ボランティアへの挑戦

東北大学
学生ボランティア活動5年の記録

2016年3月

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室

学内での活動

1

東北大学祭の様子。来場者に対して、私たちの活動紹介や、各種被災地グッズの販売を行なってきた。

2012年11月4日

2

基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の様子。学生がボランティアツアーを企画し、発表会を行なった。

2013年7月7日

3

日中ボランティア交流団の一員として訪中。四川省を視察した。

2013年11月16日

4

「スタートアップフェア」の様子。説明会形式で、一般学生とボランティア団体を仲介してきた。

2014年4月9日

5

国連ボランティア計画ディクタス事務局長との懇談。国連世界防災会議の一環として実現した。

2015年3月14日

6

"The Great East Japan Earthquake Workshop"の様子。年々増加する留学生を対象に、説明会を行なった。

2015年12月9日

岩手県での活動

7

第1次陸前高田ボランティアツアーの際に視察した「奇跡の一本松」。既に枯死が確認されていたが、まだ解体はされていない(左)。このわずか3日後に保存のために切断・解体された

2012年9月9日、12日

8

東北大学第1次陸前高田ボランティアツアーの際の集合写真。神戸大学のご紹介で、高田町和野地区の和野会館に宿泊し1泊2日の活動を行った。

2012年9月9日

9

海抜14m以上の嵩上げをする陸前高田市を高田町大石地区から望む。津波は、この写真で学生たちが経っている位置(海抜約15m)まで到達した。

2015年5月4日

10

大隅第2仮設住宅でお花植えのボランティア。12世帯程の小さな仮設住宅であるため、めったにボランティアなど来ないとお話されていた。会長の釘子明さんは語り部活動をされており、東北大学生もよく震災直後の行動から避難所でのご苦労、また震災前の陸前高田市のご様子などの話しを聞かせていただく。

2015年4月19日

11

中田災害公営住宅にて。仮設住宅から公営住宅に出られる方の引っ越しをお手伝い。仮設住宅から公営住宅、そこからまた自宅を再建される方もいるが、引っ越し費用が補助されるのは1回だけで、自宅再建のための資金を温存するため、自力で引っ越しされる方も多い。そういう方々のお手伝いを行う。

2015年11月15日

12

旧広田水産高校仮設住宅にて。この日は清掃ボランティア活動とペーパークラフトのお雛様作りを行った。既に退去された方も多いが、それだけに「以前は8人の仲間で手芸をしていたが、人が集まらなくなってやらなくなった。寂しい」等とおっしゃる方も。

2016年2月14日

宮城県での活動

13

山元町半澤いちご農園でのボランティア。山元町はいちごの一大産地であり、東北大学生もいちご農家の支援に入っていた。

2012年8月11日

14

石巻市日和山にて。最大の被災地である石巻市では、東北大学生も、複数回スタディツアーを実施してきた。

2013年5月3日

15

南三陸町防災対策庁舎にて。甚大な被害をこうむった南三陸町では、復興応援団と連携して、交流人口増加をめざしたツアーを実施している。

2014年2月15日

16

仙台市若林区荒浜にて。広大な農地が浸水したこの地域では、ガレキ撤去のボランティアが長期にわたって必要となった。

2014年5月3日

17

東松島市よつばファームにて。この農園では、震災後に野菜のブランド化が試みられており、東北大学生も支援に入っている。

2014年5月10日

18

大崎市の水害被災現場にて。2015年9月には、全国で豪雨が発生し、宮城県でも、川の決壊などの被害を受けた。そこで東北大学生も、農地復旧のボランティアに駆け付けた。

2015年9月13日

19

石巻市雄勝町雄勝地区にて。震災後に人口が急減したこの地域における、復興の課題を学ぶ。

2013年9月24日

20

石巻市雄勝町波板地区にて。雄勝町では、それぞれの「浜」ごとに個性がある。そこで、聞き取り調査を通じて各浜の特徴を教えていただいた。

2014年8月27日

21

石巻市雄勝町名振地区にて。人口の急減から、江戸時代より続く「おめつき」祭りの存続も危なくなりつつある。そこで東北大学生も応援に駆け付けた。

2015年1月24日

22

石巻市河北町仮設飯野川校団地にて。この仮設では、震災後に雄勝町を離れた方が多くを占める。また入居者の多くが希望する「二子団地」は、平成29年度完成予定で、仮設生活の長期化が懸念されている。そんななか、流しそうめんなどの活動ににより、束の間の息抜きを提供している。

2015年4月12日

23

石巻市雄勝町雄勝地区にて。震災後に、林業をはじめた若者がおり、学生も様ざまな支援をしている。

2015年12月6日

24

石巻市雄勝町名振地区にて、漁業体験の様子。雄勝町の魅力をさぐる「魅力発掘ツアー」の一環として実施した。

2016年2月16日

福島県での活動

25

薄磯地区集会所での足湯の様子

2015年6月

26

薄磯地区集会所での切り絵の様子

2015年6月

27

福島市笹谷東仮設住宅での年末大掃除

2015年12月

28

福島市でいちご農家の方からお話を伺っている様子

2015年4月

29

JR富岡駅前の様子

2013年9月

30

郡山市JAお米検査場の風景

2015年9月

はじめに

東日本大震災から 5 年がたちます。被災地はいまだ復興の途上にありますが、震災発生当時大学に在籍していた学生諸君はほぼ卒業しています。間もなく、東北大学は、震災のときには中学 1 年生だった世代を新入生として迎えます。あれだけ大変だった震災の記憶も、やがて風化していってしまうかもしれません。

それだけに、東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室が様々なプログラムを実施し、それを通して、東北大学の多数の学生諸君が実際に被災地を訪れ、現地で被災者各位から話を聞いたり、様々なボランティア活動に取り組んだりすることは、きわめて重要だといわなければなりません。わたしたちは、今後も息長く、被災地の状況の変化に対応しつつ、ボランティア活動に取り組む学生諸君を支援していきたいと考えています。

また、本学が掲げる「グローバル人材の育成」にとっても、ボランティア活動は重要です。グローバル人材とは、単に語学に優れた人材のことではありません。たとえば、本学がグローバル人材に求める力のひとつである国際教養力は「自身と他者の立場を客観的に、かつ共感をもって把握する力」と定義されていますが、このような力を身につけるための有効な手段のひとつがボランティア活動です。自身と他者の立場を把握できなければ、ボランティア活動は「押しつけの支援」となり、その本来の性格を失ってしまうからです。この点を理解しておくことは、国際貢献などの諸活動に関わる際に、なくてはならない前提です。また、ボランティア活動は、行動力、問題解決能力、リーダーシップなどを身に付けるためにも有効です。

本学でも 2017 年度からのクォーター制導入に向けて準備が進んでいます。この制度の主要な目的は学生諸君が留学などをしやすい環境を整えることですが、その導入により、ボランティア活動をはじめとする社会貢献活動に対する参加も容易になることが想定されます。

本学にとり、学生ボランティア支援のルーツは東日本大震災にあります。大震災をきっかけとして、本学は、大学としてはおこなってこなかった大規模な学生ボランティア支援に、まさに「挑戦」することとなりました。今回作成された本誌は、いわば 5 年間の挑戦の記録です。本誌が、大規模災害が発生した際に大学がなすべき学生ボランティア活動支援の在り方について考えるための、あるいは平時における教育と学生ボランティア活動の関係について考えるための、なんらかの参考となれば幸いです。

2016 年 3 月

東北大学東日本大震災学生ボランティア支援運営委員会　委員長
花輪　公雄
東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室　室長
小田中　直樹

目　次

巻頭挨拶
一章　緊急対応期の学生ボランティア支援と支援室の発足
一節　はじめに―震災前の学生ボランティア支援―……1
二節　緊急対応と学生ボランティア支援：大学の機関として……2
一項　東北大学の被害……2
二項　震災後の対応（大学組織：学生への対応を中心に）……4
三節　緊急対応と学生ボランティア：学生の視点から……13
一項　避難生活初期（発災当日～3 月 14 日ごろまで）……13
二項　避難生活中期（3 月 14 日ごろ～3 月末ごろ）……14
三項　避難生活後期（4 月～授業再開まで）……16
四項　授業再開後……17
四節　支援室 1 年目の動き……19
一項　支援室の動き：2011 年 6 月～12 月……19
二項　支援室の動き：2011 年 12 月～2012 年 3 月……22
二章　支援室のあゆみ
一節　2012 年度の通史……27
一項　はじめに……27
二項　大学内での活動……27
三項　被災地での取り組み（ボランティアツアー・スタディツアー）……31
四項　運営体制……33
二節　2013 年度の通史……38
一項　はじめに……38
二項　大学内での活動……38
三項　被災地での取り組み……39
四項　運営体制……42
三節　2014 年度の通史……47
一項　大学内での活動……47
二項　被災地での取り組み……49
三項　運営体制……52
四項　他団体との連携……55
四節　2015 年度の通史……57
一項　運営体制……57
二項　大学内での活動……60

三項　被災地での取り組み……62
四項　他団体との連携、その他……64
三章　被災地での取り組み
一節　岩手県での取り組み……66
一項　神戸大学との連携と「陸前高田ボランティアツアー」の始まり……66
二項　岩手大学の合流により 3 大学連携活動に発展（2013 年度）……67
三項　「ぽかぽか」誕生と東北大学独自の活動展開、
災害公営住宅での活動開始（2014 年度）……71
四項　仮設住宅入居者減少による変化（2015 年度）……72
五項　活動一覧……75
二節　宮城県での取り組み（各地）……78
一項　山元町での取り組み……79
二項　仙台市若林区での取り組み……82
三項　東松島市での取り組み……84
四項　南三陸町での取り組み……86
五項　石巻市中心部（旧石巻市）での取り組み……88
六項　その他の取り組み……89
七項　東日本大震災以外の被災地における取り組み……90
三節　宮城県での取り組み（石巻市雄勝町）……92
一項　地域の概要……92
二項　石巻市雄勝町での活動……93
三項　活動一覧……100
四節　福島県での取り組み……104
一項　2012 年度の取り組み……104
二項　2013 年度の取り組み……105
三項　2014 年度の取り組み……108
四項　2015 年度の取り組み……111
五節　その他の取り組み……117
一項　宮城県沿岸部被災地ツアー……117
二項　多大学合同ツアー……118
三項　あしなが育英会ツアー……119
四項　活動一覧……119
四章　学内の取り組み、その他
一節　オープンキャンパス……121
一項　オープンキャンパスの概要……121
二項　年度ごとの概要……122

二節　大学祭.....125
一項　内容.....125
二項　意義.....125
三項　課題.....126
四項　年度ごとの概要.....126
三節　スタートアップフェア.....130
一項　実施記録.....130
二項　参加団体.....130
四節　井戸端会議.....133
一項　実施記録.....133
二項　第一回井戸端会議.....133
五節　国際交流.....138
一項　海外の大学との交流.....138
二項　日本ボランティア代表団訪中プログラムへの参加.....139
三項　台湾大学からのお招き.....139
四項　国連ボランティア計画ディクタス事務局長のご訪問.....139
六節　授業との連携.....140
一項　基礎ゼミ「震災復興とボランティア活動」「地域復興とボランティア活動」..140
二項　総合科目「震災復興とボランティア」.....141
五章　支援室五年に寄せて
一節　学生スタッフ経験者からの寄稿.....142
三節　地域の方がたからの寄稿.....175
参考資料集.....182

一章　緊急対応期の学生ボランティア支援と支援室の発足

一節　はじめに—震災前の学生ボランティア支援—

本章では、東日本大震災を受けて、東北大学がいかに学生と向きあい、学生ボランティアに対していかなる支援体制を構築していったかを紹介する。あわせて東日本大震災学生ボランティア支援室が、学生ボランティアの支援組織として、2011 年度にどのような活動を展開してきたかを紹介する。

学生ボランティア支援の全国的な傾向として、近年、私立大学を中心にボランティアセンターなどの支援組織が設置されている。東北大学でも、東日本大震災が発生する前から学生ボランティア支援に関する各種資料を収集しており、他大学の事例や、仙台市のボランティア情報等を整理していた。しかし東日本大震災が発生するまで、学生ボランティア支援に関する具体的な組織は設置していなかった。また災害対策マニュアル[1]にも、災害時の業務のなかに、学生ボランティアに関する事項は含んでいなかった[2]。したがって資料を収集していたものの、学生ボランティアを支援する十分な準備はなかったといえる。

東北大学ではそのなかで、2011 年 6 月に「東日本大震災学生ボランティア支援室」を設置し、東日本大震災に関する学生ボランティア支援を行なってきた。そこにはどのような経緯があったのだろうか。

---

[1] 東北大学では災害対策規定 8 条に基づき、本部等事業場における災害予防及び災害対策のための業務要領として、「災害対策マニュアル」を定めていた。このマニュアルには災害対策本部組織の設置が定められ、災害対策本部における各班の構成及び担当業務に関して、詳細に規定していた。そのうち、学生対応の所管は学生対策班であり、次の通りに業務を規定していた。①学生の安否確認、家屋等の被災状況調査、②学生会館及び課外活動の建物の安全確認、③寮生の安否確認、建物の安全確認、被災状況調査、④学生の宿舎の斡旋確保、⑤生協等との連携により福利厚生施設の安全確認、被災状況調査、⑥留学生の安否確認、家屋等の被災状況調査、⑦留学生の宿舎の斡旋確保、⑧授業対策（東北大学 2013:18）。

[2] 災害発生時には、阪神淡路大震災で注目されたように、学生ボランティアが多様な活躍をすることが報告されている。そこで大学では、学生ボランティアをいかに支援するかが一つの問題としてある。

二節　緊急対応と学生ボランティア支援：大学の機関として

一項　東北大学の被害

震災当日の大学は、東北大学東日本大震災記録集によると、以下のような状況におかれていた（東北大学 2013:26）。すなわち、学内では、学部、大学院ともに講義や卒業研究発表が終わり、卒業式・修了式（学位授与式）を控え、学生の多くが春休みに入っていた。また事務においては、最後の入学試験である「一般入試後期日程試験」を 12 日に控え、試験会場の整備確認等の最後の点検を終えた状況だった。

東日本大震災は、そのような状況下で発生する。震災による被害としては、まず地震があった。東北大学のキャンパスはほとんどが仙台市青葉区に集中するが、青葉区は震度 6 強～6 弱の地震に見舞われた。さらに津波もあり、農学研究科附属複合生態フィールド教育研究センター（宮城県女川町）、名取ボート艇庫・合宿所（名取市閖上）、七ヶ浜ヨット艇庫・合宿所（七ヶ浜町）が津波に襲われることになる。

具体的な被害をみていくと、まずキャンパス内では、幸いにして人的被害がでなかった。しかしキャンパス外では、3 人の学生が死亡（学部学生 2 名、入学予定者 1 名）、14 名が負傷している。住居が全壊または一部損壊した学生も 526 人にのぼった。大学の建物も大きな被害を受けており、とくに青葉山キャンパスでは地震被害が大きくなった。建物を壊して建て替える「改築建物」が、青葉山キャンパスで 9 棟、雨宮キャンパスで 2 棟などとなっており[3]、改修が必要な「全面改修建物」も、星陵キャンパスで 2 棟、川内キャンパスで 1 棟にのぼった（東北大学 2013:64）。さらに各キャンパスにおいては、すべての部局において電気、水道、ガスが止まり、UPS（無停電電源装置）給電を除いたネットワークも停止する事態となった。バス、地下鉄も不通となり、移動手段までも奪われることになった。

以上のような非常事態のなかで、震災直後のキャンパスでは、次のような避難行動が記録されている（東北大学 2013:27）。

表 1－1　東北大学各キャンパスにおける、発災直後の避難行動

部局	避難した場所	避難した人数	避難所要時間
＜片平キャンパス＞			
本部事務機構	中庭、多元研中庭	300 人程度	20 分程度
生命科学研究科	新棟前、中庭	200 人程度	10 分程度
金属材料研究科	中庭駐車場	多数	10 分程度
流体科学研究所	1 号館前	70 人程度	30 分程度
電気通信研究所	2 号館前	300 人程度	15 分程度
多元物質科学研究所	指定避難所	600 人程度	20 分程度
WPI-AIMR	駐車場前	70 人程度	5 分程度

[3] その他の「改築建物」は、女川町のフィールドセンターが 10 棟、名取市閖上の漕艇庫、長町宿舎が各 2 棟、七ヶ浜町の漕艇庫、川渡実験場が各 1 棟あった（東北大学 2013:64）。

＜青葉山キャンパス＞			
工学部・工学研究科	指定避難所	1500 人程度	20 分程度
理学部・理学研究科	指定避難所	多数	10 分程度
薬学部・薬学研究科	D 棟前駐車場	230 人程度	不明
サイクロトン・ラジオアイソトープセンター	研究棟西側空き地	50 人程度	10 分程度
NICHe	研究棟前	50 人程度	15 分程度
＜川内キャンパス＞			
教育・学生支援部	管理棟前広場	100 人程度	10 分程度
附属図書館	本館前広場	240 人程度	10 分程度
文学部・文学研究科	萩ホール前	100 人程度	30 分程度
教育学部・教育学研究科	中庭、萩ホール前	40 人程度	15 分程度
法学部・法学研究科	萩ホール前	50 人程度	30 分程度
経済学部・経済学研究科	中庭、萩ホール前	90 人程度	20 分程度
国際文化研究科	本棟玄関前	多数	15 分程度
＜雨宮キャンパス＞			
農学部・農学研究科	第一研究棟前中庭	200 人程度	10 分程度
＜星陵キャンパス＞			
医学部・医学研究科	1 号館前、5 号館前駐車場	100 人程度	10 分程度
歯学部・歯学研究科	臨床研究棟前駐車場	200 人程度	10 分程度
加齢医学研究所	研究棟南側広場	200 人程度	10 分程度

出典：東北大学（2013）27 頁より、一部改編

表から分かる通り、東北大学では各所において計 4690 人以上が避難した。この人数は、東北大学の在籍数が 30162 人（学生 18572 人、教職員 11590 人）であることを踏まえると、六分の一程度にすぎない。これは春休みに入り、仙台を離れていた学生、教職員が多かったためである。そこで学生、教職員は多様な場所において被災し、後にみるように、それぞれ多様な避難行動・震災対応をとることになった。

写真 1-1　地震により図書館の本も落下した（左）
写真 1-2　青葉山キャンパス工学研究科中央棟前の避難状況（右）

二項　震災後の対応（大学組織：学生への対応を中心に）

では震災の被害を受けて、東北大学はいかに対応したのか。以下では大学組織（二項）、学生（三節）という二つの視点から見ていくこととする。

➢ 3 月 11 日 15 時 30 分ごろ　災害対策本部の立ち上げ

大学組織の対応としては、震災当日、井上総長が東京出張中で不在であった。そこで震災直後には、まず根元理事（片平キャンパス本部棟に在室していた）が各部課へ状況把握を指示し、15 時 30 分ごろに再集合させる。そして根元理事が本部長代理となり、災害対策マニュアルにしたがって災害対策本部を設置した。本部では、総務、安否確認、物資対策、施設対策、学生対策の各班が立ち上げられた（東北大学 2013:28）。

➢ 3 月 11 日～　一般入試後期日程試験の停止・避難所の設置

つづいて同日中に決定されたのが、一般入試後期日程試験の停止である。試験中に地震のくる恐れがあるとして、16 時ごろには延期を決定、各部局へ周知させるとともに、NHK、東北放送へプレスリリースも発表した。また同日中には、避難所として、さくらホール（片平キャンパス）、川内体育館（川内キャンパス）、工学部中央棟 1 階生協食堂（青葉山キャンパス）、星陵体育館（星陵キャンパス）、農学研究科講堂（雨宮キャンパス）などが開放され、教職員が運営した。とくに市街地に所在する川内、星陵、雨宮キャンパスでは、近隣住民の避難もあり、川内体育館では、最大 270 名が避難生活をおくった（12 日）。なお避難者に対しては、大学が備蓄していた飲料水、アルファ米、乾パン、缶詰等の提供があり、13 日ごろからは、大学生協から食料品等の提供もあったため、切迫した状況にはならなかったという（東北大学 2013：50）

写真 1-3　避難所となった川内体育館の様子

➢　3 月 14 日～　本格的な安否確認のスタート

災害対策本部では、12 日から連日にかけて、被害概況の調査が行われる。また保存食料、飲料水等が各避難所へ運搬・提供され、ネットワークの復旧も進められた。そのなかで、14 日には、臨時部局長連絡会議が開かれ、各部局に対して、所属する学生・教職員の安否確認を最優先する方針が指示された。ここから、本格的な安否確認がスタートすることになり、30 日までに安否を判明させた。

➢　3 月 14 日～　緊急連絡ホームページを開設。総長メッセージ

同じく 14 日には、災害対策本部会議において、当分の期間の休校、学位記授与式の中止、一般入試後期日程の延期、入学式の延期等を決定し、「東北大学からの重要なお知らせ」と題したプレスリリースを発表する（14 日）。ここでは以下のような内容を記しており、学生には、帰省等による待機を指示するものとなっていた。

平成 23 年 3 月 14 日

報道機関各位

東北大学

東北大学からの重要なお知らせ

1. 平成 23 年 3 月 11 日に発生しました東北地方太平洋大地震により、当分の間（4 月下旬まで）本学を休校とします。
2. 3 月 25 日に予定されていた学位授与式は、中止します。具体の学位記の伝達方法については、追って連絡します。
3. 後期日程の入学試験は、4 月上旬を予定しています。
4. 新入生受け入れは、例年通り行います。前期日程合格者は、郵送等で入学手続きをしてください。なお、東北方面の郵便事情を勘案して、入学予定者に不利を生じないように、

配慮いたします。
5. 平成 23 年度入学式は、4 月下旬を予定しています。

なお、詳細はホームページ上で逐次お知らせします。また、帰省できる在校生の皆さんは、この間、帰省して頂くなど安全な場所で待機してください。

そしてホームページに関しては、15 日に緊急連絡ホームページを開設し、総長からのメッセージを三回にわたって掲載した（15 日、19 日、25 日）。

➢ 3 月 16 日～　避難所の閉鎖、放射線モニタリングのスタート

3 月 16 日になると、電気の復旧等にともなって避難所を閉鎖し、震災当日から延べ約 2000 人にのぼった避難者の受け入れが終了する。しかし仙台で生活を続けるうえでは、福島第一原子力発電所の事故にともなって、放射線による人体への影響が懸念されていた。そこで災害対策本部は、原子科学安全専門委員会に調査を依頼し、大気中の放射線量を測定した。その結果を大学ホームページにも掲載し、人体に影響はないレベルである旨を公表していった（18 日～）。

➢ 3 月 22 日～　学生ボランティアに対する支援の検討スタート

つづいて 22 日以降になると、大学組織として、学生ボランティアへいかに対応するかの検討が始まった。東北大学生は、後にみるように、震災直後から様々なボランティア活動へ携わっていた。とりわけ東北大学地域復興プロジェクト“HARU”は、大学公認のプロジェクトとして、ボランティア活動に取り組んでいた（24 日）。しかし災害対策マニュアルには、先述したとおり、学生ボランティア活動に関する特段の定めがなかった。そこで学生・教職員のボランティア活動については、災害対策本部として検討・対応することになった。その際、実働部隊となったのは、総長室と学生支援課の職員であった。

まず災害対策本部では、宮城県、仙台市との間でのボランティア活動についての協議（22 日）、山元町に対するボランティア応援の要請（23 日）などを受けて、どのようにボランティア活動に取り組むべきか等の検討を進めていく。

そのような中で、文部科学省より「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について（通知）」と題する通知が届いた。この通知は、以下のような文言で始まっており、具体的には、「ボランティア活動のための就学上の配慮」（ボランティア活動に参加しやすい環境作り、ボランティア活動への単位付与、学費への考慮等）、「ボランティア活動に関する安全確保及び情報提供」（ボランティア保険への加入指導、文部科学省ポータルサイトの活用等）を要望していた。

今後、災害復旧の進捗状況に応じて、ボランティア活動への参加を希望する学生が

出てくることが見込まれています。学生が、大学等の内外において、学修成果等を活かしたボランティア活動を行うことは、将来の社会の担い手となる学生の円滑な社会への移行促進の観点から意義があるものであることから、被災地等でのボランティア活動を希望する学生が、安心してボランティア活動に参加できるよう、下記の諸点にも配慮して、引き続き学生への指導等をよろしくお願い申し上げます（文部科学省 2011）

この通知を受けて、災害対策本部では、山元町社会福祉協議会からのボランティア要請依頼を検討した（4 月 4 日）。すなわち、総長補佐（学生支援担当）と学生支援課課長補佐が山元町を訪れて懇談し、山元町の要請内容が 40 人程度であること、避難所の物資運搬や後方支援活動を想定していることを報告し、①山元町だけに限定した支援はできないため、他市町からの依頼があった場合は、“HARU”で情報集約してもらい派遣すること、②山元町へは大学でバスを手配すること、③保険は山元町で加入手続きをしてもらうことなどを決定する。この結果、山元町に対する学生ボランティア派遣が正式に決定する（東北大学 2013：144-147）。

➢ 4 月 8 日～　山元町への支援スタート

山元町でのボランティア活動には、連日多くの学生・教員が参加し、5 月 15 日までに、述べ 1200 名が参加する。“HARU”は、山元町の活動の他にも、東北大学附属図書館の書庫の整理、支援物資の仕分け、高齢者介護などのボランティア活動にも関わり、5 月中旬には約 50 のプロジェクトが動き、“HARU”のメーリングリストに対する登録者は 1000 人を超えるようになった（“HARU” 2011a）。また東北大学のホームページには、「東日本大震災学生ボランティア支援」に関するページも設けられ（4 月 5 日）、大学としても“HARU”の活動を支援する体制がつくられた。

写真 1-4　山元町の被害風景。広大な平野が津波被害を受けた　2011 年 4 月 6 日（左）
写真 1-5　山元町におけるボランティアの風景。この日は個人宅への支援となった　2011 年 4 月 21 日（右）

➢ 4 月 19 日　災害対策本部会議

この日の会議では、ボランティア関係の報告として、“HARU”による山元町への派遣、本学図書館の整理、気仙沼市、県庁での活動などを説明、ボランティア登録者が 800 名を超えたことが報告された。

一方で災害対策本部では、“HARU”の登録者数の拡大に伴って、ボランティア活動の体制等についても検討する。具体的には、文系諸学部から、本部にボランティア活動支援室の設置依頼があったことが報告され、その応答として、医師学部の学生は、学外での活動の他に附属病院内でも色々と働いている旨、ボランティアもそうだが、地域連携・地域復興支援室を立ちあげる必要があるのではといった旨、議論があった。また東谷総長補佐から、支援室のイメージ案を作成すべきという要請があり、全学的な学生ボランティアの支援組織の設置の検討が付託される。その後、「東北大学学生ボランティア支援室（仮称）の設置について（案)」と題する文章が作成され、ボランティア支援の方針ついて、以下のようにまとめた。

表 1－2　東北大学学生ボランティア支援室（仮称）の設置について（案）

1. 設置検討の背景･経緯	(1)　本学も被災大学の一つであり、学生の安全確保の観点からライフラインが復旧するまで休校措置［をとった］ (2)　仙台市内のライフラインの復旧に伴い、休校期間中の学生のボランティア活動に関する重要性を認め、災害対策本部で議論し、地域からの要請に対応［してきた］（山元町への戦：大型バス 1 台を借り上げ、約 1 カ月） (3)　本学学生団体“HARU”を中心とした活動や赤十字への募金活動などが展開。山元町のボランティア活動への参加希望学生の調整は“HARU”を通して一元化［してきた］ (4)　学生の自主性を尊重しつつ、①関係機関との連絡調整、②バスの借り上げ、③講義室の貸与、④飲料水・腕章の提供など、大学として可能な範囲での支援を展開［してきた］ (5)　災害対策本部会議において、学生ボランティアの位置づけを引き続き議論し、特に、授業開始以降の在り方について、教育担当理事の下で検討することを決定［した］ (6)　ボランティア活動への参加を希望する学生の“HARU”への登録数が 900 名まで増加、山元町をはじめとする支援活動の休日（土日）における継続を求める多数の声［があった］ (7)　学生ボランティア活動に対する本部のサポートの継続を求める文系部局の教育から強い要請［もあった］ (8)　在校生の授業も無事スタート（4/25）し、新入生を迎える（5/6）準備もほぼ完了。被災学生への対応も財政支援の予算面を含め、或る程度の見通し［がたった］

2. 設置の目的	(1) 東日本大震災に伴う本学学生の自主的なボランティア活動を総合的に支援 (2) 学生の安全確保（学研災保険の適用等） (3) ボランティア活動をつうじた教育効果 (4) 学生による地域貢献を支援 (5) 総長裁量経費、学生支援経費、学友会費、寄付金などに基づく財政的支援
3. 主な機能	(1) 学外の機関・団体との連絡調整 (2) 学内関係部局との連絡調整 (3) ボランティア活動を行なう学生団体との連絡調整 (4) 学生の活動状況の把握・集約・整理 (5) 参加学生・団体に対する各種の支援とケア (6) その他
4. 組織	・大学が設置する（予定の）地域連携・復興支援組織の下部組織として設置 ・学生団体の活動の前提条件＝団体結成届けの提出（活動内容の把握、顧問教員の配置）。単位認定、公欠は行わない
5. 解決すべき課題等	(1) ボランティア活動を行なう学生団体の活動場所の確保 (2) 学生の活動に対する物理的・経済的支援の可否及び範囲 (3) 教育・学生支援部の業務量の増に対する手当（事務職員の増員や大学の経費による非常勤職員の雇用等） (4) 設置期限の在り方（常置、時限）

注：下線部は原文のまま。また［］は筆者による補足
出典：「ボランティアに関わる意見交換」（2011 年 5 月 2 日）配布資料

この文書から、当時は以下のような状況にあったことが伺える。すなわち、5 月初めになると、大学としてもボランティアの重要性を認める方針を明示しており、この時期には、活発なボランティア活動が展開していた。そして大学としては、“HARU”に調整等を委託しつつ、可能な範囲で支援してきた。それと同時に、以下のような問題も浮上しつつあった。一つには、「ボランティア調整ニーズの増大」ともいうべき問題で、地域からは継続的な支援が求められ、ボランティア情報を希望する学生も拡大していた。また一つには、「学業とボランティアの両立」という問題で、授業がまもなく開始するなかで、学生の自主性に依拠したボランティア活動の実施・調整は困難になることが予想されていた。そのなかで、大学組織として、より踏み込んだ学生ボランティア支援の求められる状況が生まれていたといえる[4]。ただし、「解決すべき課題等」で述べられているように、当時は学生の活動

[4] なお学内教員からの要請として、法学研究科長からは要望書が提出された。この文書では、以下の対応を求めている。すなわち、「最低限不可欠と思われる事項」として、①東北大学の一部署として「ボランティア支援センター」（仮称）を設立すること、②上記センターの設立を広く学内外に広報し、学生や学外団体等の協力を呼びかけることという二点を、「強く望まれる事項」として、③支援センターに複数名の事務職員を配置すること、④本部もしくは関係部局に教員が

に対してどこまで支援するかを定めておらず、設置期限も、はたして常設なるのか時限なのかといった問題があった。

➢ 6月7日　支援室の設立

東北大学はその後、4月25日から授業を順次スタートし、5月6日には入学式を開催する。5月9日には全学教育の授業もスタートし、およそ一カ月遅れで、通常の教育活動の再開にこぎつけた。それと並行して、大学本部では、支援室の具体的な設置形態についても議論を重ねていく。その結果、支援室の設置について5月24日の運営企画会議に付議し、6月7日の部局長連絡会議に報告、同日ひらかれた教育研究評議会[5]に報告して、正式に設置されることとなった。以上の出来事を緊急対応関連、学生ボランティア関連、学事関連の三点に分けて整理すると、表のようになる。

表1－3　2011年3月11日～6月における、大学の主な動き（学生対応関連）

月日	緊急対応関連	学生ボランティア関連	学事関連
3月11日	災害対策本部の設立。避難所の設置		一般入試後期日程試験の停止
14日	臨時部局長会議。本格的な安否確認のスタート		「東北大学からの重要なお知らせ」
15日	緊急連絡ホームページの開設		総長メッセージ
16日	避難所の閉鎖		
18日	放射線モニタリングのスタート		
22日		ボランティアについて、宮城県・仙台市と協議	
23日		宮城県から山元町へのボランティア応援の要請あり	
24日		「東北大学地域復興プロジェクト“HARU”」を設立	

関与する「運営委員会」を設置すること、⑤支援センターにおいてこれまでのHARUの活動状況や被災地の現状、現在活動するボランティア団体等の活動内容、今後の見通し等につき情報収集を行い、これからボランティアに行こうとする学生等に対して情報提供できる体制を整えることという三点を、また「行うことが望ましい事項」として、⑥今後の活動継続に向けた予算獲得を試みること、⑦被災自治体や学外ボランティア団体等と連携したプロジェクトを実施し、一部は支援センターの方で学生を募集し活動内容を決定すること、⑧ボランティア学生に対する研修・教育の体制を整備すること、⑨その他、これまでに設置されている種々の大学ボランティアセンターの活動内容を参考にしつつ、予算的・人員的に可能な範囲で、東北地方のニーズにあった活動の漸次的展開を試みることという四点を求めるものとなっていた（東北大学大学院法学研究科2011）。

[5] 部局長および主要機構長、総長特別補佐等が出席。部局長連絡会議は相談会的な位置づけ。教育研究評議会は審議機関として、年度計画や教員人事、教育・研究の点検等について審議する。

28 日		災害対策本部にて、学生のボランティア活動に関する広報について検討	
29 日		災害対策本部にて、学生ボランティアの活動等について検討	
30 日	学生の安否確認終了		
4 月 1 日		文部科学省から学生のボランティア活動に関する通知	
4 日	学内送電完了	山元町社会福祉協議会からボランティアの要請依頼あり	学事日程を決定
5 日		「東日本大震災学生ボランティア支援」のホームページ開設	
6 日	ガス供給開始	山元町において学生等ボランティア活動開始	
13 日	水道復旧完了		
14 日	学生被災状況等調査の終了		
19 日		災害対策本部にて学生ボランティアについて報告	
20 日	災害対策本部会議の終了		
25 日			各学部で順次授業スタート
5 月 6 日	災害対策本部設置期間の終了		学部別入学式
9 日			授業スタート
15 日		“HARU”の山元町ボランティア派遣終了	
24 日		運営企画会議にて、支援室の設立を付託	
6 月 7 日		部局長連絡会議、教育研究評議会にて、支援室の設立を報告	

- Cf. 研究視点による復興支援

なお東北大学に対する社会的な要請としては、学生という人的資源の提供（ボランティア）だけでなく、研究者という知的資源の提供があった。むしろ大学本部は、知的資源の提供こそが大学固有の責務とみなしていたといえる。ここから研究視点による復興支援はいち早く体制が整えられていた。

順を追ってみていくと、4 月には、防災科学研究拠点の主導のもと「東日本大震災 1 カ月後緊急報告会」を開き、専門家の視点から震災の実態を報告・発表した（4 月 13 日）。つづいて総長が「東北大学始動宣言」を公表し、世界リーディング・ユニバーシティとして地域社会の復旧・復興、そして人類社会の持続的発展に向け、「安全・安心社会の創生」に学内の英知を結集する旨、宣言した（4 月 25 日）。さらに 4 月 27 日には、総長を機構長とする全学的組織として「災害復興新生研究機構」を設置した。この組織では、基本理念として①「復興・地域再生への貢献」、②「災害復興に関する総合研究開発拠点形成」、③「分野横断的な研究組織で課題解決型プロジェクトを形成」という三点を掲げており、政府・各省庁、自治体・住民、国内外関係機関・企業と連携して、複数のプロジェクトを推進していく方針を示している[6]（東北大学 2013:162）。

[6] 具体的には、「機構コミットメント型プロジェクト」（政策的に重要な研究課題に関するもの）、「構成員提案型プロジェクト」（本学構成員が自発的に取り組むもの）に分けられた。前者は八つあり、災害科学国際研究所の設立や、東北メディカル・メガバンク推進機構の設立などが含まれる。また後者は百個以上あり、「被災地域の教職員へのサイコロジカル・エイド」（教育学研究科）、「放射能汚染地域に住む子供のエンカレッジプロジェクト」（薬学研究科）、「食・農・村の復興支援プロジェクト」（農学研究科）などが推進されている（東北大学 2013：170-173）。

三節　緊急対応と学生ボランティア：学生の視点から

以上が、大学組織としてみた支援室設立までの流れであった。ただしこれだけでは、実際に学生がどのようにボランティア活動を行なっていたかが明らかでない。そこで以下では、学生の視点からみたボランティア活動の流れも紹介する。ただし筆者の能力上、筆者が把握している範囲での紹介となる点はご了承願いたい。

一項　避難生活初期（発災当日～3 月 14 日ごろまで）

➢　避難生活の形態

発災時には、既に触れたように。春休みに入って仙台を離れていた学生、教職員が多かった。そのため、学生は多様な場所において被災し、それぞれ多様な避難生活をとることになる。

まず仙台で被災した学生は、避難所での生活以外にも、さまざまな避難行動をとっていた。東北大学関係者の震災体験をまとめた「聞き書き身体再体験―東北大学 90 人が語る 3.11」には、東北大学生がいかに行動したかが記録されている。その記述によると、震災直後の仙台では、電気・ガス・水道がほぼ停止し、住宅自体も、地震の被害によって一部では危険な状況におかれていた建物があった。食料も満足に調達できないため、仙台で被災した学生は、避難生活をおくる必要があった。ただし大学の避難所で生活していたのは一部であり、実際には、行政の設置した避難所で生活していた学生から、友人との共同生活をおくっていた学生、あるいは自宅に待機していた学生に至るまで、多様な避難生活をたどっていた。

具体的にみると、ある文学部の学部生（仮に A さんとする）は大学で被災し、一度自宅に戻った。その後、なじみのレストランの片づけを手伝ってから、八幡小学校（青葉区）で一晩を過ごした。その後数日間は、サークルの仲間と自宅で共同生活をおくった。ある文学研究科の大学院生（B さん）は、大学で被災し、自宅に戻ってから、避難所となっている近所の小学校に行ってみたが、結局は自宅で一晩を過ごした。翌日からも、昼間は研究室などに通いつつ、晩は自宅で過ごした。また別の文学研究科大学院生（C さん）は、自宅で被災し、大学にいって「さくらホール」で一晩を過ごしたが、翌日には自宅アパートに一度戻る。しかしガスのある知人宅へ泊まることにし、二日間ほど過ごしたという（とうしんろく 2012：46-48、51-52、71-72）。

一方で、仙台を離れていた学生は、全く異なる状況におかれていた。彼ら・彼女らにとっては、仙台にいかに戻るかが課題となったが、公共交通機関の停止により、移動手段は停止していた。そこで、旅行先などにいた学生は、一旦実家等へ帰省し、実家等にいた学生は、引きつづき実家等に残ることになった。

例えば、ある教育学研究科の大学院生（D さん）は、アメリカから成田空港へ帰国したところで被災、空港で一晩過ごしたあと、電車バスで東京まで移動し、新幹線で実家の愛

知へ帰省した。ある工学部の学部生（E さん）は、北海道の実家で被災し、何日かして仙台に戻ろうと考えたが、飛行機もフェリーもなかったため、断念した。また別の文学部学部生（F さん）は、インドネシアで被災し、3 月 25 日の帰国予定まで、そのままインドネシアに滞在したという（とうしんろく 2012：98-101、105106）。

➢ 学生ボランティアの形態

学生によるボランティアとして、大学の開設した避難所では、星陵体育館（星陵キャンパス）において、学生ボランティアが 1 日 2 食の食事を提供していたという（東北大学 2013: 52）。また川内キャンパス近くにある川内コミュニティセンターでは、学生や地域住民が集まり、400 人近い人が避難していた。そして避難所で過ごす中、大学生を中心として徐々にボランティアの運営組織が出来上がり、水汲みや炊き出し、トイレの水流し、情報の伝達などを進めていた[7]（ReRoots2011）。しかし仙台を離れていた学生については、震災直後に限っていうと、記録に残っているボランティア活動は存在しなかった。

二項　避難生活中期（3 月 14 日ごろ～3 月末ごろ）

➢ 避難生活の形態

つづいて 3 月 14 日ごろになると、発災から数日間が経過し、避難行動のあり方も変化していく。その背景には、公共交通機関の一部回復（仙台から山形経由で各地へ向かうルートが周知される）や、原発事故の問題などがあり、ここから仙台を離れる／仙台へ戻るという人の流れができはじめた。

仙台で被災した学生に対しては、「東北大学からの重要なお知らせ」として、「帰省できる在校生の皆さんは、この間、帰省して頂くなど安全な場所で待機してください」という告知があり、実家等への帰省が促された。この結果、公共交通機関を利用して、仙台を離れる学生が現れはじめた。例えば、最初にみた文学部の A さんは、大学から授業延期の通知もあったため、15 日には電車・バスを乗りついで、実家の盛岡まで帰省した。その際、仙台―盛岡便は回復していなかったため、山形市、酒田市、大館市経由で帰省したという。また文学研究科の C さんは、実家から「原発が危ないので帰ってこい」という連絡があり、14 日に、車を持つ先輩に乗せてもらって山形まで脱出、その後、秋田から迎えに来てもらい実家へ帰省した（とうしんろく 2012：46-48、71-72）。

とくに外国人留学生については、（原発事故に伴う）在日大使館等からの避難指示・誘導もあって、国外へ避難する学生が多数にのぼった。東日本大震災記録集によると、避難指示・誘導指示があった国は、3 月 22 日現在で 14 か国（バングラデシュ、モンゴル、ドイツ、インドネシア、チリ、フィリピン、ブルネイ、ブルガリア、タイ、ブラジル、中国、アメリカ、フランス、サウジアラビア）となっている。また移動費は、大半の国が自己負

[7] この活動が、後にはボランティア団体「ReRoots」として組織化されることになる。

担であったが、例えばアメリカでは本国がバスを用意し、3 月 18 日に、仙台発東京行きのバスを提供している。結果として、震災当時は約 1500 人の外国人留学生がいたと推計されるが、3 月末にはほぼ仙台市外へ避難していた[8]（東北大学 2013：76、91）。

一方で徐々にはあるが、仙台へ戻るという人の流れもあった。例えば、文学部の F さんは、インドネシアで被災したが、3 月 25 日に東京へ帰国し、東京―仙台間のバスの再開にともなって、27 日には仙台へ戻ってきた。またある工学研究科の大学院生（G さん）は、卒業旅行に訪れていた沖縄で被災、13 日に飛行機で東京へ飛び、実家の埼玉へ帰省していた。しかし 3 月 25 日には、友人たちと一緒に、車で仙台へ帰ったという（とうしんろく 2012：101-102、105-106）。

➢ 学生ボランティアの形態

ではこの時期、学生ボランティアにはどのような動きがあったのか。まず紹介する必要があるのは、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”に関連した動きである。“HARU”の前身としては、3 月 18 日に復興メーリングリストが作成され、環境科学研究科の吉岡俊樹教授から、学生に向けたボランティア募集があった。そのプロジェクトのリーダーとしては、吉岡教授からの依頼もあり、環境科学研究科の学生が務めることになった。そして 3 月 24 日には、正式に“HARU”が発足し、東北大学の公認団体として活動をスタートすることとなる。

“HARU”の他に、仙台周辺で精力的に活動した団体としては、「L&D 仙台」がある。この団体は, 東北大学生によって 3 月 25 日に設立されたが、震災直後から避難所のボランティアに携わっていた。すなわち、震災直後、各避難所には多くの避難者がおり、また避難所の数も非常に多かったため、多くの避難所において運営担当者が足りない状態だった。そこで、学生が夜間ボランティアとして、焚火の番（震災当時の避難所は相当な寒さだった）や避難所の見回り、高齢者のトイレへの付き添いなどを手伝った。また物資の提供ボランティアとして、仙台市、石巻市を中心に宮城県の各市町村に物資を分配する活動や、避難所から個人宅へ帰られた方へ直接物資を届ける活動などを行なっていた（L&D 仙台 2011）。

さらに仙台を離れた学生によるボランティア活動として、「All for Tohoku」の活動もあった。この団体は、東北大学の学生を中心として 3 月 18 日に結成された団体であるが、主な活動（当初）は、「①全国各地で東北大生を中心とした街頭募金活動をすること、②HP で街頭募金活動以外の支援活動を提案すること」の二点があった。具体的には、全国 8 つの支部があり、それぞれの担当に各地へ避難している東北大学生が就任して、街頭募金活動を行なったという[9]（All for Tohoku2011）。

---

[8] 3 月 28 日に完了した留学生の安否確認では、自国に 1088 名、仙台市以外の日本国内に 327 名、仙台市に 85 名という回答があった。

[9] なお初代代表は、活動にいたった経緯を、以下のように語っている。「私が復興支援に携わろ

この他にも、3 月中には、農学的な視点から復興支援をする「食・農・村の復興支援プロジェクト」（ARP）が立ち上げられ、塩釜市を拠点とした活動をする「よみがえれ！塩釜」、復興情報のメールマガジンを発行する「BASE プロジェクト」など、多くのボランティア活動がスタートしていた（“HARU” 2011b）。

写真 1-6　L&D 仙台の活動風景。ガレキ撤去の様子　（左）

写真 1-7　All for Tohoku の活動風景。募金者からのメッセージ　2011 年 4 月 10 日（右）

三項　避難生活後期（4 月～授業再開まで）

➢　避難生活の形態

入学式を迎えるころまでには、さらなる学生の動きがあった。それは仙台へ戻る流れである。4 月になると、仙台でも電気・ガス・水道の復旧がほぼ完了し、最低限の生活インフラは復旧した。公共交通機関をみても、4 月になると再開が進んでおり、4 月 12 日には、東北新幹線東京～福島間の運転が再開、4 月 13 日には仙台空港の運用が再開、4 月 25 日には東北新幹線福島～仙台間の運転も再開していた。ここから、仙台を離れたまま、もしくは仙台から一旦避難した学生も、次第に仙台へ戻ることになる。

例えば、文学部の A さんは、一時的に盛岡へ避難していたが、仙台―盛岡の高速バスが再開したので、4 月 7 日に仙台へ戻ってきた。教育学研究科の D さんも、アメリカから帰国後、愛知の実家に避難していたが、4 月 10 日には名古屋―仙台の高速バスで仙台に戻ってきた。北海道に避難していた、さらに工学部の E さんは北海道の実家にいたが、4 月 25

うと思った場所は、飛行機の中でした。私は…震災から数日、友達の家や避難所での暮らしを経て、親からの帰省の願い、学校側からの指示、そして何より不安でいっぱいだった自分の気持ちから帰省を決め、山形空港から飛行機に乗り地元に帰省しました。しかし、そんな飛行機のなかで私は、「今なお自分がお世話になった人たちがたくさん苦しんでいる。自分の友達は残ってボランティアをしている。そんな中で、自分は地元で時間を無駄に過ごしていいのか。何かできることはないのか」そう思い、募金活動をしようと思い立ちました。また、おそらく自分と同じ思いをしている東北大生はたくさんいるはず。それなから、みんなに声をかけて全国で募金活動をしたらいいのではないのか。震災直後、全国で被災地の声を直接届けられるのは自分たち東北大生しかいないのではないか。そんな思いから団体を立ち上げ SNS を使って全国の東北大生に声をかけました」（“HARU” 2011b）。

日には、飛行機で東京へ移動し、新幹線で仙台へ戻ったという（とうしんろく 2012：48、51-52、98-101）。

➢ 学生ボランティアの形態

仙台へ戻る学生が増加するなかで、学生ボランティア活動もさらに活発化していく。まずもっとも人数を集めたのは“HARU”の活動である。“HARU”は、4 月 6 日から山元町での活動をスタートしたが、山元町には毎日 40 人のバスで参加し、町のボランティア受け入れ（平均 100 件）の 4 割を占めるようになった（朝日新聞 2011.5.2）。また東北大学附属図書館では、約 100 万冊にのぼる落下図書の整理・再配架などを支援し、図書館長から謝辞があった（4 月 21 日）。その他にも、ボランティア要請は 26 件、延べ 1480 人を派遣し（4 月 22 日時点）、メーリングリストの登録者は 900 人に上るようになる。“HARU”がこのように拡大した一つの背景としては、先にみたような、東北大学の支援があったと考えられる。すなわち、大学ホームページ「東日本大震災学生ボランティア支援」という項目の先頭には“HARU”の情報が掲載され、メンバーの知人以外にも周知してもらうことができた。また山元町の活動に関しては、大学としてバスという移動手段を提供した点も、大人数の参加に一役買ったといえる。

なお“HARU”以外の活動も活発化しており、先にみた「ReRoots」は 4 月に団体を結成し、仙台市若林区を拠点とした活動を始めている。「L&D 仙台」については、活動内容が六種類まで発展し、避難所にいる児童の支援や、避難所への音楽提供、仙台市若林区二木地区の復興支援活動などを新たに始めていた。

写真 1-8　“HARU”の図書館プロジェクト　2011 年 4 月 21 日

四項　授業再開後

学生ボランティアの活動は、以上のように、時間を経るごとに拡大していった。一方で入学式が始まり、授業が全面的に再開すると、学生ボランティア活動は新たな問題に直面

することになる。とくに問題が表れたのは“HARU”であった。

5 月ごろの“HARU”は、コアメンバーが約 30 名であり、その少人数で 1000 名を超える登録者のプロジェクトを運営していた。そのなかでコアメンバーの負担が増大し、疲弊していったという。そこで大学としても、“HARU”プロジェクトに対する管理・運営組織を設置する必要性や、負荷の大きな学生の心のケアが必要となっていた。

またこれは「学業とボランティアをいかに両立するか」という問題でもあった。①ボランティア活動が長期化しかつ拡大しており、さらに②学業もスタートする。それゆえに、授業開始後になると、学生のみではボランティア活動の実践・調整が困難な場面も生じていた。そこでボランティア活動を継続するにあたっては、大学による「責任をもった」支援・調整も不可欠になっていたことが考えられる。

四節　支援室１年目の動き

では支援室は、実際にどのような形態で運営していったのか。その特徴は 12 月を境に変化していた。そこで以下では、2011 年 6～12 月までの動き、12 月～2012 年 3 月までの動きに分けて見ていくこととする。

一項　支援室の動き：2011 年 6 月～12 月

➢ 6 月 7 日　支援室の発足

支援室は、6 月 7 日に組織として正式に発足する。その際、要項としては次のような内容を定めた。

表 1－4　東日本大震災学生ボランティア支援室の主な要項

趣旨	第 1 条　この要項は、東日本大震災において東北大学の学生が行う自主的なボランティア活動に対する支援について、必要な事項を定めるものとする
支援対象	第 2 条　前条の支援は、次条に定める運営委員会において、本学の学生登録団体として認められた学生団体に対して行うものとする
運営委員会	第 3 条　本学に、前条に定める学生団体の登録審査その他ボランティア活動支援に係る重要事業を審議するため、運営委員会を置く
組織	第 4 条　運営委員会は、委員長および次に掲げる委員をもって組織する。 1. 学生支援を担当する総長補佐 2. 学生支援を担当する総長特別補佐 3. 学生生活協議会協議会協議員 4. 教育・学生支援部長 5. その他委員会が必要と認めた者 第 9 条　支援室は、次に掲げる職員をもって組織する。 1. 支援室長　1 名 2. 副支援室長　2 名 3. 総長室職員　若干名 4. 教育・学生支援部職員　若干名
所掌業務	第 8 条 1. 学外の機関・団体等との連絡調整に関すること 2. 学内の関係部署との連絡調整に関すること 3. 支援対象として運営委員会において認められた学生団体との連絡調整に関すること 4. 公認団体の活動状況の把握、集約および整理に関すること 5. 公認団体に対する各種支援及びケアに関すること

	6. その他ボランティア活動支援に関すること
事務	第 12 条　運営委員会及び支援室の事務は、教育・学生支援部において処理する

この要項を、先にみた「東北大学学生ボランティア支援室（仮称）の設置について（案）」と比較すると、まず趣旨、支援対象、所掌業務に関してはほぼ踏襲していることが分かる。一方で運営委員会、組織に関してみると、より具体的な形態が定められており、とくに組織に関しては、運営委員会と室員のメンバーを要項として定めるものとなっていた。

支援室の発足後は、まず 6 月～7 月にかけて、これらの要項にしたがった運営委員会委員の任命を行なった。それと並行し、事務においては、学生登録団体（第 2 条）の基準や、登録方法、学生ボランティア支援の具体的な流れなどを検討していく。そして 8 月 2 日に、第一回の運営委員会を開催する運びとなる。

➢ 8 月 2 日　第一回運営委員会

第一回の運営委員会では、以下のメンバーで実施される。なお委員は、役職から任命された委員が中心であり、専門家の立場から任命されたのは、ボランティア・NPO 論を専門とする西出委員のみであった。

表 1-5　第一回運営委員会委員

職	氏名	所属等
委員長	根元義章	理事（教育・情報システム担当）
副委員長	東谷篤志	総長補佐（学生支援担当）
委員	小田中直樹	総長特別補佐（学生支援担当）
	佐藤伸宏	学生協：文学研究科
	岩本武明	学生協：理学研究科
	池田忠義	学生協：高等教育センター
	上口孝之	教育・学生支援部
	西出優子	経済学研究科
	原信義	工学研究科（学生生活審議会）

会議においては、まず支援室設置の背景、所掌業務、組織について説明があった後、具体的な審議が行われた。その審議内容は①学生団体の登録審査、活動実施届に関する様式について、②学生団体への支援及び外部団体からの情報提供受け入れ基準について、③ボランティア活動に参加する学生への留意事項についての三点である。

①については、学友会の様式を参考にして、具体的に学生団体へ課す書類の様式を提案し、審議の結果、承認された。

②については、学生団体や外部団体にたいする、支援・情報提供受け入れの具体的な基準として「東日本大震災学生ボランティア活動に関する支援等の基準（案）」が作成され、

審議の結果、承認された。なお学生団体への支援内容として、具体的には「公共団体、社会福祉法人、N`PO 法人等の団体からのボランティア情報の提供」、「ボランティア活動を行う学生に対する講習会や研究会の実施」、「ボランティア活動に関する物品等の支援」、「ボランティア活動に関する各種の相談とケア」という点が示された。

③については、ボランティア活動に参加する学生に配布する文章として、「ボランティア活動に参加する学生への留意事項について」と題した文書が提案され[10]、審議の結果、承認された。その他、審議事項以外としては「HARU 新聞」[11]（2011 年 7 月発行）が配布され、学生の公認団体登録を呼びかけるにあたって、新聞記載団体に呼びかけるのも一つの案であることが議論された。

➢ 12 月までの特徴

2011 年度の運営委員会は、8 月の一回限りであり、その後は行わなかった。また 2011 年 12 月までのあいだは、学生団体の登録手続きや、ボランティア活動に参加する学生にたいする注意事項の周知といった点では進んだものの、支援室として学生へアプローチする活動はみられなかった[12]。これは「ボランティア活動のルールつくり」あるいは、「安全・安心にボランティア活動できるような環境整備」といった点では機能があったものの、ボランティア団体（とくに“HARU”）の求めた機能は担わなかったことを意味する。

“HARU”は 6 月中旬になるとボランティア活動を休止し、活動再開後も、ボランティアセンター的な活動は行わないことになった。”HARU”のブログによると、そこには以下のような経緯があった。

> “HARU”はこれまで大学内のボランティアセンターのような機能を果たし、活動してきました。しかし、授業、研究等が始まるにつれて、多くのメンバーがボランティアに割くことの出来る時間が少なくなり、今までのような価値では活動することが困難になり、6 月中旬からボランティア活動は休止してきました。その間に、本部メンバーや顧問の先生と話し合い、今後の活動方針、活動形態を議論してきました。今後は、ML 等を用いることなく、ボランティアセンターとしての活動は放棄し、専門ボランティア団体として再始動することになりました（“HARU”2011c）

また“HARU”は、支援室がボランティアセンターの機能を担うことを期待した。そこで支援室には「東日本大震災学生ボランティア支援室への要請事項（HARU からの相談）」

---

[10] 活動を行う前の準備、活動当日、活動後に分けて注意が記載されている。

[11] “HARU”が、オープンキャンパスで来場した高校生への配布を想定して作成したもの．新聞形式で、仙台で活動する 10 のボランティア団体・プロジェクトについて、活動内容と、メンバーからのコメント等がまとめられている。

[12] もっともこの時期には、団体登録の手続きや、登録団体への物品支援（長靴、スコップなどの購入・提供）といった細かな支援は行っていたと思われる。

と題した文書が提出される（7 月 24 日）。これは、支援室に対して「大学内のボランティアセンター機能を継続（これまでは事実上“HARU”が VC 機能を果たしてきた）」することを求めるものであり、具体的には、①ボランティアマッチング機能（ボランティア情報提供とボランティア参加学生の管理）、②メーリングリスト機能、③会計機能（寄付金受付の相談など）を要望していた。

しかしこの時期の支援室は、①ボランティア情報の提供に関していうと、掲示板へ掲示するもしくは窓口へ相談にきた学生に紹介するのみで、多くの学生にアプローチした提供は行っていなかった。また②メーリングリストも継承しておらず、実際に担っていたのは③会計機能のみであった。

二項　支援室の動き：2011 年 12 月～2012 年 3 月

当初の支援室は以上のような状況にあったが、12 月以降になると、次第に様ざまな企画が生まれ始めた。それは“HARU”の要望のなかにもあった、マッチング機能に近い活動である。

➢ 米村委員の就任と提案

様ざまな企画がはじまる契機となったのは、ボランティア活動に理解のふかい米村滋人准教授（法学研究科）が、運営委員に就任したことである。米村准教授が委員に就任すると、支援室の運営委員や室員に対して一つの提案を行なった。それは一般学生を対象として、ボランティア情報を提供するイベントを実施するというものである。このような提案をした背景には、米村委員の下記のような考えがあった。

> このところ、東北大学の学生、特に 1 年生・2 年生の参加率が低いという情報がある。実際に学生の話を聞いても、興味を持っている人はいるものの、定期的にボランティア活動を行なっている学生はごく少数である。このような状況が、被災地やボランティアに関する情報不足や、活動参加へのきっかけがつかめないことから生じているのだとすると、大変残念なことであり、情報提供やボランティアにかかわる交流の場を設けるのが大学の役割ではないかと考えた（12 月 6 日　第一回ボランティア連続セミナーについて）

ここには、マッチング機能を必要とみなす米村委員の考えが現れている。しかし当時の支援室では、専従のコーディネーターとして企画を実施できる職員・教員がいなかった。そこで「学生アシスタント」（学生スタッフ）として学生を雇用し、企画を補助してもらうことになった。これが、後にみる学生スタッフ組織へ発展していくことになる。

➢ 12 月 20 日、1 月 12 日、17 日　東北大学ボランティアセミナー

米村委員の発案した企画は、12 月 20 日に、「第一回東北大学ボランティアセミナー」（以

下セミナー）として実現する。実施にあたっては、12 月 6 日、20 日と打合せが行なわれる。このうち第一回の出席者については、教員 3 名（水野紀子法学研究科長、米村委員、千寿哲郎法学研究科准教授）、事務 2 名（学生支援課白崎課長、宮野係員）、コーディネーター1 名（一般社団法人ワカツク坂上氏）、学生 15 名となっていた。また学生に関していえば、多くがボランティア活動の経験者であり[13]、1 年生が 4 名、2 年生が 3 名、3 年生以上が 5 名となっていた[14]。ここから学生スタッフの特徴としては、①ボランティア活動へ既に参加している 2 年生以上が中心であり、②参加するボランティア活動と並行して、支援室の活動に関心をもった学生の多かったことが分かる。

では第一回のセミナーは、どのように実施したのか。概要は次の通りであった。

表 1－6　第一回セミナーの概要

目的	①学生一般に、広く震災ボランティアの情報を伝えること ②ボランティアに関わる学生の交流の場とすること
対象者	興味を持っているが、ボランティアに参加するきっかけを掴めていない人
開催場所	川内北キャンパス厚生会館多目的室
内容	第一部は、パネリストセッション「被災地と大学をつなぐ」。3 団体（“HARU”、L&D 仙台、Tohoku Law Net）がボランティアについて説明し、司会者が質問等していく 第二部は、トークセッション「東北大学生とボランティア」。3~4 グループに分かれ、①被災地の現状について、②現在のボランティアに対するニーズ、③大学生だからこそできる活動をテーマに話しあう
周知方法	・SNS（mixi、facebook、twitter）を使用する ・ポスターを作成し、学生支援課掲示板と厚生会館内に掲示する。直前にビラを配布する ・支援室のホームページに告知する
役割分担	学生スタッフのリーダーを、佐藤祐希（法学研究科大学院生）が務める

第一回のセミナーは、学生アシスタント参加者が 16 名であった。これは東北大学生の全体からみると極めて少なかった。またセミナー後の反省点としては、ターゲットである「ボランティア未経験者（特に 1，2 年生）」がほとんど参加していなかったこと、参加した未経験者も、第二部で会話に加われない場面があったことが挙げられた。

つづいて 1 月に入ると第二回、第三回のセミナーを実施する。このうち第二回については、第一回と同じ形式で実施したが、参加者は 6 名であった。また第三回については、パ

[13]内訳としては、L&D 仙台が最大で、4 名だった。その他に “HARU” が 2 名、Tohoku Law Net が 1 名、TEDxTohoku が 1 名、トライアスロン部が 1 名、ふんばろう東日本支援プロジェクトが 1 名、放送部が 1 名となっている。

[14] 3 名については、議事録に学年の記載がなかった。

ネルディスカッションとトークセッションの順番を入れ替え、第一部では「ボランティアに対する不安」をテーマとしてトークセッションを行ない、第二部では学生スタッフの中安祐太（工学部 3 年。L&D 仙台にも所属）が被災地の現状について紹介した。しかしこの回も低調であり、参加者は 8 名であった。

写真 1-9　第一回セミナー。トークセッションの様子（左）
写真 1-10　第三回セミナーの様子（右）

➢ 2 月 9 日　第一回相談会

セミナーは支援室として最初に実施した企画であったが、残念ながら、参加は低調であった。また当時はボランティア団体の学生などから、人手不足のため、（セミナーではなく）本学学生を対象とした募集活動をしたいという声もあがっていた。そこで米村委員や教員・学生スタッフは、新企画として、「第一回東北大学ボランティア相談会」を実施することになった（2 月 9 日）。

相談会の対象者は、ボランティアに関心をもつが、まだ参加していない学生である。この点はセミナーと同じであるが、形式が全く異なっており、学内・学外のボランティア団体がブースを構え、相談会形式で、ブースを訪れる学生に説明を聞いてもらう形式であった。相談会のこの形式は、ボランティア活動や被災地の実情を伝えるだけでなく、具体的なボランティア活動の情報を提供できるという特徴があった。そのため実際にボランティア活動の情報が欲しいという学生には好評であり、12 団体が参加[15]、25 人の参加者を集めることができた。また 2012 年度以降は、名前を改め、定期的な企画（「スタートアップフェア」）となっていくことになる。

なお相談会を実施するうえでは、ボランティア団体の勧誘ルールをいかに作るかが課題であった。というのも、当時は多様なボランティア団体が活動しており、自主的な勧誘活動に任せると、いかがわしい団体の勧誘を放置する懸念があったためである。そこで支援

[15] 参加団体は、学内団体が TEDxTohoku、All for Tohoku、Tohoku Law Net、“HARU”、L&D 仙台。学外団体が NPO 法人アスイク、学生による地域活動支援団体「みまもり隊」、公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン、情報ボランティア@仙台、NPO 法人キッズドア、ふんばろう東日本プロジェクト学習支援プロジェクト、一般社団法人ワカツクであった。

室としては、次のルールを制定した。第一に、基本的に登録団体しか参加を認めず、第二に、相談会で紹介する募集情報についてはあらかじめ支援室に提出してもらう。第三に、来場者の個人情報は他の団体関係者に伝えない。そして三点目については、念のため、担当者に誓約書を提出してもらうこととする。以上のようなルールは、今の時点（2015 年度）から振り返ると厳格なものとなっていた[16]。

➢ 2 月 21 日　第四回セミナー

2011 年度には最後に、第四回のセミナーも実施している（2 月 21 日）。このセミナーは、前三回とは内容が異なっており、ボランティア団体「Operation つながり」（広島大学）と東北大学生の交流会を兼ねて実施したものであった。セミナーは、第一部：「Operation つながり」の活動紹介、第二部：東北大生との意見交換という二部構成になっており、参加者は 20 名であった。

写真 1-11　第一回相談会の様子

写真 1-12　第四回セミナーの様子

➢ 2011 年 12 月～2012 年 3 月までの特徴

2011 年 12 月以降の特徴としては、第一に、セミナーや相談会などの実施を通して、マッチング機能をもちはじめた点が挙げられる。これらの活動を実施することで、震災ボランティア活動のルールづくりを越えて、震災ボランティア活動の積極的な支援へとシフトしていったともいえる。ただしこの時期の活動はすべて学内であり、ボランティア活動の積極的な支援といっても、大学内でボランティア団体・一般学生を引き合わせるのみというのが内実であった。

第二に、学生スタッフの登場がある。学生スタッフは当初、支援室の運営における補助的な役割として導入された制度であった。しかし 2011 年度にはすでに、セミナーや相談会

[16] ただし、この時点では初めて開催する相談会形式のイベントであったため、トラブルが起きると継続が認められない可能性があった。そこで安全・安心に実施するにあたっては不可欠なものだったともいえる。

の立案・企画にかかわっており、重要な役割を果たしていた。そして 2012 年度以降は、次章にみるように、支援室の活動における実働部隊となっていく。

表 1－7　2011 年度に実施した主な活動

開催日	イベント名	概要	参加人数
H23.12.20	第 1 回東北大学ボランティアセミナー	震災ボランティアに関する情報を提供し、学生間のつながりを深める	16
H24.1.12	第 2 回東北大学ボランティアセミナー	ボランティア活動の紹介、ボランティア活動に携わっている学生との交流	6
H24.1.17	第 3 回東北大学ボランティアセミナー	トークセッション、パネリストセッション	8
H24.2.9	第 1 回東北大学ボランティア相談会	一人一人に合わせたボランティア関連情報を伝える	25
H24.2.21	第 4 回東北大学ボランティアセミナー	広島大学のボランティア団体の活動の紹介と意見交換	20

【参考文献】

All for Tohoku，2011，「はじめに」All for Tohoku ホームページ.

L&D 仙台，2011，「災害復興支援団体 L&D 仙台　活動報告 20110515」L&D 仙台ホームページ.

文部科学省, 2011,「東北地方太平洋沖地震に伴う学士のボランティア活動について（通知）」文部科学省.

ReRoots，2011，「ReRoots の設立」ReRoots ホームページ.

とうしんろく編，2012，『聞き書き震災体験———東北大学 90 人が語る 3.11』新泉社.

東北大学，2013，『3.11 から記録と記憶をつないで、時代へ世界へ　東北大学東日本大震災記録集』東北大学.

東北大学大学院法学研究科，「東北大学におけるボランティア支援の取り組みについて」

東北大学地域復興プロジェクト“HARU”，2011a，「「HARU の集い♪」—震災から 2 カ月復興に向け結束—」2011 年 5 月 17 日ブログ.

———，2011b，「HARU 新聞———東北大学における復興支援活動まとめ」東北大学 2011 年オープンキャンパス配布資料.

———，2011c，「HARU 再始動！」2011 年 9 月 21 日ブログ.

二章　支援室のあゆみ

本章では、2012 年度～2015 年度における、支援室のあゆみをふりかえる。支援室の活動は、年を追うごとに活発化・多様化しており、運営体制も変化してきた。そこで以下では、年度ごとの活動を紹介するとともに、それぞれの特徴についても考察していくこととする。

一節　2012 年度の通史

一項　はじめに

2012 年度は、支援室で今もつづく活動の基本形がつくられた年度であった。前章でみたように、支援室に当初求められた機能は、「安全安心にボランティアできるよう環境整備する」ことであり、結果的に、ボランティアにたいする積極的な支援は十分になされなかった。一方で 2012 年度になると、支援室の機能として「ボランティア団体に関する情報発信」や「被災地へ足を運んでもらう機会の創出」といった点が見いだされ、それらに即した具体的な活動が誕生していく。

以下では 2012 年度の活動について、①大学内での活動、②被災地での取り組み（ボランティアツアー・スタディツアー）、③運営体制の三点から見ていくこととする。

二項　大学内での活動

➢　「スタートアップフェア」の開始

まず 2012 年の 4 月には、大学内での活動として、「スタートアップフェア」が始まった。「スタートアップフェア」とは、ボランティア団体の紹介イベントに関する通称であり、ボランティア団体がブースを出展し、参加者が自由にブースを回って、担当者からボランティアの説明を聞くイベントである。これは 2011 年度に開催した「ボランティア相談会」を、名前を改め、イベントとして大々的に打ち出したものであった。

2012 年度になると東北大学には、震災を（少なくとも東北大学生としては）経験していない学生が入学してきた。それに伴って、ボランティアの現状やボランティア団体の存在について、いかに彼ら・彼女らに知ってもらうかが問題となる[17]。また在校生には、学業とボランティアの両立は難しいという雰囲気があり、イベントへの勧誘が難しかった。そこ

[17] ボランティアの現状についていえば、2012 年度になると、 避難所支援やガレキ撤去といった緊急支援にちかい活動が減少した。そのためボランティアも多様化し、外部者には分かりにくくなっていたといえる。団体の周知についても、とりわけ新入生は、団体のメンバーがもつ知人・友人のネットワークをとおして団体の存在をしる機会が少なかった。そのため、スタートアップフェアといったイベントを通した存在周知が有効になった。

で「スタートアップフェア」は、新入生が主な対象となるように、様々な工夫をこらしたものとなった。まず日数をみると、最初の「スタートアップフェア」は 4 月に行われたが、日数は計 6 日間にわたった（それ以前は、すべて一日開催）。このように複数回開いた背景として、一つには、4 月になると学友会やサークルの説明会も活発に行なわれており、1 日だけだと関心のある学生を十分に拾いきれないという考えがあった。 また参加団体の規模をみても、学内団体が 5、学外団体が 6 参加し、多くのボランティア団体が一堂に介する場となった。宣伝方法についても、「ボランティアセミナー」や「ボランティア相談会」ではチラシの配布が中心であったが、「スタートアップフェア」の案内は、学生支援課の配慮から、入学式の配布資料にいれることができた。さらに東谷室長も、入学式の檀上で紹介を行ない、より多くの学生に周知することが可能となった。 その他に、イベント自体についても工夫を凝らしており、来場した学生には、新入生を想定して、最初に支援室の学生スタッフもしくは教員から被災地やボランティアの現状・実態をレクチャーする時間をもうけた。

以上のような工夫をこらした結果、4 月の「スタートアップフェア」には 150 人以上の学生が参加し、それまで行ってきた「ボランティアセミナー」のそれを大きく上回った。またボランティア団体からも、新たなメンバーの参加に成功した、意欲ある学生に成功したといった声が寄せられたため、4 月以降も継続することになり 、6 月には第二回、11 月には第三回を実施している（詳細は四章を参照）。

➢ その他イベントの開始

2012 年度には、「スタートアップフェア」以外にも、大学内で様ざまなイベントを企画した。まず 7 月には、東北大学オープンキャンパスの一企画として、被災地の現状を紹介するパネルの展示や、質問コーナー等の設置を行なった。この企画は、大学生だけでなく、高校生にもボランティア活動へ関心を持ってもらうことを目的としていた。つづいて 11 月になると東北大学祭が開かれるが、こちらにも、支援室として参加することになった。支援室のブースでは、被災地に関係した商品の販売や、ボランティア団体の体験イベント等を行なっており、大学祭へ訪れる様ざまな人びとに向けて、震災ボランティアの啓発を図った。この二つのイベントには、2012 年度以降も毎年参加しており、恒例の企画となっている（詳細は四章を参照）。

その他にも、いくつかの企画を実施した。一つには「ボランティア相談会」（2012 年 10 月～）がある。これは学生スタッフの井上尚人（経済学部 3 年）が部屋に待機して、ボランティアに関する学生の相談を受けつけるという企画である[18]。この企画を実施した経緯として、学生支援課の窓口では、ボランティアの具体的なアドバイスができないという問題があった。そこで、ボランティアに詳しい学生スタッフが定期的に相談を受けつける窓口として、実施されたものであった。また 11 月になると、学内団体である ReRoots と連携し

[18] 毎週火曜日 16 時半～18 時に、川内北キャンパス B 棟談話室の一角を借りて実施した。

て写真展を開催した。このイベントは、川内北キャンパスの講義棟廊下を利用して行なったものであり、通行する学生にたいして気軽に被災地の現状を知ってもらう機会となった。

写真 2-1　第一回スタートアップフェアの様子　2012 年 4 月 18 日（左）
写真 2-2　ReRoots と共催した写真展の様子　2012 年 11 月 22 日　（右）

➢　広報の充実化

2012 年度になると、各種イベントを宣伝する広報にも工夫がこらされていった。前年度に実施していた「ボランティアセミナー」は、「来場した学生にボランティアの紹介・相談をする」という点では意義があったものの、そもそも来場者が少ないという課題があった。そこで 2012 年度には、多様な情報発信の方法が考えられていく。

第一に、広報紙「ボランティアセミナージャーナル」（以下ジャーナル）の刊行がスタートする。支援室では、4 月の入学式に合わせてジャーナルの 1 号を作成し、入学式の配布資料として新入生全員に配布した。この号は、学生支援課の職員と“HARU”のスタッフ、支援室の教員が協力して作成したものであり、冊子には、学内外のボランティア団体による活動情報をまとめていた[19]。4 月以降もジャーナルは定期的に作成し、夏休みには第二号を発刊した。この号には、学内外のボランティア団体の紹介にくわえて、支援室の活動報告、担当教員からのメッセージも掲載している[20]。また秋には第三号を作成しており、夏休みまでに行ってきた活動を紹介した。その後もジャーナルは定期的に刊行しており、広報の一つとして確立することになった。

ジャーナル以外にも様ざまな方法が考えられた。第二に、在学生にたいする情報発信としては、「三角柱」が活用された。三角柱とは、大学生協食堂のテーブルに設置した三角形の案内筒のことであり、この筒にはボランティア情報の一覧等を掲載している。支援室で

---

[19] 発刊にあたって、以下のような思いを込めていた。「学内外のボランティア団体による支援活動の情報をお伝えすることで、皆さんが多くの人とつながる一歩を踏み出すきっかけになればと考えています。様々な支援の形があります。ぜひ自分にできる活動を探してみましょう」（ジャーナル 1 号）。このように、ボランティア情報の提供をとおして各自にあった活動へ参加してもらうことが、ジャーナル発刊の目的だったといえる。

[20] 第二号はオープンキャンパスで配布し、高校生にたいする分かりやすい広報手段としても活用している。

は、この三角柱を用いることで、食堂を利用する数多くの学生にたいする広報が可能となった[21]。

第三に、2012 年度になると「メール配信サービス」もスタートする（7 月）。このサービスには、支援室の活動に参加したことのある学生などに登録してもらっており、登録者にたいして定期的にボランティア情報をメールしている。このサービスは、ボランティアへ関心をもつ学生に対する情報発信の手段として活用されている。その他にも、2012 年度になるとホームページや facebook ページも作成しており、キャンパスの一角に、支援室専用の掲示板も設置した。このように、2012 年度にうまれた広報手段は、2015 年度になっても活用しているものが多い（表 2－1）。

表 2－1　2015 年度時点における支援室の情報発信

名前	対象者	発信内容	発信頻度	特徴
ボランティアジャーナル	新入生、イベント来場者など	支援室の活動紹介、ボランティア団体の活動紹介など	年 3―4 回	紙媒体で、分かりやすく活動紹介ができる
三角柱	食堂の利用者	イベント告知、ボランティア情報の紹介など	年 6 回程度	食堂の利用学生にイベント告知ができる
メール配信サービス	登録者（支援室の活動参加者など）	イベント告知、ボランティア情報の紹介など	不定期	ボランティアに関心をもつ学生に、情報発信できる
ホームページ	ホームページ閲覧者	イベント告知、活動報告など	不定期	体系だった情報発信ができる
facebook	「いいね」を押した人	イベント告知、活動報告など	不定期	容易に情報発信できる
twitter	フォロワー	イベント告知など	不定期	容易に情報発信できる（2014 年度から活用）
掲示板	掲示板をみる人		不定期	（2015 年度時点では、活用されていない）

[21]三角柱は神戸大学でも設置しており、藤室氏（当時神戸大学）のアドバイスによって、東北大学でも導入が決定したものであった。

写真 2-3　ジャーナル 1 号の様子

写真 2-4　2012 年 4 月に作成した、最初の三角柱

三項　被災地での取り組み（ボランティアツアー・スタディツアー）

2012 年度には、被災地における取り組みもスタートする。その取り組みは、主に「ボランティア（スタディ）ツアー」という形で実施した。ボランティアツアーとは、日帰り～数日間の泊りがけで行なう、（基本的に）一回完結のボランティア活動である。またツアーとあるように、被災地の視察などを組みこんだ活動がおおく、初参加者にも対応した内容となっている。このような活動が始まった経緯として、第一に、学内・学外のボランティア団体の活動へ直接参加することは、ボランティア未経験者にとって、（たとえスタートアップフェアで情報提供を受けても）ハードルの高いことがあった。第二に、学生のなかには「とにかく現地に行って活動したい」という考えの者が一定数おり、彼ら・彼女らにとっては、実際に参加する機会の提供が求められていたことがあった。

➢　2012 年 4～6 月の活動

最初のボランティアツアーは、5 月に実施している。ツアーは宮城県内における日帰りの活動であり、石巻市の「石巻スタディツアー」、七ヶ浜町の「沿岸部ガレキ処理ボランティアツアー」、仙台市若林区の「東北コットンプロジェクト」を行なった。ツアーの内容は、被災地の視察に重点をおいたスタディツアーと、ボランティア活動に重点をおいたボランティアツアーの二種類である。なおこれらの活動は、すべて他団体にコーディネートを依頼しており、石巻市の活動では「START TOHOKU」、七ヶ浜町の活動では「スマイルエン

ジン山形」、また仙台市若林区の活動では「ワカツク」に協力を仰いでいた[22]（詳細は三章を参照）。

写真 2-5　東北コットンプロジェクトの様子　2012 年 5 月 19 日

➢　2012 年 8 月以降の活動

続いて夏休みにも、複数のツアーを実施している。活動は、やはり宮城県内における日帰りの活動が中心であり、亘理町では「亘理スタディツアー」、山元町では「山元町いちご農園ボランティア」、仙台市若林区では「農地復旧ボランティア」を行なった。神戸大学との共催企画も初めて実施しており、岩手県内における泊まりがけという新たなツアー形態も生まれている（岩手県陸前高田市での「一泊二日岩手県沿岸ボランティア」）。

なお実施体制をみると、仙台市若林区では ReRoots（支援室の学内団体）、山元町では“HARU”（同じく学内団体）、岩手県陸前高田市では神戸大学との共催であった。また亘理町では、学生スタッフの田中邦生（医学部 2 年）が中心となって企画したが、彼は亘理町で活動する学生団体 L&D のメンバーであり、団体の活動で生まれたつながりを活かして企画した形であった。

2012 年度におけるその後の活動をみると、基本的に、夏休みのツアーを継続する形で行なっている。まず岩手県陸前高田市におけるツアーは恒例の活動となり、二回目・三回目を実施した（「陸前高田ボランティアツアー」（2012 年 11 月、2013 年 2 月））。山元町のツアー、仙台市若林区のツアーについても二回目を実施した（「山元町いちご農園ボランティア」（2012 年 12 月）、「農地復旧ボランティア」（2013 年 2 月））。また春休みには、ワカツク坂上氏のコーディネートのもと、山元町の「いちごだ！歴史だ！お祭りだ！山元町まるごとボランティアバスツアー」（2013 年 3 月）、福島県新地町の「新地町スタディツアー」（2013 年 3 月）を行なった。

その他にも 2012 年度には、高校生を対象とする企画があり、「被災地の野球部に野球グランドを貸す企画」（4 月）、「学友会バドミントン部・志津川高校の合同合宿」（10 月）なども実施している。

[22] ワカツク共催の活動としては、6 月にも、「鎮守の森復活プロジェクト」を実施している。

写真 2-6　いちごだ！歴史だ！お祭りだ！山元町まるごとボランティアバスツアーの様子。音楽イベントに参加し、住民の方と交流を行なった　2013 年 3 月 16 日　（左）
写真 2-7　被災地の野球部に野球グランドを貸す企画の様子。写真は、気仙沼高校の高校生と、東谷支援室室長　2012 年 4 月 8 日　（右）

➢　2012 年度の特徴

以上のように 2012 年度には、学生が被災地 1 へ足を運ぶ機会を創り出すために、多様なボランティアツアー・スタディツアーを実施した年度であったといえる。このようなツアーを通して、1 年間に 374 名[23]の東北大学生が、被災地を訪れることとなった。ただし運営面からみると、いずれも学生スタッフが個人的に参加する団体経由、あるいは他団体がコーディネートしたものであった。したがって、被災地との人的つながりが支援室の組織としては薄く、この点が 2013 年度以降の課題として浮上することになる。

四項　運営体制

次に、これまでにみた多様な活動をどのような運営体制で行ってきたかについて、大学の機関としての動き、学生スタッフの動きに分けてみていく。このような区分を設けるのは、支援室に「大学の機関としての特徴」、「学生スタッフの活動組織としての特徴」という二つの側面があるためである[24]。

➢　大学の機関としての動き（4 月～8 月）

では大学の機関としての動きから、見ていくこととする。支援室の運営委員会は、6 月に、2012 年度の第一回を開催する。そこでの主な議題をみると、第一に、支援室の運営にあたっての各種環境整備に関する議論（①活動経費について（議事 1-（2））、②厚生会館談話室について（議事 1-（3））③スタッフについて（議事 2-（2））、第二に、安全安心にボランティアを実施するための議論（④登録団体について（議事 2-（3））、⑤ボランティアに関わ

[23] 大学にある報告書類の人数。書類上の人数のほかに、報告がなされていない活動等もあるため、実際の参加人数はこれを上回っていたと考えられる。
[24] なお以下の記述にあたっては、二つ目の側面により焦点を当てた内容となっている可能性がある。これは筆者（学生スタッフ出身）の認識不足によるものである点は、ご了承願いたい。

る学生のメンタルケアについて（議事 2-（5）））があった。

環境整備に関する議論として、①活動経費については、大学から拠出される平成 24 年度の予算が、前年度に比べて大きく減額され、必要経費をまかなえないことが問題となっていた[25]。そこで法学部がドイツからうけた支援金、いわゆる「法学部基金」（正式名：独日援助基金（震災））を活用し、学生の行ったボランティア活動に対して支援することになった。この基金は、学生単独で行った活動等にたいしても助成するものとなっており、基金の存在によって、学生を主体とした柔軟なボランティア活動が可能となった。次に②厚生会館談話室については、既に触れたように、川内北キャンパスの厚生会館談話室[26]へ、ボランティアに関するイベント情報等を紹介する掲示板を設置したことが報告された。関連して、委員から学生スタッフが作業するスペースを設けたいという声があがり、一部屋確保できそうという報告があった。これは、後にみる「ボランティアルーム」の設置のことであり、支援室として学生スタッフの活動に便宜を図る方向性が示された。一方で支援室の運営にあたっては、③スタッフについてであるような問題があった。すなわち、委員からは、資格をもった専門職（ボランティアコーディネーター等）をスタッフとして雇うべき旨提案があったが、これは 2012 年度中には実現しなかった。結果的に、2011 年度に引きつづき、専門職として携わる職員・教員がいないまま支援室の運営を行なうことになった。

支援室の当初の目的としては、「安全安心にボランティアできるよう環境整備する」ことがあるその点について議論したのが④⑤であった。登録団体については、東北大学生主体の団体（学内団体）・その他の団体（学外団体）の区別を明確にすべきといった提案や、活動が不適切・不明確な団体については登録団体から外すべきといった提案がなされた。このような議論があった背景として、一つには、NPO 法人「POSSE」の問題があった。すなわち、「POSSE」は、東京を拠点として若者の労働問題にかんする相談や情報提供等を行なってきたが、東日本大震災をうけて、仮設住宅での被災者支援にも関わるようになった（「東北大学東日本大震災学生ボランティア学外団体登録票」）。また学生ボランティアを募集するため、2012 年度に入って、連携団体への登録を希望していた。一方で POSSE のメンバーは、大学側として不信感をおぼえる行為を繰り返し行なっていたため[27]、いかに対応するかが問題となっていたといえる。その他に、⑤ボランティアに関わる学生のメンタルケアの議論も行われており、一時期に比べて学生の精神状態は落ち着いてきたものの、まだ注意が必要である旨、発言があった。

---

[25] 具体的にみると、平成 24 年度に大学から割り当てられた予算は 360 万円であったが、必要経費としては 693 万円が計上されており、差引 300 万円以上が不足していた（「平成 24 年度ボランティア支援室の必要経費」）。このような減額は、平成 23 年度にコーディネーターを雇用できず、人件費相当の予算が残ったために行われたものであった。

[26] 川内北キャンパスは、全学教育の授業が行われるキャンパスであり、1-2 年生が多く集まる場所となっている。

[27] 2011 年 5 月～2012 年 8 月にかけ、キャンパス内で無断のビラまきをする、ビラまきの人物が本学学生と名乗っていたものの、確認したところ在籍していなかった等のトラブルが複数回発生していた（「仙台 POSSE の対応について」）。

➢　大学の機関としての動き（9 月～）

運営委員会は、9 月にはいって第二回・第三回を開催する[28]。そこでの議論は、登録団体の制度にかんする問題が中心となった。

第二回では、①「団体登録の取り扱いについて」（議題 2）、②「8 月に申請のあった登録希望団体について」（議題 3）といった点が議論される。①登録団体の制度を議論するにあたっては、まず現状認識として、「支援室設置後 1 年が経過し、特に団体登録の取り扱いについて不備等が散見されることから、団体登録の取り扱いを見直す」必要があることが示された（「東日本大震災学生ボランティア活動支援運営委員会における論点整理について」）。そして見直しの方向性としては、団体登録の審査等の取り扱いを明確にし、既存の登録団体については、登録の有効期間や団体の活動状況等の確認を設ける、新規申請の団体については基準に満たないものを登録しないといった点が提示された。また②「8 月に申請のあった登録希望団体について」は、登録を希望する二団体（POSSE、地球のステージ）について、継続審議となった（第二回運営委員会議事メモ）。

つづいて第三回では、①団体登録の基準について（議題 3）、②団体登録手続きについて（議題 4）、③「8 月に申請のあった登録希望団体について」（議題 1）といった点が議論される。①②については、具体的な基準・手続きの改正案が示され、了承された。すなわち、団体登録にあたっては複数の書類の提出が必要となり、登録団体として認められない場合の基準も明文化されることになった[29]。また手続きとしては、第一段階として学生支援課の窓口で審査し、第二段階として運営委員会で審査するという手続きが定められることになった。そして③登録を希望していた POSSE に対しては、本学の定めるルールに違反しているとして、登録を却下するということが行われた。ちなみにいうと、団体登録の基準や手続きに関する要項には、その後修正・訂正が加えられ、最終的には 1 月末に施行された（2013 年 1 月 30 日運営委員会）。

➢　大学の機関としての動き：教員について

支援室の活動を支える教員をみると、2012 年度には、米村委員、西出委員、千寿哲郎准教授（法学研究科）の寄与がとりわけ大きかった。米村委員についていうと、2011 年度から支援室の活動に深く関わっていた点は、前章にみた通りである。また 2012 年度になっても、米村委員は、学外との折衝、学内との折衝にあたって尽力した。例えば学外との折衝をみると、「スタートアップフェア」の連絡やボランティア団体の登録手続きの審査・相談などは、米村委員が中心となって対応した。学内との折衝においても、大学の事務方と交

---

[28] 6 月の委員会以降は、文学部棟ボランティアルームの使用許可がおりる、「学外団体」の呼称を「連携登録団体」に変更するといった対応がなされた。

[29] 登録対象外の基準としては、①本学が定める規則等ルールを遵守しないもの及びこれに基づく職員の指示等に従わないもの、②法令に違反する活動を行なっているもの、③申請書等の内容が整っていないもの、④虚偽・偽装等と判断されるもの、⑤団体の活動が営利を目的としているもの等が設けられた。

渉し、ボランティアルームの確保や、三角柱の設置などを主導していた。さらに、学生スタッフ組織の活動についても積極的に関わっていた。

つづいて西出委員は、非営利組織論を専門としており、支援室設立時からの運営委員である。西出委員は 2011 年度以来、自身のゼミなどを通して、震災関連の情報発信を積極的に行なってきた。また 2012 年度になると、被災地におけるボランティアツアー・スタディツアーを複数回引率するなど、支援室の活動へより深く関わるようになった。

最後に千寿准教授は、2011 年 4 月に特許庁から赴任した教員であり、支援室の運営委員ではなかった。しかし、ボランティアツアー・スタディツアーには、引率として複数回にわたり参加し、学生スタッフのミーティングには欠かさず出席するなどしていた。そのため米村委員とともに、学生スタッフ組織の活動を指揮した立場にあった。

➢ 学生スタッフ組織の動き

2012 年度の運営は、大学の機関としてみると、以上のように登録団体への対応を中心に動いていた。では学生スタッフ組織はどのように動いていたのか。

2012 年度にはいると、学生スタッフの活動を支える各種の環境整備が行なわれていった。まず学生スタッフの活動をさせる金銭面としては、ボランティア活動にたいして交通費を助成する「法学部基金」（正式名：独日援助基金（震災））がスタートする。この基金は、学生単独で行った活動等にたいしても助成され、学生による柔軟なボランティア活動が可能となった。また 2012 年度になって「ボランティアルーム」（正式名：文・教研究棟 221 号室）の利用がスタートし、この部屋を活用して、学生スタッフや登録団体が活動にもちいる各種物品の管理が可能となった。またこの部屋は会議スペースとしても利用され、学生スタッフのミーティングは基本的にこの部屋で行なわれ、イベントやツアーの準備、説明会・反省会なども実施されることで、「ボランティアルーム」は学生スタッフの拠点となっていく。

学生スタッフの活動体制をみると、2012 年度になって、学生スタッフの特徴が変化していった。すなわち、2012 年度の当初は他のボランティア団体とかけもちで学生スタッフにつくものが多かったが、次第に、支援室単独で活動する（もしくはボランティア団体以外に所属する）学生が中心となった。それにともなって、当初の支援室にあった「多様なボランティア団体に所属する学生が集うネットワーク組織」という性質が変化し、被災地との関わりにおいては、支援室に限って活動する学生スタッフが中心となる（図）。

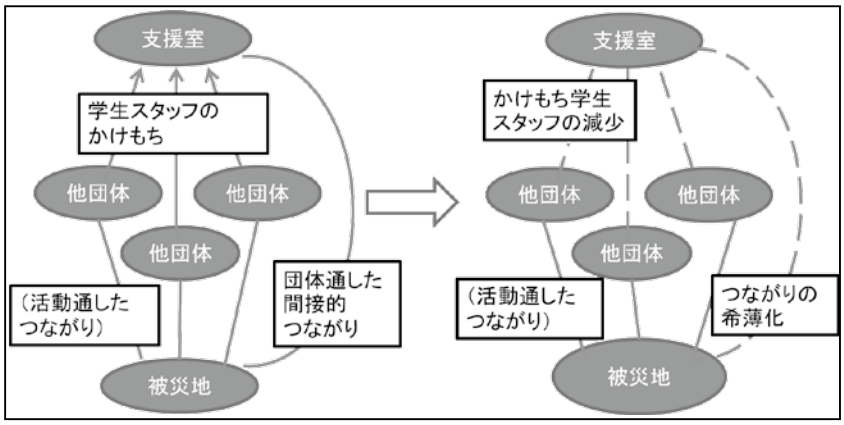

図 2-1　2012 年度における学生スタッフ組織の変化

この点は、歴代の学生スタッフ代表をみても明らかであり、二代目の渡辺絵里（文学部 3 年：2012 年 4 月～8 月）はボランティア団体 TEDxTohoku とかけもちで参加していたが、三代目の市田大弓（歯学部 2 年：2012 年 9 月～12 月）、四代目の保坂龍彦（医学部 1 年：2013 年 1 月～2014 年 3 月）は、いずれのボランティア団体にも参加していなかった。なお 2012 年度に、学生スタッフが中心となって取り組んできた活動の一つとしては、「ボランティアセミナージャーナル」の取材・編集をあげることができる。学生スタッフの渡辺慶太郎・安永昌平（いずれも工学部 2 年）はデザインの知識いかして、ジャーナルの 2 号・3 号・4 号の編集作業を担っており、紙面の構成などにもアイデアを出していた。

なお学生スタッフの取りまとめにあたっては、既にみたように、米村委員や千寿准教授の寄与が大きかった。米村委員や千寿准教授は、学生スタッフのミーティングへ欠かさず出席していた他に、細かな点（三角柱やポスターのデザイン等）についてもアドバイスを与えていた。また学生スタッフを交えて定期的に懇親会を開いており、フォーマル・インフォーマル双方において学生スタッフの関係性構築に尽力した。

二節　2013 年度の通史

一項　はじめに

2013 年度は、大学組織としてみると、コーディネーターが着任し、ボランティア活動の支援体制が確立した年度であった。一方で学生スタッフの動きとしては、学生スタッフが被災地における定期的な活動現場をもちだしたという点が、大きな特徴として挙げられる。具体的にいうと、石巻市雄勝町、福島県原発避難地域でのボランティアツアー・スタディツアーがスタートし、被災地での活動における部門制（宮城・岩手・福島）の萌芽がうまれることになった。また学内での活動においても、支援室のコーディネーター・学生スタッフと、登録団体のあいだでの連絡調整の場として、「井戸端会議」がスタートするなどの動きがみられた。

二項　大学内での活動

➢　基本的な特徴

大学内での活動は、基本的に、前年度のものを継続するかたちで行なった。まずボランティア団体を紹介する「スタートアップフェア」は、2012 年度と同じく、三回実施した（4 月、10 月、1 月）。その形式をみると、細かな工夫はみられたものの、大きな変更は行われなかった[30]。「スタートアップフェア」以外のイベントをみると、7 月にはオープンキャンパスがあり、そのなかの一企画として、学生の講演などを企画した。11 月には大学祭に参加し、おでんの出店をした。この二つについても、前年度と内容は異なるものの、イベント開催の趣旨は共通している（詳細は四章を参照）。

広報のあり方をみても、広報紙である「ボランティアセミナージャーナル」については、春号、夏号、秋号と三回にわたって発行し、それぞれ、支援室が前の時期に行なった活動を簡潔に紹介した。「三角柱」や HP を用いた広報も、より高頻度に行っていた。

➢　新たな活動

そのなかで、2012 年度に始まった活動もいくつか存在している。第一に、「震災復興とボランティア」という授業がある。ボランティアツアー等を実施するなかで、教員等は、ボランティア活動が学生にもたらす教育的効果を認識していた。また授業の一環と位置づけることで、熱心にボランティア活動をする学生が多くなり、ボランティア参加者の掘り起しにつながるという予想もあった[31]。そこで 2013 年度から、「基礎ゼミ」（1 年生を対象としたゼミ形式の授業）として、震災ボランティアをテーマとした授業を開講する。担当は西出委員と米村委員であり、カリキュラムとしては、①まずボランティアにかんする基礎

---

[30] 2013 年度には、ボランティア団体を紹介する小冊子の作成、文化系サークルの新入生勧誘イベント「文化フェスティバル」への参加といった変更があった。

[31] 米村委員によると、極端にいえば、シラバスに「ボランティア」に関連する科目があるというだけで、ボランティアや支援室の宣伝になるという発想があったという。

知識を学習し、②その後受講生が五班に分かれ、それぞれ具体的なボランティア活動を企画するというものであった。そして最終回には企画の発表会を行ない、三つの企画は、最終的に支援室のボランティアツアーとして実施することができた（詳細は四章を参照）。

第二に、「井戸端会議」の開催がある。教員・学生スタッフと、支援室に登録するボランティア団体のあいだには、「スタートアップフェア」の運営以外の場面において、連絡調整する機会は少なかった。またボランティア団体のあいだにも、相互に交流・情報交換する機会は少なかった。

そこで 2013 年度には、教員・学生スタッフとボランティア団体が連絡調整する会議として「井戸端会議」を開くことになった（2013 年 9 月～）。第一回の会議は試験的なものであり、「スタートアップフェア」の運営方法や各団体の活動紹介を行なった。その後「井戸端会議」は定期的な会議と位置付けられるようになり、情報交換の機会として、毎月開くことになった（詳細は四章を参照）。

第三に、その他にも新たな企画が二つあった。一つ目は映画「ふるさと帰り」上映会であり、映画に感銘を受けた学生有志によって、東北大学生を対象とする上映会が企画された。当日は 100 名弱の学生が参加し、好評のもとに終わっている。二つ目は「雄勝ツアー報告会」である。こちらは、支援室で行なったツアーを受け、学生スタッフが企画したものである。この報告会では、スタディツアーで伺った内容の報告と、石巻市雄勝町で活動する各種支援団体の活動紹介を行ない、具体的な被災地支援のあり方について議論した。

第四に、2013 年度になると国際交流が活発化した。まず 11 月には、教員・学生スタッフが「日本ボランティア代表団」[32]として中国を訪問し、四川大地震被災地の視察、現地学生との交流などを行なった。また 3 月には、南台科技大学（台湾）の学生が東北大学を訪問、学生スタッフ等と交流している。

写真 2-8　基礎ゼミの様子。受講生が発表会を行なった　2013 年 7 月 6 日（左）
写真 2-9　ボランティア訪中団の様子　2013 年 11 月 7 日（右）

三項　被災地での取り組み

2013 年度におこなった学内での活動は、新たな試みはあったものの、顕著な変化はなか

[32] 中国日本友好会、日本国際協力センターの共同事業として実施した.

ったといえる。一方で被災地での取り組みについては、2013 年度の中盤に、一つの転換点を迎えた。

➢ 2013 年 4~6 月の活動

まず 4~6 月には、2012 年度の活動でうまれた蓄積をいかし、三県でより多くのツアーを実施した。すなわち、①岩手県では、支援室のコーディネーターに着任した藤室玲治委員が中心となり、四回目、五回目のツアーを行なった（「陸前高田ボランティアツアー」（4 月、6 月））。②宮城県では、山元町で“HARU”共催のボランティアツアーを行なっており（「山元町いちご農園ボランティアツアー」（4 月））、仙台市若林区でも、ReRoots と共催でツアーを行なった（「若林区農業復興応援ツアー」（5 月））。これらはいずれも、2012 年度からつづく三回目のツアーであった。また石巻市では、支援室の学生スタッフと、“HARU”、菊池遼氏[33]の共同企画によって、二回目のスタディツアーを実施した（「石巻スタディツアー」（5 月））。その他にも気仙沼市では、藤室委員の企画で、日帰りのボランティアツアーを実施している（「宮城県沿岸ボランティアツアー」（5 月））。③福島県では、郡山市において、藤室委員と支援室学生スタッフ、坂上氏[34]の共同企画によるツアーを行なった（「福島スタディツアー」（6 月））。また坂上氏の仲介により、子どもの移動保育をおこなう NPO「ポッケア」と共催したツアーも実施している（「移動保育プロジェクトボランティア」（6 月））。

2013 年度の前期には、このように数多くのツアーを実施したが、ツアーの運営形態をみると、支援室の教員あるいは他のボランティア団体が中心となって企画したものが中心となっていた。

➢ 2013 年 8 月～9 月の活動

一方で 8 月以降は、支援室の学生スタッフが中心となった企画が増加していく。夏休みの活動をみると、①まず岩手県では、「陸前高田ボランティアツアー」を継続して行なったが（8 月、9 月）、仮設住宅へのアポイントメントや活動内容の考案において、学生スタッフの関与が増加した（詳細は三章）。

②宮城県では、津波で極端に人口減少した石巻市雄勝町において、復興の課題をまなぶツアーを行なった（「雄勝スタディツアー」（9 月））。この企画は、教員・学生スタッフが協力し、3 か月の準備のすえに実現したものであり、初めて訪れる被災地での活動であった。同じく宮城県では、他大学の学生を被災地にまねいたツアーも行なった（「仙台＆宮城県沿岸部ツアー」（8 月））。こちらのツアーでは、東日本大震災で被災しなかった地域の学生に対して、防災意識を高めることを主眼においており、宮城県の複数地域を視察した。

最後に③福島県でも、放射能汚染の問題や、原発避難地域が直面してきた問題を真正面

---

[33]山形大学出身。START TOHOKU のメンバーとして、2012 年度の「石巻スタディツアー」をコーディネートした人物であり、2013 年 4 月に、東北大学大学院経済学研究科へ入学した。

[34]2012 年度は、 一般社団法人ワカツクへ勤務しながら、東北大学大学院へ在学していた。一方で 2013 年度になると、出身が福島県であったことから、福島県の NPO「コースター」の理事に着任、主に福島県で活動されるようになった。

から取りあげたツアーを行なった(「福島スタディツアー」(9 月))。こちらも新企画であり、教員・学生スタッフが夏休み前から準備することで実現したツアーであった[35]。

なお 2013 年 7 月には、山形県で集中豪雨が発生する。そこで教員・学生スタッフの有志がバスをチャーターし、ボランティアに向かった。ただし当時は、支援室の予算に「東日本大震災の被災地」限定という制約があったため、大学によるチャーターは適わなかった。そこで、有志が費用を負担しての活動となった。

写真 2-10　陸前高田ボランティアツアーの様子　2013 年 8 月 31 日（左）
写真 2-11　宮城沿岸ツアーの様子。河北新報本社にてお話を伺う　2013 年 8 月 29 日（右）

➢ 2013 年 10 月以降の活動

その後の活動をみると、夏休みに実施したツアーと関連する、もしくは延長線上にあるツアーの割合が大きくなっていった。まず①岩手県では、「陸前高田ボランティアツアー」を五回にわたって実施しており、最も回数を重ねるツアーとなった（11 月、12 月、1 月、2 月、3 月）。②宮城県では、石巻市雄勝町において、足湯ボランティア活動がスタートする。この活動はスタディツアーから発展したものであり、教員・学生スタッフとツアー参加者が協力して運営し、四回にかけて行なった（「石巻足湯ボランティア活動」（11 月、1 月、2 月、3 月））。また③福島県では、留学生を対象として、原発避難地域の問題を学習するツアー（「留学生と共に行く福島スタディツアー」（12 月））、除染問題の学習や仮設住宅での交流、移動保育への参加などを中心とするツアーを実施した（「福島ボランティアツアー」(2 月))。これら二つのツアーも、陸前高田市や石巻市雄勝町におけるツアーと同様に、支援室の学生スタッフと教員が協力して企画したものであった。

これらの他に、夏休み後に行なった活動は三つにすぎない[36]。したがって被災地での活動は、「支援室の教員または他のボランティア団体が企画」したものから「学生スタッフが主体的に参画」したものへと、次第に移行していったことになる。

---

[35] その他に夏休みには、基礎ゼミ受講生の企画したツアーが三つ行われた。

[36] 学友会バトミントン部主催の活動（「バドミントン部合同合宿」（10 月））、南三陸町における「復興応援団」共催のツアー（「南三陸ボランティアツアー」（2 月））、山元町における HARU 共催のツアーを行なった（「山元町足湯ボランティア」（2 月、3 月））。

写真 2-12　福島ツアーの様子　2013 年 12 月 14 日（左）
写真 2-13　陸前高田ボランティアツアーの様子　2014 年 2 月 8 日（右）

四項　運営体制

では、支援室の運営体制はどのように行っていたのか。被災地における活動形態の変化は、支援室の教員・学生スタッフにおける議論の結果としてうまれたものであった。

➢ 運営体制（2013 年度前期）

まず大学組織としての動きをみると、2013 年度になって、千寿哲郎准教授が退任したが、藤室准教授が支援室のコーディネーターとして着任、ボランティアに理解のふかい松谷基和准教授も赴任し、支援室の委員となった。そのため 2012 年度と比べて、教員による支援体制がより充実することになった。学生スタッフ組織の動きをみると、前年度と同様、他のボランティア団体と掛けもちするメンバーはわずかであった。また新メンバーも加入したが、彼ら・彼女らは、被災地での活動に関心のある学生が中心となっていた。そのため被災地での活動に関心をもつ学生スタッフと、被災地における具体的な活動現場をもたない体制（当時）の間にズレが生じつつあった。あるいは、学生スタッフが被災地の現状に疎いという問題も生じていた。

以上のような問題が生まれつつあるなかで、教員・学生スタッフを交えて、活動の方向性を検討するミーティングが開かれた（2012 年 5 月~6 月）。このなかでも最も転機となったのは、5 月 23 日と 6 月 3 日のミーティングであった（表）。表にあるように、これらのミーティングを通して活動の方向性にかんする議論を行なった。その結果、学生スタッフとして被災地での活動現場をもつ方向性へ舵をきることになる。具体的には、教員・学生スタッフが四班に分かれ、①岩手県陸前高田、②宮城県石巻市雄勝町、③他大学ツアー、④福島県のツアーを検討していった。この成果として行なったのが、先にみた夏休みのツアーであった。

表 2−2　5 月 23 日学生スタッフミーティングの概要

ミーティングの趣旨	新旧の学生スタッフ・教員をまじえ、支援室の活動目的について議論する
ミーティングの背景	支援室の活動目的が、当時、不明確だった。では加入した 1 年生に何をしてもらうか。ジャーナルの編集か、情報発信か、ツアーの企画か。これは支援

	室の方向性にかかわってくる問題であるが、通常のミーティングでは十分に議論する時間がなかった。そこで、別日程でミーティングを開く必要があった。
ミーティングででた主な議論	○中安（2011 年度～2012 年度の学生スタッフ）の問題提起 　被災地におけるニーズはなくなり、「マッチング」（支援室がもっていた当初の役割）の必要性もなくなった。したがって、支援室はその役割を終えたのでないか。 ○保坂（学生スタッフ代表（当時））の問題提起 近年の活動は、ツアーのやりっぱなし（ツアーを行なう目的が曖昧）、被災地との関係性が希薄、リピーターの少なさといった問題があった。今後考えるべき論点は①特定の被災地で活動するか否か、②「アクション」（被災地での活動）か「マッチング」かといった点でないか。 ○藤室委員の提案 　学生スタッフが被災地の現状に疎いという問題や、学生スタッフのモチベーション低下という問題へ対応するためにも、「アクション」と「マッチング」を両立すべきでないか。支援室には、ニーズに合わせて被災地における新たな活動を生みだす「インキュベーション」の役割があるのでは。 ○提案への指摘（中安ら） 「アクション」と「マッチング」を両立するには、学生スタッフのキャパシティが不足　していないか。そもそも、被災地のニーズはなくなり、支援室の役割は終えたのではないか。また学生スタッフによる「アクション」は困難でないか。 ○提案への応答（藤室委員ら） キャパシティ不足には、ノウハウの蓄積で対処できるのでは。また被災地には明確な仲介ニーズが消えただけで、ニーズ自体は存在するのでないか。学生スタッフでも、他団体やキーマンとつながりをもつことで「アクション」が可能でないか。
決定事項	「マッチング」だけでなく、「アクション」の企画も検討する

出典：5 月 23 日学生スタッフミーティング議事録

➢　大学の機関としての動き（2013 年 8 月～）

　つづいて後期になると、米村委員の異動、活動の方向性にかんする検討等をうけ、どのような運営体制が適切かについて議論が交わされた。

　米村委員については、9 月 30 日をもって東京大学へ異動となり、支援室における活動は困難となった。それに伴って、学内における折衝をいかに行なうかが一つの課題となる。

すなわち、学内においては、当時①支援室に配分される予算の量的・質的制約[37]や、②学生スタッフがもつ位置づけの不明確さ[38]、③組織名に「東日本大震災」の限定がつくことによる活動制約といった問題があったが（2013 年 7 月学生スタッフミーティング）、それらの折衝を中心に行っていたのが、米村委員だったためである。そこで米村委員の異動を前に、学内に向けた提言を取りまとめる動きがみられた。具体的には、東谷室長と学生スタッフのあいだで懇談会があり（9 月）、米村委員も提言書をとりまとめた（9 月）。この提言には、支援室のこれまでの活動と、それらが担ってきた機能、今後の方向性として以下のような点を示している（表）。この提言は、支援室の運営委員長である花輪理事（教育・学生支援担当）に提出され、9 月に開催された運営委員会でも配布されており、2015 年度の時点をみると、提言 4、5、10 などは、形を変えつつも実現している。

表 2－3 支援室の運営に関する提言

これまで行なった活動（業務）	①ボランティア活動に従事したい学生に対する相談・紹介業務 ②ボランティアツアー等の各種イベント ③ボランティア団体にたいする物品等の支援
活動が担ってきた機能	①課外活動としてのボランティア活動（に従事する学生）の支援［狭義の学生支援］ ②地域経済論・地域社会論・防災等の諸分野に関わる教育・研究 ③外国人留学生・日本人学生の被災地プログラム等を通じた国際交流 ④大学の直接的な支援活動を通じた地域貢献
具体的な提言（一部抜粋）	「支援室を、専任教員を擁する恒久的な組織とし、教育・研究・国際交流等を直接担いうるものとして機能させる」（提言 1） 「支援室の活動範囲を拡大し、東日本大震災関連の活動への限定をつけないことにする」（提言 4） 「学生スタッフの増員を図り、教育・研究活動への関与の程度を高める」（提言 5） 「支援室の名称を「東北大学地域復興支援センター」に変更する」（提言 7） 「学生支援課職員・支援室学生スタッフに対して、定期的に研修を実施する」（提言 10）

出典：2013 年度第二回運営委員会配布資料

[37] 量的にみると、2013 年度には複数のツアーを実施したために、前期だけで 2012 年度の経費を上回っていた。また質的には、大学が管理する予算であったため、使途に制約があった（仮設住宅でのカフェ活動に使う飲み物・お菓子を購入できないなど）。なお 2013 年 7 月には、一つの助成金に採択され（大和証券福祉財団「平成 25 年度（第三回）災害時ボランティア活動助成」）、50 万円の外部資金を獲得した。

[38] 支援室の学生スタッフは、一章でみたように事後的な発案で生まれたものであり、要項にも規定されていない。一方で年度を追うごとに、学生スタッフや実質的な活動の中心を担うようになっていた。そこで、支援室のなかでいかに位置づけるかが課題になっていたといえる。

さらに 11 月以降になると、学生スタッフと、支援室に関わる教員・大学職員（支援室室員）のあいだで意見交換会が始まった（11 月、12 月、1 月）。この会議は、実際に行なったボランティア活動の報告や、学生スタッフが活動するうえでの課題共有[39]などをする機会となり、支援室の運営にあたって、より学生スタッフの意見の取り入れを試みていた。

➢ 学生スタッフ組織の動き（2013 年 8 月～）

2013 年度後期には、大学としての議論と並行して、学生スタッフ組織の体制についても議論があった。まず 8-9 月にかけて、学生スタッフ組織を「マッチング部門」と「ツアー部門」に分けるという方向性が打ち出される（8/14 小ミーティング）。ここでいう「マッチング部門」とは学内での活動、「ツアー部門」とは被災地でのボランティアツアー等を想定しており、部門ごとに独立したミーティングの実施を検討した。これは、学生スタッフによるツアー企画の増加をうけて、一つのミーティングだけでは全ての活動について議論できなくなったためである。ただし実際の学生スタッフをみると、ツアー中心に活動する者が多くを占めており、「マッチング部門」に誰も回らない可能性があった。したがって「マッチング部門」は立ち消えになったが、「ツアー部門」は岩手県・宮城県・福島県にそれぞれ設置することが決まった（9/30 ミーティング）。

つづいて 2014 年の 1 月以降になると、「ツアー部門」の具体的な運営体制が議論された。まず岩手県で活動する学生スタッフは、「陸前高田ボランティアツアー」の参加者で構成されたが、一定程度の人数が集まっており、なおかつ陸前高田市に特化した活動を希望するものが中心となっていた。そのため支援室とは独自に活動する方針となり、「東北大学陸前高田応援サークル・ぽかぽか」として、サークル化を行なった。一方で宮城県、福島県の活動については、そもそも誰がメンバーか不明確であり[40]、活動先についてもようやく何回か活動を始めた段階だったといえる。したがってサークル化はせず、ツアーに向けて独自のミーティングを行なう程度であった（図 2-2）。

[39] 学生スタッフからは、例えば、学生ボランティア団体の学友会登録、活動場所にたいする「東日本大震災被災地」限定の解除といった要望がなされた（第一回室員・学生懇談会）。

[40] 例えば福島県の活動は、ツアーを主に運営する学生が毎回異なる状況であった。また宮城県の活動でも、定期的に同一地域で活動するメンバーは少なく、メンバーの境界が曖昧になっていた。

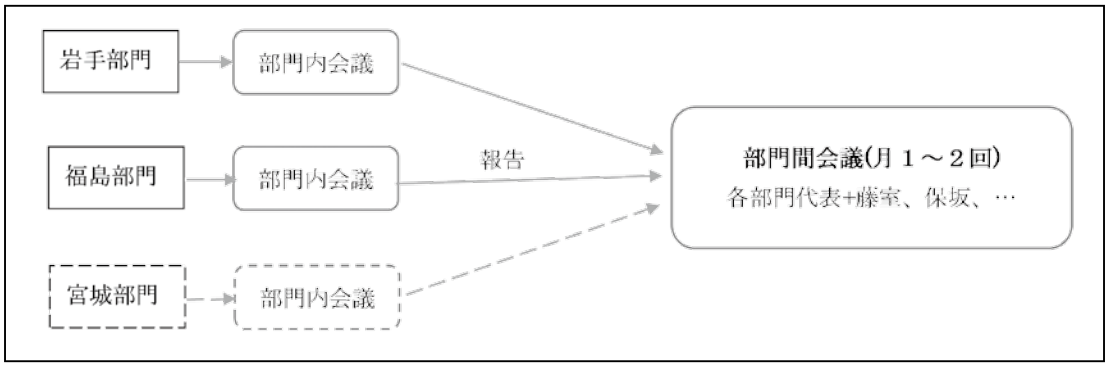

図 2-2　2013 年度後期における、学生スタッフ組織の運営体制
出典：2013 年 10 月 23 日学生スタッフミーティング議事録

このような運営体制の変化は、被災地での活動という視点からみると、独自の活動が活発化し、活動メンバー間の紐帯が強まる効果があったと考えられる。しかしながら学生スタッフの関心は被災地での活動に傾いたため、学内での活動への関心が相対的に低下し、学内での活動に参加する学生スタッフが不足しがちになっていた（図）。この点は、次年度以降の課題として浮上する。

➢　その他の特徴

2013 年度には、その他にも運営体制に若干の変更があった。第一に、TGL 制度との連携がスタートする。TGL とは東北大学グローバルラーニングセンターの通称であり、この年度になって、一定のプログラム（授業等）を履修した学生には、認定証が授与されることになった。また 2013 年度には、震災ボランティア活動も、このプログラムの一つと位置づけられた。この点は、震災ボランティア活動のもつ教育的効果が、単位履修の制度としてもある程度認められ始めたことを意味している。

第二に、連携登録団体制度の廃止がある。この制度のそもそもの趣旨としては、大学として学外の各種団体を審査することで、学生に対して、安全で適正な活動をする団体を紹介する点にあった。また学外の団体に対しては、「スタートアップフェア」への参加や学内へのボランティア募集にあたって、連携登録団体となることを義務付けていた。しかし実際の運用状況をみると、審査に膨大な書類が求められること等が障害となって、柔軟な運用ができているとは言い難かった（「外部団体との連携のあり方について」）。そこで 9 月の運営委員会において、制度の必要性が議論される。その結果、この制度を廃止し、イベントごとに適切なボランティア団体へ参加を呼びかけることが決定した。ここから、より柔軟な形で、学外の各種団体との連携が可能になったといえる。

三節　2014 年度の通史

2014 年度は、2013 年度に誕生した岩手・宮城・福島の三部門が本格的に稼働し始め、地域での活動がより深化した年度であったといえる。部門を組織化したことで、参加者を一般募集しないで、部門のメンバーが個別に活動場所の被災地に行くことが増えたのが、特徴の一つである。また、岩手部門がサークルとして独立した活動をはじめた一方で、支援室は 2013 年度までの学生スタッフが少なくなり、新入生を迎えて 1，2 年生の割合が大きくなった。

本節では、2014 年度の支援室について、①大学内での活動、②被災地での取り組み、③運営体制、④他団体との連携、にわけて述べることとする。

一項　大学内での活動

学内での活動は、①ミーティング、②勉強会、③図書館企画、④講演会、⑤学生スタッフ説明会、⑥オープンキャンパス、⑦大学祭、⑧スタートアップフェア、⑨基礎ゼミなど、多岐に渡った。以下、この 9 つの項目について触れる。

①2013 年度と比較して、ミーティングの時間、回数はかなり増加した[41]。 各部門、支援室本体のミーティングに加え、時期に合わせて多大学ツアー、学祭、図書館企画等のミーティングを行った。支援室本体ミーティングでは、各ツアーの報告、三角柱などの事務的な調整を話し合い、今後どのようなことをするかというアイデア出しも行った[42]。そのアイデア出しの結果としては、ミーティングでの勉強会や、図書館企画、支援室のロゴや愛称、パーカー作成の件がある。そのうち、支援室のロゴ、愛称（SCRUM）、パーカーは 2015 年度に完成した。

②勉強会は、自分が活動してみたい地域を調べて発表し、具体的にこれからの活動につなげるというもので、2014 年度の後期に行った。岩手県の被害状況や、宮城県石巻市、岩沼市、女川町、気仙沼市、丸森町、福島県会津地方、川内村、田村市などの発表を 1 月 13 日に行った[43]。

③図書館企画は、東北地方や東日本大震災をテーマにして書かれた本を取り上げ、支援室スタッフで書評を書いて図書館で展示し、同時に支援室の活動紹介もするという企画で

---

[41]前期は、支援室本体:木曜 18 時、ぽかぽか:火曜 18 時、宮城部門:水曜 18 時、福島:火曜朝 7 時 30 分から行っていた。金曜 18:00 からは多大学合同ツアーのミーティングを行うこともあった。後期は、基本的には支援室:火曜 18 時、ぽかぽか:水曜 18 時から行っていた。月曜と木曜で福島と雄勝がミーティングを行った。各ミーティングの時間は 2 時間ほどで、2013 年度は 2 週間に一度、4 時間ほどかけて行っていた。

[42]　7 月 3 日の本体ミーティングでアイデアの検討を行う。また、11 月 18 日、12 月 2 日でこれからの支援室について話し合う。12 月 2 日ミーティングでは、これからの支援室について、「復興まちづくりについてもっと関わる」、「情報発信をもっと行う」、「活動範囲を広げる」、「近場の仙台市での活動を行う」、「新しいことを始める」などの意見が出た。

[43] 12 月 9 日支援室本体ミーティング議事録より

ある[44]。 2014 年度は「被災地の言葉」というテーマのもと、各スタッフが選んだ 6 冊の本を東北大学附属図書館 2 階震災ライブラリーのスペースで展示した[45]。

④講演会（4 月 15 日）では、陸前高田市下和野地区町内会事務局長（当時）の千葉浩一氏をお呼びした。「陸前高田市の避難所・和野会館からの報告とまちづくりの挑戦」という題目で、震災発生当時の避難所運営や、東北大学の学生との関わり、和野地区のまちづくり活動のお話をいただいた。

⑤学生スタッフの説明会（4 月 21 日と 5 月 8 日）は新入生勧誘を目的として 2 度行った。内容としては、まず学生スタッフの役割をパワーポイントで発表し、その後座談会を開くというもので、4 月 21 日の参加者は 2 名。5 月 8 日の参加者は 10 名ほどだった。座談会では、支援室に対する疑問、仮に支援室に入ってみたらどのような活動をしてみたいかなどを話し合った。

⑥オープンキャンパス（7 月 30 日～31 日）では、支援室の活動紹介のパネル展示に加え、高校生から大学生になりたての学部 1 年生から高校生に向けて、大学生活の過ごし方やボランティア活動についての講演会を行った。

⑦大学祭は、学部 1 年生を中心に、7 月ごろから企画を始めた。2014 年度は、10 月 31 日に準備、11 月 1 日～11 月 2 日の 2 日間出店し、活動のパネル展示、被災地グッズの販売、なべやきと呼ばれる陸前高田市の郷土料理を提供した。

⑧スタートアップフェアは 4 月、10 月、1 月の他に新たに 6 月にも開催し、川内北キャンパスの厚生会館を中心に講義棟や、萩ホールでも行った。また、ブース形式に加え、説明会方式[46]も採り入れた。支援室としては、新たに別個に岩手部門「ぽかぽか」[47]のブースを設け、より陸前高田に焦点を当てて説明できるようにもした。

⑨全学教育科目の基礎ゼミ「地域復興とボランティア」は、大学教育との関連として、前年度に引き続き開講された。2014 年度は、20 名ほどの基礎ゼミ生が 4 つの班に分かれ、それぞれがぽかぽか、福島部門、“HARU”、Reroots の協力の下、ツアーを企画した。2103 年度との相違点は、それぞれのグループの活動する地域があらかじめ決められていたことと、前期の内に全ての企画を実施することで、企画の自由度は減る分、初心者にとっては企画がしやすいものとなった。後期からは新しく、全学教育科目として、「震災復興とボランティア」というオムニバス講義を開講した。

---

[44] 7 月 9 日図書館企画ミーティング議事録より

[45] 11 月 25 日支援室本体ミーティング議事録より

[46] スタートアップフェアは、各登録団体がブースを出し、来場者が自分の興味にあったブースに自由に行くという形式が主だった。登録団体の内容が一度にわかるのが良いのではないかという意見もあり、各団体が 1～2 分で説明する説明会方式も 6 月に採用したが、その後はもとのブース形式に戻した。

[47] もともと陸前高田を中心に活動を始めた岩手部門は、より学生主体で活動を行おうと 2014 年 2 月にサークル「ぽかぽか」として独立。1 カ月に一度の割合で、陸前高田で活動を行う。その後、2014 年 3 月末で支援室の 1 部門に戻った。

写真 2-14　図書館企画の様子。特集は「被災地の言葉」　2014 年 12 月 24 日（左）
写真 2-15　大学祭の様子　2014 年 11 月 1 日（右）

二項　被災地での取り組み

➢ 2014 年 4 月～7 月の活動

4 月～7 月について、地域ごとに見ると、①岩手県では、学生サークル「ぽかぽか」が中心となって、三回のツアーを行った。②宮城県では、支援室の一部門である宮城部門が、石巻市雄勝町で三回のツアーを開催している。また、2013 年度と同様に“HARU”共催のボランティアツアーを行い（「亘理・山元町を見る・聴く・体験するスタディツアー」4/29）、仙台市若林区で支援室独自のツアー（「若林区被災地スタディツアー」4/13）、ReRoots 共催（「若林区農業復興支援ツアー」5/3）、基礎ゼミ企画のツアー（「仙台市若林区復興視察」7/5）、などを開催した。その他に、初めての試みとして、MLeaders 共催の「松島スタディツアー」（6 月 8 日）や、みまもり隊共催の「東松島春の農業支援ボランティアツアー」（5 月 10 日）がある。③福島県では、福島部門中心に富岡町や郡山市を対象として 2 度ツアーを開催した。

写真 2-16　亘理・山元町を見る・聴く・体験するスタディツアーの様子。中浜小学校にて 2014 年 4 月 29 日（左）
写真 2-17　松島スタディツアーの様子。2014 年 6 月 8 日　（右）

➢ 2014 年 8 月～9 月について

8 月~9 月の夏休みの活動は、新メンバーを交えた初めての本格的なツアーであった。

①岩手県では、陸前高田市で 2 回の長期のボランティアツアーに加え、他大学と連携した仮設住宅調査を 2 度行った。また、あしなが育英会との共催でツアーを実施した。②宮城県では、支援室では石巻市雄勝町の住民に聞き取り調査を行うリサーチツアーを 2 度行った。山元町では、“HARU”共催の足湯活動、南三陸町では復興応援団共催の「ブルーツーリズム」を開催している。③福島県では、いわき市を焦点にあてた福島スタディツアーを実施した。④9 月には立教大学の学生を中心とした関東の学生を被災地に案内する多大学合同ツアーを実施。名取市、東松島市、石巻市、福島県など、「復興の進度、あり方の違い」や原発事故といういくつかのテーマに沿って、被災地を縦断した。

写真 2-18　福島スタディツアー。福島県富岡町の視察　2014 年 9 月 17 日（左）
写真 2-19　多大学合同ツアー。閖上中学校にて　2014 年 9 月 11 日（右）

➢ 2014 年 10 月～2015 年 3 月について

10 月以降も、同内容のツアーを行うことが多かった。①岩手県では、陸前高田市で 4 回のツアーを実施。②宮城県では、石巻市雄勝町でヒアリングや仮設住宅での足湯、手芸、カラオケなどの活動を中心としたツアーを 5 回実施した。南三陸町で復興応援団共催のツアーを実施した。③福島県では、いわき市や田村市、郡山市などでツアーを 3 回実施した。

このように 10 月以降は、比較的他団体との連携が少なく、部門主体の活動が多かった。宮城部門や岩手部門などは、一般参加者を募らずに部門のメンバーで被災地に行く活動も増えていた。

写真 2-20　陸前高田ボランティアツアーの様子。被災した寺での草刈、遺品捜索　2014 年 11 月 23 日　（左）
写真 2-21　石巻市雄勝町ボランティアツアー。立浜仮設にて住民の方との交流　2014 年 2 月 8 日　（右）

➢　その他の特徴・議論

第一に、活動の頻度、回数についてである。地域への継続的支援という性質が強くなり、各部門のイベントが多くなったことで、支援室のイベント数は、2013 年の 35 件から 50 件に増加した[48]。各部門が月に 1 回のペースでツアーを行い、支援室本体での企画もしくは、他団体の企画も月に 1 回ほど行っていた。従って、週末はほとんどツアーを開催していた。基本的には、岩手と福島での活動は連泊のツアーが多く、雄勝は日帰りの活動も行った[49]。

また、2014 年度からは、一般募集をするツアーだけでなく、部門のメンバーが個別に活動場所に訪れる回数も増えた。したがって、部門の実質的な活動回数は、さらに増え、部門間の活動が同じ日で重なることもあった。

第二に、ツアー企画における学生での議論を紹介する。それは、ツアーの「スタディ」要素を強めるか、「ボランティア」要素を強めるかという問題だった。「スタディ」要素というのは、ツアー・イベントの中で学生が学ぶこと、すなわち、講話や、視察を重視するというもので、「ボランティア」要素は、実際に被災地で、何かしらのボランティア活動（足湯、手芸、掃除など）をするというものである。例えば、12 月 3 日の福島部門ミーティングでは、今後のツアーを「スタディ」要素と「ボランティア」要素の問題についてどうするかについて「学生に学んでもらうことと、地域支援を行うことどちらを重視するか？」「両

---

[48] 詳しくは、イベント数の表を参照。

[49]陸前高田ツアーは最短で 2 泊 3 日（4 月 18 日～20 日等）、最長で 4 泊 5 日（8 月 7 日～11 日）、福島ツアーは最短で 1 泊 2 日（4 月 26 日～27 日等）、最長で 2 泊 3 日（9 月 16 日～18 日）、雄勝ツアーは最短で日帰り、最長で 2 泊 3 日（8 月 27 日～29 日）

4 月 13 日、7 月 5 日の 2 回行う。また、その他一般募集しないでの活動が数回。

者を分けて考えるのは良くない」「ツアーごとに目的をしっかり立てて、ボランティア要素とスタディ要素をツアーでは混ぜない方が良い」などの様々な意見が出た[50]。

➢ 東日本大震災被災地以外の災害支援について

2014 年 7 月の山形県南陽市の台風被害[51]にも東北大生を数名派遣した。以前の支援室は、「東日本大震災の被災地」にしか、予算が下りないようになっていたが、2014 年度から予算が使えるようになった。しかし、派遣時にはすでに現地のボランティアセンターが終了していたため、活動を行うことができなかった。8 月には広島県では猛烈な雨による土砂災害などが発生し、75 名の方が亡くなった[52]。 支援室では、さらに、「近隣地」にしか予算が下りないようになっていたため、東谷室長（当時）や、藤室委員の自費で学生数名を広島県に派遣した。そのため、今後の災害支援に対応するため、予算の執行につき「近隣地」という制約も外すこととなった。

三項　運営体制

➢ 大学の機関としての動き

大学の機関としては、2014 年 4 月に組織再編が行われ、新たに「高度教養教育・学生支援機構」が誕生した。また機構のなかの一組織として「課外・ボランティア活動支援センター」（以下、センター）が設置された。このセンターは、震災ボランティアに限定せず、より一般的な課外活動・ボランティア活動の支援を目的として設置された組織である。この設置は、ボランティア活動の支援に際して「震災」という限定がなくなった点を考えると、一つの前進である。しかし設置した時点では支援室との関係があいまいであり、大学組織として、センターと支援室をいかに接続させるかが課題となる。月 23 日（水）の運営委員会では、この点について「現在は同センターと支援室が並行して設置されているが、将来的には一本化する」[53]ものとした。

なおセンターの事業としては、（1）本学学生の自主的な課外活動、文化やスポーツ・ボランティア活動の総合的な支援、（2）東日本大震災被災地復興および地域社会・国際社会に貢献し得る人材の育成を目的と した、社会貢献型の体験学習（サービスラーニング）の企画・実施、（3）国内外の大学との課外・ボランティア活動における交流・連携の促進の

---

[50] 12 月 3 日福島部門ミーティング議事録より

[51] 2014 年 7 月 9 日から 10 日にかけて、台風 8 号の影響により、山形県や福島県に大きな被害をもたらした。特に、山形県南陽市では、最上川水系吉野川の洪水氾濫や、土砂災害などが発生した。国土交通省平成 26 年度の水害・土砂災害情報より
http://www.mlit.go.jp/river/bousai/saigai/

[52] 8 月 19 日から中国地方や九州北部での大気の状態が不安定になり、20 日午前 3 時 30 分には広島県で 1 時間に約 120 ミリの猛烈な雨を観測した。内閣府防災情報のページ「平成 26 年 8 月 19 日からの広島県の大雨に関する対応状況等」より
http://www.bousai.go.jp/updates/h260819ooame/honbu.html

[53] 2014 年度第一回運営委員会議事メモ（案）より

四点が規定されており[54]、東日本大震災に関連する事業以外にも、対象事業を拡大している。しかし運営に関わる教員・職員をみると、支援室とほぼ同一であった[55]。ここからセンターとしては、いかに震災に限定しない活動を展開するかも課題となっていく。

➢ 学生スタッフ組織の動き

学生スタッフとして、支援室は本格的に支援室本体と三部門の体制で動き始めた。岩手、宮城、福島の三部門ではそれぞれの地域について継続的に支援をしていくことを役割とし、支援室本体ではそれぞれの部門の調整、他団体との連携と、その他新しい活動を考える役目を担った。各部門、支援室全体のミーティングはそれぞれ週 1 回ずつ行われ、各メンバーは各々の希望のミーティングに参加した。その中でも、岩手部門は、サークル「ぽかぽか」として、より独自の路線を進み、支援室とは別に新歓やイベントを開催した。また、5 月初めには、一部のメンバーで「足湯・手芸隊」が結成され、支援室の仮設住宅等での足湯・手芸活動を促進しようとする動きがあった。

2013 年度からの部門の発展程度には差があり、岩手部門（ぽかぽか）、宮城部門には 2014 年度開始時からある程度のメンバーはいたものの、支援室本体、福島部門にはほとんどメンバーは定着していなかった。したがって支援室本体と福島部門は、1 年生や上級生を新しく迎えて動き始め、全体として、学部上級生や大学院生の人数の割合が多かった 2013 年度と違い、1、2 年生の人数の割合が多くなった。また支援室本体と福島部門のメンバーの重複が大きく、しばらくの間は一部のメンバーがそれぞれの部門のミーティングに参加し、調整を図って連携を保っていた。

個人的なつながりを除き、部門間の交流はそれほど行われなかったため、2015 年 1 月 15 日には、各部門の問題点や成果を報告しあう報告会を別途設けた。後期には学生スタッフも定着してきたため、それまで毎回のミーティングで仕事を割り振っていたのをやめ、支援室スタッフにリーダー、副リーダー、広報、書記、メール対応係などの役職を作った[56]。

---

[54] 高度教養教育・学生支援機構 課外・ボランティア活動支援センター 運営要領より

[55] 7 月の運営委員会では、支援室と同様に「東谷副委員長及び藤室委員が同センターの業務に関わっていく」とされた（運営委員会議事録）。

[56] 11 月 4 日議事録より

写真 2-22　学生スタッフ本体ミーティングの様子　2014 年 5 月 15 日　（左）
写真 2-23　学生スタッフ三部門合同ミーティングの様子 2015 年 1 月 15 日　（右）

➢ 活動資金

2014 年度からは、新たに住友ユースチャレンジから助成金を 300 万円取得した。この財源は部門での活動や若林区や山元町に充てられ、部門の活動の財源は確保された。但し、予算にはそれぞれ特定の地域や、特定の対象のために使うという制約があったので、多大学の学生を参加させることなどが問題となった。また、7 月頃から燃料代の高騰したこともあり、バスを頻繁に利用することができなくなったので、予算節約のためにレンタカーを借りて活動することも多くなった。

2014 年度は、比較的予算を確保できたが、2016 年度には支援室の主な財源である法学部基金と、住友ユースチャレンジがなくなるということで、その後の支援室の活動の在り方が問題となった。

➢ 広報

2014 年度初めは主に三角柱、ジャーナル、メールサービスや、Facebook、ウェブページなどであった。また、新たにツイッターを始めた。参加者募集に最も効果的な広告媒体はキャンパス内の食堂に設置した 150 個ほどの三角柱だったと思われる。しかし、三角柱は紙面の制限や更新に限りがあるので、詳細はウェブページに載せて対応した。ジャーナル、ウェブページと Facebook では、ツアー告知の他に、活動報告も行っていた。

➢ 文学部棟 2 階ボランティアルーム（正式名：文・教研究棟 221 号室）

2013 年度に引き続き、普段のミーティング場所として、文学部棟 2 階のボランティアルームを使用した。11 月 28 日の大掃除では、衣装ケースや小物入れなどを新たに設置し、足湯や手芸の物品などの整理はできたが、ボランティアルームは他団体の物品などもあり、各ボランティア団体の物品の管理という課題は残った。一方で、2014 年度の 3 月頃から、学生支援課との間でボランティアルームの移動の話が持ち上がったが、ボランティアルームの移動は 2015 年度になった。

四項　他団体との連携

➢　他団体との連携

支援室と関わりを持つ団体として、登録団体と他地域の大学やサークルとにわけられる。第一に、支援室の登録団体とは、各団体が集う井戸端会議で情報を共有し、連携をとるという形をとっていた。しかし、他団体と一緒に初めから企画を練るということは少なく、支援室は広報や参加者募集、バスの手配の面でのサポートに回ることがほとんどだった[57]。

第二に、他地域の団体とは、支援室本体で独自に企画するか、部門で企画したツアーに参加していただくという形が主だった。海外の大学とは、東北大学のキャンパスで意見交換を行うことも多かった。また、各地で行われるボランティアフォーラムで情報共有することも増え、具体的には、に東京大学での講演会（5 月 17 日）、に住友ユースチャレンジの報告会（9 月 19 日～20 日）、に東北学院大学でのシンポジウム（12 月 12 日）、岩手大学の足湯ボランティアフォーラム（12 月 6 日～7 日）、に東京でのボランティアフォーラム「第 2 回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会」（2 月 25 日～27 日）などに参加した。

➢　国際交流

支援室としての国際交流の機会も徐々に増えてきた。アリゾナ州立大学との交流（7 月 31 日）や、あしなが育英会のツアー（8 月 18 日~19 日）、国連ボランティア計画[58]との交流（3 月 14 日）があった。

アリゾナ州立大学との交流では、震災発生後から現在までの状況や、支援室の活動を紹介した後、震災後の日本での体験や、アメリカでの震災に対する認識の意見交換、その他日本文化などについての意見交換を行った。

また、2014 年度は第 3 回国連防災世界会議[59]が 3 月 12 日から 3 月 18 日まで仙台で開催され、支援室もポスター展示や、スタッフが各自ボランティアや別のセッションに出席するという形で参画した。その一環として、国連ボランティア計画の方と交流した。東北大学の学生が関わっているボランティア活動について発表し、事務局長からは、世界から見た支援室のボランティア活動の特徴や、ボランティアに対する認識などについての意見をいただいた。

---

[57] 他団体との合同企画は、HARU と 4 回、みまもり隊と 2 回、復興応援団と 2 回、ReRoots と 1 回、MLeaders と 1 回行う。詳しくはイベント表を参照。

[58] 国連ボランティア計画（United Nations Volunteers）は、国連開発計画（UNDP）の下部組織として 1970 年に国連総会決議で創設される。UNV ホームページ URL: http://unv.or.jp/about/

[59] 国連世界防災会議（UNWCDR）は全世界の災害による被害の軽減を目指す指針を策定する世界会議　実行委員会ホームページ URL: http://www.bosai-sendai.jp/

写真 2-24　第二回学生ボランティアと支援者が集う全国研究交流集会。国立オリンピック記念青少年総合センターにて　2015 年 2 月 26 日（左）

写真 2-25　国連ボランティア計画との交流　2015 年 3 月 14 日（右）

四節　2015 年度の通史

2015 年度は、東日本大震災から 5 年目を迎え、支援室の活動も、新たな段階へと進み始めた年度であった。運営体制をみると、支援室の室長が交代し、新たな会議がスタートした。また学生スタッフ組織が強化され、勉強会なども頻繁に行われるようになった。実際の活動内容を見ると、被災地における取り組みは、各部門のツアー内容が発展し、部門以外での活動も増加した他、後期からは留学生との交流により力を入れるようになった。学内での活動や他団体との連携も活発化しており、2014 年度と比べてもさらに活動の幅が広がった一年であったといえる。

一項　運営体制

➢　大学の機関としての動き

2015 年度における特徴的な動きとしては、支援室室長の交代があった。東谷篤志総長特別補佐（学生支援担当）は支援室の発足以来、室長として、支援室における「表の顔」となってきた。一方で 2015 年 3 月をもって室長を退任することになり（生命科学研究科長へ転任）、4 月からは、小田中直樹総長特別補佐（学生支援担当）が室長となった。また小田中室長となり、新たな会議、「課外・ボランティア活動支援センター定例事務打ち合わせ」がスタートした。

この会議は、次のような経緯からはじまったものである。すなわち、センターは支援室と並行して設置された組織であり（前節）、学生支援課の所属であった藤室委員も、2015 年度になると高度教養教育・学生支援機構へ転任、センター所属の教員と位置付けられるようになった[60]。またセンター長には小田中室長が就任し、センターとしては、小田中室長と副センター長の永富教授（医工学研究科）、藤室委員で業務を進めていく体制となる。しかし 2016 年度になっても、前年度同様、センターをいかに運営していくかは不透明であった。そこで小田中室長の提案により、センター関係の教員と職員（学生支援課）が集まり、運営方法について定期的な会議を開くことになった（2011 年 7 月～）。また会議には小田中室長の意向から、支援室における活動の実働部隊である学生スタッフも参加した。

この打ち合わせの趣旨は、小田中室長による次の発言（第一回）にまとまっている。

> 課外・ボランティア活動支援センターの運営等について、共通理解を持つため、今後、月に 1 度、定例事務打ち合わせを行う旨の発言があり、以下の 4 点について依頼があった。
> ①今年度、センターとして何をするのかを決めること
> ②永富先生から、リーダー研修や救急救命研修など実施するよう話があったこと

[60] それに伴って支援室のコーディネーターが不在となり、元学生スタッフである松原久が、2015 年 11 月から採用された。

③羽田先生から、震災関係のボランティアのニーズが減ってきているが、その他のボランティアに手を広げるのかも含め、構想を今年度中に提出すること、また、2018 年４月以降、ボランティア専門の先生がつかない可能性があるので、それも考慮して 5 年間くらいの長期的計画を立てること、さらに、来年度以降提供する授業について考えるよう話があったこと

④月に１度、打ち合わせの際にそれまでの活動をまとめた活動一覧を提出すること

（第一回定例事務打ち合わせ議事録）

以上の発言にあるように、センターの運営に関する共通理解を持つことが、会議における最大の目的であった。また具体的にはセンターの活動内容を検討し、リーダー研修など、震災ボランティアに限定されない新たな活動を議論することも目的であった[61]。さらに別の目的として、学生と職員・教員が定期的に情報交換することで、運営面における細かな調整をするという点もあった。この会議は 2015 年度中に 8 回開催され、センターとしての授業提供やボランティアルームの移転問題（後述）などを議論する場となっている。

なお 2015 年度の支援室は、以下のようなイメージで運営されており、支援室室員と学生スタッフチームの「運営会議（月一度）」という記載が、この打ち合わせを示している。

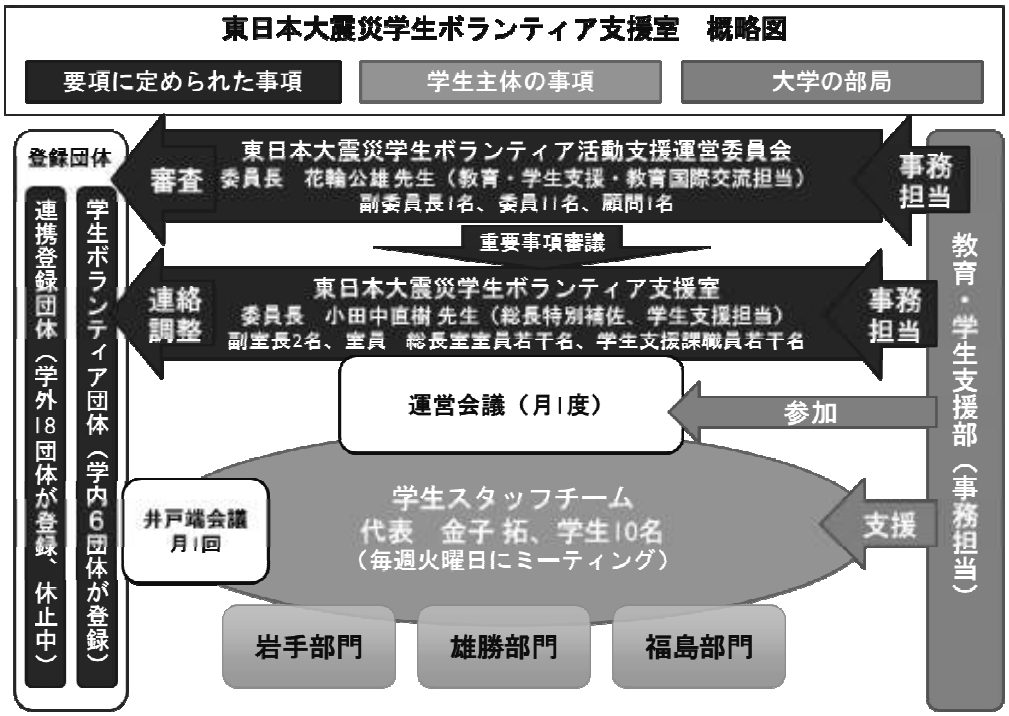

図 2-3　2015 年度における支援室の組織図

[61] その成果として 2016 年 2 月には、大学祭実行委員会、学友会体育部、生協学生委員などを交えたリーダー研修を実施した。

➢　学生スタッフ組織の動き

学生スタッフ組織においても、2015 年 4 月に代表が代わり、五代目の石井雄太郎（法学部 3 年）から六代目の金子拓（理学部 2 年）にバトンタッチした。ま新たに一年生のメンバーを迎え、一・二年生を中心とした新体制で運営していくことになる。学生スタッフ組織における 2015 年度の特徴は、第一に、ミーティング回数の増加、第二に、勉強会の実施、第三に、学生スタッフ組織の強化があった。

第一に、2015 年度の学生スタッフ組織は、①被災地での取り組みと、②学内での取り組みその他に区別されており、①については三部門に分かれ、それぞれ代表をおいた。またメンバーの重複はあるものの、それぞれ独自にミーティングを行なっていた。②については、学生スタッフの「本体」と呼び、学生スタッフの代表が統括した。こちらもミーティングが定期的に開かれ、各部門から最低一人は出席を求めることで、学生スタッフ全体としての情報共有を図った。なおミーティングの回数については、①のミーティングが毎週部門ごとにあり、②のミーティングもあった。その他に企画ごとのミーティングも実施しており、ほぼ毎日ミーティングのあるのが実態であった[62]。

第二に、ミーティングでは、勉強会などを通して、活動に関する知識の獲得や、活動を反省的にとらえる機会を積極的に設けていた。まず①三部門のミーティングでは、活動地域にかんする勉強会を実施した[63]。②学生スタッフ本体のミーティングでは、支援室の今後の目標や方向性、活動内容について議論した[64]。ここでの話し合いから、つぶやきカード分析会や、支援室設立に尽力した米村先生と初期のメンバーとの会談も行われることになった。「つぶやきカード分析会」とは、被災地のニーズの把握を目的として、ツアーの際に記入されたつぶやきカードを読み返す勉強会であり、前期に実施した（6/22）。また米村先生および初期のメンバーとの会談では、支援室設立の経緯や目的について、また米村先生の今後の支援室の在り方についての考えを伺った（7/28）。なぜボランティアをするのか、ボランティアの啓発方法といった議論もあり、支援室そのものについて知る機会となった。その他に 2015 年度には、自分が活動してみたい地域の発表会[65]や（前期）、復興の現状、防災、事前復興などについての勉強会も実施している[66]。

---

[62] 2015 年度は支援室本体:火曜 18 時、ぽかぽか:水曜 18 時、宮城部門:月曜 18 時、福島:前期は金曜 18 時、後期は木曜 18 時から行っていた。プロジェクトチームのミーティングはメンバーの都合のよい時間に行われた。各ミーティングの時間は 2 時間ほどで、テスト期間などを除きほぼ毎週行われていた。

[63] 例えば岩手部門では、陸前高田の復興まちづくりに関する勉強会を、宮城部門では、過疎地域の問題に焦点をあてた本（小田切徳美 2014『農山村は消滅しない』など）の読書会を、また福島部門では、福島県の問題に焦点をあてた本（開沼博 2014『はじめての福島学』）の読書会を行なった。

[64] 5 月 26 日の本体ミーティングにて当時代表の金子から提案が行われ、6 月 23 日に 1 年生から意見書が提出された。

[65] このとき気仙沼・南三陸でボランティアや市民活動を学ぶツアーと、女川・岩沼・閖上・野蒜などでまちづくりを学ぶツアーの 2 つの案が出たが、どちらも実施には至らなかった。

[66] 10 月 20 日に「東日本大震災の復興計画と現状」、12 月 1 日に「まちづくりについて」をテ

第三に、学生スタッフ組織は、2013 年度以来、被災地ごとの取り組みにメンバーが分散し、学生スタッフとしてのアイデンティティが弱いことが問題となっていた。そこで 4 月には、まず学生スタッフ組織の愛称を決定し（「SCRUM」）、ロゴやパーカーを作成することにした（写真）。また 10 月には、学生スタッフ組織による二日間の合宿も開くことになり、学生スタッフ間の交流促進や、学生スタッフ組織としての目的確認、活動の再検討などを行なった（10 月 3-4 日）。この合宿での議論から、五年史（本誌）の作成や、留学生を対象とした企画などのアイデアが生まれることになり、交流促進の担当（通称レク研）なども生まれている。

写真 2-26　学生スタッフ組織「SCRUM」のロゴ（左）
写真 2-27　学生スタッフによる合宿の風景　2015 年 10 月 4 日（右）

➢　活動資金、その他

2015 年度は基盤経費として 960 万円が与えられた。5 月には高度教養開発推進事業に 300 万円を申請し、120 万円が措置された。また同月 500 万円で申請した大学改革推進経費は 100 万円が措置された。住友ユースチャレンジの助成金も継続採択され、300 万円を確保している。その他に、学生スタッフとして申請した、ユニベール財団の助成金も 50 万円助成され、より潤沢な資金のもとに活動が可能となっていた。

なおその他の特記事項としては、川内北キャンパス新管理棟（2015 年に完成）のなかに「ボランティア活動支援室」が設けられ、支援室コーディネーターの常駐部屋かつ学生スタッフの活動拠点に使えることになる。これに伴って、それまで学生スタッフの活動拠点であった「ボランティアルーム」を返却し、引っ越し作業を行なった。

二項　大学内での活動

学内での主な活動は、前年度からの継続企画として、①図書館企画、②学生スタッフ説明会、③オープンキャンパスへの参加、④大学祭への参加、⑤スタートアップフェア・説明会、⑥基礎ゼミなどを行なった。さらに新企画として、⑦学魂祭への参加、⑧留学生説明会を実施した。以下、それぞれの項目について紹介する。

ーマとして実施し、担当者が調べた内容を発表、それについて全員で議論した。

①図書館企画は昨年度と同様、東北地方や東日本大震災をテーマにして書かれた本を取り上げ、支援室スタッフで書評を書いて図書館で展示し、同時に支援室の活動紹介もするという企画であり、2015 年度は「今の被災地」というテーマで実施された。スタッフが 6 冊の本を選び、東北大学附属図書館 2 階震災ライブラリーのスペースで展示した。

②学生スタッフの説明会(4 月 14,23 日、5 月 7 日)は新入生勧誘を目的として 3 度行った。まず被災地の画境を説明し、次に学生スタッフの役割をパワーポイントで発表する。その後座談会を開き、新入生と交流をするという内容で、合計で 10 名ほどの参加者であった。座談会では、お菓子や飲み物を用意し、支援室に対する疑問、どのような活動をしてみたいかなどを自由に話し合った。

③オープンキャンパス(7 月 29 日～30 日)では、支援室の活動紹介のパネル展示のほかに、支援室だけでなく HARU や Re:Smile といった他団体のメンバーも交え、高校生に向けての講演会やパネルディスカッションを行った。

④学祭は、昨年度同様 1 年生を中心に、7 月ごろから企画を始めた。2015 年度は、10 月 30,31 日、11 月 1 日の 3 日間出店した。内容は、「震災復興カフェ」と題して、飲み物や被災地のお菓子・グッズの販売、活動のパネル展示の他、ビデオを使い被災地の方がたからのメッセージビデオを上映した。また 2 日目には陸前高田市から大友重隆氏をお呼びし、陸前高田市のお祭り「うごく七夕」についての講演をしていただいた。

⑤スタートアップフェアは 4 月に講義棟、6,7 月、10 月、2 月に川内北キャンパスの厚生会館で行い、全部で 4 回実施された。2015 年度はブース形式のみ行われた。7 月 31 日には学習支援ボランティア団体の説明会も厚生会館で行われた。また、12 月 9 日には支援室初の試みとしてユニバーシティ三条にて留学生向けの英語での説明会を行った。

⑥全学教育科目の基礎ゼミは、2015 年度も実施され、今期の内容はボランティアツアーへの参加、2 つの NPO の方によるパネルディスカッション、ボランティア募集パンフレット作成、ボランティア団体へのインタビューなどとなっている。後期は前年度と同じく全学教育科目として、「震災復興とボランティア」というオムニバス講義を開講した。

以上が、前年度から継続しての企画であるが、新企画も二つ行なった。⑦学魂祭については、2015 年度に新しく始まったイベント「学魂祭」へ参加した。このイベントは、仙台の学生間の横のつながりを強化し、仙台を学生の力で活性化することを目的として実施されたものであり、支援室としてもブース出展し、パネル展示と、被災地のお菓子・グッズの販売を行なった。

⑧留学生説明会とは、留学生を対象としたイベントであり、震災の概要や被災地、ボランティア活動の現状を紹介し、その後ワークショップを行なった (12/9)。このイベントは、東北大学に数多くいる留学生に対して、被災地の問題やボランティア活動へ関心を持ってもらうことを目的としていた。また説明会は全て英語で行われ、学生スタッフが英語で発信する訓練となることも意図していた。

写真 2-28　大学祭で用いたチラシ（左）

写真 2-29　留学生説明会の様子　2015 年 12 月（右）

三項　被災地での取り組み

➢　2015 年 4 月~9 月

ここでは、地域ごとに取り組みを見ていく。前期の活動は、これまでの活動を継続、あるいは発展させたものが中心であった。

①岩手県では、陸前高田応援サークル「ぽかぽか」として 5 回のツアーを実施し、仮設住宅・復興住宅におけるカフェ活動や、地域の祭りの手伝い、子供企画などを行った。また 8 月には、毎年恒例となった仮設住宅調査に参加した。

②宮城県では、まず宮城部門として、石巻市雄勝町で 4 回のツアーを実施した。なお 9 月 28､29 日には、「石巻市雄勝町魅力発掘ツアー」と題して、地域の魅力向上を支援することを目的としたツアーを行なった。その他に、支援室主催の活動としては、仙台市若林区におけるツアーを実施した（4/12「仙台市若林区スタディツアー」)。他団体との共催としては、HARU との共催で 4 月 29 日に石巻スタディツアーを実施し、ReRoots との共催で 5 月 2 日に仙台市農業復興支援ツアーを行なった。7-8 月にかけては、あしなが育英会との共催で石巻市・女川町へのボランティアツアーを開催した（7/13-14，8/24-25)。また夏休みの終わりには、みまもり隊との共催で「復興の“今”を知る 東松島スタディツアー」を実施している（9/27)。

③福島県では、福島部門を中心に四回のツアーを実施した。なお夏休みには、9 月 16~18 日にかけて、郡山市・双葉郡・いわき市を訪問するスタディツアーを実施している。

➢　2015 年 10 月～2016 年 1 月

一方で後期に入ると、従来とは内容の異なるツアーも増加していく。

①岩手県では、陸前高田市で 6 回のツアーを実施した。うち一回は東北大学文学部との共催という新たな形態のツアーであった(11/7-8「陸前高田地域住民との留学生と地域の交流ツアー」)。また 1 月のツアーでは、ロケット打ち上げサークル From The Earth と連携し、小学校でロケットを打ち上げるという新たな企画も実施している。

②宮城県では、まず宮城部門の企画により五回のツアーを実施したが、そのなかには仮設住宅における音楽イベントや林業体験ツアーなど、新たな内容のものも目立った。このうち音楽イベントについては、アカペラサークル del monde と連携した企画であり、学生スタッフの合宿における発案から生まれた企画であった。宮城部門以外をみても、HARU との共同企画である「ハッピーハロウィン＠山元町」や、TUFUSA との共同企画である「Miyagi Recover Tour」など、企画段階から他団体と連携した企画を行なっている。

③福島県では、福島部門の企画により、餅つき会の参加など 4 回ツアーを実施した。そのうち 1 回は、福島大学災害ボランティアセンターとの合同ツアーとなっており、それぞれの活動場所で活動するとともに、発表会などを通じてより緊密な連携を探る機会となった。

写真 2-30　留学生を対象とした「Miyagi Recover Tour」の様子　2016 年 1 月（左）
写真 2-31　福島県いわき市泉玉露仮設における餅つきの様子　2016 年 1 月（右）

➢　その他特徴・議論

ツアーの回数は前年度と同じく、各部門が月に 1 回はツアーを行い、また支援室本体も企画をしたり他団体とツアーを組んだりしていたため、ほぼ毎週末にツアーが実施されていた。しかし、活動内容は前年度に比べ変化している。足湯や手芸、仮設の掃除だけでなく、住民の方と一緒に料理をしたり、防災ワークショップをしたり、音楽イベントを開いたりなど、従来とは異なる支援の仕方をしてきた。これは、震災から 5 年目を迎え、被災地のニーズが変わってきていることを示している。従来の活動の需要が減ってきており、それに対しこれまでとは異なる様々なアクションをとったことが 2015 年度の特徴である。

被災地のニーズの変化に伴い、学生スタッフ内でよく話し合われたことが、これからの支援室の方向性についてである。継続的な支援を続けていくためには、どんな目標を立て、

どのような活動をしてくべきなのか、ということが問題となった。

これに関し、「活動コンセプト」「活動の対象は誰か」「コンセプトや対象のためにどんな活動をしていくか」というポイントで話し合い、6 月 30 日に「支援室とは、継承、振興、人材育成のために、学生と地域をつなぐ」組織であるということを大本とすることに決まった。

➢ 東日本大震災被災地以外での災害支援

2015 年度には、東日本大震災被災地以外の地域における活動も、数度にわたって実施している。まずは、宮城県大崎市における水害ボランティアである。2015 年 9 月には、台風にともなって全国各地で豪雨となり、宮城県でも、大崎市や大和町で川の決壊する被害があった。そこで支援室においても、大崎市でボランティア活動を実施し、災害ボランティアセンターの仲介した水田のガレキ撤去を行なっている。

また宮城県栗原市花山地区でも、ボランティア活動を開始している。これは学生スタッフの石田昴誠（経済学部 2 年）が、主に花山地区で活動する企業「株式会社花山サンゼット」でインターンシップをしていた縁でスタートした活動である。花山地区は、過疎化・高齢化が進行し、担い手の不足が問題となってきた。そこで支援室としてもボランティアツアーを企画し、地域の祭りの運営の手伝いなどを行なっている。

四項　他団体との連携、その他

➢ ボランティア団体との連携

ボランティア団体との連携をみると、既に触れたように、2015 年度には携が活発化するという特徴があった。その動きは春からあり、5 月には「春のボランティア団体合同合宿「いっぽこ合宿」」と題したイベントが実施された。このイベントは、「東北大学内でのボランティア団体の連携を強化するとともに、新入生へ活動の紹介をする」ことを目的とするものであり、一泊二日の合宿形式で行われた。なお合宿の最後には、ボランティア団体間の連携企画を考えるワークショップを開き、ここから「ハッピーハロウィン＠山元町」（支援室・HARU の共同企画）などの企画も誕生することになった。その他に、学生スタッフの合宿であったアイデアから、「Miyagi Recover Tour」（支援室・TUFSA の共同企画）も実現した。ボランティア団体との連携は、このように、合宿などの新しい活動を通してより活発化したという側面があった。

➢ 国際交流

最後に国際交流をみると、2015 年度も活発な交流を行なっていた。6 月にはベイラー大学（アメリカ）の学生が東北大学を訪れ、支援室の教員、学生スタッフと意見交換などを実施している。、また 1 月には、ガジャ・マダ大学（インドネシア）の教員などが東北大学を訪問し、それぞれの被災地の現状や、活動紹介を行なっている。

写真 2-32　ボランティア団体合同合宿「いっぽこ合宿」の集合写真　2015 年 5 月　（左）
写真 2-33　ガジャ・マダ大学との交流会における集合写真　2016 年 1 月　（右）

三章　被災地での取り組み

被災地での取り組みは、学生による地域貢献・復興支援が行われる具体的な場面であり、それとともに、ボランティア活動をとおした学生の教育効果が発揮される機会である。

当初の支援室は、被災地での取り組みを実践する組織というよりも、学内での活動をとおして、ボランティア活動に関わる団体を側面支援する活動が中心となっていた。一方で時期を追うごとに、支援室としての被災地での取り組みは活発化してきた。その取り組みは 2015 年度になると、被災三県（岩手県、宮城県、福島県）で展開している。そこで本章では、各県における取り組みをそれぞれ紹介していく。

一節　岩手県での取り組み

一項　神戸大学との連携と「陸前高田ボランティアツアー」の始まり

東北大学の学生ボランティア支援室が岩手県での取り組みを開始したのは、神戸大学との連携がきっかけである。東日本大震災後、支援室の運営委員であった法学部の米村滋人先生は神戸大学の学生ボランティア支援室に連絡を取り、当時、神戸大学のコーディネーターであった藤室先生と連絡を取り合う関係があった。そして神戸大学の支援室では 2011 年 4 月末から、岩手県遠野市を拠点として、沿岸部の陸前高田市や大槌町等への定期的な支援活動を行っていた。

また 2011 年 10 月 23 日に、東北大学と神戸大学は災害科学分野における連携協力協定」を締結しているが、その中で「神戸大学で実績のある『心のケアを含めた学生ボランティア支援[67]』」についても連携するとされた。この協定も踏まえて、米村先生と藤室先生の間では、東北で、両大学の学生が連携してボランティア活動を行う企画を実施できないかが模索されていた。

これがはじめて実現したのが、2012 年の夏のことである。8 月の頭に、神戸大学のボランティアバスが岩手県を訪問する際に、藤室先生と神戸大学のメンバー数名が東北大学に立ち寄り、岩手で実践している足湯ボランティアと、タオルで作る「まけないぞう」の講習会を東北大学生を対象に実施した。8 月中に米村先生と東北大学生 2 名が、実験的に岩手県での活動に合流し、これが神戸大学と東北大学での初めての合同活動となった。

その後、一般公募した学生が 9 月 8 日～9 日の 1 泊 2 日の日程で 11 名参加し、岩手県陸前高田市で神戸大学生と一緒に活動した。これが東北大学の第 1 次陸前高田ボランティアツアーである。神戸大学が 20 名程、合計で 30 名程なので、6 名程の 5 班に分かれて活動していた。東北大学生も 5 班に分かれ、神戸大学生のグループに交ざって活動した。活動

---

[67] 東北大学ホームページ「東北大学と神戸大学が災害科学分野における連携協定を締結」2011 年 11 月 1 日。http://www.tohoku.ac.jp/japanese/2011/11/news20111101-02.html

内容は、仮設住宅での足湯・手芸（「まけないぞう」作成）が主だったが、他にイベントの手伝いや地元の学童保育所でのボランティア等のメニューもあった。宿泊は神戸大学と合同で、地域の高田町・上和野町内会のご厚意により「和野会館」という、震災発生後しばらくは避難所になったこともある、地域の会館に宿泊させていただいた。またその後、岩手県で活動した神戸大学生の内一部が、9 月 13 日に仙台市若林区で ReRoots が主催する瓦礫撤去の活動にも参加した（2013 年 2 月にも同様に、岩手県での活動の後に、若林区で神戸大学生が活動した）。

その後、2012 年度中には 3 回の「陸前高田ボランティアツアー」を神戸大学と合同する形で実施した。2 回目は連休を利用して 11 月 23 日（金）～25 日（日）の 2 泊 3 日の日程となった。基本的には前回と同様、東北大学生は神戸大学生のグループに交じって活動したが、3 日目の下矢作仮設住宅という場所では、東北大学生主体のグループで、独自のイベント（手作りのお菓子をふるまう）を企画して実施した。これはその後も引き継がれ、第 3 次陸前高田ボランティアツアー（2 月 22 日～24 日）の際にも、3 日目に下矢作仮設住宅で東北大学生によるイベントが開催された。

写真 1-1-1　神戸大学生が指導し東北大学で実施した足湯講習会。2012 年 8 月 8 日（左）
写真 1-1-2　陸前高田市和野会館で実際に足湯ボランティアをする東北大学生。2012 年 9 月 9 日

二項　岩手大学の合流により 3 大学連携活動に発展（2013 年度）

2013 年 4 月からは、神戸大学の学生ボランティア支援室にいて、岩手県で東北大学生と一緒に活動していた藤室先生が、東北大学に異動し、東北大学のボランティアコーディネーターになった。そのため東北大学生の岩手県での活動も藤室先生が主導して進めるようになった。

4 月に第 4 次・6 月に第 5 次の陸前高田ボランティアツアーが実施された。6 月には高田町の上和野町内会で防災をテーマとしたワークショップの開催を神戸大学とともに実施した。

今回の東日本大震災で壊滅的な被害を受けた陸前高田市、その中でも最も大きな被害を受けたのが、中心部の高田町であるが、和野地区はその高田町の中でも北側の山のすそ野に位置し、和野地区の北側の上和野町内会は津波に寄る家屋被害を免れた地域であった。上和野町内会の中には氷上神社があり、この神社を目指して津波を逃れた人々も多かった。神社のすぐ近くには和野会館があり、その和野会館が避難所となり、上和野の町内会と自主防災会は避難者の受け入れと避難所の運営を自主的に行った。その後、その和野会館に東北大学生も含め、学生ボランティアが宿泊させてもらうことになった。

津波に関しては大丈夫だった地域だが、火災や水害などは起こり得る。また津波で消防署などの拠点施設も失われた陸前高田市の防災能力は、2013 年度の段階でも低下したままなので、防災への取り組みは不可欠だった。そこで、震災がきっかけで縁のできた神戸大学都市安全研究センターから土砂災害の専門家の大石哲教授をお招きして、防災をテーマとしたワークショップを開催することになった。大石先生にお話しいただいた後、住民がグループに分かれ、そこに神戸大学と東北大学の学生が司会役・書記役として参加して、上和野地区の防災上の課題について住民の方々の意見を聞いたり、記録を行ったりした。このようなワークショップは、神戸大学単独で 2013 年 2 月 20 日に初回が行われており、東北大学が参加した 6 月のワークショップは第 2 回目だったが、前回 2 月の参加者 30 名を上回る 40 名の住民の方々の参加があり、学生が参加することで、住民の方々同士のみで実施するのに比べても、活発な発言・議論が行われた。その後も、このような学生・住民協働のワークショップは上和野町内会で定期的に行われ、その後は陸前高田市の他の地区や、陸前高田市以外の場所でも実施されるようになった。

写真 1-2-1　神戸大学の大石哲先生をお招きしての防災ワークショップ。2013 年 6 月 15 日（左）

写真 1-2-2　上和野町内会の方々と「高齢者の住みやすいまちづくり」について話し合う東北大学生。2013 年 11 月 23 日（右）

さて、2013 年度には地元の大学である岩手大学とも一緒に活動を行うようになった。きっかけは陸前高田市高田町の伝統行事「動く七夕」であった。

陸前高田市高田町では毎年 8 月 7 日に「動く七夕」という行事を実施していた。これは

仙台の七夕とは趣を異にする行事で、高田町の 12 集落（森の前、大石、鳴石、駅前、中央、大町、荒町、和野、松原、川原、長砂、沼田）がそれぞれの祭組で車輪の付いたうごく山車を製作し、装飾を行い（仙台の七夕飾りに似ている部分もあるが、まったく異なる部分もある）、その美しさや、祭囃子の太鼓と笛の音を競い合う。しかし、多くの山車が、2011 年の津波で地区ごと流されてしまった。

しかしその年の 8 月 7 日に、いくつかの残された地区の山車を活用して、高田町の「動く七夕」は開催された。「こんなときに、祭りどころではない」という反対意見もあったが、「こんなときだからこそ、何としてもやる」という有志が集まった。山車を引っ張るのにも、多くの祭組の構成員は、亡くなったり、地区を去るなどしていたため、多くのボランティアが参加して支援した。陸前高田市内で、高田町に次いで大きな被害を受けた気仙町にもよく似た「けんか七夕」という行事がある。これは山車をぶつけ合う荒っぽい祭りであるが、津波により山車が流され、一台だけが残った。一台ではけんかはできない。しかし、けんかはできないが、その山車を飾り付け、2011 年度に「けんか七夕」も開催された。このように、高田町の「動く七夕」、気仙町の「けんか七夕」は、陸前高田市の復興にとって象徴的な行事なのである。

さて、宿泊場所などでお世話になっている和野地区にも、和野祭組があり、2013 年 8 月 7 日に、東北大学と神戸大学ははじめてこの和野祭組にボランティアとして参加することとなった。和野は被災こそ免れていたが、若者の数の減少により祭りの担い手は減っていた。山の麓に位置する地域の生活上、巡行の最後には山車に坂道を上ってもらわないといけないのだが、人力だけではそれが難しく、トラクターなどでけん引していた。そうした状況だったため、学生が加わることが歓迎されたのだった。この和野の「動く七夕」に岩手大学三陸復興支援機構ボランティア班の学生たちも参加していたのである。これが 3 大学で連携して活動した最初となった。

8 月には、岩手大学は七夕祭を一緒に手伝ったのみだったが、9 月には仮設住宅などでの活動にも、神戸大学・東北大学生に岩手大学生も交じって活動するようになった。

写真 1-2-3　高田町の「動く七夕」。夜は電飾され光る。2013 年 8 月 7 日（左）
写真 1-2-4　東北大学と岩手大学・神戸大学の学生一同で和野会館に宿泊。2013 年 9 月 7 日（右）

10 月にも 3 大学で合同して活動し、上和野地区の子ども会と「いものこ会」（芋煮会）を開催し、学生が学習支援とレクリエーションを行った。震災以前は、地区の子ども会で夏休みなどに和野会館に集まり、夏休みの宿題などに取り組んでいたそうだが、震災以降、そうした活動が途絶えていた。それが 3 年ぶりに実施できたのである。3 大学の学生たちも、子ども会活動の再開をサポートすることができた。こうした子どもの学習支援の活動も 2013 年度になってはじめて行うようになった活動であり、その後も継続的に実施している。

また 2014 年 1 月には、和野地区で特徴的なもう一つの伝統行事「権現舞」の復活にも関わることになった。権現舞とは、虎舞のことである。虎舞とは獅子の代わりに虎が、お正月に厄除けをしに各戸を回る行事である。和野地区では 2011 年 1 月に行われて以来、震災の影響によって途絶えていた。復活が難しい理由のひとつが、やはり担い手の不足であった。そこで、東北大学・岩手大学・神戸大学の 3 大学の学生が参加し、久しぶりに権現舞が再開されることとなった。

2013 年度は、3 大学で連携して活動する体制が出来上がり、また和野地区で（1）ワークショップ、（2）動く七夕、（3）子どもの学習支援とレクリエーション、（4）権現舞というその後に恒例化した 4 つの取り組みを行うようになった年度であると言える。

一方で、陸前高田市内の仮設住宅における足湯・手芸カフェの活動も継続的に実施した。2013 年頃には仮設住宅入居者の 2 割程度の方が、陸前高田市内外で自力再建等を果たし出て行っていたが、復興公営住宅は完成しておらず、まだまだ多くの方が生活されていた。そうした仮設住宅を訪問し、足湯と手芸（「まけないぞう」や折り紙など）を行い、住民の方々と交流しながら、震災当時のことや現在のお気持ちなどについて、お話をうかがっていった。住民の方々の気晴らしになればと、東北大学落語研究部の学生が寄席を開くこともあった。

写真 1-2-5　地元の方から「とらまい」を習う東北大学生。2014 年 1 月 11 日（左）
写真 1-2-6　落語研究部の学生による寄席。高田高校仮設住宅にて。2014 年 2 月 11 日（右）

三項　「ぽかぽか」誕生と東北大学独自の活動展開、災害公営住宅での活動開始（2014 年度）

2013 年度の最後、2 月の第 12 次陸前高田ボランティアツアーは東北大学側で「ぽかぽか」という陸前高田市でのボランティア活動に継続的に関わる学生によるサークルが誕生し、その「ぽかぽか」で企画したものとなった。参加人数も東北大学 28 名、岩手大学 4 名、神戸大学 3 名と、東北大学が最も多く、また活動先や活動内容についても東北大学生による「ぽかぽか」が企画したものになっている。これ以前については、主に神戸大学が企画したツアーの一部に東北大学生が交ざって活動するという形態であったので、「ぽかぽか」という東北大学生によるチームができて、独自にツアー自体を企画できるようになったのは画期的なことであった。

「ぽかぽか」は 2013 年の 4 月から陸前高田ボランティアツアーの活動に継続的に参加するようになった東北大学生、それも主に 1 回生が中心になって結成されたものであった。

2014 年度に入ると「ぽかぽか」は新入生獲得にも力を入れ、4 月 18 日～20 日には新入生に陸前高田市の現状を知ってもらうことを主な目的にしたツアーを岩手大学と合同で実施した。もちろん、必要がある場合（人数が必要な伝統行事の手伝いなどが多い）には 3 大学で連携して活動している。

9 月には上和野町内会が「ザ☆夏祭り 2014」という企画を実施した。震災前にも夏祭りを行っていたのだが、震災で中断していた。また被災により家を失った方が、新たに上和野町内会の地区に自宅を再建され、町内会の世帯数は増大していた。こうした新たな住民との交流を図ることも目的として、開催されることになった。これについては神戸大学・岩手大学とともに東北大学も参加させてもらった。

写真 1-3-1　津波が来た際の状況を地元の方からうかがう新入生。2014 年 4 月 19 日（左）
写真 1-3-2　上和野町内会主催の「ザ☆夏祭り 2014」。2014 年 9 月 6 日（右）

また 2014 年 10 月に、陸前高田市高田町では最初となる、災害公営住宅・下和野団地（市営）が完成し、入居が始まった。建設戸数 120 の団地で 7 階建 1 棟と 6 階建 1 棟の 2 棟で構成されている。仮設住宅から入居し、広々とした部屋や、仮設とは異なり隣の音が聞こえないことに喜ぶ方も多い反面、新たな環境に戸惑う声も少なくなかった。仮設住宅から

下和野団地に引っ越したある男性は、以下のように話してくれた。

> ここではドアを閉めるとひとりっきりになってしまう。何とも言えない孤独感がある。男らしくないことをいうけど、泣きたくなる。一人でいるとたまらない思いがする（2014 年 11 月 11 日、70 代男性）

私たちの取り組みとしては、10 月には下和野団地に引っ越す人々のお手伝いを行い、その後 11 月には下和野団地で足湯・手芸カフェを開催した。カフェには 15 名の方が参加してくれた。参加者の中には、同じ仮設住宅から引っ越してきたものの、2 階と 4 階と離れた階に入居したので、このカフェに参加してはじめてお互いの入居を知ったという方々もいた。その後も、下和野団地では定期的に足湯・手芸カフェを開催している。

2014 年度の陸前高田市は、大型のベルトコンベアが稼働し嵩上げが進行していき、景色が次々と変わっていった。仮設住宅からも、自力再建や公営住宅入居等により出ていく方も増え始めていた。

写真 1-3-3　下和野団地。このようなタイプの集合住宅に住んだ経験のある方の少ない陸前高田市では生活に戸惑う方も多い（左）
野心 1-3-4　巨大なベルトコンベアにより嵩上げ工事が進む。2014 年 8 月 23 日（右）

四項　仮設住宅入居者減少による変化（2015 年度）

2015 年度に入ると、東北大学単独の活動が増えてきた。4 月・5 月・6 月に 1 回ずつ陸前高田ボランティアツアーを実施したが、すべて東北大学単独での活動である。

仮設住宅から出ていかれた方も増えたが、年度の初めにはまだ 7 割程の入居であった。だが仮設住宅の自治会長等をされていた方が出られた場合も多く、自治会活動を行うのが難しくなっている仮設住宅もあった。行事毎を行っても、人が集まらないというお話も聞いたが、一方で、これまで毎年やっていた自治会等の行事が無くなって、またボランティアなども来なくなって寂しいという声も聞いた。

そこで、足湯・手芸カフェ以外にも、色々と工夫をしながら仮設住宅での活動を続けていった。4 月と 5 月には、仮設住宅内にお花を植える活動を行った。また 6 月には戸別に訪

問して窓ガラスや網戸、換気扇やエアコンのフィルター等の清掃を行う「お掃除ボランティア」を高田第一中学校仮設住宅で実施した。この「お掃除ボランティア」は、すでに支援室において福島県や宮城県では取り組まれていたので、それを取り入れたものである。特にご高齢の方の単身世帯等で、高いところの掃除が普段はできないため、好評である。

写真 1-4-1　プランターに花を植え仮設住宅の敷地に置く。2015 年 4 月 19 日（左）
写真 1-4-2　清掃ボランティア活動。網戸も清掃する。6 月 28 日（右）

和野地区では、毎年恒例の「動く七夕」「権現舞」に参加した他、5 年に 1 度の氷上神社のお祭り「五年祭」が震災後はじめておこなわれるため、10 月にその実施をお手伝いした。

また子どもを対象にした学習支援とレクリエーションの取り組みでは、8 月に高田小学校の協力を得て、小学校の児童すべてにチラシを配り、和野会館で実施する学習支援とレクリエーションを案内したところ、40 名程の子どもが集まった。1 月には東北大学の学生団体フロム・ジ・アース（FTE）とペットボトルロケットの作成・打ち上げを行った。これも高田小学校の協力を得てチラシを配布し、小学生 16 名を対象に実施することができた。

また和野地区以外では、地元の NPO 法人パクトが実施する「小友みちくさルーム」（震災により公園や学校のグランド等の遊び場を失った子どもたちが、遊べる場をつくる活動）に協力して、9 月と 3 月に小友町の気仙大工伝承館でレクリエーションを行った。

写真 1-4-3　氷上神社の五年祭。お神輿を担ぐ。2015 年 10 月 11 日（左）
写真 1-4-4　ペットボトルロケット作りを終えて。FTE と高田小学校の子どもたち。2016 年 1 月 9 日（右）

また陸前高田市の最も北側に位置しする横田町の「横田に住んでいがった！を実現する会議」から「満足度アンケート」調査への協力について依頼があり、1 月から 2 月にかけてアンケート結果の集計と報告を、また 3 月に報告に基づいたワークショップの開催を行った。

横田地区は津波による住宅被害は免れ、横田中学校・横田小学校等のグランドに多くの仮設住宅が建設された。しかし、高齢化が進展し、陸前高田市の他の地区に比べ「取り残された場所」と感じている住民の方も多い。2016 年 3 月には横田中学校も廃校になる。

アンケートに対しては地元の 461 世帯中 353 世帯から回答があり、76.6%という高い回答率になった。3 月 19 日には学生ボランティアも交えてワークショップも開催し、横田の地域づくりについて様々な意見を聞くことができた。

復興住宅については、2015 年 11 月に災害公営中田団地（197 戸）への入居が始まり、引っ越しをお手伝いした。2015 年 3 月 21 日には足湯・手芸カフェも開催した。そこでは、以下のようなお話をうかがった。

> **先日、医者から車を運転しない方がいいと勧められた。とても不便になる。知人に車に乗せてもらうしかないが、どこに誰が住んでいるのかよく分からない（2016 年 3 月 21 日、70 代男性）**
>
> **公営住宅に入居している人は皆何かしらの寂しさ（家を亡くした、家族を亡くした…）を持っている人しかいない（2016 年 3 月 21 日、60 代助成）**

陸前高田市の仮設住宅は 2019（平成 31）年度一杯までは存続する見通しである。また災害公営住宅に移った後も課題は多い。地域づくりについては、高台と嵩上げ地の造成が終わり、人が住み始めてようやくスタートラインに立つことになる。「ぽかぽか」としては、被災した方々に末永く寄り添いながら、陸前高田市の行く末に注目していきたい。

写真 1-4-5　横田町で行ったワークショップ。5 卓に分かれて議論。2016 年 3 月 19 日（左）
写真 1-4-6　中田団地での活動後に記念写真。3 大学連携で実施した。2016 年 3 月 21 日（右）

五項　活動一覧

支援室で実施した、岩手県陸前高田市での主な活動について表にした。一般の東北大学生に対して広報して、参加を募った活動（ボランティアツアー）のみ掲載している。より少人数での活動・打ち合わせなどのための訪問は含まれていない。参加者数は東北大学生（大学院生や留学生は含む）と引率教員（通常は１名）の数である。

次数・期間	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
＜2012 年＞ 第 1 次 9 月 8 日（土）～ 9 月 9 日（日）	和野会館 大船渡中 りんご学童保育所 高田高校仮設	視察　足湯　手芸 学童保育の手伝い	11 名	神戸大と合同
第 2 次 11 月 23 日（金） ～ 11 月 25 日（日）	二日市仮設　和野会館 高田高校仮設　横田コミセン 下矢作小仮設 高田一中仮設 碁石コミセン 下壺仮設　上壺仮設	視察　足湯　手芸	12 名	神戸大と合同
＜2013 年＞ 第 3 次 2 月 22 日（金）～ 2 月 24 日（日）	和野会館 広田水産仮設　堂の沢仮設 唐桑仮設　二日市仮設 高田高校仮設　栃が沢仮設 下矢作小仮設	視察　足湯　手芸 漁業支援	10 名	神戸大と合同
第 4 次 4 月 27 日（土）～ 4 月 29 日（月）	下矢作小仮設 和野会館	視察　手芸　足湯 農園での作業	15 名	神戸大と合同
第 5 次 6 月 14 日（金）～ 6 月 16 日（日）	復興サポートステーション 小友コミュニティーセンター 西風道仮設　財当仮設 下矢作小仮設	視察　手芸　足湯 泥出し　防災 WS 子どもの学習支援 子どもと遊ぶ	12 名	神戸大と合同
第 6 次 8 月 7 日（水）～ 8 月 11 日（日）	和野会館　施設「陸前高田」 末崎サポートステーション 米崎小仮設　佐野仮設 二日市仮設　高畑仮設 下矢作小仮設　和野地区	視察　手芸　足湯 フィールドワーク 納涼祭の手伝い 泥出し	20 名	神戸大、岩手大と合同
第 7 次 9 月 4 日（水）～ 9 月 7 日（土）	堂の沢仮設　二日市仮設 竹駒小仮設　壺の沢公民館 下矢作小仮設　和野会館	視察　手芸　足湯	7 名	神戸大、岩手大等と合同
第 8 次 10 月 11 日（金） ～10 月 14 日（月）	和野会館　栃が沢仮説 滝の里仮設　竹駒小仮設 大船渡周辺	視察　手芸　足湯 避難所に関するヒアリング、さんま祭り（大船渡）手伝い 子ども会の学習支援 いものこ会手伝い	11 名	神戸大、岩手大と合同
第 9 次 11 月 22 日（金） ～11 月 24 日（日）	高田高校仮設　米崎小仮設 和野会館　下矢作小仮設 上壺仮設　矢作中仮設 砂川仮設　稲葉仮設 要谷仮設　富田仮設 栃が沢仮設	視察　手芸　足湯	17 名	神戸大、岩手大と合同
第 10 次 12 月 20 日（金） ～12 月 22 日（日）	竹駒仮設　モビリア 滝の里仮設　下矢作仮設	視察　手芸　足湯 ヒアリング 100 人サンタ企画	9 名	神戸大、岩手大と合同

次数・期間	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
＜2014 年＞ 第 11 次 1 月 11 日（土）～ 1 月 13 日（月）	和野会館 上長部仮設　滝の里仮設 上和野避難所	視察　手芸　足湯 子ども会学習支援 とらまい手伝い 聞き取り	10 名	神戸大、岩手大と合同
第 12 次 2 月 8 日（土）～ 2 月 11 日（火）	モビリア 和野会館 復興サポートステーション 竹駒仮設　西風道仮設 滝の里仮設　長部小仮設　上長部仮設　米崎小仮設 矢作中仮設　下矢作仮設 高田高校仮設　財当仮設	視察　手芸　足湯 ヒアリング	32 名	神戸大、岩手大と合同
第 13 次 3 月 14 日（金）～ 3 月 19 日（水）	和野会館 滝の里仮設　佐野仮設 下矢作仮設　竹駒仮設	視察　手芸　足湯 子ども会の手伝い	5 名	神戸大、岩手大と合同
第 14 次 4 月 18 日（金）～ 4 月 20 日（日）	広田半島 竹駒仮設　滝の里仮設 下矢作仮設　佐野仮設	視察　足湯　手芸 漁業手伝い	10 名	岩手大と合同で活動
第 15 次 5 月 4 日（日）～ 5 月 6 日（火）	大船渡中仮設 モビリア仮設 長洞仮設　下矢作小仮設 米崎小仮設　竹駒小仮設	視察　足湯 子供と遊ぶ 上和野へ引っ越しされた方への聞き取り調査	25 名	岩手大と合同
第 16 次 6 月 27 日（金）～ 6 月 29 日（日）	佐野仮設　西風道仮設 堂ノ沢仮設　下矢作小仮設 滝の里仮設　竹駒仮設 高田一中仮設　和野会館	視察　手芸　足湯 郷土料理を習う	20 名	神戸大・岩手大と合同
第 17 次 8 月 7 日（木）～ 8 月 11 日（月）	和野地区　陸前高田市役所 高齢者施設「陸前高田」 大東アストロロマン 西風道仮設　高田高校仮設 広田水産仮設　佐野仮設　細根沢　下矢作仮設 滝の里仮設　竹駒小仮設　矢作中仮設　米中仮設	視察　手芸　足湯 動く七夕　納涼祭手伝い 子供会学習支援 子供と遊ぶ あしながインターン生と交流	14 名	神戸大・岩手大と合同
第 18 次 9 月 4 日（木）～ 9 月 7 日（日）	滝の里仮設 上壺仮設 三日市仮設 上和野地区	視察　足湯　手芸 お祭りの手伝い	9 名	神戸大・岩手大と合同
第 19 次 10 月 10 日（金） ～10 月 13 日（月）	和野会館　米崎中仮設 高田高校仮設 竹駒小仮設 下矢作教員住宅跡地 打越地区民有地 下和野復興住宅 堂の沢仮設　西風道仮設	聞き取り調査 視察　引っ越し 自治会文化祭の手伝い 子ども会の学習支援	6 名	神戸大・岩手大と合同
第 20 次 11 月 21 日（金） ～11 月 24 日（月）	上和野地区 和野会館 下和野災害公営住宅 高田高校仮設　下矢作仮設 竹駒小仮設　滝の里仮設	視察　手芸　足湯 子ども会活動の支援 遺品捜索 防災ワークショップ	15 名	神戸大・岩手大と合同
＜2015 年＞ 第 21 時 1 月 9 日（金）～ 1 月 12 日（月）	和野会館　滝の里仮設 二日市仮設　竹駒仮設 高田高校仮設	視察　カラオケ大会運営 とらまい　足湯　手芸	10 名	神戸大・岩手大と合同

次数・期間	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
第 22 次 2 月 12 日（木）～15 日（日）	高田市役所 二又復興交流センター 西風道仮設　細根沢仮設 下矢作仮設住宅 竹駒仮設　滝の里仮設 下和野復興住宅 高田高校仮設　モビリア仮設	視察　手芸　足湯 下和野住宅でワークショップ	9 名	神戸大・岩手大・東京大と合同
第 23 次 4 月 18 日（土）～19 日（日）	大隈第二仮設住宅 高田高校仮設住宅	花植え　手芸　足湯	11 名	
第 24 次 5 月 4 日（月）～6 日（水）	西風道仮設住宅 高田高校仮設住宅 高田一中仮設住宅 アストロロマン大東 広田半島	視察　足湯　手芸　カフェ　畑の整地　草刈り 子供と遊ぶ	25 名	
第 25 次 6 月 27 日（土）～28 日（日）	高田高校仮設　下和野団地 高田一中仮設	足湯　手芸　カフェ 清掃	5 名	
第 26 次 8 月 6 日（木）～8 月 11 日（火）	高田コミュニティセンター 施設「陸前高田」 高田高校仮設　竹駒小仮設 高田一中仮設	視察　足湯　手芸 動く七夕　納涼祭 プール教室の監視員 夏休み宿題勉強会 子供と遊ぶ	13 名	神戸大・岩手大と合同
第 27 次 9 月 4 日（金）～6 日（日）	箱根山わんぱくの森 西風道仮設 大隈第二仮設	子供と遊ぶ（パクト） 足湯　手芸　カフェ	7 名	
第 28 次 10 月 10 日（土）～10 月 12 日（月）	和野会館 高田町和野地区 小友町	視察　五年祭　松の植樹	6 名	
第 29 次 11 月 14 日（土）～11 月 15 日（日）	高田高校仮設 滝の里仮設	引越し　清掃　視察	10 名	
第 30 次 12 月 5 日（土）～6 日（日）	高田町　和野会館	視察　まち歩き　WS	8 名	
第 31 次 12 月 19 日（土）～20 日（日）	下和野団地 高田高校仮設 一中仮設	視察　手芸　清掃	10 名	
第 32 次 1 月 8 日（金）～1 月 11 日（日）	陸前高田小学校 和野会館 横田町 高田町和野地区 横田コミュニティセンター 下和野団地	ペットボトルロケット教室　冬休みの宿題勉強会　調査 手芸 高田松原用竹柵作り	24 名	神戸大・岩手大と合同
第 33 次 2 月 13 日（土）～2 月 14 日（日）	気仙大工伝承館 下和野団地 旧広田水産高校仮設住宅	視察 足湯　手芸（ペーパークラフトでお雛様作り）	6 名	
第 34 次 3 月 19 日（土）～3 月 12 日（月）	横田コミュニティセンター 気仙大工伝承館 高田高校仮設住宅　中田団地	ワークショップ 子供と遊ぶ（パクト） 引っ越し 足湯 手芸（コースター）	5 名	神戸大・岩手大と合同

二節　宮城県での取り組み（各地）

宮城県では、東北大学からもっとも近い被災地とあって、5 年間のあいだに多様なボランティア活動が実施してきた。山元町や仙台市若林区では、支援室主催の活動、他団体と連携した活動の双方が定期的に行われてきた。南三陸町や石巻市、東松島市でも、他団体と連携した活動が実施されてきた。その他の地域でも、多様な活動を行ってきた。さらに 2015 年度にはいると、水害ボランティアに参加するなど、東日本大震災被災地に限定されない活動も始まっている。

図 3-2-1　宮城県の主な活動地域

一項　山元町での取り組み

➢　山元町の概要

山元町は、宮城県沿岸部のもっとも南に位置する自治体であり、北を亘理町、南を福島県新地町と接している。震災前の人口は 5,235 世帯 16,711 人。沿岸部には広大な農地が広がっており、イチゴとリンゴの栽培を中心とした農業が盛んな地域である。一方で、震災前には、仙台都市圏のベットタウン化が進んでおり、山元町の外部で仕事につく住民も増加していた。

震災による被害としては、津波は町の約半分の地域をのみこみ、住宅地・農地に大きな被害をもたらした。全壊・流出の家屋が約 4 割（2217 棟）となっており、死者・行方不明者も 3.8%（636 人）にのぼった。また発災後は、町の方針によって沿岸部が災害危険区域に指定されており、被害の甚大さもあいまって、人口減少の大きさが問題となっている。

➢　支援室の活動

以上のような特徴をもつ山元町において、東北大学では、2011 年度から活動を行なってきた。その際、活動母体となってきたのは、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”である（詳細は一章を参照）。“HARU”は、まだ大学が再開していない 2011 年 4 月から、1 日あたり約 40 名（延べ 1000 名）のボランティアを山元町に派遣し、炊き出しや民家の泥かき、避難所の手伝いなどを行なった。またその後も継続的にボランティアを行なっており、支援室では主に“HARU”と連携して山元町での取り組みを進めてきた。支援室として行ったのは、第一に“HARU”と連携した活動、第二に、ワカツクと連携した活動、第三に、支援室主催の活動である。

“HARU”と連携した活動としては、「半澤いちご農園」と連携したボランティアツアーを行なってきた。「半澤イチゴ農園」は、井上尚人（“HARU”と支援室の学生スタッフを兼務）のインターン先であり、その経緯もあって、イチゴ農園の掃除や培入れボランティアを行ってきた。具体的には「イチゴ農園ボランティアツアー」（2012 年 8 月、12 月、2013 年 4 月、6 月）と題して、一般公募のもと、日帰りの活動を行なっている[67]。つづいて 2013 年に入ると“HARU”の新たな活動として、仮設住宅における足湯ボランティアがスタートする。そこで支援室でも“HARU”と共催により、定期的に足湯ボランティアツアーを実施することになった[68]（2014 年 2 月、3 月、7 月、8 月）。その他にも、春には新入生歓迎をかねて、ボランティア要素とスタディ要素をあわせもったツアーを行なった（2013 年 4 月、2014 年 4 月）。さらに 2015 年度に入ると、山元町では、仮設住宅から復興公営住宅

---

[67] 2013 年度に入ると、「半澤いちご農園」は徐々に自立した経営がはじまっており、ボランティアの支援がなくても営農が可能となってきた。そのため、HARU は「半澤イチゴ農園」で活動する回数を次第に少なくしていき、2014 年 4 月に活動を終えた。

[68] 足湯ボランティアについては、2013 年 5 月から活動を開始した。ただし、仮設住宅から復興公営住宅への移行にともなって、2015 年度に活動を終えた。

や自立再建した住宅への移転が進んでいる。一方で、新たに入居した住宅においては、震災以前の人間関係や仮設住宅のそれと分離していることが問題となってきた。そこで 2015 年 10 月には“HARU”と支援室の連携企画として、「ハッピーハロウィン＠山元町」を実施した。このイベントではハロウィーンを通して、新たに再建された住宅団地でのコミュニティ形成を目的に、実施している。

ワカツクと連携した活動としては、2012 年 6 月に「鎮守の森復活プロジェクト」を行なった。これは沿岸部で被災した八重垣神社において、鎮守の森を再生するために植樹を行なう活動であり、58 名の学生が参加した。また 2013 年 3 月には、「いちごだ！歴史だ！お祭りだ！山元町まるごとボランティアバスツアー」と題して、ワカツク坂上氏のコーディネートのもとに、スタディツアーを行なった。このツアーでは、山元町の若者が開いた音楽イベントに参加し、若者との交流を図る機会となった。

山元町では、支援室主催の活動も行なわれてきた。まず八重垣神社のお祭りには、震災で担い手不足が問題となってきたが、教員の藤室委員が足湯ボランティアに参加し、祭りの関係者と知り合ったことをきっかけとして、2014 年から参加している。また 2014 年 6 月には井上によるコーディネートのもと、基礎ゼミ「震災復興とボランティア活動」の参加者がツアーを企画した（詳細は第四章を参照）。さらに 2014 年 9 月には、支援室と復興大学との連携企画として、「おてら災害ボランティアセンターボランティアツアー」を開催、山元町の神社でボランティア活動を行なっている。このように山元町では、多様な団体・アクターと連携した活動に携わってきた。

写真 3-2-1　ハッピーハロウィン＠山元町の様子　2015 年 10 月 25 日（左）
写真 3-2-2　山元町ボランティツアー。半澤イチゴ農園にて作業　2013 年 4 月 28 日（右.）

➢　活動一覧

【“HARU”と連携したツアー】

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2012 年度≫ 8 月 11 日	半澤いちご農園	掃除や培土入れのお手伝い	33	
12 月 2 日	半澤いちご農園	掃除や培土入れのお手伝い	14	

≪2013 年度≫ 4 月 28 日	半澤いちご農園 山元町沿岸部 亘理中央公民館	掃除や培土入れのお手伝い 被災現場の視察 お話を伺う（亘理グリーンベルト PJ 松島氏） ワークショップ	38	「亘理グリーンベルト PJ」と共催
2 月 23 日	町民グラウンド仮設	足湯	7	
3 月 23 日	町民グラウンド仮設	足湯	5	
≪2014 年度≫ 4 月 29 日	半澤いちご農園、亘理公民館、荒浜海岸、鳥の海ふれあい商店街	いちご狩り体験 お話を伺う（語り部） 被災現場の視察	38	
7 月 6 日	―	足湯	6	
8 月 2 日	―	足湯	5	
≪2015 年度≫ 10 月 25 日	新山下駅周辺地区	仮装の作成、街歩き	18	企画名「ハッピーハロウィン＠山元町」

【ワカツクと連携したツアー】

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2012 年度≫ 6 月 24 日	笠野八重垣神社	植樹	58	日本財団学生ボランティアセンター共催
3 月 16 日	山元町沿岸部、GRA、小平老人憩いの家	被災現場の視察 お話を伺う（GRA） 音楽イベントの参加	―	山元若者がたり共催

【支援室主催のツアー】

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2014 年度≫ 6 月 29 日	みんなの写真館、山元町沿岸部、山元イチゴ農園、berry very labo	写真館の視察 被災現場の視察 お話を伺う（やまもと語り部の会渡辺氏、イチゴ農園岩佐氏）	20	基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の一環

7 月 27 日	笠野八重垣神社	夏祭りの参加	―	
9 月 24 日 ~25 日	普門寺	農作業の手伝い 住民の方との交流等	―	復興大学共催
≪2015 年度≫ 7 月 26 日	笠野八重垣神社	夏祭りの参加	―	

二項　仙台市若林区での取り組み

➢　仙台市若林区の特徴

仙台市若林区は、仙台市のなかの沿岸部に位置する地域であり、北を仙台市宮城野区、南を名取市と接している。震災前の人口は 57,834 世帯、130,936 人（2010 年）。沿岸部には、山元町と同じく広大な農地が広がっており、農業が盛んな地域である。一方で東日本大震災は、荒浜地区を中心に大きな被害をもたらし、農地の 40%が冠水。死者も○○人となった。また震災後は、荒浜地区における災害危険区域の指定、被災農地の大規模な集約計画など、議論をまきおこす復興形態がすすめられてきた。

➢　支援室の活動

東北大学では、以上のような特徴をもつ若林区に対して、大学から近い津波被災地ということもあり、様ざまな取り組みを行なってきた。支援室として最初に行なったのは、東北コットンプロジェクト主催の「若林区コットンプロジェクト」である（2012 年 5 月）。一方でその後の取り組みは、第一に、一般社団法人 ReRoots と連携した活動、第二に、支援室主催の活動を行なってきた。

第一に、一般社団法人 ReRoots は、大学にほど近い川内コミュニティセンターに避難していた学生・社会人が中心となって結成した団体であり、若林区を活動拠点として、農地のガレキ撤去やビニールハウスの撤去・組みたて、側溝の泥だしなどに着手してきた。また ReRoots は、支援室の登録団体となっており、支援室と連携した各種ボランティアツアーを実施している。最初に行なったボランティアツアーは 2012 年 9 月であり、被災した農地のガレキ撤去を 1 日がかりで行なった。ガレキ撤去をするツアーは、その後も長期休みにあわせて、定期的に実施されてきた（2013 年 2 月、2014 年 5 月）。またガレキ撤去がほぼ終了した 2015 年になると、農業組合法人代表や ReRoots 代表の講演、野菜・移動販売所の視察なども組み合わせたツアーを行ない、ガレキ撤去のみならず、若林区の農業がかかえる問題について、より多面的に考える機会を提供した（2015 年 4 月、5 月）。

二種類目の活動として、支援室独自のものがある。最初に実施したのは、2014 年 4 月の「若林区被災地スタディツアー」であり、新入生を主な対象にして、身近な津波被災地を紹介することを目的に企画された。当日は、支援室スタッフの案内のもと、被災した神社・小学校の視察、語り部の方のお話、外部支援団体「冒険遊び場」の活動紹介、仮設住宅の訪問をおこなった。2014 年度にはその後、スタディツアーで訪問した若林区東通仮設での

活動も行われ、足湯ボランティアを数回実施している。なおツアーや足湯からは以下のような声が聞かれた。

以前は農家だった。今、田んぼは他人に貸している。震災後は米を自分で買うようになった。以前は自分で作っていたから。野菜もそう（60 代・男性・東通仮設）

若い人たちが来てくれるといいねえ。私らだけじゃ津波の話で暗くなってくからねえ（80 代・女性・東通仮設）

せんだいあらはまを立ち上げたのは、農業を継続しなければならない…農地を保全・管理することが必要。また新規就労者へ給料をきちんと払えるようにする必要もある（年齢不明・男性・せんだいあらはま佐藤氏）

写真 3-2-3　若林区ボランティアツアー。ガレキ撤去の様子　2013 年 2 月 28 日（左）
写真 3-2-4　若林区スタディツアー。冒険あそび場のお話の様子　2014 年 4 月 13 日（右）

➢ 活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2012 年度≫ 5 月 19 日	若林区沿岸部	コットンの種まき	19	東北コットン PJ 共催
9 月 13 日	若林区沿岸部	農地のガレキ撤去	3	ReRoots 共催
2 月 28 日	若林区沿岸部	農地のガレキ撤去	15	ReRoots 共催
≪2013 年度≫ 5 月 5 日	若林区沿岸部	農地のガレキ撤去 ワークショップ	29	ReRoots 共催
≪2014 年度≫ 4 月 13 日	若林区沿岸部、里浜ロッジ、茶房「希望」、六郷あそび場、東通仮設	被災現場の視察 お話を伺う（荒浜再生を願う会、茶房「希望」店主、冒険あそび場、東通仮設住民）	20	企画名「若林区スタディツアー」。みやぎ観光復興支援センター共催
5 月 3 日	若林区沿岸部	農地のガレキ撤去 被災現場の視察	27	ReRoots 共催

5 月 11 日	東通仮設	清掃活動の参加 足湯	9	
6 月 7 日	東通仮設	足湯	4	
7 月 5 日	若林区沿岸部、茶房「希望」、東通仮設	被災現場の視察 お話を伺う（荒浜再生を願う会喜田氏、東通仮設安達氏、若林区市民センター職員）	23	基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の一環
≪2015 年度≫ 4 月 11 日	若林区沿岸部、海楽寺、七郷市民センター、くるまあと、東通仮設	被災現場の視察 お話を伺う（海楽寺大友氏、冒険あそび場根本氏、東通仮設安達氏） 移動販売の見学	15	ReRoots 共催
5 月 2 日	若林区沿岸部、せんだいあらはま事務所、七郷市民センター、くるまあと	被災現場の視察 お話を伺う（せんだいあらはま佐藤氏、ReRoots 広瀬氏） 農地のガレキ撤去 移動販売の見学	29	ReRoots 共催

三項　東松島市での取り組み

➢　東松島市の特徴

東松島市は、東を石巻市、西を松島町に接する地域であり、平野部には農地が広がっている。また西部には奥松島があり、景勝地としても知られている地域である。東日本大震災では農地をふくむ広い範囲が津波の被害をうけ、復興にあたって大規模な高台移転が進められてきた。また高台移転用地は、造成が長期化しており、大きな被害を受けた野蒜地区の北部丘陵では、造成完成が平成 28 年度の予定となっている。

➢　支援室の活動

東松島市での活動は、基本的に、学生団体「みまもり隊」と連携して行ってきた。「みまもり隊」は、東松島市で活動する団体であり、2011 年 6 月に結成された。結成当初は、メンバーの親戚がイチゴ農家であったことをきっかけに、そのイチゴ農家のお宅を支援してきた（HP）。また 2012 年度～2013 年度には、市内の農家にたいする支援を定期的につづけていたが、2014 年度に入ると「東松島地野菜プロジェクト」を立ち上げた。「地野菜プロジェクト」とは、東松島の地野菜をブランド化して、一人でも多くの人に「この野菜なら東松島」と思ってもらえるようにすることを目標とするプロジェクトであり（HP）、農業自体の抱える問題を見すえて支援するものである。

支援室としては、「みまもり隊」と連携して、まず「東松島ボランティアツアー」を実施

した（2013 年 8 月）。このツアーは、2013 年度基礎ゼミの一環として行われたものであり、1 年生と「みまもり隊」のメンバーが主体となって企画、「みまもり隊」の活動地域でボランティアを行なった。つづいて 2014 年度にはいると、季節ごとにボランティア活動をするようになり、「東松島春の農業支援ボランティアツアー」（2014 年 5 月）、「東松島夏の農業支援ボランティアツアー」（2014 年 8 月）、「東松島地野菜収穫プロジェクト」（2014 年 10 月）と実施した。また 2015 年度には、gakuvo（日本財団学生ボランティア支援センター）のイベント「コラボラ」をきっかけとして、支援室・みまもり隊共催で「東松島スタディツアー」を実施した（2015 年 9 月）。このツアーでは、農業関係の作業だけでなく、語り部、観光関係者、仮設住宅の住民の方のお話を伺うなど、新たな要素を組み入れた活動となった。その他にも 2015 年秋には新たな試みとして、高校生が語り部となって被災地を案内する「東松島高校生語り部ツアー」も実施している（2015 年 11 月）。

なお、ツアーで数回にわたって訪問している小野駅前仮設の住民からは、以下のような声が聞かれた。

仮設住宅に移った後は、それまで家族と行っていた稲作ができなくなったため時間を持て余していた。一方で「おのくん」作りを始めてからは、手を動かしながら仮設住宅に住む他の方々と談笑もでき、良かった。今後の悩みは夫とともに稲作を再開できるかどうか（50~60 代・女性・小野駅前仮設）

最初（震災前）は私の家の周囲の人々を知る機会がなかったんだけど、地震が来て避難場所に行ったとき、はじめて私の周りの方々を知ることができた。そこでのつながりが生まれた。もう 4 年も住んでいるけど、家の環境が悪くないから故郷みたいに思えてきた（年齢不明・女性・小野駅前仮設）

私は震災前、農業をやっていたんですよ。それで夫がやることないから農業を再開したいって言ってるんですよね。でも今更農具やら機械やらで何千万もかけて農業を再開するのはどうかともちょっと思うんですよね（60 代・女性・小野駅前仮設）

写真 3-2-5　東松島ボランティアツアー。よつばファームにおける野菜収穫の様子　2013 年 8 月 5 日　（左）

写真 3-2-6　高校生語り部のお話の様子　2015 年 11 月 28 日（右）

➢ 活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2013 年度≫ 8 月 5 日	よつばファーム、小野駅前仮設、小野市民センター	野菜の収穫 住民との交流 グループディスカッション	11	基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の一環
≪2014 年度≫ 5 月 10 日	よつばファーム	農業体験 野菜バーベキュー	19	みまもり隊共催
8 月 9 日	よつばファーム、宮戸島	野菜の収穫 野菜バーベキュー 視察	27	企画名「地野菜収穫 PJ」。みまもり隊共催
10 月 25 日	よつばファーム、カキ小屋	農業支援 芋煮	6	みまもり隊共催
≪2015 年度≫ 9 月 27 日	東松島市沿岸部、小野駅前仮設、よつばファーム、小野市民センター	被災現場の視察 住民との交流 お話を伺う（よつばファーム）	28	みまもり隊共催
11 月 28 日	野蒜小学校	お話を伺う（高校生語りべ）	—	みまもり隊共催

四項　南三陸町での取り組み

➢ 南三陸町の特徴

南三陸町は、宮城県の北部に位置する地域であり、北を気仙沼市、南を石巻市と接している。リアス式海岸の地形を生かして、漁業が盛んな地域となっており、志津川地域はギンザケ養殖がスタートとした場所としても知られている。震災前の人口は、5,295 世帯 17,429 人であった。

震災の被害としては、中心部である志津川地域でとりわけ津波の高さが大きくなり、町の防災対策庁舎が津波にのみこまれるなどの被害をうけた。一方で、震災後は災害ボランティアセンターの尽力もあって、多数のボランティアが駆け付ける地域ともなっている。

➢ 支援室の活動

南三陸町では、「復興応援団」と共催で活動を行なってきた。「復興応援団」は、「地元の人が中心となった復興」をテーマとしてかかげる団体であり、主に南三陸町で活動してきた[69]。活動形態としては、地域のファンづくりのため、毎月 2 回ほどボランティアツアーを

[69] 多賀城市では仮設住宅で暮らしている方たちの「安心づくり」を行っている。「安心づくり」の一環としては、仮設住宅に暮らす方たちに有益になり、また外に出ていくきっかけになる

実施しており、このツアーでは 2011 年 8 月から通算して 1115 名を現地に派遣している。（2014 年 6 月 5 日時点）。ツアーでは、東京などから社会人を募集し、農業や漁業を支援する活動を行なってきた。

支援室と連携した活動としては、井戸端会議がきっかけとなり、「南三陸ボランティアツアー」を実施した（2014 年 2 月）。このツアーでは、社会人のツアーでは運営側に回っていた学生がツアー参加者になり、いちご作りの手伝いなども行なった。その後も、同様の形態で活動が続けられており、2014 年度の夏休み、春休み、2015 年度の夏休みと、定期的にボランティアツアーを開催している（2014 年 9 月、2015 年 3 月、9 月）。

写真 3-2-7　南三陸ボランティアツアー。小野花匠園における記念写真　2014 年 2 月 15 日

➢ 活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2013 年度≫ 2 月 15 日 ～16 日	南三陸町市街地、小野花匠園	被災現場の視察 農作業の手伝い	11	復興応援団共催
≪2014 年度≫ 9 月 27 日 ~28 日	南三陸町市街地、金比羅丸作業場	被災現場の視察 養殖業や被災集落に関する学習 漁業見学・体験	16	復興応援団共催
3 月 21 日 ~22 日	南三陸町各地	お話を伺う（金比羅丸高橋氏、マルアラ及川氏、志のや高橋氏） 漁業体験	9	復興応援団共催
≪2015 年度≫ 9 月 19 日 ～20 日	南三陸町市街地、金比羅丸作業場	被災現場の視察 漁業体験（「アナゴ釣り体験」開発の協力）	18	復興応援団共催

ような情報をまとめた広報誌を発行し、手渡しで配っている。

五項　石巻市中心部（旧石巻市）での取り組み

➢　石巻市（旧石巻市）の特徴

石巻市は宮城県のなかでも最大の被災地となっており、とりわけ石巻市中心部（旧石巻市）では大規模な浸水被害があった。また震災後は、平成の大合併による市の広域化もあって行政機能がマヒし、甚大な被害を受けていかに復興するかが課題となっている。とくに石巻市中心部では、大がかりな土地区画整理事業を行なうことになったため、事業の長期化が懸念されている。それと同時に震災後は多くのボランティアが支援に入り、「石巻モデル」と呼ばれてきた。

➢　支援室の活動

支援室の活動としては、主にスタディツアーを実施してきた。最初にツアーを行なったのは 2012 年 5 月である。このツアーは、石巻市でスタディツアーを実施する「START」（山形大学）にコーディネートを依頼し、石巻市の日和山や門脇地区の視察、立町ふれあい商店街の視察等を行なった。またこのツアーが好評であったため、次年度にも「START」の菊池氏と“HARU”の後藤氏、支援室学生スタッフが中心となって、同様のツアーを企画することになった。さらに 2015 年度にも“HARU”の西塚氏と支援室学生スタッフ・教員が中心となり、ツアーを企画している。なおツアーでは、以下のような声を伺った。

山へ避難したものの、津波は来ないし雪で寒いしでお金や毛布を取りに戻った人もいたけれど、音がしてふと見るとヘドロが押し寄せてきた。その後も三日間は燃えているところがあった。ヘリで物資が届けられたが、食べる気は起きないし、大人はみんな呆然としていた。息子が死んで孫だけが残った。これからどうすればいいのか（年齢不明・男性・日和山にて）

写真 3-2-8　石巻スタディツアー。日和山にて被災状況を学ぶ　2013 年 5 月 3 日（左）
写真 3-2-9　石巻スタディツアー。立町商店街を視察する　2015 年 4 月 29 日（右）

➢ 活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2012 年度≫ 5 月 4 日	石巻市沿岸部・市街地、立町商店街	被災現場の視察 お話を伺う（立町商店街）	33	START 共催
≪2013 年度≫ 5 月 3 日	石巻市沿岸部・市街地、大橋仮設、立町商店街、石巻 NEWSee	被災現場の視察 住民との交流 お話を伺う（立町商店街店主、大橋仮設、石巻日々新聞武内氏）	27	“HARU”共催
≪2015 年度≫ 4 月 29 日	門脇地区、大橋仮設、商店街、石巻 NEWSee、ピースボート石巻	被災現場の視察 お話を伺う（門脇地区本間氏、石巻日々新聞武内氏、ピースボート石巻田上氏）	35	“HARU”共催

六項　その他の取り組み

支援室では、上記の地域以外にも、様ざまな被災地で取り組みを行なってきた。その一覧は、以下の表である。他団体と共催した活動、支援室主催の活動に分けてみていく。

➢ 支援室の活動

第一に、他団体と共催の活動としては、2012 年度に、スマイルエンジン山形とともに七ヶ浜町でガレキ撤去のツアーを行なった。この活動は、被災地での活動の先駆けとなるものであった。また 2014 年 6 月には、松島で活動する団体「M leaders」と共催でツアーを実施した。こちらのツアーでは、松島町の観光地を訪れ、魅力を発掘する内容であった。

第二に、支援室主催の活動としては、2012 年度に「亘理スタディツアー」を行なった。このツアーは、仙台からほど近い被災地である亘理町で、住民団体「いちごっこ」の方にお話しを伺うなどの活動となっている。また 2013 年度に入ると、4 月から着任した藤室委員の発案で、気仙沼市・陸前高田市を訪問するツアーも実施した。このツアーは、岩手県の陸前高田ボランティアツアーから発展して実施したものであった。2013 年度にはさらに、基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の一環として、七ヶ浜町、女川町でもツアーを行なった。両ツアーは 1 年生が中心となって企画したものであり、1 年生の視点を生かし、その他のツアーとは異なる内容・企画でツアーを行なっている。

写真 3-2-10　亘理スタディツアー。被災した荒浜中学校前にて　2012 年 8 月 4 日（左）
写真 3-2-11　女川スタディツアー。語り部の方からお話を伺う　2013 年 9 月 17 日（右）

➢ 活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2012 年度≫ 5 月 5 日	七ヶ浜町沿岸部（七ヶ浜町）	ガレキ撤去	50	スマイルエンジン山形共催
8 月 4 日	亘理町沿岸部、いちごっこ、亘理中央公民館（亘理町）	被災現場の視察 お話を伺う（いちごっこ小野氏） ホームカミングデ―参加	17	
≪2013 年度≫ 5 月 4 日	唐桑町福祉の里（気仙沼市）、佐野仮設（岩手県陸前高田市）	お話を伺う（馬場氏） 足湯	10	
8 月 4 日	七ヶ浜生涯学習センター、きずな公園（七ヶ浜町）	料理教室 子供と遊ぶ	14	基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の一環
9 月 17 日	女川町沿岸部、女川町役場、女川社協（女川町）	被災現場の視察 お話を伺う（語りべ、女川町職員）	16	基礎ゼミ「震災復興とボランティア」の一環
≪2014 年度≫ 6 月 8 日	大高森（東松島市）、松島町各地（松島町）、多聞山（七ヶ浜町）	フィールドワーク	9	MLeaders 共催

七項　東日本大震災以外の被災地における取り組み

➢ 支援室の活動

これまで見てきたのは、東日本大震災被災地での取り組みであった。一方で 2015 年度に

はいると、その他の地域における活動も始まっている。

第一に、2015 年 9 月には「大崎市水害ボランティア」（2015 年 9 月）があった。この活動は、9 月に宮城県で発生した「関東・東北豪雨」を受けて行なったものである。集中豪雨によって、宮城県各地では川の水嵩が増しており、とくに大崎市では渋井川が決壊するという大きな被害があった。それにともなって、水が住宅地や田んぼに流れこみ、泥かき等が必要になった。そこで支援室としても、有志の学生を募り、ボランティアに参加することになった。

第二に、栗原市花山地区での活動も始まった。花山地区は、宮城県の内陸部に位置する地域であり、2008 年に発生した岩手・宮城内陸地震の被災地でもある。花山地区で活動する企業「花山サンセット」において、また支援室の学生スタッフがインターンシップに参加したことをきっかけに、活動がスタートしている。まず 2015 年 10 月には、花山地区で「湖秋祭り」というイベントがあり、その運営簿ボランティアとして、支援室の学生が参加した。つづいて 2016 年 2 月には、花山地区の「雪っこ祭り」の運営ボランティアとして、学生スタッフが参加している。

写真 3-2-12　湖秋祭り準備の様子　2015 年 10 月 10 日（左）

写真 3-2-13　大崎市水害現場の作業風景　2015 年 9 月 21 日（右）

➢　活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2015 年度≫ 9 月 21 日	水害現場（大崎市）	泥だし	―	平成 27 年 9 月 関東・東北豪雨を受けて
10 月 10 日 ～12 日	花山地区（栗原市）	「湖秋祭り」の運営手伝い	10	花山サンゼット共催
2 月 12 日 ~14 日	花山地区（栗原市）	「雪っこ祭り」の手伝い 雪かき	―	

三節　宮城県での取り組み（石巻市雄勝町）

支援室では、2013 年度以来、宮城県のなかでも石巻市雄勝町を、中心的な活動場所の一つとしてきた。そこで以下では節を改めて、石巻市雄勝町での取り組みを紹介する。

一項　地域の概要

➢　石巻市雄勝町の特徴

石巻市雄勝町は､震災前の人口が 1637 世帯 4300 人｡国内シェア 1 位をほこる雄勝硯と、ホタテを中心とする漁業で有名な地域である。なお雄勝町は、2005 年の市町村合併によって石巻市となった地域であり、もともとは単独の自治体であった。そのため、石巻市との合併後も、住民のなかには雄勝町としてのアイデンティティが強く残っている[70]。

一方で雄勝町をミクロにみると、かつて十五浜と呼ばれていたように複数の漁業集落「浜」で構成されており、それぞれの浜は地理的に隔てられ、産業的、文化的にも多様な特徴をもってきた。最大の浜「雄勝」は、行政機関や病院、商店街が立ちならび、中心部としての役割を果たしてきた。雄勝湾に面する浜では、穏やかな内湾を生かして、ホタテやカキの養殖が行われてきた。対照的に太平洋に面する浜では、アワビ、ウニ、コンブなどの採貝・採藻や、沿岸漁業が行われてきた。したがって雄勝町のなかでも、浜ごとにアイデンティティが形成されてきたともいえる。

なお雄勝町は、基幹産業である硯産業や漁業の衰退にともなって、震災前から人口減少に直面してきた。震災前の高齢化率は 40%を超えており、漁業や硯産業を引退後、余生をすごす高齢者が中心になってきた。

➢　震災による被害の甚大さと、復興の困難さ

このように震災前から過疎化の問題を抱えていた雄勝町に対して、東日本大震災の津波被害は追い打ちをかけることになった。震災では 8 割の家屋が流出・全壊の被害をうけ、死者・行方不明者は 236 名にのぼった。また発災後は、避難所環境の劣悪さや仮設住宅の不足もあわさって、雄勝町外で生活をおくる住民が多数にのぼるようになった。さらに復興事業の実施にあたっては、防災集団移転促進事業の進め方にたいする反発もあって、雄勝町内で住宅再建を希望する住民の減少をまねいてきた。その結果、雄勝町における人口は事業完了後も 1300 人（震災前の 3 割前後）になるといわれており，震災に伴う人口減少の問題が、きわめて顕著にあらわれる被災地となっている。

---

[70] とくに「雄勝法印神楽」は、雄勝町全域から集まった神楽師によって上演されており、雄勝町で行われる祭りには欠かせないものとなってきた。また近年では、若者による新たな試みとして、雄勝町住民により「伊達の黒船太鼓」が結成されている。

図 3-3-1　石巻市雄勝町の地図

写真 3-3-1　雄勝町雄勝地区の被害風景

二項　石巻市雄勝町での活動

➢ 活動の契機となったスタディツアー（2013 年 9 月）

支援室における石巻市雄勝町での取り組みは、2013 年 9 月から始まった。この時期からの始動は、他の支援団体と比較するとかなり遅く、支援室による被災地での取り組みに限ってみても早いものではない。ではなぜこの時期にスタートしたのか。ここには、支援室の内部事情が関係していた。設立当初の支援室は活動現場をもたないことから、活動に向けたモチベーションの低下や、被災地の実情への疎さといった問題に直面していた。そこで支援室では、2013 年 6 月にミーティングを行ない、現場をもって活動する方針へ舵をきることになる。そのなかで、活動の一現場としてアイデアがでたのが、石巻市雄勝町であった（詳細は第二章 2013 年度略史を参照）。

雄勝町に着目したのは、雄勝町に過疎地域の問題が顕在化していたためであった。雄勝町は、震災後に人口減少が極めて大きくなっており、雄勝町にすむ住民・離れた住民問わず、生活環境が大きく変化している。そのなかで学生スタッフの松原は、過疎研究としての視点から、雄勝町の抱える復興の課題へ関心をもっていた。またコーディネーターの藤室委員も、神戸大学に在籍していた 2012 年 2 月に、阿部晃成氏（「雄勝地区を考える会」）と出会っていた[71]。その後東北大学へ赴任した藤室委員は、阿部・宮定両氏のことが念頭にあった。以上のような経緯から、雄勝町での活動がスタートする。

最初に実施した活動は「雄勝復興まちづくりスタディツアー」であり、2013 年 9 月 24～25 日に行なった[72]。ツアーのテーマは「過疎地域における復興の課題と展望」を学ぶこ

---

[71] 阿部氏が、神戸大学ボランティア講座に参加した。その場には「まち・コミュニケーション」の田中保三氏や宮定章氏も参加しており、2012 年 3 月以降、「まち・コミュニケーション」の宮定氏が雄勝町への支援をスタートする。

[72] ツアー実施にあたっては、2013 年 7 月～9 月にかけて各種ヒアリング・事前打ち合わせを行

とであり、行政職員を手はじめに、住民運動のリーダー、漁業従事者、商店街のリーダー、集落のリーダーからお話しを伺った。これらを通して、多角的な視点から復興の課題・展望について学んだ。また最後にはワークショップを行ない、住民（阿部晃成氏）、研究者（東北大学公共政策大学院　島田明夫教授）、外部支援者（東北大学職員　菅原麻衣子氏）からそれぞれコメントを頂戴することで、ツアーの総括とした。なおツアーでは、以下のような話を伺い、雄勝町の抱える課題とともに、住民の方の力強さを学ぶ機会となった。

雄勝地区では、9 割の住民が出ていっている。住民とまちの関係を「水の入ったコップ」に例えると、震災によってコップが壊れ、中の水が出ていったとき、行政はコップの再建しか考えていない。被災者の復興を本当に考えるなら、こぼれた水を見る必要がある（20 代・男性・雄勝地区を考える会阿部氏）

今は地区のことで精一杯で、「とにかく波板から動いていかないと」という気構え。反発を食らっても、何もやらないと全てなくなってしまう。ならば、何かして自分たちの意志を次いでくれる人が現れればよい（60 代・男性・波板地区会青木氏・伊藤氏）

自分は、1376 年に入植した末永家の 24 代目。今回は立浜で初めての津波で、先祖も見たことがない。それを目前で見られただけすごいと思っている。まちづくりの課題は、過疎化が加速していること。食べられるから今ここにいるので、住める場所や環境が無いと人を呼べない。今後も食べていけるように独自産業の発展が必要となる（50 代・男性・立浜地区末永氏）

防潮堤は、これまでの低い高さの防潮堤でいい。（雄勝は）限界集落だが、その覚悟があって住んでいる。30 分運転すれば買い物にも行けるし、80 歳くらいで運転している人も多数いる。入院したら子供のもとに行けばいい。低い土地には、果樹園など流されていいものを作ればいい（40 代・男性・硯組合高橋氏）

写真 3-3-2　阿部晃成氏のお話の様子　2013 年 9 月 27 日　（左）
写真 3-3-3　ワークショップの様子　2013 年 9 月 28 日　（右）

った。具体的には、7 月 2 日：阿部氏、宮定氏。7 月 17 日：東北大学・島田明夫教授。7 月 21 日：元雄勝町議・阿部久悦氏。7 月 27 日：東北大学職員・菅原麻衣子氏。8 月 28 日：雄勝総合支所、立浜地区：末永陽市氏、名振地区：大和久男氏、硯組合：高橋頼雄氏。

➢　スタディツアー後の展開―ボランティアとしての足湯へ―（2013 年度後期）

雄勝町での取り組みは、以上のように「スタディツアー」としてスタートしたが、その後の活動はボランティアへとシフトしていった。

ボランティアが始まった経緯は、以下のようなものがある。すなわち、ツアー終了後はツアーで伺った内容を記録するために、参加者で分担し、文字お越しを行った。ただし藤室委員・松原には、お話を伺うのみでは被災地の支援にならないという考えもあった。そこでツアー参加者が集まってミーティングを行ない、様ざまな活動方法を検討した（2013 年 11 月 6 日ミーティング）。そのなかで、支援室にとって最もノウハウのある足湯に関心が集まったため、足湯による傾聴ボランティアをスタートする。

足湯の活動先としては、二つの方針を立てることになった。一つ目は、震災後に雄勝町を離れて生活する被災者である。彼ら・彼女らは、震災前とは大きく異なる生活環境で暮らしており、生活に不安を抱えていることが予想された。そこで雄勝町の被災者がおおく生活する仮設飯野川校団地（石巻市河北町・74 戸）において、活動をスタートする（2014 年 1 月～）。二つ目は、震災後も雄勝町で生活をつづける被災者である。彼ら・彼女らは、震災前とおなじ地域で生活していたが、人口減少や仮設住宅の入居にともなって、同じく生活に不安を抱えていることが予想された。そこで、9 月のツアーでお世話になった名振地区での活動をスタートする（2013 年 11 月～）。なお足湯では、以下のようなつぶやきが聞かれ、より一人ひとりの思いに接する機会となった。

> （震災直後は）笑うこともできなかった。ボランティアの方たちのおかげで今こうやっていられる。若い人からパワーをもらっている。何事も経験、目の前に来たら体当たりするしかない（70 代・女性・名振地区）
>
> 若い人が少ないですね。子供は 1 歳と 2 歳と生まれたばっかりの 3 人。学生さんはひとりもいない。でも小さい子供の顔を見てるとやっぱり幸せなものです。こういうあったかい日はいいけど、冬になると寒くて集まることもできなくなる（50 代・女性・名振地区）
>
> 昼間は石巻で働いている。ここの集会所は学生さんが塾をやってくれている。震災前は雄勝に住んでいた。ここの仮設は雄勝の人がほとんどだけど、地区がバラバラだからお互い知らない人同士だった（年齢不明・女性・仮設飯野川団地）
>
> 1 カ月に一度来てくれるだけで嬉しい。三年目ともなると、ボランティアの数も減ってしまったから。震災前、椎茸を植えていて収穫を楽しみにしていたが、流されてしまった。波板のセンターでまた植え直すので、再スタートという感じ（60 代・女性・仮設飯野川団地）

さらにスタディツアーの延長として、学内で報告会を開催したいという声があり、報告会を開いた（2014 年 1 月）。報告会では、まずツアー参加者で分担し、ツアー内容の簡単

な紹介を行なった。それに加えて、雄勝町に関係する研究者・外部支援者を大学へ招待し、雄勝町の支援方法にたいする意見交換を行なった。

写真 3-3-4 足湯ボランティアの様子。仮設飯野川校団地にて　2014 年 1 月 19 日

➢　足湯ボランティア後の展開　―研究会のスタート―（2014 年度前期）

足湯ボランティアは、2014 年度に入っても定期的に行なった。活動は日帰りバスツアーの形式で行われ、雄勝町を離れて生活する被災者に対しては、2014 年 4 月（仮設飯野川校団地、仮設追波川多目的団地）、6 月（仮設飯野川校団地）、9 月（仮設飯野川校団地）と実施した。また雄勝町で生活をつづける被災者に対しては、2014 年 5 月（立浜仮設、波板地区）、7 月（波板地区）、9 月（波板地区）と実施した。なお活動メンバーについては、スタディツアー参加者だけでなく、一般の学生も公募し、多様な関心をもつ学生に参加してもらう形態をとった。なお足湯では、下記のようなつぶやきがあり、同じ被災者の方といっても多様な思いを持つことを学んだ。

昨年までは花を育てていたが、消費税も上がったし、実りのある野菜の栽培も始めた。…雄勝には人も少なく、お店も立ち行かないので、活気が戻らず帰れない（60 代・男性・追波川仮設）

ホタテ、ほっき、カキ等、ここで一度でも食べたらもう他の場所では食べられなくなる。ここは農業ではなく、漁業の町だ（年齢不明・男性・立浜仮設）

さらに 2014 年度前期になると、支援室は「住友ユースチャレンジ」の助成金を獲得し、助成金をもとに、雄勝町で調査をおこなう構想がもちあがった。具体的には、まず藤室委員・松原と阿部氏、宮定氏でミーティングを行ない、雄勝町に関係する NPO などを交えて「雄勝研究会」を発足させた（2014 年 4 月）。

「雄勝研究会」では、毎月一回ほど集まり、石巻市社協の職員、研究者、雄勝町へ支援にはいる NPO などに活動紹介を依頼することで、雄勝町を支援するにあたっての知見を深めた。またそこでの議論をふまえて、夏休みには合宿形式で、雄勝町の各集落、仮設住宅

に対して一斉ヒアリングを行なった[73]（「雄勝リサーチツアー」）。ヒアリングでは、震災後の問題（集落としての避難所対応、復興に向けた動きなど）にくわえて、集落の基本的な特徴（自治会の集まり、運営方法など）もうかがった。ここから雄勝町といっても集落ごとに個性があり、それぞれに固有の課題と支援のニーズがある点への理解を深めた。なおヒアリングでは、下記のような声を伺った。

復興支援をうたい工学系の大学・専門家が雄勝に何度も入っていたが、綺麗な模型を作ってプレゼンテーションするが、なに 1 つ実現したものがない。かれらの研究材料にされただけで、絵に描いた餅になっている。もう一歩踏み込んで、現実にしていく努力をして欲しい。…震災前から高齢化が進んでいた。現在住んでいる住民+α で 1500 人程度が戻ればいいと考えている（60 代・男性・大須小仮設中村会長）

高台移転先では同じ地区の人が 8 軒住むため寂しさはない。他地区からきている人にとっては「人のつながり」を重要視している。どんな形であれ、少しでも早く自分の住居を持ちたいというのが仮設住宅の住民の一つの思いとしてある（年齢性別不明・立浜仮設）

震災後、復興協議会の役員であり、流出した町民を雄勝に戻すために尽力したが、いまだに復興住宅の工事中である。3 年過ぎると若い木ほど根付きがよい（若い人は 3 年も経てば避難先に根付いてしまう）。残るのは、養殖者と年寄り（70 代・男性・羽坂地区阿部前会長）

地区の特徴は、豊かな海、人情が厚く人のつながりが強い、物々交換の頻度が高くお金がかからない、他所が真似できないくらいの仲の良さといった点がある（80 代・男性・分浜地区青木会長）

写真 3-3-5、3-3-6　リサーチツアーにおけるヒアリングの様子　2014 年 8 月 28 日
大須地区にて（左）　分浜地区にて（右）

[73] ツアーにあたっては、まち・コミュニケーション宮定氏の呼びかけのもとに、東北大学だけでなく、関西大学、中央大学、首都大学東京、専修大学、弘前大学の大学生・大学院生、さらには社会人も参加し、相互に交流する機会となった。

➢　リサーチツアー後の展開―活動形態の多様化―【2014 年度後期以降～】

2014 年度の後期になると、活動形態が、前期のそれ（日帰りの足湯ボランティア中心）から大きく変化していった。第一に、イベントへの参加がスタートする。2014 年 9 月には、波板地区で「雄勝浜祭り」が開かれ、支援室の学生・教員もボランティアとして参加した。また 11 月には、雄勝町の一大イベントである「雄勝ホタテ祭り」に参加した。1 月には名振地区で「おめつき」祭りが開かれ、こちらも学生・職員が参加している。

第二に、波板地域交流センターを拠点として、様々な種類を組み合わせた泊りがけの活動がスタートする。まず 11 月には、①波板地区での硯みがきボランティアと、②「ホタテ祭り」のボランティアを組み合わせた活動を行なった。12 月には、①集落の調査と②住民の方へのヒアリング、③足湯ボランティア、④漁業体験を組みあわせた活動を実施した。また 2 月の活動も、①石巻市中心部の視察、②行政職員のヒアリング、③足湯ボランティア、④集落の歴史に関する聞き書きなどを組み合わせたものとなった。

ボランティアの運営面においても、この時期から、部門として徐々に確立していく。雄勝町で活動するメンバーでは、支援室本体とは別に、隔週でミーティングを開いた。その出席者は、支援室本体と重なっていないメンバーも多かった。また松原に代わって鵜澤が学生の代表となり、運営を主導する形となった。

つづいて 2015 年度に入ると、活動が三種類に収束していった。第一の活動は、波板地区への支援である。波板地区は、震災前から雄勝町でも最も人口が少ない集落であり、過疎化が進んでいた。一方で震災後は、集落の消滅にたいする危機感から様ざまな活動を展開している。そこで支援室としては、波板地区のその時々の活動への補助を行なってきた。まず 5 月に雄勝クラフトフェア、10 月には雄勝ホタテ祭りがあり、それぞれ波板地区のブース運営を補助した。また 2015 年 3 月には桜の植樹祭を手伝い、そこででた要望をきっかけに、竹の伐採・海岸清掃を行なった（5 月、7 月）。他にも 12 月には、地区の集会所である波板地域交流センターのお掃除ボランティアを行っている。

第二の活動は、阿部晃成氏への支援である。阿部氏にたいしては、2015 年度以前も、震災当日の体験や、震災後の住民活動についてお話を伺っていた。一方で 2015 年度に入ると、阿部氏が新たに雄勝里山プロジェクトを立ち上げ、林業の取り組みをスタートする。そこで支援室としても、まず 9 月に林業に関するお話を伺った（「雄勝魅力発掘ツアー」の一環）。つづいて 11 月には、9 月に出たアイデアを基に「林業体験スタディツアー」を実施する。このツアーでは、斧による木の伐採、伐採した木の運びだしなどを通して、林業の具体的な作業を知ってもらうことを目的においた。さらに 12 月にはチェーンソー講習会があり、林業に不可欠なチェーンソーの使用方法を学んでいる。

第三の活動は、仮設飯野川校団地への支援である。仮設の入居者は、二子団地（石巻市河北町。平成 29 年度完成予定）での住宅再建を希望する方が多く、仮設生活の長期化が予想されている。そこで 2015 年度になっても定期的に訪問しており、足湯や清掃ボランティアを行なった（4 月、12 月）。また 8 月には、流しそうめんを企画し、普段のカフェ活動な

どでは接点の少ない子供などと交流した。他にも 11 月には、アカペラサークル del monde と連携し、集会所でアカペラを披露している。

その他に、9 月には「雄勝魅力発掘ツアー」と題してヒアリングを行なった。それ以前のヒアリングは、雄勝町の抱える復興の課題に焦点を当てたものであった。しかし地域の行く末を考えるうえでは、雄勝町にどのような魅力があるかを知ることも重要となってくる。そこでツアーでは、雄勝町のもつ魅力を四地域（①雄勝地区中心部、②半島部（雄勝地区以外）、③仮設飯野川校団地、④波板地区）に分かれてヒアリングし、住民の方自身が地域への愛着を再発見することを試みている。なお 2014 年度後期以降の活動をとおして、下記のような声を伺っている。

空き家を活用した民泊体験、自然体験によって、地域の魅力を発信できないだろうか。今回のような語り合いのなかで、地域の将来のことのみならず、他地域のことを知り、学びをえることができればと思う（年齢不明・女性・羽坂地区）

これまでの 4 年半は長かった。住むところを確定してからの方が気が重い。あと 3 年かーという感じ。東松島はもう引き渡し。3 年のひらきはなぜ？（60 代・男性・仮設飯野川校団地）

ブースの出店は…売り上げよりも、「少しても多くの人に波板の PR をすることが重要」という思いから，出店している。波板地区は高齢者ばかりであり、自分たちだけでできる活動は限界がある。そこで、今後もボランティアとして、様々な活動に関わってもらえると嬉しい（60 代・男性・波板地区）

写真 3-3-7　雄勝地区における林業支援の様子 2015 年 11 月 22 日　（左）
写真 3-3-8　雄勝クラフトフェアにおける波板ブースの出展 2015 年 5 月 24 日　（右）

以上のように、スタディツアーとして始まった雄勝町の取り組みは、時期を追うごとに、個別の問題に即した具体的なボランティア活動へと展開しつつある。

三項　活動一覧

➢　これまでの実施ツアー

《2013 年度》

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
9 月 24 日～25 日	雄勝総合支所、雄勝地区、波板地区、立浜地区、名振地区（石巻市雄勝町）	お話を伺う（雄勝総合支所三浦氏、雄勝地区を考える会阿部氏、波板地区役員、立浜地区末永氏、名振地区大和夫婦、硯組合高橋氏） ワークショップ	20	企画名「雄勝復興まちづくりスタディツアー」まち・コミュニケーション宮定氏参加
11 月 24 日	名振地区（雄勝町）	足湯手芸	8	
1 月 19 日	仮設飯野川校団地（石巻市河北町）	足湯手芸	9	
2 月 13 日	仮設飯野川校団地（河北町）	足湯手芸	10	
3 月 27 日	仮設飯野川校団地（河北町）	足湯手芸	5	

《2014 年度》

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
4 月 29 日	仮設飯野川校団地、仮設追波川多目的団地（河北町）	足湯手芸	16	
5 月 31 日	仮設立浜団地、波板地区（雄勝町）	お話を伺う（雄勝地区を考える会阿部氏） 足湯手芸	11	
6 月 15 日	仮設飯野川校団地（河北町）	足湯手芸	10	
7 月 13 日	波板地区（雄勝町）	足湯手芸	5	
8 月 27 日～29 日	名振地区、峠崎仮設、大須地区、大須仮設、羽坂地区、立浜地区、立浜仮設、大浜地区、森林公園仮設、分浜地区、波板地区（雄勝町）仮設飯野川校団地、喫茶去	調査（地区会…会長もしくは役員から、仮設住宅…自治会役員もしくは住民から） お話を伺う（雄勝地区高橋氏）	31	企画名「雄勝リサーチツアー」他大学・社会人と合同

	HAMA（河北町）			
9 月 14 日	波板地区（雄勝町）	「波板浜祭り」の参加	7	
9 月 17 日～19 日	羽坂地区、大須地区、森林公園仮設（雄勝町）、尾ノ崎地区（河北町）、女川町中心部	お話を伺う（地区会…会長もしくは役員から、仮設住宅…住民から） 視察	8	企画名「雄勝リサーチツアー」他大学・社会人と合同
9 月 23 日	波板地区（雄勝町）、仮設飯野川校団地（河北町）	足湯手芸	10	
9 月 25 日~27 日	雄勝総合支所、名振地区、波板地区、水浜地区、雄勝地区（雄勝町）、女川町中心部	お話を伺う（雄勝総合支所職員、「海遊」、雄勝地区高橋氏） 視察（羽坂地区）	11	企画名「雄勝リサーチツアー」他大学・社会人と合同
10 月 18 日	名振地区（雄勝町）	足湯手芸	8	
11 月 15 日～16 日	雄勝地区、波板地区（雄勝町）	お話を伺う（硯組合高橋氏） 硯みがき体験（波板地区） 「ホタテ祭り」の参加	6	
12 月 21 日～22 日	雄勝地区、森林公園仮設、名振地区、羽坂地区、波板地区、桑浜地区、荒地区（雄勝町）	足湯手芸 硯みがき体験 漁業体験 お話を伺う（雄勝花物語徳水氏、南三陸観光高橋氏） 調査（地区会長から）	18	
1 月 24 日	名振地区（雄勝町）	「おめつき祭り」の参加	4	
2 月 7 日～9 日	雄勝地区、波板地区、名振地区、立浜地区（雄勝町）、仮設飯野川団地（河北町）、日和山ほか（石巻市中心部）	足湯手芸 お話を伺う（門脇地区本間氏、仮設飯野川団地山下会長、雄勝地区を考える会阿部氏、まち・コミュニケーション宮定氏、雄勝総合支所職員） 歴史聞き書き（波板地区） 視察（石巻市中心部）	15	
2 月 11 日	仮設飯野川校団地（河北町）	足湯手芸	9	

3 月 7 日～8 日	波板地区、雄勝地区（雄勝町）	イベントの参加（「波板植樹祭」、「被災地ウォーク in おがつ」）	6	「桜並木ネットワーク」、実行委員会主催のイベントへの参加

《2015 年度》

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
4 月 12 日	仮設飯野川校団地（河北町）	仮設住宅の清掃	17	
5 月 9 日～10 日	雄勝ローズガーデン、波板地区、旧桑浜小学校、名振地区（雄勝町）	花壇の整備 海岸の整備 お話を伺う（雄勝花物語徳水氏、雄勝地区を考える会阿部氏、硯職人遠藤氏、SWT311 安田氏、名振地区大和氏）	17	
5 月 24 日	雄勝地区（雄勝町）	「雄勝クラフトフェア」の参加	6	波板地区のブースへ参加
7 月 5 日	波板地区（雄勝町）、仮設飯野川校団地（河北町）	海岸の整備 足湯手芸	21	
8 月 2 日	波板地区（雄勝町）、仮設飯野川校団地（河北町）	海水浴 流しそうめんの提供	8	
9 月 27 日～28 日	波板地区、桑浜地区、羽坂地区、旧桑浜小学校、雄勝地区（雄勝町）、仮設飯野川校団地（河北町）	お話を伺う（各地区住民） お茶会（羽坂地区、仮設飯野川校団地、森林公園仮設） 漁業体験（桑浜地区）	17	企画名「雄勝魅力発掘ツアー」
10 月 11 日	雄勝地区（雄勝町）	「雄勝ホタテ祭り」の参加	4	波板地区のブースへ参加
11 月 14 日	名振地区（雄勝町）、仮設飯野川校団地（河北町）	アカペラの披露	8	サークル「del monde」と共催
11 月 21 日～22 日	雄勝地区（雄勝町）	お話を伺う（雄勝地区を考える会阿部氏、高橋氏） 林業体験	10	企画名「林業体験スタディツアー」

12 月 5 日～6 日	雄勝地区（雄勝町）	チェーンソー講習	5	雄勝里山 PJ 主催
12 月 12 日	波板地区（雄勝町）	「波板地域交流センター」の清掃	1	
12 月 23 日	仮設飯野川校団地、仮設大森第四団地（河北町）	仮設住宅の清掃	24	
12 月 29 日	波板地区（雄勝町）	障がい者の方の見守り	4	静岡大学学生も 1 名参加
1 月 24 日	名振地区（雄勝町）	「おめつき祭り」の参加	10	

➢ ツアー以外の活動

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
≪2013 年度≫ 1 月 20 日	東北大学	ツアーの内容報告 足湯のつぶやき紹介 団体の活動紹介（オレンジねっと、雄勝スタジオ、雄勝アイランド構想協議会、雄勝いしのわネット）	18	企画名「スタディツアー報告会」
≪2014 年度≫ 5 月 13 日	石巻市	住民、NPO、研究者の方を交えて勉強会	―	
6 月 18 日、7 月 9 日	石巻市	住民、NPO、研究者の方を交えて勉強会	―	
7 月 22 日、29 日、8 月 12 日	石巻市	リサーチツアーに向けた調査票の検討	―	

四節　福島県での取り組み

福島県は地震そのものの被害や津波被害に加えて、原発事故やそれに付随する避難生活や風評被害の問題などが存在するという点で、岩手県や宮城県に比べて、より「複合的な」被災をした県である。発足当初は東北大学の所在地である宮城県での活動が中心であった東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室の活動も2013年頃から本格的に福島県での活動をスタートさせ、2013年9月には福島県専門の部門が完成した。以後は2か月に1度ほどのペースでボランティアツアーやスタディツアー（以下単に「ツアー」と表記する）を実施し、2016年1月末時点で延べ19回のツアーを行ってきた。ここでは、福島県での活動と福島部門のあゆみを簡単に振り返る。

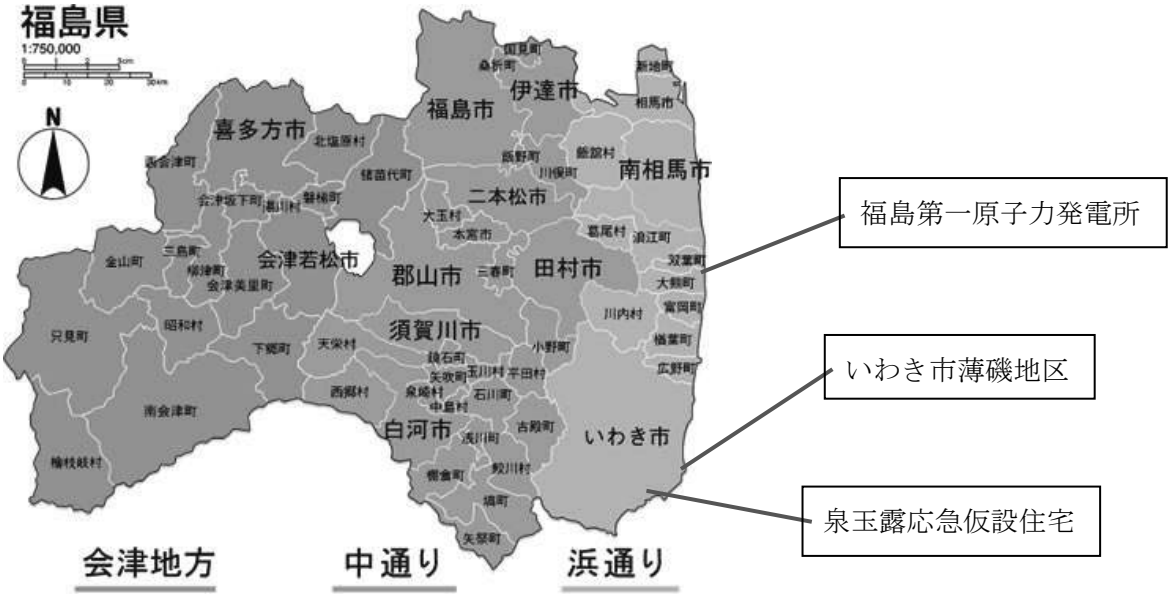

図 3-4-1　福島県の地図

一項　2012年度の取り組み

震災発生から1年以上が経過した2012年度であったが、支援室スタッフの活動内容は、学内のイベント企画や他団体へのコーディネートなどの活動がウエイトの多くを占めており、現在に通ずる被災三県の部門制というシステムはま未だ築かれておらず、中でも福島は三県の中で最も疎遠な地となってしまっていた。しかし、2012年度の後半になると当時支援室スタッフで双葉郡富岡町出身である坂上氏を中心に、福島にも足を運ぼうという機運がその高まりを見せ、2012年度（2013年）3月に初めて支援室として福島へ向かうツアーが実施された。この3月のツアーは後の福島部門誕生の第一歩となるものであった。

➢　3月　○支援室として初めて福島へのツアーを行う

当時一般社団法人ワカツクに所属していた坂上氏が中心となり、NPO法人みらいとに所属していた日下氏などの協力を得て、福島県の新地町へのスタディツアーを実施した。こ

れは支援室として初の福島へのツアーとなった。内容としては津波で被害を受けた沿岸部を視察した後、役場や地域の方からお話を伺い、最後にワークショップを行うというツアーであった。

二項　2013 年度の取り組み

2012 年度後半以降の福島ツアーへの関心の高まりや 2013 年度 5 月のミーティングを受けて、9 月に福島部門が正式に誕生・スタートしたのがこの 2013 年度である。チームとして初の企画･運営となった 9 月ツアーを皮切りに 12 月､2 月と順調にツアーを重ねていき、部門として独り立ちをするきっかけを作りに成功。来年度 2014 年度以降の活動の本格化への足掛かりとなる年度であった。

➢　5 月　〇部門誕生のきっかけとなった 23 日支援室ミーティング

2012 年度後半から続いてきた福島への興味・関心の高まりと共に福島部門誕生の大きなきっかけとされているのが 2013 年 5 月 23 日に行われた支援室ミーティングである。このミーティングでは支援室の今後に関することがかなり熱く話し合われた。その中で、「支援室が今後特定の地域にフィールドを持っていくべきかどうか」いうことが議題にあがり、その結果支援室では今後、岩手県の陸前高田、宮城県の雄勝、そして福島で継続的な活動をしていこうということが決まった。

➢　6 月　〇さらに 2 度の福島ツアー

2012 年度 3 月の初の福島へのツアーの第二弾、第三弾としてさらに 2 本のツアーが行われた。3 月のツアーは完全なるスタディツアーであったが、6 月の 2 本のツアーでは足湯や移動保育などボランティア要素も取り入れられ、よりボランティアツアーに近いツアーとなった。また、移動保育活動では「NPO 法人 移動保育プロジェクト ポッケア」の活動に参加。以降の移動保育活動のきっかけとなった。

ここまで計 3 本の福島でのツアーはいずれも坂上氏によるところが大きかったが、その努力の結果、福島により興味を持つスタッフが増加。部門形成への大きな原動力となった

➢　6 月　〇初のチームでのツアー企画

6 月末の支援室ミーティングで夏休みのツアー企画が議題にあがり､その後企画チームとして集まった 6 名のメンバーがどのようなツアーをしたいのかということを話し合った。その結果、移動保育などのボランティア要素も入れるものの、スタディ要素を中心としたツアーにしていくということに決まった。これには、当時のメンバーにまだ福島について十分な知識がなかったということが背景として存在する。そうして行われた 2013 年 9 月 12 日から 14 日のツアーは、“福島専門のチーム”として初めて運営を行ったツアーであった。

➢　9 月　○初めて富岡町を訪れる

9 月 12 日～9 月 14 日の福島ツアーでは初めて富岡町を訪れることとなった。富岡町は、原発事故の被害を受け、2016 年 1 月現在も全町避難が続けられている人口約 14,000 の町であり、我々は富岡町の方々が避難生活を送っている泉玉露仮設住宅で頻繁に活動を行っている。また富岡町民からなる語り人（かたりべ）チーム「富岡町 3・11 を語る会」は震災直後より続く原発からの避難生活やその苦悩などを人々に語り伝える活動をしており、福島部門でも何度かお話を伺っている。

写真 3-4-1　福島スタディツアー。JR 富岡駅前の様子　2013 年 9 月 12 日

➢　9 月　○福島部門、誕生

9 月 12 日～9 月 14 日の福島ツアーが終わった 9 月 30 日の支援室ミーティングで後期以降の支援室の方針が話し合われ、全体の代表保坂、マッチング部門代表福長、岩手部門代表奥山、宮城部門代表松原、福島部門代表石井の新体制がスタート。初代代表石井の下、福島部門がその産声をあげた。

➢　12 月　○留学生と行く福島ツアー

福島部門として初めて企画をしたツアーは 2013 年 12 月 14 日～15 日に実施された留学生と行く福島ツアーであった。このツアーには計 31 名が参加し、仮設住宅での足湯を行うなど留学生向けでありながら、本格的なツアー内容となった。このツアーでは経済学研究科の松谷基和委員に多大なるご尽力をいただいた。

写真 3-4-2，3-4-3　留学生と行く福島ツアー　2013 年 12 月

左：相馬市松川浦漁協の方からのお話、右：石上第一仮設住宅での交流の様子）

写真 3-4-4　郡山市おだがいさまセンターにて足湯活動　2013 年 9 月

なお 2013 年度の活動では、住民の方から、以下のような声を伺った。

一年前は悲しみでこの歌（浪江町の歌）を歌うことができなかった（浪江町から本宮市へ避難）

素晴らしい浪江の風景、自然を見たくても帰れない（50 代・女性・浪江町から本宮市へ避難）

昔は息子もよく来てくれたんだけどなあ（70 代・男性・浪江町から福島市へ避難）

家の中もぐちゃぐちゃになっちゃったんだけど、基礎がしっかりしてたから大丈夫だったんだ（70 代・男性・浪江町から福島市へ避難）

三項　2014 年度の取り組み

2014 年度は支援室に入った 1 年生のほぼ全員が福島部門に属したということもあり部門の人数が大幅に増加し、体制が少しずつ整い始めた年度となった。年度を通してコンスタントにツアーを実施し、現在の主な活動場所である、いわき市の平薄磯地区と同市の泉玉露応急仮設住宅という核となる活動拠点ができ始めた年度にもなった。

➢　4 月　○部門勉強会のスタート

「宮城にいても福島のためにできることはないか」ということで、この年度より福島部門内での勉強会をスタート。主に原発事故での影響やその賠償などを中心に本や資料などを予め読んだ発表者がその内容を発表するという形式で、これまでに朝日新聞『プロメテウスの罠』や福島第一原子力発電所労働記『いちえふ』、開沼博氏著の『はじめての福島学』などを読んできた。この勉強会で得た知識はツアー中、一般参加者に配布するしおりなどに活かされている。

➢　4 月　○初めて泉玉露応急仮設住宅を訪れる

2014 年 4 月 26 日～27 日の福島ツアーで、原発事故の影響で避難してきた富岡町の住民が暮らす泉玉露応急仮設住宅に初めて訪れた。我々が泉玉露応急仮設住宅で活動をさせていただくことになった経緯としては、富岡町の社会福祉協議会として 2011 年 5 月に発足した「おだがいさまセンター」に以前よりお世話になっていたということや、いわきには大学などが少なく、福島県の他の地域に比べて学生ボランティアが不足していたことなどが存在する。以後泉玉露仮設住宅では、仮設住宅内のイベント「ほっこりカフェ」や餅つき会に参加をしたり、足湯・手芸ボランティアや清掃ボランティアを行ったりと様々な活動でお世話になっている。

写真 3-4-5，3-4-6　泉玉露仮設住宅にて落語（左）足湯（右）2014 年 4 月

➢　7 月　○初の清掃ボランティア活動

2014 年 7 月 5 日～6 日のツアーは東北大学 1 年生の必修科目基礎ゼミの一環で行われたツアーである。このツアーでは支援室 OB の坂上氏が理事を務める「NPO 法人コースター」の協力を得て、支援室では初となる仮設住宅の清掃ボランティアを実施した。このツアー

をきっかけに他の部門でも仮設住宅での清掃ボランティアが取り入れられ、その頻度が少しずつ高くなっていった。

➢　8 月　○ハーバード大生と共に行く福島スタディツアー

昨年 2013 年 12 月の留学生と行く福島スタディツアーに引き続き、ハーバード大学生と行く福島スタディツアーを 8 月 2 日～3 日の日程で実施、21 名が参加した。飯館村やいわき市泉玉露仮設住宅でお話を伺うなど、前回よりもスタディ要素を充実させたツアーとなった。

写真 3-4-7，3-4-8　ハーバード大生と共に行く福島ツアー。飯館村での様子 2014 年 8 月

➢　9 月　○初めて薄磯地区を訪れる

2014 年 9 月 16 日～18 日の福島スタディツアーで、現在の主な活動地の一つである薄磯地区を初めて訪れた。これは学生スタッフである松原の知り合いが薄磯地区で研究していたというところから始まっている。いわき市平薄磯地区は、いわき市の沿岸部に位置し、いわき市最大級の津波により 100 名以上の方が亡くなった地域で、今も大半の住民が公営住宅で暮らしている。震災後は、地域の復旧・復興、まちづくりを進めるという目的で「薄磯復興協議委員会」が設立され、住民主体の復興が進められている。9 月ツアー時は地区の様子を視察するのみであったが、次の 11 月ツアーでは薄磯復興協議委員会委員長の鈴木氏より薄磯の概要についてお話をいただいている。

写真 3-4-9，3-4-10　いわき市薄磯地区の様子　2014 年 9 月

➢　11 月　○代表が金子（当時 1 年）に交代

来年度以降の体制づくりがミーティングで話し合われ、福島部門発足当初から代表を務めてきた石井に替わり当時 1 年の金子に代表の座が譲られた。また、これと同時に福島部門では初となる副代表が設置され､同じく当時 1 年の名古屋がその座につくこととなった。

写真 3-4-11，3-4-12　2014 年度活動の様子
田村市都路地区での水路造設作戦　7 月（左）
いわき市泉玉露仮設住宅での手芸活動　9 月（右）

なお 2014 年度の活動では、住民の方から、以下のような声を伺った。

息子や孫が遠くに住んでいるため、あまり来てくれずさみしい（70 代・女性）

（お掃除ボランティアに関して）手の届かない所の掃除はありがたい（70 代・女性）

福島に来なきゃ良かった（70 代・男性）

残念だけど、富岡町は閉鎖した方が良いのでは（50 代・女性）

テレビでは川内村の住民の半数が戻っているというが、そんなの嘘だ（50 代・女性）

旦那は震災後、病気で亡くなった。息子があと 2 年くらいで仕事が定年になり福島に来てくれる。今は寂しい（80 代・女性・いわき市薄磯地区）

震災のせいで家族とバラバラになってしまった。今は津波で半壊した家を再建して住んでいる。土地から離れたくない（80 代・女性・いわき市薄磯地区）

県庁に乗り込んで、打ち切られた補償内容を再度認めさせた（60 代・男性・川内村から郡山市へ避難）

一人だから、食べ物を食べきれないことがある。高い所に手が届かないので、掃除は嬉しい。息子は会津にいて、なかなか会えない（70 代・女性）

主人が体調を崩して入院していた。いつまでも仮設にいられないから、いつかは出ないといけない（60 代・女性・川内村から郡山市へ避難）

米農家をやっているが､震災当初は売れなかった。沢の水が放射線のせいで使えない。山のものが食べられない（70 代・女性）

四項　2015 年度の取り組み

2015 年度の一番大きな特徴は、より部門としての色が強くなったということである。2014 年度までは支援室のほぼ全メンバーが福島部門に属しており、ほとんど支援室と同じような組織であったが、2015 年度からは他の部門と同様な位置づけとなった。10 月末には「福興 youth」という新たな団体名を決定、独自で助成金の申請を出し、8 月以降はメンバーのみでも数回福島に足を運ぶなど、より福島に、地域に根ざした活動へとシフトしていった年度であった。また活動場所はいわき市の薄磯地区と同市泉玉露応急仮設住宅の 2 つが大半を占め、結果として 2015 年度の全ての福島ツアーでこのどちらかを訪れることとなった。

➢　4 月　○代表が秋山（当時 2 年）に交代

2014 年 11 月より福島部門の代表を務めてきた金子の 2015 年 4 月付での支援室の代表就任に伴い、当時 2 年の秋山へと代表が移行。これと同様に、2015 年 4 月付で支援室副代表に就任した名古屋に替わって同じく当時 2 年の渡辺が新たに福島部門の副代表に就任した。

➢　6 月　○留学生と行く福島ツアー

海外の学生と福島を訪れる 3 年連続のツアーとなった 2015 年 6 月の留学生と行く福島スタディツアーでは、震災を直に経験した方からお話を伺うだけでなく、小水力発電の見学や福島市の庭坂小学区で子どもたちと一緒に給食するなど目新しいプログラムが多く取り入れられたツアーとなり、金曜日からの開催にも関わらず 23 名の学生が参加した。

写真 3-4-13　留学生と行く福島ツアー。福島市あんざい果樹園にて　2015 年 6 月

➢　8 月　○薄磯地誌づくりのお手伝い

津波で大きな被害を受けたいわき市平薄磯地区での地誌づくりのため、住民から薄磯の歴史を聴き取るというボランティアにスタッフ 4 人が参加した。これは今回の津波の被害

や地区の歴史を後世に伝えていくという目的で作られており、町の防災の歴史などを中心にお話を伺った。

➢　10 月　○団体新名称決定

より地域に根ざした専門的な活動を続けていくという目的で、福島部門の愛称を決めるということになり、10 月末の部門ミーティングで「福興 youth」という福島部門独自の名称を決定した。

写真 3-4-14，3-4-15　2015 年度活動の様子

いわき市泉玉露交流サロンでの流しそうめん　6 月（左）

笹谷東仮設住宅での大掃除　12 月（右）

なお 2015 年度の活動では、住民の方から、以下のような声を伺った。

富岡の桜を見に帰りました。仮設住宅の人とバスで行ったのですが、バスからは降りられなくて悲しかったです（70 代・女性・富岡町からいわき市に避難）

（いわき市民と富岡町などから同市に避難している人との関係について）「避難してきた人のことを悪く言うのは、（いわき市民でも）ごく一部なんだけど、一部でもいるとね。（避難してきた人の中には）いわき市に家を買ったけど、もう売って別で暮らしたいとか、家のカーテンを閉め切って暮らしている人もいるわ（60 代・女性・富岡町からいわき市へ避難）

仮設にいてもすることが特にないから、楽しくない（50 代・男性・富岡町からいわき市へ避難）

やっぱり復興、復旧ってなった時に良いも悪いも大事なのはお金だよ。だからまず賠償をしっかりしないとどうにもならないね（70 代・男性・富岡町からいわき市へ避難）

実は自分は昔、原発の安全性をチェックする仕事をしていたが、今回これほどまでの事故に発展するとは思わなかった（70 代・男性・富岡町からいわき市へ避難）

東京の大学に通う孫が二人いて、二人ともずっとここに住んでいます。何十年も商売

をやっていましたが、震災で店を失って今はもう仕事をしていません（70 代・女性・いわき市薄磯地区）

仮設に住んでいると、免許がないのでとても不便だ。役場も遠い

最近仮設の広い部屋に移させてもらった。前は本当に狭かったので、良かった（40 代・女性・富岡町からいわき市へ避難）

仮設では暇だからずっと編み物をしている。外にでるのは病院に行く時くらい（70 代・女性・富岡町からいわき市へ避難）

行政の人も最初は来てくれたが、最近は全く来なくなった（60 代・女性・浪江町から福島市へ避難）

（遺影を指して）息子が富岡の家さ行って写真持ってきてくれたんだ。お父さん、お母さんのと、旦那のね（80 代・女性・富岡町からいわき市へ避難）

私の家は津波にも流されないで、地震にも耐えて全く被害がないのにそこで暮らせないのよ。おかしいわよね（80 代・女性・富岡町からいわき市へ避難）

四項　活動一覧

➢　これまでの実施ツアー

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
《2012 年度》3 月 22 日	新地町	まち歩き、お話を伺う（役場の方）（旅館の方）、ワークショップ	16 名	NPO 法人みらいと、一般社団法人ワカツクとの共催
《2013 年度》6 月 8 日	おだがいさまセンター、ミュージカルがくと館	足湯・カフェ、講演を聴く、お話を伺う（コースターの方）、ワークショップ	29 名	
6 月 22 日	みちのく杜の湖畔公園	移動保育	20 名	NPO 法人ポッケアとの共催 ※活動場所は宮城県
9 月 12 日～14 日	川内村・富岡町、富岡町役場、おだがいさまセンター、湖南町	視察、お話を伺う、足湯、移動保育	12 名	NPO 法人ポッケアとの共催
12 月 14 日	松川浦漁協、飯館村	お話を伺う（漁協の	31 名	留学生向けツアー

～15 日	福島高校、森合仮設住宅 石神第一仮設住宅	方）（農業委員会の方） 学生との交流 足湯		
2 月 21 日 ～22 日	高木仮設住宅、石神仮設住宅、除染情報プラザ、湖南町	足湯、住民との交流、除染に関する学習、移動保育	14 名	NPO 法人ポッケアとの共催
《2014 年度》 4 月 26 日 ～27 日	ココカラ、おだがいさまセンター、富岡駅前、泉玉露仮設住宅、好間仮設住宅	移動保育、お話を伺う、視察、足湯	25 名	NPO 法人ポッケアとの共催
7 月 5 日 ～6 日	田村市都路地区 南一丁目仮設住宅	石積み・川づくり 清掃ボランティア	14 名	ＮＰＯ法人コースターとの共催 基礎ゼミツアー
8 月 2 日 ～3 日	飯館村 両忘庵 泉玉露仮設住宅 福島第二原子力発電所、浅利	お話を伺う （農業委員会の方） （福島再生の会の方） （大学の准教授）（会長）、見学、視察	21 名	ハーバード大学生とのツアー
9 月 16 日 ～18 日	いわき・ら・ら・ミュウ、いわき教会 薄磯地区、富岡駅前 泉玉露仮設住宅 好間仮設住宅	震災被害展示の見学 お話を伺う 視察 足湯	13 名	
11 月 8 日 ～9 日	薄磯地区集会所 浜風商店街 田村市都路地区	お話を伺う、足湯 商店街の視察、まち歩き	8 名	
12 月 13 日 ～14 日	南一丁目仮設住宅 若宮仮設住宅	清掃ボランティア	14 名	ＮＰＯ法人コースターとの共催
2 月 21 日 ～23 日	おだがいさまセンター、薄磯地区集会所、泉玉露仮設住宅、富岡駅前	足湯交流会への参加、お話を伺う 地域内の視察、足湯（カフェに参加）、視察	7 名	
《2015 年度》 4 月 25 日	四季の里	お話を伺う	13 名	

～26 日	川内村・富岡町 泉玉露交流サロン 泉玉露仮設住宅	イチゴ狩り 町の視察 お話を伺う 足湯		
6 月 13 日 ～14 日	薄磯地区集会所 泉玉露交流サロン	足湯・切り絵・折り紙 流しそうめん	12 名	
6 月 19 日 ～20 日	あんざい果樹園 飯館村 庭坂小学校 土屋温泉町支所 エネルギー施設 双葉未来学園	お話を伺う 視察 食材モニタリング視察 講演を聴く 小水力発電見学 学生との交流	23 名	留学生向けツアー
9 月 16 日 ～18 日	ＪＡ郡山 さくらビル Ｊヴィレッジ 富岡駅前 ここなら商店街 泉玉露仮設住宅 浜風商店街	検査場見学 お話を伺う （富岡町語り部） （東京電力の方） 視察 お昼ごはん ビンゴ大会 商店街見学	11 名	
11 月 7 日 ～8 日	富岡駅前 薄磯地区集会所 泉玉露仮設住宅	視察、芋煮、足湯・切り絵、清掃ボランティア	8 名	
12 月 12 日 ～13 日	笹谷東部仮設住宅 旧松川小仮設住宅 森合町仮設住宅 泉玉露仮設住宅 福島県青少年会館 薄磯地区集会所	清掃ボランティア、福島大との交流会、餃子作り 足湯・折り紙 講演を聴く	15 名	福島大学災害ボランティアセンターとの共催
2 月 19 日 ～20 日	福島県漁連、いわき・まごころ双葉会、薄磯地区	ヒアリング 足湯手芸 ワークショップ	9 名	

➢　その他の活動

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参 加 者数	備考
《2015 年度》 8 月 8 日 ～9 日	薄磯地区	地誌づくりにむけたヒアリング	4 名	薄磯地区瀬谷氏などの協力
10 月 18 日	上野台仮設住宅	芋煮 折り紙・工作	5 名	福島大学災害ボランティアセンターの活動に参加
1 月 11 日	泉玉露仮設住宅	餅つき	5 名	餅つき会に参加
1 月 24 日	薄磯地区	餅つき	2 名	餅つき会に参加

五節　その他の取り組み

支援室では、他団体と協力しつつ、被災 3 県のうち複数の地域を取り上げるツアーも開催してきた。本節では、そのような種類のツアーを「その他のツアー」と分類し、紹介することとする。

一項　宮城県沿岸部被災地ツアー

➢　概要

宮城沿岸部被災地ツアーは、主に京都府にある同志社女子大学の学生を対象にして東北被災地を案内するという内容のツアーである。他地域の学生を主な対象にするツアーとしては、支援室では初めてのツアーである。もともと同志社女子大学に知人がいた米村委員をきっかけに、このツアーを開催することとなった。

ツアーの目的について、第 1 に他地域の学生に被災地について、とりわけ、沿岸部の被害の大きさや、それぞれの沿岸被災地域での被害の違いや賑わいの差をしってもらうことに注目してもらうことである。第 2 に、観光や食事を通して「宮城県の良いところ」について考えてもらうことである。

次に、ツアー内容について、1 日目は、仙台市で主に活動をした。すなわち、河北新報本社や、宮城県社会福祉協議会の話を聞いてディスカッションをした後、仙台城址を訪れ観光をした。2 日目は沿岸部へ移動し、仙台市若林区荒浜、塩釜港、松島、東松島市を巡って被災地の視察、観光を行った。東松島市では、「奥松島体験ネットワーク」で漁業体験を行い、民宿「かみの家」に宿泊した。3 日目は石巻市に移動し、本間英一氏に門脇地区でお話を伺い、門脇小学校や日和山を視察した。その後、石巻 Newsée（石巻日日新聞展示コーナー）を訪れ、お話を聞いた。

➢　感想・反省

参加者からは、「やはり実際に訪れることの大切さというものを感じた。このイベントでメディアを通してだけではわからない被災地の今の現状がしることができたと思う」「一つの問題について考えても、その中にはいろいろな事情があったり、難しい判断が存在しているので、何が正しいかとかどうすべきかと答えを出そうとしてももやもやしたことが多かったです」「ここで学んだことをいろいろな場で、ぜひ発表して、どんどん発信していこうと思いました」（同志社女子大学・現代社会学部 2 回生）という感想があった。

また、反省・改善点としては、スケジュール設定の他、他地域へのツアー広報の方法をどうするか、 関西の人たちが東北の事を学んでもらうためにディスカッションを工夫するなど、ホスピタリティを出した方が良い（東北大学修士 1 年）ということが挙がった。

他地域の学生に東北についてどう知ってもらうためにどのような工夫をすればよいかということを考えるきっかけとなるツアーとなったといえる。

写真 3-5-1　東松島市奥松島体験ネットワークでの漁業体験　2013 年 8 月 20 日（左））
写真 3-5-2　石巻市門脇小学校を視察　2013 年 8 月 21 日（右）

二項　多大学合同ツアー

➢　概要

2014 年の 9 月 11 日から 9 月 13 日にかけて、多大学合同ツアーを実施した。このツアーも、米村准教授のお知り合いがいる立教大学法学部のゼミ生に東北の案内することをきっかけとして始まった。さらに、立教大学だけでなく東京大学やお茶の水大学、早稲田大学、埼玉大学などの関東の学生に募集を広げ、多大学の学生が集うツアーとなった。

まず目的についてである。宮城沿岸部被災地ツアーのように他地域の学生に東日本大震災やボランティアについて考えてもらうことに加え、実際に各自のホームページなどで報告をしてもらうこととした。

次に内容についてである。1 日目は名取市閖上地区の津波復興祈念資料館「閖上の記憶」でお話を聞き、東松島市野蒜地区を見学、その後石巻市雄勝町を阿部晃成氏の案内で視察した。夜は雄勝町の浪板地域交流センター（浪板ラボ）に宿泊して、ディスカッションや懇親会を行った。ディスカッションでは、関東や東北での震災に対する意識の違いや、「復興」とはどういうもので、どうすれば「復興」するのかということを話し合った。2 日目は福島市曲屋果樹園で風評被害についてのお話を聞き、梨狩りを楽しんだ。その後、JA 郡山市機関農業倉庫で全量全袋検査の見学をした。郡山市の「おだがいさまセンター」では、富岡町についてのお話を聞き、夜は川内村の「いわなの里」に宿泊した。3 日目は、川内村や富岡町を視察した後、いわき市に移動して泉玉露仮設住宅で活動し、JR 泉駅で解散した。

➢　感想・反省

参加者の感想としては、「『復興』とは多義的なものであって、その場面ごとに適切な復興方法を模索する必要がある」（慶応大学法務研究科 2 年）、「語り部の方々からのお話を聞いたり、被災された方の不安などを聞いたりする中で、国の行政と地域社会のニーズとのギャップ、孤独死への懸念、情報格差、電力に頼りすぎた生活など、現代の日本が持つ課題のより深刻な状況を感じました。」（早稲田大学 1 年）などがあった。

今後の課題としては、やはり東北で学んだことを他地域の学生にいかに発信してもらえ

るかというツアー後の仕組み、取り組みまで作れたらよいと思われる。

写真 3-5-3　東松島市野蒜駅を視察　2014 年 9 月 11 日（左）

写真 3-5-4　JA 郡山市機関農業倉庫にてコメの全量全袋検査の見学　2014 年 9 月 12 日（右）

三項　あしなが育英会ツアー

あしなが育英会では、病気・自死・災害等で両親、片親を亡くした遺児たちの教育支援の一環で、世界（オックスフォード大学、プリンストン大学など）の学生約 20 名を日本に招待し、奨学生と共に学ぶ「あしながインターンシップ・プログラム」を実施している。

支援室は、2014 年度からこのプログラムの募集などに協力している。

2014 年度は、8 月 8 日（金）～8 月 11 日（月）、8 月 17 日（日）～8 月 20 日（水）の 2 回、陸前高田市の視察や「陸前高田レインボーハウス」で震災遺児との交流、仙台育英高校においてインターン生の特別授業などを行った。2015 年度は、7 月 11 日（土）～7 月 15 日（水）、8 月 22 日（土）～8 月 26 日（水）の 2 回行った。1 期目は、東北大学でのディスカッションや石巻市中心部、大川小学校、雄勝町の視察や漁業体験、仙台第三高等学校での出前授業を行った。2 期目は、東北大学でのディスカッションや仙台第三高等学校での出前授業、大川小学校の視察の他、女川町の視察、漁業体験をした。

四項　活動一覧

開催時期	主な活動場所	主な活動内容	参加者数	備考
2013 年 8 月 19 日 ～21 日	宮城県河北新報本社、東北大学、若林区荒浜（仙台市）、塩釜市街地（塩釜市）、野蒜地区、月浜（東松島市）、石巻市沿岸部・街地（石巻市）	お話を伺う（河北新報、宮城県社協、石巻市門脇町本間氏など） 漁業体験 被災現場の視察	8	企画名「宮城県沿岸部被災地ツアー」。同支社女子大の学生も参加

2014 年 8 月 8 日～11 日、 17 日~20 日	岩手県陸前高田市、陸前高田レインボーハウス、宮城県仙台育英高校	地域の視察、震災遺児との交流、インターン生の特別授業など	―	「あしなが育英会ツアー」
9 月 11 日 ～13 日	宮城県名取市閖上、東松島市野蒜、石巻市雄勝町波板地区、福島県郡山市曲屋果樹園、JA 郡山市機関農業倉庫、郡山市おだがいさまセンター、川内村、富岡町、いわき市泉玉露仮設	お話を伺う（各地）、地域の視察（各地）、カフェ活動（泉玉露仮設）	―	「多大学合同ツアー」
2015 年 7 月 11 日～15 日、	東北大学、石巻市中心部、石巻市大川小学校、石巻市雄勝町仙台第三高校	ディスカッション、視察、漁業体験、出前授業	―	「あしなが育英会ツアー」
8 月 22 日 ～25 日	東北大学、仙台第三高校、石巻市大川小学校、女川町	ディスカッション、出前授業、視察、漁業体験	―	「あしなが育英会ツアー」
2016 年 2 月 21 日~24 日	宮城県名取市閖上、石巻市大川小学校、石巻市仮設大橋団地、福島県楢葉町、富岡町	視察、ワークショップ	12 名	「多大学合同被災地ツアー」

四章　学内の取り組み、その他

本章では、学内での取り組みや、その他の取り組み全般について紹介する。

支援室における一つの業務は、一章でみたように、各種調整を行なうことであった。具体的には、所掌業務として、学外の機関・団体等との連絡調整、学内の関係部署との連絡調整、支援対象として運営委員会において認められた学生団体との連絡調整が定められている（要項第 8 条）。

そのなかで主に行ってきた活動としては、学内イベントへの参加（オープンキャンパス、大学祭：一・二節）、一般学生を対象とした団体紹介イベント（スタートアップフェア：三節）、学内・学外団体との連絡調整会議（井戸端会議：四節）、大学間交流への対応（国際交流：五節）がある。また支援室では、震災ボランティアに関する教育活動も実践してきた（学内の授業：六節）。以下では、それぞれ順に紹介していく。

一節　オープンキャンパス

東北大学では、毎年 7 月 30 日、7 月 31 日頃に高校生を対象にオープンキャンパスを開催している。東北大学には、宮城県内外から 2 日間で約 6 万人[74]の高校生が集まり、全国の大学でも屈指の規模を誇ってきた。支援室では、数年後に大学生を控える高校生に、被災地やボランティア活動の情報を発信しようと 2012 年から企画を実施してきた。ここでは、内容、企画の意義、企画の課題、年度毎の概要を紹介する。なおオープンキャンパスは、大学行事の一つであるため、活動の意義や課題は東北大学特有のものとなるかもしれないことに留意してほしい。

一項　オープンキャンパスの概要

➢　内容

オープンキャンパスでは、ボランティア活動のパネル展示とトークセッションや講演会を実施している。2012 年度は、川内南キャンパスでブースを出して、大学生が高校生にボランティア活動の紹介や大学生活の過ごし方について説明を行う企画をした。2013 年度は、川内北キャンパスの講義棟でボランティア活動のパネル展示と大学生や高校生、社会人を交えたトークセッションを行った。2014 年度、2015 年度はボランティア活動のパネル展示と、学生による講演会を行った。

---

[74] 平成 27 年度の延べ人数。東北大学入試センターホームページより
http://www.tnc.tohoku.ac.jp/koho_opencampus.php

➢　意義

オープンキャンパスでは、県内外から多数の高校生が来場するため、大学の様子を伝えるだけでなく、被災地での活動に興味を持ってもらえる機会だといえる。

他方で、栃木高校や神戸の高校生の団体、Re:Smile といったボランティア団体のように、特定の高校生の団体との交流も増えてきたことも挙げられる。今後も全国の高校生や、沿岸被災地の高校生などと共同で活動を行う機会を作れると良いのではないかと思われる。

➢　課題

もっぱら東北大学の事情ではあるが、オープンキャンパス（7 月）は期末テスト期間とかぶっており、学生スタッフにとっては準備がしにくいことが挙げられる。また、新メンバーが加入してから間もない時期でもあり、実際に手伝う学生が少ないと、ノウハウが蓄積されにくいということがあった。

二項　年度ごとの概要

➢　2012 年度

日時	7 月 30 日～31 日　9:00～16:00
場所	川内南キャンパス文系学部講義棟下
参加人数	不明
内容	・ボランティア団体の活動紹介パネル展示 ・ボランティア座談会「ボランティア経験者達の生の声を聞いてみよう」 ・ボランティアセミナージャーナル 1 号の配布

写真 4-1　2012 年度の様子。この年は屋外でパネル展示を行なった

➢　2013 年度[75]

日時	7 月 30 日～31 日　　両日 9:00～16:00
場所	川内北キャンパス講義棟 A202 教室
参加人数	210 名
内容	下記時間帯以外は活動紹介パネル展示 30 日　12:30～13:30　トークセッション「復興系男子」2 人のホンネ 15:00～16:00　トークセッション　ボランティアで大学デビュー 31 日　12:30～13:30　トークセッション「教える」支援って何だろう？ 15:00～16:00　同上

写真 4-2，4-3　2013 年度の様子。この年はトークセッションを企画した

➢　2014 年度

日時	7 月 30 日～31 日
場所	川内北キャンパス A101 号室、A102 号室
参加人数	130 名
内容	・学部 1 年生から高校生への講演 ・栃木高校出身の東北大生から栃木高校の高校生への講演 ・活動紹介パネル展示パネル展示

写真 4-4　2014 年度の様子

[75] 2013 年 4 月 26 日ボランティア支援室臨時ミーティング議事録より

➢　2015 年度[76]

日時	7 月 29 日～30 日
場所	川内北キャンパス講義棟 A101　展示　講義棟 A102　講演会
参加人数	不明
内容	・「東北大学生の復興支援～震災から 5 年目を迎えて～」 神戸の高校生の団体などへ支援室の活動、地域の課題、魅力を紹介。 ・「東北大学生と宮城県の高校生コラボ～ボランティアの魅力を紹介」 高校生ボランティアグループ Re:Smile とコラボ

写真 4-5　2015 年度の様子

[76] 2015 オープンキャンパス（20150603）参考

二節　大学祭

東北大学では、毎年 10 月の終わりから 11 月の初めの休日に大学祭を開催している。東北大学の学生をはじめ、他大学の学生や一般の市民が来場し、普段関わることの少ない方と交流する機会になっている。ここでは、支援室の活動内容と、活動の意義、課題、年度毎の概要について紹介していく。なお大学祭は、大学行事であるため、意義や課題は東北大学ならではのものとなるかもしれないことには留意してほしい。

一項　内容

支援室は、東北大学の大学祭に 2012 年度から 2015 年度までの計 4 回出店している。2012 年度は、「震災復興応援フェア」を行った。これは、関連するボランティア団体に協力していただき、実際のボランティア活動を体験していただくというものだった。また、特別の団体として、一般の学生団体とは別枠で出展を行っており、2015 年度の学祭では物品の倉庫として使われていた厚生会館の多目的室及び隣接するウッドデッキで、被災地で活動するボランティア団体の活動を実際に体験してもらう企画を行った。2013 年度は、準備不足などもあったが、「おでん屋」を実施した。2014 年度は、「震災復興カフェ」という企画名で、活動のパネル展示や、被災地のグッズ販売、「なべやき」と呼ばれる陸前高田市などの郷土料理を提供した。2015 年度は、2014 年度と同じく「震災復興カフェ」という企画名で、活動のパネル展示、被災地のグッズ販売に加え、新たに現地でお世話になったからのメッセージ動画の放映や、講演会を行った。

二項　意義

第 1 に、大学祭が広く発信の機会になったということである。大学祭は、東北大学の学生をはじめ、広く社会人や、高校生、他大学の学生などが来場する。実際に、近年の大学祭では、一般市民の来場やグッズの購入が多いように思われるため、普段関わりが少ない方々に被災地や活動の様子を伝える良い機会になったといえる。

第 2 に、大学祭における被災地グッズ販売についてである。グッズ販売は、被災地の魅力を伝えたり、売上で実際に貢献できるという意義があった。ただ、実際に現地に行ってグッズを買ってほしいと考えている被災者の方もいらっしゃるので、グッズの購入が現地に行くきっかけになればという思いもある。

第 3 に、被災地の人を大学に連れてくる良い機会になったという点である。実際に被災された方のお話を聞くのは貴重であり、このようなイベントの際に学生以外の方にもお話を聞いていただくのには意義があったといえる。

三項　課題

大学祭は、大学の行事であるため、かなり前から準備が必要となり、負担が大きいということである。大学祭は、11 月開催のために 6，7 月頃から準備が必要であり、と計画を詰め切れていないとうまくいかないことがあった。現在は、大学祭やオープンキャンパスに関するにノウハウも徐々に蓄積されてきているので、今後さらに質を向上できたらよいと思われる。

四項　年度ごとの概要

➢　2012 年度[77]

企画名	「震災復興応援フェア」
目的	学祭に来る学生や来場者を対象に、ボランティアへの参加率を高めるようにする。
日時	11 月 2 日～4 日　3 日間
場所	川内北キャンパス厚生会館 ※2012 年度は特別にこの場所で開催することが許可された。
内容	（1）ボランティア体験スペース 連携するボランティア団体に協力していただき、各団体のボランティア活動を体験してもらう。 （2）写真展示 （3）物産販売（非調理食品）

写真 4-6，4-7　2012 年度の様子。屋内での物産販売など（左）　屋外での物産販売など（右）

[77] 震災復興応援フェア企画書（2012 年 8 月 29 日）より

➢　2013 年度

企画名	おでん屋[78]
目的	（1）被災地の食材を使っておでんをすることで、被災地の支援を行う。 ※結局被災地の食材は使わなかった。 （2）支援室の資金を調達する。
日時	11 月 1 日～3 日
場所	川内北キャンパス講義棟 B 北側付近の屋外
販売の内容	卵、大根、厚揚げ、ちくわ、はんぺん、こんにゃく or しらたきなど

写真 4-8，4-9　2013 年度の様子。おでんの販売（左）　おでん屋のチラシ（右）

➢　2014 年度

企画名	「震災復興カフェ[79]」
目的	学生や一般の来場者に被災地や活動の様子を伝え、ボランティア活動や被災地への関心を持ってもらう。また、グッズ販売を行うことで、被災者の方に直接貢献をする。
日時	10 月 31 日　事前準備 11 月 1 日～2 日　2 日間
場所	川内北キャンパス講義棟 A101 教室
内容	（1）活動パネル展示 支援室本体、被災 3 県の活動紹介と、登録団体の紹介を行う。 （2）被災地グッズ販売 ・「千壽の会」テディベア、ポーチ（岩手県大船渡市）、

[78] 2013 年 10 月 25 日「学祭のおでん屋について」議事録

[79] 2014 年 9 月 29 日、10 月 3 日ミーティング議事録より、企画書なし

	・雄勝硯マウスパッド、浜のおばちゃんキーホルダー、雄勝名振マザーミサンガ（宮城県石巻市雄勝町） ・富岡さくら咲かせるゾウ（福島県富岡町）、 ・まけないゾウ（兵庫県神戸市）、 （3）なべやき販売 岩手県陸前高田市などの郷土料理であるなべやきを作り、提供する。 （4）活動写真の動画放映 支援室の活動風景の写真を編集した動画を放映する。

写真 4-10　3014 年度の様子。屋内でのパネル展示が中心となった

➢　2015 年度

企画名	「震災復興カフェ[80]」
目的	「東日本大震災被災地支援を継続的に行っている支援室としては、東北大学学園祭に来場される、東北大学生やそのご家族、一般の方々を対象に、東日本大震災をもう一度思い起こしてもらい、被災地の現状を知ってもらうために、以下の 4 つの企画を実施する。」
日時	10 月 30 日～11 月 1 日　3 日間
場所	川内北キャンパス講義棟 C206 教室
内容	（1）東北大学生による被災地支援の状況に関するパネル展示 （2）被災者の方々が作ったグッズの販売（収益はすべて作成者に帰属する） （3）被災地特有の軽食販売 ・石巻焼きそば、気仙沼ホルモンについては中止 ・2014 年度に比べ菓子類が充実。 福幸ブッセ（福島）、夢の木バウム（陸前高田）、けせん坂（陸前高田）、旨塩サブレ（石巻）など

[80] 2015 年 6 月 21 日企画書

	・あさか舞（福島県産米）の販売 （4）被災当事者によるトークセッションの実施 講演会　講師　大友重隆氏（陸前高田市） 日時　10 月 31 日 14:00～15:00 内容　「動く七夕を通した陸前高田の復興への取り組み」 （5）動画放映　支援室の活動先でお世話になっている方からのメッセージ上映

写真 4-11，4-12　2015 年度の様子。パネル展示（左）　物品販売（右）

三節　スタートアップフェア

スタートアップフェアとは、東北大学内外の各ボランティア団体やNPO法人などがブース形式で出展をし、新メンバーの募集や団体の紹介などを行う企画である。支援室では当初「ボランティアセミナー」というボランティア初心者向けの情報発信・団体紹介イベントを行っていたが、より多くの団体に参加をしてもらい、よりカジュアルに、より盛大にこうしたイベントが行えないか、ということでこの「スタートアップフェア」が編み出された。2012年4月を皮切りに、年に3回から4回のペースで行っており、平均して10数団体が参加（これまでの最高は16団体)。各団体における新メンバーの発掘や、団体間の交流促進に一役買っている。

一項　実施記録

スタートアップフェアは、これまで13回にわたって実施してきた。その概要は、以下の通りである。

年度	開催日	参加者数
2012年度	4月10日、12日、17日、19日、24日、26日	154名
	6月 7日	28名
	12月 5日、10日、11日、12日	40名
2013年度	4月10日、12日、16日、18日、24日、26日	87名
	10月21日、23日、24日	43名
	1月31日、2月7日	45名
2014年度	4月 8日、10日、16日、17日、23日、25日	203名
	6月30日、7月1日、2日	38名
	10月20日、21日	40名
	1月30日、2月6日	16名
2015年度	4月 7日、9日、13日、15日、22日、24日	246名
	6月29日、7月1日、2日	21名
	10月19日、23日	30名

二項　参加団体

これまでの主な参加団体について、東北大学生のボランティア団体（学内団体)、その他の団体（学外団体）の順に紹介する。

➢　学内団体

団体名	団体区分	活動内容	主な活動場所
東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室	学内	ボランティア・スタディツアーの実施	岩手県、宮城県、福島県の被災地

東北大学国際ボランティア団体 As One	学内	海外での建築支援、被災地支援	スリランカなどの海外、宮城県沿岸部
東北大学地域復興プロジェクト“HARU”	学内	仮設住宅支援	宮城県亘理郡山元町
学生による地域支援活動団体『みまもり隊』	学内	農業支援	東松島市
東北大学地域応援サークルぽかぽか	学内	ボランティア・スタディツアーの実施	岩手県陸前高田市
ReRoots	学内	農業支援	宮城県仙台市若林区

➢ 学外団体

団体名	団体区分	活動内容	主な活動場所
NPO 法人キッズドア	学外	教育支援	東京都中央区、仙台市
NPO 法人アスイク	学外	教育支援	仙台市
NPO 法人 good!	学外	海外ボランティアワークキャンプ	アジア諸国
特定非営利活動法人 TEDIC	学外	教育支援、若者支援	宮城県石巻市
一般社団法人パーソナルサポートセンター	学外	仮設住宅支援、個人への支援	宮城県仙台市
ピコせんサポーター	学外	子ども支援	宮城県仙台市
復興応援団	学外	農業・漁業支援	宮城県本吉郡南三陸町
一般社団法人ワカツク	学外	ボランティア・インターンシップのマッチング	宮城県各地
宮城学生ボランティアユニオン	学外	ボランティア普及活動	宮城県各地
公益社団法人 チャンス・フォー・チルドレン	学外	教育支援	兵庫県西宮市、宮城県仙台市、東京都江東区
@plus	学外	ボランティア普及活動	宮城県各地
こども☆ひかりプロジェクト	学外	子ども支援	被災各地
一般社団法人ピースボート災害ボランティアセンター	学外	仮設住宅支援	宮城県石巻市

NPO 法人冒険あそび場	学外	子ども支援	宮城県仙台市
Growing Class	学外	教育支援	宮城県仙台市
一般社団法人学習能力開発財団	学外	教育支援	宮城県仙台市
Teach For Japan	学外	教育支援	東京都・福岡県をはじめとする全国 10 都市
復興大学 復興人材育成教育コース	学外	人材育成	宮城県仙台市
復興大学 災害ボランティアステーション	学外	仮設住宅支援	宮城県各地
ハビタット・フォー・ ヒューマニティ・ジャパン	学外	海外での建築・開発支援	スリランカなどのアジア諸国
情報ボランティア@仙台	学外	情報発信	宮城県仙台市
特定非営利活動法人 チームレスキュー	学外	被災地慈善活動	被災各地
M Leaders	学外	地域支援	宮城県宮城郡松島町

写真 4-13　スタートアップフェアの様子

四節　井戸端会議

井戸端会議は、東北大学内外のボランティア団体などが集まって行う会議のことで、各団体の近況共有やスタートアップフェアの日程、開催概要、その他イベントの調整を実施する場である。2013 年 9 月よりスタートし、毎年五度ほどのペースで会議を開いており、東北大学川内北キャンパス厚生会館内の多目的ルームや同北キャンパス C 棟が使用されている。会議には毎回 5～10 ほどの団体が参加し、団体間の垣根を超えた数少ない情報共有の場として機能している。

一項　実施記録

年度	回数
2013 年度	5 回（9 月 20 日、12 月 17 日、1 月 17 日、2 月 12 日、3 月 25 日）
2014 年度	5 回（5 月 22 日、6 月 16 日、12 月 18 日、1 月 8 日、3 月 26 日）
2015 年度	6 回（5 月 14 日、6 月 11 日、10 月 8 日、11 月 19 日、12 月 10 日、1 月 16 日）

（※2015 年度は 2016 年 1 月終了時点でのデータ）

二項　第一回井戸端会議

ここでは井戸端会議の概要を示すため、第一回の様子を紹介する。概要は、以下の通りである。

➢　日　時

2013 年 9 月 20 日（金）13:00～15:00

➢　会　場

東北大学文学部棟 2 階多目的演習室

➢　出席者

復興応援団（田ノ岡大貴）、ピコせんサポーター（馬場瞳、吉野健太郎）、東北大学地域復興プロジェクト“HARU”（井上尚人）、東北大学生協学生委員（櫻井滉輔、田中大輔）、ハビタット・フォー・ヒューマニティー・ジャパン（大谷航介）、一般社団法人ワカツク（中村憲和、築瀬裕子）、支援室（藤室玲治、保坂龍彦、井津、福長）

➢　議題 1. 開催の趣旨説明

東北大学ボランティア支援室では日頃情報交換をする機会が無かったということで、今回 10 月のスタートアップフェアに向けて、また各団体へ向けてのニーズの広報として、また皆さん同士の情報交換ということで、来ていただきました。支援室と登録団体と今後の連携についても話し合えればと思います。

➢　議題 2. 各団体の近況報告と今後の予定

【復興応援団】　最近の活動は復興応援団便り発行、漁業プロジェクト、農業プロジェクトの３つ。復興応援団便りは、南三陸、多賀城で現地のチャレンジャーを取材して毎月発行。地元の方に元気を伝えたい。6 月より多賀城版を発行。多賀城の全仮設住宅に配布。／漁業プロジェクト　金毘羅丸高橋さんの「手ぶらでフィッシング」という事業を支援しています。GW で第 8 回終了。6 月から新プロジェクト。夏休みに高校生向けスタディーツアーを行いました。農業プロジェクト　9／28－29 で 24 回目になります。トマトの種まき、肥料の散布、収穫などの手伝いを月一でやっています。漁業・農業ツアーで開始から延べ 924 名が参加。今年中に 1000 名を超える予定。

【ピコせんサポーター】　メインは今年 8 月 9－11 日のイベント「子どもが作る街仙台」の子どものサポート。街づくりをテーマに、子供たちがどんな街にしたいか、どんな店を置くか、町のルールをどうするか主体的に考え、夏休みに 3 日間実際に自分たちで街を運営するというもの。代表は宮城野区在住の方で、ボランティアの学生は東北大、学院大、福祉大、高校生等。

今後の予定： 仙台の街を見学、大学見学、映画見学、コンビニ見学、建築のミニチュア作成、演劇ワークショップ、演劇の公演等を子供達と行う予定。

【HARU】　学生 40 人位が登録して、プロジェクトごとに活動しています。教育支援：石巻大橋仮設住宅で小学生対象に学習支援を行う。土曜日に子供たちを預かってほしいというニーズがあったので、今は月 2 回開催しています。足湯：支援室と共同で講習会を開いたりしました。いちごプロジェクト：今はいちごを栽培しています。これまで延べ 2000 人位のボランティアに来ていただいた。冬はボランティアの方に感謝の年賀状を発送する予定。いちごの収穫も手伝う計画。7 月に神戸大学に関西西宮の学生に復興の願いを書いた短冊を集めていただき、8／6 に定禅寺通りで七夕飾りにして出した。9／6 広島大学 9／8 長崎大学　9／11 立教大学、関西方面の学生のスタディツアーを受け入れた。

後期の予定：東北大の大学祭に初めて出ることになり、新入生中心で、各被災地の物品販売（石巻クジラの缶詰）（苺をモチーフにした山元町のアクリルたわし）を販売する予定。

【ハビタット】　世界 100 か国くらいで活動している。貧困層、戦争の犠牲者のために家を建てる活動を行い、国内では 22 大学に 1000 人位の学生がボランティア活動を行って、タイ、フィリピン、カンボジアで家を建てたりボランティアツアーを行ったりしている。国内向けの支援としては、大船渡、陸前高田、東松島、名取、石巻等の住居建築を支援している。大工さんの指示を仰ぎながらボランティアが修理を行ったり、東松島希望の丘商店街の建築に関わったりした。昨年は 1000 人位の学生が来ていただいた。東北からの参加者がほぼいなかったので、東北の学生にもっと参加していただきたい。スタートアップフ

ェアを契機に東北大生 5 人が登録し、その後 10 名前後が活動に参加してくれた。東北大生 1 名をタイに派遣し、海外の建築を視察していただいた。

【生協学生委員】　七が浜のボランティアセンターと協力して、学習支援で子どもたちの居場所づくりを兼ねて継続して支援を続けています。東北地域の他のボランティアと協力しています。昨年は荒浜、閖上、七ヶ浜に 80 人位の東北大の学生を連れてツアーを行いました。全国の大学生協で連携して七が浜、南三陸で農業支援、瓦礫撤去を行いました。東北大学生協の活動としては、福島県南相馬に視察に行き、現地の課題をうかがいました。今後もボランティアは継続して、視察の方も続けていこうと思っています。

【ワカツク】　もともとデュナミスとして 10 年以上活動しており、学生さん向けの人材育成を目標に学生をつなぐ活動をしています。マッチング・フェアを行いトータルで 1000 人位の学生に来ていただきました。今年は、学生団体向けの支援として、団体のマネジメントや集客、組織運営に関する相談や講座を行っています。また、「記者と駆けるインターン」として、河北新報と合同で仙台市内の中小企業に取材に行き、新聞記事・ブログ等を通して学生に伝える活動をしています。中小企業の社長さんのところに行くと、震災の話をされることが多いので、そこから学生さん中心に支援やインターンの活動につなげていきたい。東北大学では基礎ゼミのお手伝いをさせていただいたりしました。

【情報ボランティア@仙台】　被災地・被災者と復興支援の現状を伝えるブログとして、河北新報のサイト「ふらっと」で除法発信を行っています。月に 5－6 本学生が書いた記事を投稿しています。最近では、週 1 回のミーティングで勉強会や互いが書いたブログに対する意見交換を行い、参加する学生が情報発信能力を高められるようにしています。発表媒体としては、「ふらっと」内のブログの他に、仙台の仮設住宅に全戸配布される情報誌「みらいん」そして優秀な記事は河北新報の夕刊に掲載されることもあります

➢　議題 3. コーディネーターからのお知らせ（藤室）　※5 分

【助成金等】　大和証券福祉財団「災害時ボランティア活動助成」。足湯の活動で補助金を申請し、採択されました。現在は HARU, L&D さんが足湯の活動を行っています。資金の目的は足湯に限られてしまいますが、もし足湯の活動をする予定があれば、資金や物資等で協力できるので、よろしくお願いします。

任天堂さんから、Wii や百人一首や将棋盤を提供していただきました。被災地の支援活動に使用していただけるなら、お貸ししますので、ぜひ申し出てください。

（財）学生サポートセンター「学生ボランティア団体支援」。どのような活動でも幅広く応募でき、書類は簡単に書けるもので報告書も必要ないので、ぜひ応募してください。顧問の推薦状が必要ですが、顧問がいない団体は、藤室が推薦書を書くので申し出てくださ

い。また、大きな団体のプロジェクトや支部単位でも応募できます。神戸大学では毎年 5, 6 団体が応募していました。採択される団体は 1 大学 1 つですが、神戸大学では毎年どこかしらの団体が採用されていました。

「住友商事ユースチャレンジ・フォーラム２０１３」10 月 1 日から 2014 年度の募集があります。それに先駆けて 9 月 28・29 日に仙台で報告会があります。来年度の申込みを考えている団体はぜひ参加してください。東北大と提携している神戸大学ボラバスも新規助成として報告する予定です。

【イベント】　12 月 7～8 日　「東日本大震災ボランティア交流会」(会場 : 岩手大学)。バス貸し切りで移動するので、他大学の学生と交流したい方がいれば、ぜひ申し出てほしい。

9 月 27 日　青葉区ボランティアセンター主催「ボランティアリーダーズカフェ」。チラシにある団体が報告するので、興味があればご参加下さい。

9 月 22 日　北陸学院大学復興支援チーム大学生と宮城県の学生による復興交流ワークショップ

【ニーズ】　宮城野区「つぎはぎすっぺっ茶」から学習支援ボランティアの協力要請。東北大生一名が活動に参加していたが、参加できなくなったので、HARU さん、アスイクさんに声をかけています。参加していただける団体があればぜひ申し出てください。

【その他連絡事項】　東北大学のボランティア活動に参加すると、TGL（東北大学グローバル人材育成推進事業）ポイントが付くことになっています。東北大学の学生さんで学内のボランティアに参加している方は TGL のサイトを参照してみてください。

11 月 14 - 19 日に、(財) 日本国際協力センターの主催で、東北大学、福島大学の学生が「日本ボランティア代表団」として四川の被災地等を視察する予定です。

➢　議題 3. 10 月のスタートアップフェアについて

学内・学外を分ける必要はないので、今回は分けずに開催したいと思います。皆さんの意見を踏まえると 3 回ほどが良いと思います。日程 : 10 月 21 日（月)、23 日（水)、24 日（木）16:30 - 19:00（早ければ 18:30 程度に終了）途中参加/退出も結構です。

前回は新入生向け資料に入れて全新入生に広報できたのに対し、今回はこれが使えないので、来場者数は減る見込みです。ホームページやフェイスブックを通じて来場する人は少ないので、学食に置く三角柱が一番効果あると思います。

「学生は学外団体に不安を感じて学内団体に入りがちなので、学外団体も安心だよ、とボランティア支援室に一筆入れてください」(復興応援団)

「学内外の区別は、今回はやめます。ただ、各団体で「東北大学内の学生団体」などを名乗っていただくのは問題ありません」(藤室)

➢ 議題 4. 東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室と登録団体の今後の連携・協力について

今後も井戸端会議を定期的に開きたいと考えています。次回は 11 月下旬をめどにスタートアップフェアや学祭の反省や冬休みの活動についての情報共有などを。支援室のメール配信サービスの他に登録団体のメーリングリスト（井戸端会議メーリングリスト）を作り、広報や情報共有に使いたいと思います。近々案内のメールをお送りします。

「ワカツクと支援室の学生に対する支援ではどう違うのですか」（ワカツク・築瀬さん）

「こんなボランティアがしたい、という学生に対して登録団体を紹介したり、あるいはもっと漠然と何かをしたいという学生にはツアーに参加してもらったり」（藤室）

写真 4-14　井戸端会議の様子

五節　国際交流

一項　海外の大学との交流

東日本大震災の被災地に対しては海外の関心も強く、東北大学に対しては、海外の大学から被災地でボランティア活動を行っている学生との交流を希望する申し出も多い。支援室ではそうした申し出に対しては、東北大学グローバルラーニングセンター等の協力も仰ぎながら、可能な限り対応するようにしている。これまで実施した海外の大学との交流会等を以下の表にまとめた。

実施日	大学名	国・地域	参加者	内容
2014 年 3 月 5 日	南台科技大学	台湾	5 名	東日本大震災についての講演（教員）、学生ボランティア活動紹介（学生）、グループディスカッション、若林区視察
7 月 31 日	アリゾナ州立大学	アメリカ	25 名	オープンキャンスの日に来場。東日本大震災についての講演（教員）、支援室の活動紹介（学生）、意見交換、パネル展示
2015 年 3 月 17 日	メリーランド大学	アメリカ	21 名	東日本大震災についての講演（教員）、支援室の活動紹介（学生）、意見交換
6 月 23 日	ベイラー大学	アメリカ	10 名	東北大学キャンパス見学、被災者による講演会、 東北大学学生との交流
2016 年 1 月 20 日	ガジャ・マダ大学	インドネシア	5 名	東北大学生のボランティア活動の紹介と、ガジャ・マダ大学学生の地域貢献活動を相互に紹介
3 月 16 日	メリーランド大学	アメリカ	18 名	東北大学紹介、東日本大震災についての講演、図書館紹介（教職員）、防災カードゲーム（学生）

二項　日本ボランティア代表団訪中プログラムへの参加

2013 年には、中国日本友好協会及び一般財団法人日本国際協力センターが主催する、「日中ボランティア訪問団」の事業に東北大学から申し込んだところ、採択され、11 月 14 日～19 日の日程で支援室の教員 1 名・学生 3 名が中国の四川省を訪問し、四川大地震からの復興状況などを視察した。日本の大学からは、他に福島大学が参加していた。

三項　台湾大学からのお招き

2013 年 12 月 21 日には台湾大学か開催する「国立台湾大学サービス・ラーニング及び社会サービスチーム成果発表会」に招待され、支援室の学生 3 名が参加し、東日本大震災被災地での学生ボランティア活動を紹介した。

四項　国連ボランティア計画ディクタス事務局長のご訪問

2015 年 3 月 14 日～18 日にかけて仙台で開催された「第 3 回国連世界防災会議」参加のために来られていた国連ボランティア計画（UNV）ディクタス事務局長より支援室に連絡があり、表敬訪問していただけることとなった。支援室の教員と学生からの英語の報告を聞いていただいた後、学生スタッフと懇談の時間を取ってもらった。

特に、東北大学生が説明した「足湯ボランティア」に対して感銘を受けられたようで、3 月 16 日に開催された国連ボランティア計画のセッションの最後に、私たちが東北の被災地で足湯をしている写真を紹介され「津波で傷ついたり、家族を失ったり、コミュニティを離れざるを得ない人々の手を若者が握り寄り添う。これは素晴らしいボランティア」と紹介して下さいました。

写真 4-15　学生スタッフと懇談するディクタス事務局長。2015 年 3 月 14 日（左）
写真 4-16　UNV のセッションの最後に足湯ボランティア紹介してくれたディクタス事務局長。2015 年 3 月 16 日（右）

六節　授業との連携

一項　基礎ゼミ「震災復興とボランティア活動」「地域復興とボランティア活動」

支援室の設立や運営等に大きな役割を果たした運営委員の一人が、東北大学法学研究科准教授の米村滋人先生であるが、この米村先生が、東日本大震災被災地でのボランティア活動を通した教育に取り組むべく、学生ボランティア支援室との連携を意識して 2013 年度前期に開講されたのが基礎ゼミ「震災復興とボランティア活動」である。

基礎ゼミとは入学したばかりの 1 年生を対象として、20 名程度の少人数のゼミ形式で、高校とは異なる大学での学生による主体的な学びを得てもらうための授業であり、課外でのボランティア活動の実践から得られた、被災地や学生の成長に関する知見を、正課教育に実験的に反映する場としては非常に適していた。

2013 年度の基礎ゼミは、受講生を 5 つのグループに分け、最終的に夏休みにそれぞれのグループが「ボランティアツアー」を企画するというものであったが、初めての試みということもあって、教員・学生の双方に負荷のかかるものとなった。その分、深い学びが得られ、またボランティア活動推進という点で、このゼミ受講生からは 2014 年度の学生ボランティア支援室のリーダーをする者も現れ、大きな成果を挙げた。

2014 年度には、担当は経済学研究科の西出優子先生に変わり（西出先生も学生ボランティア支援室の運営委員である）、名称も「地域復興とボランティア活動」と変えて実施した。2013 年度の反省も踏まえて、比較的順調にゼミ運営を行うことができ、1 年生の創意工夫と被災地域の方々のご協力により、1 年生自身が一般の東北大学生を対象に、被災地を紹介するボランティアツアー・スタディツアーを 4 つ企画することができた（支援室を通して一般参加者を募った）。

この 2014 年度には高度教養教育・学生支援機構が発足し、その業務センターのひとつとして「課外・ボランティア活動支援センター」も発足した。この支援センターが学生ボランティア支援室の運営も担当し、また課外活動から得られた学びを正課教育に反映するべく、ボランティアに関する基礎ゼミの開講も、この業務センターで担当することとなった。こうして、2015 年度には、課外・ボランティア活動支援センター所属の特任准教授である藤室先生が担当する形で、基礎ゼミ「地域復興とボランティア活動」が実施された。

2013 年度および 2014 年度の基礎ゼミの大まかな流れとしては、受講している学生に、まずゴールデンウィークの時期に、学生ボランティア支援室が主催しているボランティアツアーないしスタディツアーに参加してもらうことで、被災地に足を運んでもらい、その経験も踏まえて、4〜5 班に分かれて、今度は自分たちでボランティアツアーかスタディツアーを企画し、一般の東北大学生を相手に、被災地を案内するというものであった。

この後半の部分、ボランティアツアー・スタディツアーを自ら企画するところに面白さがあるのであるが、現地の方々との打ち合わせや、宿や乗り物の手配、参加者の募集など、受講生と教員に多くの負担がかかるのが課題であった。

そこで 2015 年度の基礎ゼミでは、ツアーの企画を行うことをやめ、その代わりに夏休みの学生ボランティア募集を行うためのパンフレットを班で 1 つ作成することを採取目標とした。

2016 年度には、前期に基礎ゼミ「ボランティア活動と地域課題」として、後期にも展開ゼミとして同名のゼミを実施する予定である。

二項　総合科目 「震災復興とボランティア」

2014 年度後期には、支援室の運営委員で経済学研究科の西出優子先生が「震災復興とボランティア」という総合科目の授業を開講した。これは東日本大震災被災地で様々な取り組みを行っている学内の先生、学外の NPO 等で活動している方々によるオムニバス講義である。受講生は、講師の方々がお話したテーマに関連したボランティア活動を 1 日行って、レポートを書くことを求められる。このボランティア活動を探す際に、支援室が手助けを行うという形で、授業をサポートしている。2014 年度には 60 名の受講者があった。

2015 年度にも同様の形式で開講したが、今度は受講者が 20 名に減った。とはいえ、ボランティア活動現場での実習や、授業を受けてのグループディスカッションを行うにはちょうど良い人数となった。

2016 年度には課外・ボランティア活動支援センターが開講する科目となり、これまでの後期開講から前期開講に変わる。

写真 4-17　基礎ゼミ「地域復興とボランティア活動」の風景。ゴールデンウィーク中に行った活動のふりかえり。2015 年 5 月 11 日（左）

写真 4-18　「震災復興とボランティア」の最後、参加したボランティア活動をグループで報告する受講生。2016 年 1 月 18 日（右）

五章　支援室五年に寄せて

本章では、支援室に関わってきた皆さまからの寄稿を紹介する。支援室では、これまで多数の関係者の協力のもとに、活動を行ってきた。そこで今回は①教員、②学生スタッフ、③地域の方がたに依頼し、支援室五年に寄せた文章をいただいた。なお、今回寄稿をお願いできたのは、一部にとどまっている。また本来多大なる協力をいただいた皆さまにも、時間の不足・タイミングの問題などから、執筆いただけなかった。この点は、すべて編集者の力不足によるものであり、はじめにお詫び申し上げたい。

以下では教員（一節）、学生スタッフ（二節）、地域の方がた（三節）の順に、寄稿を紹介していく。

一節　学生スタッフ経験者からの寄稿

支援室の具体的な活動場面では、学生スタッフ（学生アシスタント）が大きな貢献をしてきた。今回は①学生スタッフの代表を務めた 5 名と、②学生スタッフの中心となって活動してきた 7 名、そして③他のボランティア団体などと兼務しながら、支援室の活動を支えてきた 3 名から寄稿をもらっている（表 5-2）。

表 5-1　学生スタッフ経験者からの寄稿一覧

名前	所属等	立場
佐藤祐希	法学研究科 2010 年入学。学生スタッフ初代代表	①
市田大弓	歯学部 2010 年入学。学生スタッフ三代目代表	
保坂龍彦	医学部 2012 年入学。学生スタッフ四代目代表	
石井雄太郎	法学部 2013 年入学。学生スタッフ五代目代表	
金子拓	理学部 2014 年入学。学生スタッフ六代目代表	
松原久	文学研究科 2012 年入学	②
佐藤成	経済学部 2013 年入学	
北村早智里	文学部 2013 年入学	
秋山健太	理学部 2014 年入学	
和田祐奈	工学部 2014 年入学	
石田昂誠	経済学部 2014 年入学	
長江泰	法学研究科 2014 年入学	
井上尚人	経済学部 2010 年入学。東北大学地域復興プロジェクト“HARU”	③
坂上英和	経済学研究科 2012 年入学。一般社団法人ワカツク→NPO 法人コースター	
菊池遼	経済学研究科 2013 年入学。スマイルエンジン山形など	

この５年を振り返って

法学研究科修了
佐藤祐希

1. 支援室に入ったきっかけ

はじめにボランティア支援室についてのお話をいただいたのは、2011 年の秋頃だったように記憶しています。当時、私は東北大学の法科大学院の先輩たちと一緒に、いくつかの学外団体に所属しながら震災ボランティアを行っており、米村先生からはそういった学生たちをバックアップできる体制を整えたいというような話を伺っていました。それから、他の学生ボランティア団体の学生たちと初顔合わせを行った際、「ひとまず組織が動き出すまでのテイクオフ期間だけでも」と思い暫定的に学生たちの取りまとめ役を引き受けたのが、私が支援室の最初のリーダーになったきっかけでした。まさにその日が支援室ビギニングといったところでしょうか（笑）

2. 活動内容、活動を通した経験・成長

それから 2012 年の 3 月まで、学生スタッフのリーダーとして支援室の活動に参加しましたが、足当初は学生スタッフがそれぞれ所属する団体で別個に活動していたので、活動といっても現在のように支援室独自のボランティア活動を行うというよりは、震災ボランティアに興味を持ってもらったり、興味を持ってくれた学生を各団体の活動につないだりというように広報に活動の軸足がありました。この期間に支援室が行った活動としては、3 回のボランティアセミナーおよびボランティアシンポジウムの開催、「ボランティア相談会」（後のスタートアップフェア）の実施、そして入学式で配布した Volunteer Seminar Journal の発行が挙げられます。特に印象深いのは広島大学のボランティア団体 OPERATION つながりと共同して行ったシンポジウムでしょうか。他大学の学生たちと連絡・調整役として連絡をとりながら一つのモノを作り上げていくのは初めての経験で大変でしたが、何とか無事に成功にこぎつけることができたときの充実感もひとしおで、貴重な経験をさせていただいたのかなと思います。もう一度やりたいかと言われれば「うーん…」となってしまいますが（笑）この時期の支援室は、どのように支援室の舵取りを行っていくかについてもスタッフが手探りで模索していたので、ミーティングの場に限らずそれ以外のやりとりにおいても、コアメンバーを中心に学生スタッフたちの間でアツい意見交換が行われ、とにかくヒリヒリする緊張感の中で活動していた印象です。

ボランティア活動を通して私は、今までは頭の中で考えているだけだった「困っている人を助けたい」という思いを、以前より自然に行動に移せるようになったかなと思います。震災ボランティアを始めたのは自分にとって勇気の要る一歩でしたが、その活動を通して、誰かのために汗を流したり、その人のために何ができるのかを考えたりするのが自然にで

きるようになったし、そういう綺麗事を追い求めていくのも案外悪くないんじゃないかと思うようになりました。また、支援室の活動の中では、普通に学生生活をしていただけでは知り合わなかったであろうたくさんの人と出会うことができました。同じ東北大学の中にも、こんなにいろんなことを考え、それを実行に移すことのできる情熱を持った人がいたのかと驚きましたし、遠く広島や神戸の地にもつながりができたのは、震災以前には考えもしなかった大きな変化でした。

3. 今後に向けたメッセージ

現在の支援室は、仙台市周辺にかぎらず岩手・宮城・福島の 3 県に活動のフィールドを拡げ、独自に支援室としての活動を発足させるなど、支援室発足当初には予想だにしていなかった活動スタイルへと成長を遂げてきて、その過程でモチベーションとエネルギーに溢れるスタッフたちも増えてきたようです。震災から 5 年を迎える今年、いまだに支援を必要としている人たちは多い一方で、震災のニュースが少なくなりそういった方たちへの関心が少しずつ薄れてきているように感じます。支援室としてさまざまな活動を精力的に展開していくことはもちろんですが、被災地の現状を的確に発信して、震災ボランティアへの興味・関心を掘り起こすこと、そして、これから支援室を支えていってくれる後輩たちに確実にバトンをつなぎ、支援室の活動が途絶えることのないように次の代を見据えた体制を整えていくことが、今後ますます支援室にとって必要になっていくように思います。学業とは違い一つ一つの成果が見えにくく、アルバイトとは違いお金になるワケではなく、サークルや部活動とは違い楽しみを見出しにくいのがボランティアだと思いますが、今この東北の地でしか得られない経験と誰かに必要とされる実感は他の何物にも代え難いものだと思うので、それをモチベーションにしながら、今の自分にできるコトを自分のペースでコツコツやっていってほしいです。

医学部 2 年
市田大弓

1. 支援室との関わり

私は、支援室が発足した 2011 年の 12 月から、2013 年の 3 月まで所属し、その中の 2012 年の 9 月から 12 月までの 4 ヶ月間、3 代目の学生リーダーとして活動させていただきました。

2. 活動内容、活動を通した経験・成長

私は主に、スタートアップフェアとツアーとビラ作成に取り組みました。 まず第一にスタートアップフェアでは、はじめは経験豊富な方にインタビューをしてボランティアの経験を語ってもらい、来場者にはそれを聞いてもらうという形式をとっていました。しかし、それではあまり人が集まりませんでした。そこで、支援室の登録団体が各々のブースを設けて、来場者が興味のあるところに行って話を聞いてもらう(支援室もブースを設けてアシスタントを募集)という参加型の形式に変えたところ、来場者は大幅に増加しました。自分のペースで興味のあることだけ聴けるということや、入退場も自由でお菓子などの軽食を用意しましたから入りやすかったということも要因だと考えています。

このころから支援室の体制が徐々に固まってきたと記憶しています。対象は東北大生に限定しました。目的は、東北大生がボランティア活動をすることをサポートをするということでした。スタートアップフェアを通して知ってもらい、ツアーを通して経験してもらい、団体に登録することを通して続けてもらう、という流れを理想としました。

ツアーでは、企画する上で初めはなんのコネもないですから、たまたまご縁があった団体のツアーに参加者として入れていただきました。その中でツアーの企画方法を学ばせてもらい、人脈を作って、自分たちでツアーを作ることにつなげていきました。ツアーをする上で最も重視したことは、参加してくれた学生に、活動の意義を意識してもらうことです。活動前に各自の動機をバスの車内で発表し、帰りのバスで振り返る。実行できていれば達成感を感じられますし、他の参加者の目標や結果を聞けば親近感がわきます。これらを通してボランティアに夢中になることが狙いでした。ツアーの後は、QR コードを使ってアーケードに答えてもらいました。参加者の声を次のツアーに活かすことで、どんどん洗練されていきました。

ビラ作成において、私は全くの初心者で、米村先生には 1 からご指導いただきました。スタートアップフェアやツアーの度に作成し、何度も推敲を重ねたために時間はかかりましたが、最低限形になるものは作れるようになりました。

このように、支援室は経験を重ねるごとに体制も整い、スタッフのキャパシティーも上

がっていきました。

個人的には、ツアーに参加するときの動機や目標を考えたりイベントを企画するなかで、論理的に物事を考える力が身についたと感じました。ほぼ感情のみで思考していたそれまでの自分のことを恐ろしく思った程に私の中で革命が起きました。

3. 今後に向けたメッセージ

今後私が支援室に期待することとしましては、被災地の現状を東北大生に今まで以上にたくさん伝えてもらうことです。2011 年 3 月 11 日からもうすぐ 5 年が経とうとしている中で、何もしなければ震災の事実が人々の記憶からどんどん風化して行くでしょう。その中で、それをできる限り食い止めていってほしいと思います。私の印象では、今現在の学生スタッフはテキパキとした方々ばかりですから、皆さんが力を合わせれば十分達成できると思います。学生アシスタント OB として温かく見守っていますね。

以上です。

学生アシスタントとして活動して

医学部 4 年
保坂龍彦

1. 支援室に入ったきっかけ

私は震災の翌年に東北大学に入学し、神奈川から引っ越してきました。仙台に来たからには何らかの形で被災地域の支援に携わりたいと思い、ボランティア支援室に学生アシスタントとして加入し、2012 年の冬から 2014 年の春までアシスタントの代表を務めました。その間、主に学生向けのスタディツアーやボランティアツアーの企画と運営に携わりました。

2. 活動を通した経験・成長

震災について調べたり、ボランティア活動を通じて多くの人からお話を聞いた中で、特に印象に残っていることを二つ紹介したいと思います。第一に、今回の震災は経済、教育、福祉を含め社会の様々な領域に課題をもたらしましたが、それらの多くは実は以前から地方社会で進行していたのであり、震災によって加速したのだという点です。例えば、過疎化や高齢化は沿岸部の多くの地域で進んでいましたが、震災を機に若い世代が職や良い教育環境を求めて都市部へ移ったことにより、一層深刻になりました。一次産業の後継者や医療の人材の不足も同様です。従って、被災地域が直面している困難のうちいくつかは数年後、数十年後に日本の多くの地方社会が直面し得る普遍的なものであり、いわば被災地域は社会問題の先進地域です。震災以来、こうした困難に対してボランティア団体や NPO により様々な試みがなされており、その中には将来広く採りいれられるモデルとなるものもあるでしょう。支援室ではこれらの団体の活動を一貫して学生向けに紹介してきました。ボランティアとして、あるいは NPO や企業の一員としてこうした活動に参加することは、震災からの復興へ貢献するだけでなく、社会的な問題へ関心を深める機会となると思います。

第二に、今回の震災、とりわけ福島第一原発の事故は科学や技術についての再考を私たちに迫りました。原発事故は原子力工学から医学、農業、漁業にまたがる広い範囲に専門的な問題をもたらしましたが、将来この事態がどうなるかについての不確実性がこの事故を特徴づけています。ここでの不確実性には二重の意味があります。一つには、事故が未曾有の規模であり、経験から判断して行動することが難しいということ。もう一つには、放射線が人体に与える影響それ自体が確率論的であるということです（健康に有害な多くの因子、例えば毒物は、量に比例して症状がひどくなりますが、それに対して放射線の被曝の場合には、被曝量に比例して悪化するのは癌や白血病の症状ではなく、それらを発病する確率です）。この二重の不確実性が、専門家の間ですら事故への対応について統一的な

見解に至るのを困難にし、避難区域の線引きや原発周辺の住民への検診などについて激しい議論が交わされました。また、放射線に対する不安は風評被害を生み、福島を中心に農業や漁業に大きな打撃を与えました。一連の事態は、危機に際して社会が科学的な専門知識を共有することの難しさを物語っています。一般的に、自然科学の知識は厳密な実験やデータの統計的な解析により裏付けられたうえで実用化されるので、科学が十分に根拠づけられていない予測しか提供できない場合にいかにそれを一般の人々に伝えるか、という倫理的な問題に科学者が直面することは稀です。しかしこの問題は応用的な科学にとっては本質的なものです。私自身が医学部生ということもあり、原発事故は科学や技術の倫理についての教訓に富む出来事でした。

3. 今後に向けたメッセージ

ボランティア支援室の一員として活動することがなければ、こうしたことについて改めて考える機会を持たなかったと思います。震災から 5 年が経ちつつあり、被災地域の状況も変わる中でボランティア支援室の活動にも変化があるでしょう。今後もボランティア支援室には、ボランティアを通じて社会に貢献するだけでなく、学生が自らの目指す職業や社会的な問題について考える場を提供してくれることを期待します。

ボランティア支援室での経験

法学部 3 年
石井雄太郎

0　はじめに

ボランティア支援室に 2013 年から 2015 年の 3 年ほど関わって、様々なことを感じました。1 支援室スタッフとして、2 震災未体験の者として、3 学生として、という 3 つの視点からの経験や感想に加え、4 まとめを書かせていただきました。

1　支援室スタッフとして

まず、私が支援室に関わるようになった直接のきっかけは全学教育科目の「震災復興とボランティア」という基礎ゼミを受講したことです。受講の最も大きな動機は、高校生の時に何も関わることができなかった東日本大震災について知りたいという、東北地方以外から来た学生としてはありがちなものでした。

次に、私のスタッフとしての役割は、ツアーの企画に参加するほかは、部門間の調整、学内でのイベント、広報や他団体との連携、フォーラムへの参加、国際交流などがありました。支援室では、2013 年度後期から本体と 3 部門の体制が誕生し、支援室本体は現場をもたず、現場で継続的に活動をしたいという学生にとっては魅力の少ないものになってしまったのか、本体には人が少なくなってしまいました。そのような流れの中で、私は支援室本体のリーダーになったこともあり、支援室本体を部門との関わりあいの中でいかに機能させるかが私の課題でした。

最後に、私が支援室で経験した活動を大きく分けるとすると、現地支援と対外発信になると思います。そして、これらを学生でいかに実現するかということが常に問題意識としてありました。すなわち、前者は、現地では何が必要とされ、学生だからこそできることは何か、ということ、後者は、より多くの人に、継続的に活動に興味を持ってもらうにはどうすればよいか、ということです。個人的な考えですが、この 2 つの要素をいかに実現するかという、支援室に関わっていただいた方々の格闘の日々があって、現在に至っているのではないかと思います。

2　震災未体験の者として

震災当時、関西におり、しばらく経ってから東北に来た私にとって、流されてしまった津波被災地や、原発事故により時が止まったようになっていた福島県の避難指示区域の光景、被災された方のお話は、とても衝撃的でした。そして、街の風景は徐々に変わっていくもので、私が関わったこの 3 年間でも、震災の面影を遺すものは、かなり減ってきています。視覚的なものは失われても、未経験の人のために、やはり語り継ぐということの重

要性を感じました。他方で、地域の人との交流、きれいな景色やおいしいものとの出会いを通してその土地の魅力に迫ることもできました。他地域から来た私としては、これらをもっと様々な人に伝えたいという思いがあります。

そして、東北の地について考えることは、自分の地域について考えなおす契機にもなりました。災害時の対応や、地域の個性など、自分の住んでいる地域などと比較をするとともに、家族や友人がかけがえのないものだと一層感じるようになりました。

3　学生として

行政、企業、技術者の話を聞いて感じたことは、大学で学んでいることが、実際の現場でうまくいかない場合がしばしばある、ということです。私の場合は、法学部ということもあり、震災の中で法制度がどのように運用されているのかということに興味がありました。法律はどこかで明確な線引きをせざるを得ないだけに、個人個人の実体をなかなか反映できない場合がある点など、法律だけでは解決できないと思われることに数多く遭遇しました。同時に、既存のものがうまくいかない場合に、私たちはどう対処すべきかを深く考えさせられました。このようなことは、学生が将来それぞれの分野で活躍するに当たって重要なことではないかと思いました。

4　まとめ

最初は、東北で過去に何が起こったのか知りたいという気持ちで支援室に関わった私ですが、過去のことだと思っていたことは、今現在、そして未来へ続いていくもので、震災により顕在化した問題は決して東北だけの他人事の問題ではなく、私たち一人一人が自分の事として向き合うべきものであることを痛感しました。

私は、このような経験から、身の回りの問題を、もっと自分に身近なものとして捉えて考えることが大切ではないかと思い始めました。支援室に関わることで、より多くのことに、目を向けてみようと考えるようになりました。

また、現在のボランティア支援室も、徐々に東日本大震災という制約が外されつつあります。今後は、貧困、少子高齢、教育、過疎などの社会問題(現にこれらと東日本大震災の問題は切り離しにくいようにも思います。)や、国際的な問題へますますその活動の幅を広げていくのではないでしょうか。それは、決して東日本大震災の風化の徴表ではなく、その経験を他の身近な問題に応用するものであると考えています。その上では、ぜひ今まで関わってきた地域や人とのつながりを大切にしてほしいと思います。

そして、ボランティア支援室が、東北とのつながりを軸として、学生と地域の人が交わりつつ、様々な社会問題を取り上げ、考え、実行する場になることを願っています。

理学部２年
金子拓

1. 支援室に関わったきっかけ

私は１年生の５月から本格的にこのボランティア支援室にかかわるようになりました。もともと出身が北海道で、震災や被災地に対する情報をほとんど持っていませんでした。同じ国にいるのに何も知らない自分が嫌で、自分にできることを探したくて、大学に行ったら震災に関するボランティアをやりたいと思っていました。１年生の４月、スタートアップフェアというボランティア団体の合同説明会があると知り、そこで支援室の活動に魅力を感じたのが関わり始めたきっかけです。

2. 支援室での活動内容、活動を通した経験・成長

いざ、ボランティア活動を始めてみると自分の思っていた震災ボランティアとの差に驚きました。震災ボランティアというと、瓦礫撤去や家屋の清掃のイメージだったのですが、それはもうほとんど終わっており、今は復興へ向けたボランティアが主流となっています。そこで、まず自分の無知さを痛感しました。

それと反対に、福島県の富岡駅を初めて訪れたときには、ひっくり返った車や、倒壊した家屋を見て、いまだに震災の爪痕が残っている場所があることを目の当たりにしました。

私が支援室に入り始めのころは足湯・傾聴ボランティアがほとんどでした。足湯をすることが何のボランティアになるのか、と最初は疑いつつやっていましたが、１対１で話す分、現地の方から震災当時や現状の話をうかがうことができました。これをすることで悩み不満・残る思いを吐露できるのであれば、やっている意味はあるなと思いましたし、現地の方から直接話をうかがうことで、当時の様子を知ることができ、自分に何ができるのかということを考える材料にもなったので、自分にとってもすごく有意義なボランティアとなりました。

このようなボランティアを通じて、震災に関して無知だった自分の中に、震災の被害の大きさや、被災された方の声を含めた現状を、少しずつ入れていけたのはかなり貴重な経験だったと思います。

また２年生から１年間、学生代表として支援室にかかわり、団体運営に関する経験や、他の大学、NPO、社会人の方とのつながりができ、自分の中のネットワークが地元から全国に広がったことは自分の中で大きな成長だと感じました。

ボランティア活動を始めて、自分の被災地・震災に関する考えが“自分が震災について知りたい”から“たくさんの人に震災について知ってもらいたい”に変わってきました。活動を通していつかは自分に起こるかもしれない震災に対する防災をしなければならないと考えたからです。

3. 今後に向けたメッセージ

今後も支援室には関わっていくつもりですが、被災地を支援するボランティアに加えて、日本人はもちろん、外国の人たちにも震災について知ってもらえるような活動をしていって欲しいと思います。

「非被災者」によるボランティアの実際

文学研究科博士前期課程修了
松原久

１．四つの偶然から生まれた関わり

私と支援室の関わりは３年以上にわたる。しかし私は、ボランティアに対する強い意欲をもつ人間ではないし、被災した当事者でもない、そんな私が支援室の活動に関わったのは、いくつかの偶然によるものであった。

・震災のタイミング

一つめの偶然は、大学三年の終わりを迎えた時期に震災があったことだった。当時、私は京都で大学生活をおくっていたが、揺れはほとんど感じず、家族・友人に被災した方もいなかった。そのため震災による直接的な被害はなく、「ボランティアしなければ」という強い動機づけもなかったといえる。一方で当時は、学年的に、かなり時間的な余裕があった。そこで「被災地をみてみたい」という野次馬根性もあって、試しにボランティア活動へ参加し、ガレキ撤去や、避難所の炊き出しなどを行った。その後関西に戻ってみると、被災地の惨状と、日常生活のあいだにある距離に違和感をおぼえるようになった。また当時から、大学院への進学を考えていたため、せっかくならば「被災地に近い大学で勉強してみよう」という気持ちがおこり、東北大学へ入学することになった。

・支援室の体制

つづいての偶然は、２０１２年度における支援室の体制が、私にとって居心地のよかったことがある。２０１２年４月になって、私は東北大学へ入学したが、入学後もしばらくはボランティアに参加しなかった。その背景には、元来の消極的な性格もあったが、授業等の忙しさや、被災地でどのようなニーズがあるか分からないこともあった。そんななか「大学で気軽にできるボランティア活動」として、支援室の存在を偶然しることになる。また大学院生ともなると、学部生の「サークル」的な雰囲気に飛び込むのは億劫だったが、当時の支援室のスタッフは移行期にあり、様ざまな先生方や大学院生が一緒になって運営していた。ここから、大学院生の私でも自然と参加できたといえる。

・地域との出会い

三つめの偶然は、石巻市雄勝町という地域との出会いがあった。支援室のメンバーとなって半年ほどのあいだは、様ざまな活動に参加した（メールの管理やスタートアップフェアの運営、各地のスタディツアー・ボランティアツアーへの参加など）。それらの活動は、大きくみると、被災地支援に関わるものであった。しかし実際には、被災地を支援できているという感覚がなく、かといって被災地のニーズも分からず、惰性で活動していたのが

実情だった。そんなときに関わったのが、石巻市雄勝町のスタディツアーであった（２０１３年９月）。このツアーは、私の問題関心（「人口が急減した地域の抱える復興の問題をしりたい」）もあって行なったものだったが、ツアーを通して、研究者の関わり方の問題から、住民合意の問題、ボランティアが地域へ与えてきた影響に至るまで、様ざまな問題を学ぶことになった。またツアーを経て、とくに「雄勝町の問題を知り、支援したい」という考えがうまれた。ここから、思いを新たに、ボランティアへ関わり続けることになった。

・メンバーとの出会い

最後の偶然は、一緒に活動するメンバーに恵まれたことである。雄勝町への支援は、スタディツアーの参加者に呼びかける形で始まった。しかしボランティアを企画したとしても、誰も参加者がいなければ、支援室としてではなく「個人的な支援」にとどまっていた。しかし実際に呼びかけてみると、多くのメンバー（とくに三・四年生や大学院生の皆さん）が、忙しいにも関わらず、活動に参加してくれた。これは本当に嬉しい驚きだった。ツアー参加者唯一の１年生であった鵜澤くんも、リーダーまで勤めてくれ、その他多くのメンバーが継続的に参加してくれた。ここから「支援室による支援」として継続し、（途中から）雄勝町での活動がメインとなった私も、支援室との関わりが続くことになった。

２．活動を通じて考えたこと

支援室との関わりは、以上のような偶然の産物であった。そのなかで、活動を通じて以下のようなことを感じてきた。

・出会いをもたらすボランティア

まず活動には「出会い」が多く含まれていた。ボランティアは、相手のある行為（相互行為）であり、月なみの表現だが、そこには必ず出会いがある。それは「人」であり「地域」であり、出会いを通した新たな関心が生まれることもある。私にとっては、阿部晃成さんや石巻市雄勝町の皆さんとの出会いが大きく、当初は野次馬的な気持ちで被災地と関わりはじめた私も、防災のあり方から、震災をへた生き方の問題まで考えさせられることになった。この点は、ボランティアが相手への支援にとどまることなく、ボランティアする側の成長／教育につながることも意味しているだろう。

・関係性をいかにつくるか

つぎに、継続的な関係性の重要さを学んだ。繰り返しとなるが、ボランティアには相手があるため、相手の「ニーズ」をいかに汲み取るかという点が重要となる。また分かりやすい「被災地支援のニーズ」が減った近年では、何がボランティアに求められているかも不透明になっている。そのなかでは、同じ地域・人へ継続的に通うなかで、様ざまな話ができるようになり、そこで生まれた会話から「ニーズ」も現れてくる。そのような関係性を、本当に地域とつくれているかと聞かれると心苦しいが、私自身、なんども石巻市雄勝

町へ足を運ぶことで、より率直な話しを聞かせていただく経験をした。そこから継続的な関係性の意義を実感する機会となった。

・ボランティア「支援」のやりがいと苦労

ボランティア「支援」のもつ、二つの側面も感じた。支援室の活動は、ボランティアしたい人の支援（ボランティアの「支援」）という特徴もある。そこで重要となるのは、いかに多くの人をボランティアに巻き込むかであるが、実際問題として、人はなかなか動いてくれなかった。その理由としては、ボランティアが自発性に基づくものであり、授業やバイトといった他の活動と比べて動機づけが弱いという点が考えられる。そのことは頭では分かるが、実際にボランティアを告知しても参加者が集まらず、たとえ参加してくれたとしても一度きりの参加者が多かったのは、かなり苦労した点であった。初参加者に対して、毎回同じような説明をするのも辛いものがあった。

一方で、活動をつづけるなかで、ボランティア「支援」のやりがいも大いに感じることがあった。それは継続的に参加するメンバーがうまれたときであり、諸事情から一回だけの参加者でも、「新たな問題をしった」など、様ざまな反応があったときである。地域の皆さんから、多くの人を連れてくることへ感謝の声をいただくのも、やりがいを感じる機会となってきた。これらの声から、ボランティア「支援」の意義も実感してきたといえる。

３．今後に向けたメッセージ

以上、簡単に思うところをまとめてみたが、今後の活動に向けたキーワードを考えてみた。一つ目は「多様性」である。支援室は、多様な人材の活躍する場となっている点が、良い特徴と考えている。学部・学年はもちろんだが、多様なパーソナリティをもった人が活動することで、組織としての柔軟な対応・発想もうまれてくる。そこで、いわゆるサークル（趣味を共有する同質的な集団）と異なり、多様な人材の居場所となるような組織づくりが、今後も重要となるだろう。

第二は「思いの伝達」である。ボランティアに参加する理由や、ボランティアからのアウトプットは人それぞれだが、そこに支援室としてしっかりと意味づけすることも重要となる。言い換えると、支援室として大事にしていることを言語化し、相手に伝達することもが重要となってくる。伝達する対象として、一つは学生があり、学生へしっかりと思いを伝えることが、より多くの学生にボランティアへ関心を持ってもらうには必要となる。また一つには地域があり、支援室が何を目的として活動しているのかを伝えることで、より支援室にあった活動のニーズも生まれてくる。なお思いを伝えるにあたっては、何を伝えたいかについてしっかりと言語化する作業が鍵となるだろう。

第三に「継続性」がある。すでに触れたことだが、同じ地域へ定期的に訪問することでうまれるものが多くある。したがって、多様な活動を新たに始めることも重要だが、それと同時に、地域との継続性を大事にすることで、より地に足のついた活動になるだろう。

経済学部３年
佐藤成

1. 支援室での活動内容

私は２年生の 10 月からおよそ１年間、支援室の活動に参加させていただいた。地元宮城県の魅力と課題、そして人のつながりの素晴らしさを考えさせられた貴重な１年間だった。

私が支援室主催のツアーに初めて参加したのは、2014 年８月のことだった。東日本大震災で自身が被災し、両親の実家のある石巻が津波による甚大な被害を受けたこともあり、大学に入ったら震災ボランティアをやりたいと強く願っていた。その機会をインターネットで探っていたところ、この支援室の存在を知り、２泊３日の雄勝ツアーに参加した。様々な大学の人たちと共に、仮設住宅の代表の方や自治会長さんのお話を伺い、復興はまだ道半ばであることを痛感させられた。このツアーをきっかけに、私は支援室の全体ミーティングや、雄勝部門のミーティングに参加するようになった。

2. 活動を通した経験・成長

雄勝部門での活動をしていて感じたのは、雄勝という街が、復興の流れの中で取り残されてしまう危険性があるということだった。人口が多く資金が豊富で、創意工夫を凝らした政策を展開する自治体は復興のスピードが速い。しかし雄勝は石巻市の一部で地域としての自己決定ができず、若者が定住するインセンティブとなる雇用の場が限られている。こうした状況の中ではまず交流人口を増やし、漁業や林業の資源が豊富であることをアピールするなど、少しでも雄勝を魅力的に思う人を増やす努力が求められると考える。

他のボランティア団体と共同で企画を行ったこともあった。中でも一番印象に残っているのは、2015 年５月に行われた初めての試み「いっぽこ合宿」である。企画の段階から関わったのだが、ボランティア団体同士の横のつながりを強め、また１年生に対してボランティアに対する考えを深めてもらうために何ができるかを考え、話し合った。本番では不手際こそあったものの、震災復興やボランティアへの想いを、様々な人たちと共有することができたと思う。

ボランティアそのもの以外で、この支援室の活動を通して成長できたと思ったことがある。それは、パソコンのスキルを高める練習になったことである。ミーティングでの議事録の作成やツアーのしおりの編集、ビラなどの広告の作成、またパワーポイントを使ってのスライド作成も行った。課題のレポートを書く以外で、人生でここまでパソコンを駆使した機会はなかったと思う。課外活動とはいえ、ボランティアは企業が普段やるようなことを練習できる貴重な機会であると思う。

3. 今後に向けたメッセージ

今後の支援室の皆さんには、震災は「現在進行形」であることを周囲に、より多くの人に向けて発信してほしいと思う。「東北の復興には 10 年、いや 20 年かかる」と言った人がいる。それは、復興が単に建物の復旧や衣食住の確保だけでなく、コミュニティや人の流れができて「街の営み」が戻るまでを指すからだと思う。現に、仮設住宅から復興住宅に移り住んだ後も、住民同士のコミュニティ形成に腐心している人がたくさんいる。我々学生ボランティアに求められているのは、こうした人達の「心の復興」に携わり、基本的なルールや枠組みをつくるのは行政の仕事で、お金の流れを作るのは企業の仕事だ。ボランティアは、フットワークの軽さを活かし、それらの間に立って潤滑油となって社会に対し貢献していくべきである。

復興まであとどれくらいの時間が必要かはまだ分からない。震災から 5 年経ち、風化が進みあの日の出来事が世間から忘れ去られようとしている。それゆえに、このボランティア活動を通して、東北への思い入れをより一層深め、支援の輪が広がることを願う。

力を借り、知恵をあわせるということ――大学生だからできることを

文学部 3 年
北村早智里

1. 支援室に入ったきっかけ

私がボランティアに関わるようになったのは、震災から 2 年半後の 2013 年 9 月。大学 1 年生だった私は、縁あって岩手県陸前高田市へのボランティアツアーに参加しました。初めて参加したその時からおよそ 1 年半、陸前高田市へ通い続けました。多くの経験をし、学びを得たと思っています。

私は、高校 1 年生のころ福島県福島市で被災しました。発災後すぐに避難し、誰の力にもなれなかったという当時の後悔から、大学に入って時間ができたらボランティアに参加しようと決めていました。ボランティアに初めて参加した時にわかったことは、「被災者の力になるんだ」と強く駆り立てられて支援に向かった 1 回目は、自分の後悔を払拭するための自己満足にすぎなかったということ。そして実際は、何度行ってもほとんど何の役にも立つことができないということでした。

2. 支援室での活動を通した経験・成長

そこから 1 年半、ボランティアツアーの運営として、また参加者として携わり続け、学生ボランティアの在り方について深く考えるようになりました。何度仮設住宅にお邪魔し、足湯・手芸のサロンを開催しても、力になれたという実感を持てたことはありませんでした。それよりも、変わりゆく被災地の現状にボランティア活動が取り残されている、と感じることが多くなっていきました。仮設住宅からの移住で新たに生まれる問題、確立されていくそれぞれの生活。大学生だけでは立ち向かっていけないような大きな問題が、どんどん増えていって、ボランティアがそれを追いかけるようでした。そして、自分がかかわるボランティアの活動に意味を見いだせなくなりました。いつもよくしてくださる陸前高田市の皆さんに顔向けができないと感じるようになり、ボランティアを続けられなくなりました。

3. 今後に向けたメッセージ

ボランティアから離れて 1 年。専門の勉強にそれまでよりも熱心に取り組むようになり、思うようになったことがあります。それは、学生ボランティアは、大学に所属しているという利点を生かし切れていないのではないかということです。私たちが所属する大学には、多くの研究者がいます。そんな大学に所属する私たち学生がボランティアをすることの最も大きな意義は、研究者というプロフェッショナルと被災地をつなぐ架け橋となれることではないでしょうか。私たちは何かと、自分たちの力でどうにかしようとしてしまいます。

でも、出来ないことはできる人に任せたらいい。できないことを見つけたら、出来る人を探す努力をしなければならない。私たちが何を出来るかという視点よりも、自分たちが支援する人たちにとって何が一番いいのか、私たちが議論しているこの話題にもっと詳しい人がいないのか、考える余地を持つことが必要だったのではないかと感じるのです。

また、被災地では多くの団体が活動しています。では、今通っている場所にどんな団体が入っていて、いつ、どこで、どんな活動をしているか、把握しているでしょうか。ある仮設住宅にお邪魔したときに、「昨日もほかの大学さんが同じようなことをやってたよ」と教えてもらったことがありました。そして、それは1度や2度ではありません。2日続けてサロン活動を行うなら、どちらかが別なことをしたほうが、より多くの問題に焦点を当てられるはずです。先にも述べたように、被災地の状況は刻々と変化し、そしてニーズも変化しています。変化する状況の中で本気で課題に取り組むためには、時間も労力も足りないことを、ボランティアに携わっている人ならわかっていると思います。だったら、ほかの団体と力を合わせる努力をすればいい。誰かの力を借りればいい。

私が伝えたいのは、努力の方向を変える努力が、学生団体に必要とされていることではないかということです。大学生だからできないこともちろんあります。私たちはあまりに非力です。でも、私たちだからこそ出来ることも、沢山残されているはずです。東日本大震災発災から、5年となります。節目は、人を動かす力を持ちます。今だからこそ、力を入れて議論するべきではないでしょうか。

ボランティアを通して

理学部 2 年
秋山 健太

1. 支援室に入ったきっかけ

僕が初めて支援室の活動に参加したのは 2014 年 9 月の多大学合同ツアーであった。実はそれより前の 5 月、みまもり隊さんの活動に参加させていただいていたので、これが被災地とのいわゆる初顔合わせではなかったのだが、初めて訪れる宮城の名取閖上地区や福島県での現地の方々からのお話。他大学の参加者の方との交流などを通して、また一つ被災地の顔を見た気がした。以後、僕が福島へ何度か足を運ぶきっかけとなったツアーである。

そもそも自分が支援室に入った理由と言うのは特にこれといったものがないのだが、京都から一人仙台に来て、「せっかく東北に来たのだから少なくとも一度は震災の現状を知ってみたい」という気持ちはやはりどこかにあったのだと思う。自分はそうした軽い気持ちでこの支援室に入った人間である。

2. 支援室での活動

2014 年の 9 月の多大学合同ツアー以降、よくお邪魔するようになったのは、福島県である。2014 年に計 4 回、2015 年に計 7 回、ボランティア関係で福島を訪れた。福島県には原発事故という岩手、宮城とははっきりと違う側面が存在する。そこから生じる避難の問題、東京電力の賠償の問題、風評被害の問題…。そこに津波と地震の被害があるのだから、福島県が本当にたくさんの難題の抱えていることは間違いない。今回の 3.11 の震災が複合型の震災と言われる所以は福島県を訪れてみると少し分かるのではないかと思う。

3. 活動を通した経験・成長

そんな中、2015 年度より自分は支援室の福島部門長を務めることとなったのでここではそれについて少し書かせていただこうと思う。部門長になった直後は正直に言うとあまりそれについて深く考えていなかった。大変言い方が悪いが、毎週決められた時間にミーティングを行い、何となくボランティアツアーを組む。それだけのことだと思っていた。先輩方がやっている姿があまりにも簡単に見えて、部門長というのを甘く見ていたのだと思う。

実際自分がリーダーとなった 4 月や 6 月のツアーは個人的に満足のいくものではなかった。ツアーが終わってから、現地の方々や他の参加者の方々に申し訳ない気持ちでいっぱいになったが、時すでに遅し。ツアーがそんな出来だから現地の方々や一般参加者の方々との交流もうまくいかない。特に現地の方々との距離のようなものが大変気になった。「こっちは被災した身だからというのもあって、復興に向けて真剣に取り組んでいるけれど、

あなたたちはどうなの？」そんな風に思われてしまっているのではないかという恐怖心が自分の中に芽生え、ボランティアに行くのが少し怖くなった。もちろん、自分が部門長になって何もしてこなかったというわけではない。今までになかった新しい活動を取り入れてみたり、しおりを工夫してみたり。それによって手間が増えるとしてもそれが良いボランティアにつながると思ったことはトライしてみたつもりである。

そうして迎えた 9 月のツアーだったが、またしても納得のいくツアーにすることはできず。フラストレーションが溜まっていってしまった。11 月ツアーの企画をしていた時のこと。住民の方とうまくアポが取れず、参加者も全く集まらなかった。ツアー1 週間前になってもスケジュールが決まらず、ツアーができそうにない。今までツアーで失敗ばかりしてきたが、今回こそもうダメだと思った。思えば一年間部門長をやってきたが、あの時ほど、もう本当に部門長を、あわよくば支援室そのものをやめてしまいたいと思った時期はなかった。そんなときアポを取っていた住民の方からのメールの一節にこのような文章があった。「あまり難しく考えないでください。」……。僕はこの言葉にすごく救われた。支援をしにいく立場の者が無理に考え込んでいても仕方がない。そんなことしたって“誰得”だ！、と。傲慢ながらにもそう思うことができて、これで吹っ切れた。そしてその 11 月ツアーの 2 日目に行った泉玉露でのお掃除ボランティアでは、今までで 1、2 を争うような納得のいくボランティアをすることができた。

とにかく、支援室に入っての僕の成長の大元はこの 2015 年 11 月ツアー前の苦しみにあると思う。そこを乗り越えることで、次の 12 月ツアーの際には今までで一番地域の方と密接に、近い距離で関わることができた。これが部門長になって一番嬉しかったことである。

4. 今後に向けたメッセージ

被災地はまだまだ復興の途中にある。僕が思うのは、これまでの活動でお世話になった人、関わっていただいた人が悲しむ姿や泣く姿は絶対に見たくないということだ。もしかすると関西から来た自分が、ここまで本気に東北の復興を願うことができるようになったことがここに来ての一番の成長なのかもしれない。そしてその背景には僕が今までさせてもらった現地の方々との交流があることは言うまでもない。ボランティア団体として僕を含め多々至らぬところはあると思うが、そうした「人との結びつき」というものを大事にしていく支援室であってほしいと思う。

活動を振り返って

工学部 2 年
和田祐奈

1. 支援室との関わり

東日本大震災ボランティア支援室設立より五年が経過したとのことで、お祝い申し上げますとともに、東日本大震災により被害に合われた皆様のご健勝を心よりお祈り申し上げます。

私は 2014 年から、陸前高田応援サークルぽかぽかに所属し、岩手県陸前高田市でのボランティア活動への参加を開始しました。活動を始めた当初、陸前高田市は現在進行中のかさ上げ工事の着手前で、被災した駅などの様子が見られたことから、津波による被災地の復興の困難さを実感しました。

2. 活動内容、活動を通した経験・成長

活動内容としては、ボランティアツアーの企画・運営と、実際にツアーに参加することの二つが挙げられます。これらは陸前高田市、すなわち被災地の現状を知り、広め、実際に足を運んでもらうことを目的としています。

ツアーでは、足湯・手芸イベントの開催を軸に、地域行事のお手伝いなども行っています。これらの手段を介して、住民の方同士の交流の場を作り、新たなコミュニティの形成を媒介することを目標の一つとしています。第三者である学生が話し相手となることで、住民同士では打ち明けにくい悩みを吐き出していただくことも狙いです。地域の方の要望でワークショップなどをお手伝いさせていただくこともあり、その中で話をまとめ、意見を仰ぎ、場の全体を見通すという貴重な機会も体験しました。

活動していく上での知識として、復興関連の諸制度に関する知識を得、それらが災害の内容や土地によって適・不適があることを知りました。同じ制度を適用するにあたっても、地域によって適用方法や実際の運営方法が異なっており、その如何では住民の方の納得の度合いが大きく異なることが分かりました。

また、現地の方とお話しすることで、まちづくりのような外的な復興は進行していても、現状への不安や震災のトラウマを解消する精神的・内的な復興は進んでいない、あるいはなされていないことを実感しました。

活動を通して、企画の内容を検討し、活動内容や陸前高田市の現状報告の周知方法を考えることが多かったため、客観的に全体を捉えようと努力することができたと考えます。また、足湯や手芸などを行いながら、ぽつんとしている場所がないかなどを気にかけ現場全体に目を配るなど、視野を広い見方ができるようになったと感じました。

3. 今後に向けたメッセージ

陸前高田市の現状として、仮設住宅の縮小、新設した公営住宅や高台の住宅地への住民の移転が本格的に始動していることが挙げられます。これにより、仮設住宅で成立したコミュニティの変動が起こっています。新たな入居先では人間関係を再度構築しなければならず、これらの事態に不安や問題を抱えていらっしゃる方が少なくありません。一方で、物資的な支援に対しマイナスの印象を持たれている方が多いようです。

したがって、仮設住宅や公営住宅などに継続的・新規にお伺いして集会イベントを催すことでコミュニティ形成の促進を図る、あるいは強化の促進をしていくことが必要だと考えています。「話し相手がほしい」というご意見も頂くので、ただ世間話をして一緒にお茶を飲む、それだけの活動も有意義なのではないかと思います。「震災ボランティア」ではありますが、震災から五年が経過する今、直接的に震災のお話を聞くのではなく、ただの日常を過ごすような、そういった支援の形も考えていくべきではないでしょうか。また、ぽかぽかは支援室と協力体制で活動させていただいています。活動を通して得たノウハウや各活動先の様子などを互いに共有し、議論できる場があるとより充実した活動ができるのではないかと考えています。

最後になりましたが、東日本大震災ボランティア支援室の皆様の更なるご活躍と共に、外面的・内面的な復興が進みますことをお祈り申し上げます。

支援での活動で得た経験

経済学部 2 年
石田昂誠

1. 支援室に入ったきっかけ

まず初めに、私がこの東日本大震災学生ボランティア支援室スタッフになったのは、東日本大震災による原発事故のために、福島県いわき市からから我が家のある埼玉に一時避難してきた祖父母の話がきっかけでした。話によると、いわき市は震災直後、電気や水道が止まり、コンビニやスーパーからは食材が売り切れ、、、といった具合に最悪な状況であったそうです。私はそのような話を聞いて、「何かの縁で東北地方に来たのだから東北の人々のために何かボランティアがしたい」と考えボランティア支援室のスタッフになることを決めました。

2. 支援室での経験

その後支援室に入り、実際に被災地に訪問し被災現場を目の当たりにすると、その被害の大きさを実感しました。新聞やテレビのニュースで見た映像以上に大きなショックを受けました。故郷を奪われ追われた被災地の方々は非常に大変な思いをしていることが理解できました。

しかし、私が支援室に入ったのは震災から 3 年後の 2014 年であったために、どこの被災地を見て回っても既に瓦礫は撤去されていて、果たして本当にボランティアの需要があるのだろうかと考えるようになりました。私のボランティアに対する当初のイメージはがれき撤去や物資運搬などの力作業であったため、当時はボランティアのイメージと実際との相違に困惑していました。

支援室での活動中に、そんな戸惑いを払拭するような出来事がありました。とあるボランティアツアーで手芸や足湯マッサージのボランティアをするために仮設住宅にお邪魔させていただき、実際に足湯マッサージのボランティアをさせていただいたときのことです。仮設住宅にお住まいのとある男性に足湯マッサージさせていただいていて、マンツーマンで日ごろの出来事等世間話をしていました。しかし、ふとしたきっかけからその男性は震災当時のことを語って聞かせてくれて、ついには涙流してしまいました。辛いことを思い出させてしまって申し訳なかったと詫びると、その男性は「話を聞いてくれて有難う、おかげで心がすっきりした」と握手してくれました。この時に私は単に感謝されたことへの喜びを覚えると同時に、このように“話を聞いてあげる”ボランティアの形もあるのだと認識しました。仮設住宅に住んでいると様々な思いを抱え込んでしまうケースがあり、このようなコミュニティの場を設けることも被災地の方々の貢献につながり、その時その時代に合ったニーズを把握することの必要性を実感しました。

また、ボランティア活動を続けていると日本の社会問題を目の当たりにすることもありました。とあるボランティアでお邪魔させていただいた地域は、もともと若者の大都市への人口流出に悩まされていたところで、そこに東日本大震災が追い打ちをかけて人口流出を加速させ少子高齢化が進み、地域運営が困難になっている地域です。現地で復興に携わっている方にお話を伺うと、その問題の根深さを認識できました。少子高齢化を食い止め、大都市からこのような地域に人を呼び込むにはどうしたらよいか。私はこの経験をきっかけに地域づくりに関心を持つようになりました。

3. 経験を通した変化

今までの支援室でのボランティア活動を通じて、私はよく“考える”ようになりました。ボランティアとは何か、被災地は何を求めているのか、被災地に活気を取り戻すためにはどうしたらよいか、自分が本当にしたいことは何か。様々な方面において関心を持つようになりました。その興味関心が現在の私の企業インターンシップにつながりました。私はこの支援室での経験を通じて１人の人間として成長できたと思います。このように成長できたのは実際に被災地に飛び込み、普通に生活していては得られない貴重な経験が出来たからであると思っています。私は、少しでも多くの学生がボランティアに携われ、成長できるように支援室は努力を継続していくべきであると思いました。

学生ボランティア支援室・五年誌に寄せて

法学研究科公共政策大学院 2 年
長江泰

1. はじめに

私は、社会人学生として約一年半ボランティア活動に参加しました。経歴や世代も異なる学生の皆さんに温かく受けいれていただきましたので、そのお礼の意味を込めて、経験したことや考えていることについてお伝えいたします。今後、ボランティア活動を考えられている皆さんに少しでも参考になればと思います。

2. 機会

大学での座学だけでなく、ボランティア活動を通じて被災現場にての人の生き方や地域のあり方等を学ぶ機会を得ました。（個人ではなかなか現場に飛び込めません。）

3. 出会い

被災地で様々な経験をされた住民の方、事業所の方などと出会うことができました。津波から奇跡的に生還し今後のまちづくりや仕事づくりに取り組んでいる若者・愛想がいいと言い難い風貌で魚料理をふるまってくれた漁師さん・過疎地域ながら何とか集落を守りたいと工夫を重ねている高齢者軍団・しなやかさと頼もしさを兼ね備えたおばちゃん達・高齢者ばかりの中で特に目を引く元気なチビッ子など、それぞれが魅力的な人達です。

4. 対話・コミュニケーション

避難時だけでなく復興まちづくり等に関しても、人が理解し合うためには、「対話」や「コミュニケーション」と呼ばれるものが重要であることを改めて感じました。よそ者だけに、より意識できたのかもしれません。

これは、学部や学年の異なる学生ボランティアがまとまっていくためにも通じることなのかもしれません。

5. 生き方

中には被災時の壮絶なお話もありましたが、それぞれの想いを胸に今を生きておられる姿が印象的でした。「情けは人の為ならず」や「ケアをとおしての自己実現」（ミルトン・メイヤロフ）という言葉もあります。自分自身、「生」を見つめるきっかけともなりました。

復興段階にはいったと一般的には言われますが、社会とのつながりの弱い人達に生きづらさが顕著になってきた部分もあります。学生ボランティアとしてできることはいろいろあるはずです。

6. 試しに

以上、経験したことの一部を申し上げました。若い学生のうちに、またその身分を活用して、いろいろな現場を見る・体感することを試してはどうでしょうか。その中で、自分なりに見えてくるものがあると思います。

私の震災体験と後輩たちへ

経済学研究科会計大学院 2 年
井上尚人

1. はじめに

……治まらない激しい揺れ。雪のように降ってくる内壁の粉塵。

人生で最も死を意識した瞬間だった。

あの日、私は東北大学の図書館にいた。机の下に逃げ込んだ 1 分間が 10 分にも 20 分にも感じられた……

この文章は、私の経験を主に書き、最後に後輩たちへのメッセージとしたい。拙文であるが、目を通していただければ幸いである。

2. 震災直後

震災発生時は、いつも通りの春休みの一日で、図書館で勉強をしていた。揺れが治まると、図書館職員の方から「図書館は閉館します」とのアナウンスがあり、学生たちは、帰宅するなり、友人宅に避難するなりの行動をとった。避難場所についてのアナウンスもなかったので、当時は職員の方にとっても、それほど大事になるとは思ってもいなかったのではないだろうか。

自分も、とりあえずアパートに戻ることにした。帰宅途中、家の外壁のコンクリートが落ちていたり、近くの家にひびが入っていたり、小さな地割れがあったりとただならぬ状況になっていることを気づかされた。余震もかなり強いレベルで来ていたし、電気も止まっていたので、結局その日は自宅で寝ることを諦め、毛布と非常食、携帯の簡易充電器を持って大学に戻ることにした。

大学では体育館が、簡易の避難所になっており、結局そこで 2 日過ごすことになった。3 日目に電気が戻り、自宅に帰り、簡単に整理をした後、4 日目に友人のお父さんの車で実家の山形県米沢市に帰った。ちなみに津波が来て沿岸が大変なことになったのを知ったのは 3 日目のことだった。

3. ボランティア活動

米沢に帰ると、普段通りの生活があった。仙台で被災した時にはその日の食べ物にも苦労していたのに、いつも通りの食事が食卓に並び、津波の映像を見ながら食べた。どこのチャンネルを付けても津波の映像ばかりで、家にいると気分が悪くなった。外で何かすることがないか探していると、高校の先輩らが、募金活動をしていることを知り、混ぜても

らって活動した。また、福島の原発から避難されてこられた方のための物資の受け払いもした。だから、よく聞かれるが、私のボランティアのきっかけは「暇つぶし」であり、「気晴らし」に過ぎなかった。

4. 被災地に初めて行く

物資の受け払い中に福島の方から、被災地の現状をお聞きすることがあった。それでも、当時の私にとっては、親戚が被災したわけでもなければ、自分に直接の被害があったわけでもないので、どこか他人事のような気がしていた。それで、まずは興味本位で「被災地っていうけどどうなっているんだろう？」という気持ちで、ボランティアに参加してみることにした。

検索すると、東北大学地域復興プロジェクト”HARU”という団体が、ボランティアを募っていた。早速申し込み、米沢から仙台に向かった。

2011 年 4 月 29 日。この日は 3 月 11 日とともに私の中で、忘れられない一日である。初めて被災地に行った場所は山元町という場所だった。場所も知らず言われるがままバスに乗り込んだ。高速道路で進んでいくと、拓けた土地に出た。瓦礫や転がった家、車、船などが 360°にあった。テレビの画面では 2 次元に過ぎないので、衝撃が大きかった。今も脳裏に焼き付いている。

5. 同級生の死

山元町に行ったりしているうちに、約 3 か月の長い春休みが終わり、GW 明けから大学が始まった。そこで初めて衝撃の事実を知った。

クラスメートの死

確かに、被災地には行った。現地の人の話も聞いた。でもどこか、自分とは違う世界と思っていたので、この出来事はショックだった。話したこともある子が亡くなった事実をなかなか受け入れらなかった。でも、その子を忘れないようにと大学が始まってからもボランティアをやった。

6. いちご農園の方と出逢って

夏休みに入って、ある日のボランティアで、山元町で一軒のいちご農家の方に出逢った。この出逢いは、私の大学生活を語る上で欠かせない出逢いである。農家さんと知り合った後、2011 年 10 月からは毎週農園に通った。自分で何かしたかったということもあるし、農家さんから依頼されたということもあってだ。農園には結局 2 年半ボランティアとして携わった。その後もお互いよきパートナーとして、関わりは続いている。

農園では様々なことを経験した。農作業はもちろんだが、私に与えられた使命は「農園を元気にすること」だった。今までやっていなかったいちご狩りを始めたり、そのための広報をしたり、仲間を巻き込んでボランティアをしたり、テレビの取材、年賀状書き、撮

影会等々……

自分がボランティアコーディ―ネートするときは、農園との話し合いをしっかり行った上で、参加者の方が無理なく、そして楽しめるように工夫した。

農園で得たものは一言では言い表せない。ただ、言うとしたら**「世の中は簡単には変わらない。だけど、動かなければ変わらない」**ということである。

7. 後輩たちへ

今この文に目を通しているということは、ボランティアをやっていたり、これからやろううかと迷っていたりという段階でしょうか。ボランティアというと一人ひとり考え方が違うので、壁に当たることもあると思います。自分の時間を犠牲にしてでもすごく頑張りたい人、空いた時間でたまに活動したい人、人との出会いのためにボランティアをする人……色々だとは思います。私としては、どんなきっかけで初めてもいいと思います。ただ最低限 3 つのことだけを守ってもらえれば。

1. 現地との約束は必ず守る。2. 無理はしない。3.楽しんで活動する。

これから社会人になるので、なかなかみんなとは関わる機会は減ると思います。ですが、遠くから応援していますし、困ったことがあれば連絡してくださいね。

8. 最後に

今回、このような文集を作ってくださる小田中先生、藤室先生をはじめとする支援室スタッフの皆さんに感謝いたします。また、字数の関係で書ききれなかった活動や想いは『東北大学　HARU』のブログに散りばめていますのでご覧いただければ幸いです。

より多くの東北大生がボランティアとして参加するにはどうすればよいか

NPO 法人コースター理事
坂上英和

1. 支援室との関わり

東北大学東日本大震災ボランティア支援室の設立者の一人である東北大学法学部・法学研究科の准教授（当時）の米村滋人先生から相談を受けたことが、支援室に関わるきっかけでした。米村先生をお会いしたのは、2011 年の後期が始まった頃で、当時は一般社団法人ワカツクにて、様々なボランティアコーディネートをしており、私自身が東北大学 OB ということから、少しでも母校の役に立ちたいという想いで参画しました。

米村先生と初めてお会いした際、東日本大震災から半年以上が経ち、仙台市内も落ち着きを取り戻したにも関わらず、東北大学の学生が被災地のためにボランティアをし続ける場がなく、そのために支援室を立ち上げる旨をお聞きしました。東北外の学生の参画は多かったものの米村先生のおっしゃるとおり、これだけの大規模・広域被害でありながら、その未来を背負うべき仙台の学生が被災地すら訪れたことがないという状況でした。

支援室の設立後、今まで培っていたボランティアコーディネートのノウハウを活かして、学生チームのマネジメントやスタートアップフェアの企画などについて、協力させていただきました。特に福島県でのスタディツアーやボランティアツアーの実施に注力いたしました。というのも、私の出身地が福島第一原子力発電所から 10 キロ圏内にある富岡町であり、当時、多くの学生が福島でボランティアをすることをタブーとしており、なんとか東北大生に福島の現状をしてほしいという想いから、支援室の学生スタッフの皆さんと企画をしました。今は当たり前のように行われていますが、当時は除染がまだまだ本格的に行われていない時期であり、そういう状況で学生たちを現地に連れていっていいのか悩みましたが、真剣な眼差しで富岡町を見学する姿や果敢に仮設住宅で住民と交流する姿を見て、実施して良かったなと感じました。

また、スタディツアーやボランティアツアーだけでなく、ツアーで関わりを持った NPO 法人と独自に連絡を取り、今もなお、ボランティアとして何度も福島に足を運ぶ学生もいます。支援室が立ち上がる前には考えられないくらい多くの学生が被災地でボランティアとして関わっているなと嬉しく思います。現在も支援室と連携して福島でのボランティアツアーの受入しておりますが、引き続き協力して多くの東北大生が活動する場をつくっていきたいと考えています。

2. 今後に向けたメッセージ

東日本大震災から 5 年が経ち、より問題が複雑し、学生のボランティアとしての関わり方も高度な内容を求められることが増えてくると思います。社会人に比べれば、経験も力

はないかもしれません。だからこそ、がむしゃらに汗をかきながら活動する学生ボランティアが、NPO のみならず、被災した住民の活力になると信じています。まだまだ東北の復興には時間がかかりますが、こうした学生の頑張りから多くの大人が触発され、大きな動きが生まれるのだと思います。

東日本大震災だけでなく、この 5 年間で様々な災害が起きました。これからも起きるでしょう。できることは小さいことかもしれない。まずは現地に行き、やれることを必死にやる学生の姿は、どこに行っても復興のための大事な要因だと思います。そうした学生の後押しをするのが、支援室だと思います。これからも、支援室と連携して、東北大生のチャレンジの選択肢をつくっていければと思います。これからもよろしくお願いいたします。

震災ボランティアをいかに次世代に伝えるか

経済学研究科博士後期課程 1 年
菊池遼

1. ボランティアに参加するまで

2011 年 3 月 11 日の震災発生当時、私は山形大学に在学していた。震災直後に奇跡的に仙台に住む両親とも電話がつながり無事が確認できた。「仙台に行こうか？」という私の問いかけに、母は「今は来ないで山形にいたほうがいい」と返した。この混乱期に私が行ったところでどうにもならない。「自分にも何かできることはないのか？」という気持ちはあったものの、結局何もできぬまま月日は経っていった。

夏頃になると山形では平穏な生活へと戻っていたが、どこか違和感があった。周りには被災地に行ったという知り合いも増え始め、被災地へと足を運んだことのない自分がコンプレックスになっていた。そのような折、山形大学と東北芸術工科大学で共同運行していたボランティアバス「スマイルエンジン」を知ることになる。何かに導かれたような気がして、初めて被災地に行決心できた。

2. ボランティアの経験

8 月の真夏日、活動場所は石巻市だった。山形から石巻は 2 時間半。地続きにある場所、同じ日本国内とは思えないような光景だった。ほとんど更地になった場所に点々とある骨格だけが残された建造物。津波の爪痕を肌で感じことができた。テレビ越しで見ていた映画のような光景は現実となって目の前に存在していた。

ボランティアバスには何度も乗車する人もいれば、一度きりの人もいる。私も後者になる可能性はあった。しかし、一度見たあの光景をこのまま振り返らぬまま過ごすには居心地の悪さを感じるようになっていた。その後も何度か「スマイルエンジン」に乗っているうちに私はいつの間にか学生スタッフとなっていた。

3. 支援室との関わり

私とボランティア支援室との初めの出会いは 2012 年 4 月のことであった。「スマイルエンジン」の活動と平行して、「START」という団体の立ち上げに参画し、石巻でのスタディツアーを開催していた。「ボランティア支援室ではスタディツアーのノウハウがない」ということから、我々の元へとスタディツアー開催の依頼があったのである。ゴールデンウィークの 5 月 4 日にスタディツアーを企画、5 月 5 日ボランティアバスを運行した。

当時の参加学生から「どうして被災地により近い仙台にある東北大学が山形大学の学生による企画で被災地に行くことになったのか」と疑問を呈されたが、まさにその通りであるし、これを機会にボランティア支援室独自のツアーを展開してもらえればいいと思って

いた。

それから 1 年後の 2013 年 4 月。山形大学を卒業して本学の経済学研究科博士前期課程に進学した。入学間もなくしてボランティア支援室から「今年も新入生向けのスタディツアーを企画してほしい」との依頼があった。このときは HARU の後藤さんと支援室の保坂さんの 3 人でツアーを企画した。保坂さんから 2013 年春はボランティア支援室主催のスタートアップフェアで何件ものツアーを企画していると聞いた。1 年でそこまでの企画を持てるようになっていたことに驚いた記憶がある。

それ以降は多少活動のお手伝いさせていただいた程度で、支援室の企画には携わらなくなってしまったが、陰ながら活動を見守ってきた。

4. 今後に向けたメッセージ

正直なところ、初めて 2012 年 4 月にボランティア支援室と初めて関わった頃と比べて、2016 年にこれまでの組織になるとは想像もしていなかった。これもひとえにボランティア支援室に関わってくれてきた方々の功績であろう。そして、新入生も震災復興に興味を持ってボランティア支援室に関わってくれる人たちも増えてたいへん嬉しく思う。

その反面、新しく入ってきた世代には、2011 年当時の被災地の光景や生々しさはもうすでに風化した伝聞でしか伝えられない状況にある。私が震災後に仙台市若林区荒浜に初めて行ったのは確か 2011 年の暮れのことであった。荒浜は実家から自転車でも行ける距離にあり何度も足を運んだ場所だった。震災前の光景を知る場所が一変してしまった喪失感、衝撃に、石巻のそれとはまた別の感情が湧き上がった。しかし、私自身のなかでも当時の光景や気持ちを 100%思い返すことはもはやできない。あのときあの場所で感じた感覚をもう一度再現することは不可能なのだ。ましてや、その感覚を人に伝えることはとても困難なことである。

しかしながら、震災当時に大学生でなかった世代にとって 2016 年の被災地は先入観のないまた違った光景として目に映っているのだろう。その世代でしか味わえないその感覚はともても貴重なものである。だからこそ、その感覚を大切にしてほしいし、次の世代へも伝えてほしい。機会があれば前の世代の話も聞いてみてほしい。他者の目線を取り入れることで、また違う世界が見えてくるだろう。いろいろな経験や人に囲まれて、自分の世界で自分の目で見た被災地を感じてほしい。

二節　地域の方がたからの寄稿

地域の方がたの寄稿としては、宮城県石巻市雄勝町の 2 名、福島県いわき市薄磯地区の 1 名から寄稿を頂戴した（表 5-3）。地域の方がたは、被災地での活動において活動の協力者・理解者となっていただいてきた。それと共に社会人としての立場から、学生の教育にも多大なる寄与をいただいている。

表 5-2　地域の方がたからの寄稿

名前	所属等
青木甚一郎	宮城県石巻市雄勝町・波板地区会
阿部晃成	宮城県石巻市雄勝町・雄勝町の雄勝地区を考える会
大河内善男	福島県いわき市薄磯地区・災害公営住宅薄磯団地自治会

これからも

石巻市雄勝町波板地区
青木甚一郎

1. 地区のこれまで

私たちの浜は震災の被害により、4 世帯 10 人の集落です。2016 年の春に高台移転地が完成し、10 世帯 21 人になる予定です。震災から、5 年目で波板に戻ることができます。人口規模からすると小さな集落ですが、2014 年 5 月に波板地域交流センター(通称:ナミイタ・ラボ)が完成しました。センターは、地域の集会をする場所、イベントをする場所、時には宿泊する場所として機能しています。

2. 支援室との関わり

東北大学のボランティアセンターの方々は雄勝町で活動される時は、交流センターを拠点にしてくれています。ありがとうございます。集落では、足湯とお茶っこや、波板の歴史・調査・発表会、竹切り、漁業体験、イベントの手伝いなどを実施してくれています。どんな場合でもみんな一生懸命働いてくれています。竹切りや雄勝の大事なイベントである「ホタテ祭りや雄勝クラフトフェア」など、地域でなんとかしたいが手が回らないところに、手を回してくれて本当に助かっています。2015 年の年末にはセンターを要介護者の人が 40 人利用しました。その時には急遽お願いしたにも関わらず、5 人の学生が来てくれ、身の回りの手伝いをしてくれました。そうした、日常の手の届かないところに、手を差し伸べてくれています。

様々な活動もさることながら、私たち高齢者のため孫の世代の学生さんたちと話せることが何よりも嬉しいことです。普段、センターに来ない女性もボランティアセンターの人が来ると集まってきてくれます。ボランティアセンターの活動は、地域の人が集まるきっかけとなっています。そして、みんな笑顔で帰っていきます。

3. 今後に向けたメッセージ

これからも、波板に戻ってきますが、ますます高齢化するので、継続して来てもらえると助かります。いつも「また来るね～」と言って、ちゃんと来てくれるのでこれかも来てくれると嬉しいです。また、足湯やお茶っこなどは、一つの集落だけでは人数が少ないから、幾つかの集落をまとめて 1 回でも良いので、日程も組みやすいだろうし、人も集まるので続けて欲しいと思っています。

遷り変わりながらも続いていくこと

雄勝町の雄勝地区を考える会
阿部晃成

1. 震災当日の経験

震災から 5 年が経ちます。

5 年前のあの日まで、私は 22 歳の人生に迷った若者でした。それから海上を一晩漂流し、自己犠牲を通じての自己承認があり、人生観を構築するのに十分な経験をします。死を前提とせざるを得なかった夜が明ければ、我が国の国旗の意味とその暖かさ、その国旗を纏ったヘリの群れに国家の意思と行動を見ました。

公助ではなく自助と共助で陸に上がった後、壊滅した集落で過ごした数日間は“誰もが必要とされ、誰もがみんなの為に頑張っている”世界、所謂災害ユートピアを体験しました。そこでの自己の努力は共同体の生活改善に直結しており、しかも努力の結果はすぐさま自分にも返ってきます。だからこそ誰もが必要とされました。私自身、自分の人生であれほど自分の行動に自信をもって生きることが出来たのは初めてのことでした。

2. 避難生活からこれまで

それはやがて共同体の生活水準が向上し安定し、個々の努力の結果が相対的に出づらくなるにつれて、その努力の方向性は自分（家族）の為に移り変わっていきます。

我々家族も一週間で内陸の親戚宅の使われていなかった倉庫に移り、今度は自分の家族の為に行動を始めました。大きな事では家業のお客さんから中古住宅を譲ってもらう時には父親と共に同じく被災した親戚に土下座をして資金を借り、住居を購入しました。震災前は祖父が建てた住宅に住んでいたので、私にとって自分の住居を買うこと、そして移り住むことは自分の努力で、生活再建をしていく実感を持てる経験でした。

仕事の方も家電販売からがれき撤去などの復興工事に参入し会社の規模は数倍になっていきます。

こうやって震災からの一月間で我が家はある程度の復興をする事が出来ました。そこから復興まちづくりに関わり、家の仕事からはどんどん離れていき、高台移転に関わる住民組織を作り住民運動を行い、やがて敗北し、公の復興まちづくりからも排除され、漁業参画も失敗し、ならばと林業を起業し、ついに高台集落の自治会長として公の復興まちづくりに復帰することになりました。

4. 今後に向けたメッセージ

私の活動がそうであったように皆さんの活動内容も震災から 5 年経ち、その内容は移り変わっていると思います。そしてこれからも 10 年目、15 年目、20 年目とその内容は被災

地や日本国、皆さんのしたいことに合わせて移り変わっていくはずです。

これからの 6 年目から高台や内陸の移転地が完成し、多くの被災者が震災後住んでいた仮設住宅を出て恒久的な住宅に再移住することになります。その中で今までの仮設住宅に住んでいたときの一時的な（というには長いですが）ニーズから移転先での恒久的なニーズに移り変わり、震災の問題とそれ以外の問題は地続きであることが分かってくることになると思います。

そういった中で皆さんの活動もどんどんと“震災”の言葉から連想できる物ではなくなっていきますが、少子高齢化・過疎の進む被災地で皆さんのような若者の行動力が・発想力が・その存在自体が必要な事に変わりはありません。我々には皆さんが必要です。何が必要かは地域によって、住民によって違いますが、本当に人が“居なくなる”被災地にとって皆さんのような若者が必要です。

やがてこの 5 年誌が 10 年誌となり、15 年誌となり、20 年誌と続くよう東北大学ボランティア室が続くことを心から願っています。

災害公営住宅薄磯団地自治会
大河内善男

1. はじめに

東日本大震災から５年が経過した今、この５年を振り返った時真先に思い浮かぶのは震災当日の我が街,薄磯の信じられない光景である。思い起こせば震災の１年前、４０年に亘るサラリーマン人生を終え、第二の人生をのんびりと暮していければと、自分なりの夢を抱きながら家のリフオームを行い、これからの生活を思い描いていた矢先の出来ごとでした。

2. 震災当日

忘れようとしても忘れられない、震災当日の立っていられない程の横揺れと、外から聞こえてくる子供達の悲鳴、たまたま病院の待合室にいた私は、近くにあった大きな柱時計にしがみつき、揺れが収まりかけたころに外に出ると、道路には屋根瓦が散乱し道路横の駐車場には、幼稚園児らしい子供達が寝転がった状態で泣き叫んでいる様子でした。

私は自宅が心配になり家内に電話するも通じず、病院に戻ると、院長先生から浜通りの津波予想は３ｍだよと言われ、3m位であれば防潮堤（４．７ｍ）は超えないだろうと安堵しながらも、家族が心配であり自宅に戻ろうと車を走らせました、ところが自宅まで約３ｋｍ位の所で道路が冠水しており、不安をつのらせながら自宅へと向かいましたが、あと２．５ｋｍ位の所で道路が陥没しトラックが立ち往生していて通行できず、近くの空き地に車を置いて歩いて自宅を目指しました。

ようやく自宅のある薄磯地区に入るところまで来たのですが、そこには津波で流された家の屋根が道路をふさいで前には進めませんでした。何とか自宅まで行こうと屋根に登ると、正面に見えるはずの街並みが、海水と瓦礫が散乱した信じられない状況に豹変していました。その瞬間益々家族の安否に不安を抱きながら、避難所である小学校に避難していることを信じて小学校を目指しますが、街中に入る道路は全て瓦礫で閉ざされ、山を登り尾根を歩いてようやく小学校に辿り着き、玄関口にいた近所の人に家族が来てるよと聞かされた時は胸が込みあがる思いでした。教室に入り家族と対面し無事を確認出来ました。

3. 避難生活

薄磯の街も避難所(小学校）も孤立状態となり、食糧等支援物資も持ち込めない状況で、その晩飲まず食わずで一睡もせず、翌朝地元のかまぼこ工場より配られたかまぼこの味が今でも忘れられません。その後、いわき市から第二次避難命令出され、豊間地区の県道まで全員で山裾と瓦礫の間を歩いて移動し、市で準備したバスで内陸部の小中高校の体育館や公民館等に移り、避難所生活がスタートしました。

幸いにして、家族は全員助かりはしましたが、家族の避難するまでの経緯を聞くと、家内は買い物に出かけており、あわてて家に戻ると、母親は家の前に有る木製の階段に登り海を見ていたとの事、家内は家に入り毛布を持ち出し車へ、母親を車に乗せ小学校(避難所)へ向う、校舎の近くに車を駐車し校舎に入るも、その数分後に津波が校庭まで押し寄せてきたとの事、あと数分遅れたら波に飲まれていたかもしれない状況であった、私も道路の陥没がなければ自宅に戻り津波に遭遇したかもしれない、いずれも運が良かっただけのことであったと思う、現に家族が心配で出先から戻り、車ごと津波に飲まれ犠牲になった人もおりました、私たちの行動は自殺行為そのものであったと反省しております。

中央台東小学校体育館に入った翌日、東京電力福島第一原発で爆発事故が発生して、大騒ぎとなり多くの被災者が体育館から出て行きました、その後も余震が続き不安な日々を過ごすとともに、被災地に通い犠牲者の捜索に当たっている自衛隊、警察、消防団等のお手伝い、遺留品の整理等をして来ました、約２ヶ月位過ぎて、ようやく仮設住宅みなし住宅への入居準備が整い始め、避難所からの引越しが始まり、私たちも約３ヶ月後（6 月）に内郷にある雇用促進住宅に引っ越しました。

4. 雇用促進住宅への入居

１４階建の集合住宅で２５０世帯あり、入居者はいわき市の沿岸部で津波で家を無くされた人達でした。被災前は、ほとんどが戸建の生活者であり、集合住宅の経験など無い人ばかりで、更には被災者と云う落ち込んだ気持ちからか、団地内はゴミの捨て放題、駐車違反は後お絶たず殺伐とした状況がしばらく続き、自治会発足の動きが見え始めてきました、その後準備会合住民集会等が何度か開かれ、役員体制が決まってきた段階で、会長の人選で成り手がないとの事で、準備会のメンバーが来て私の名前が上がっておりお願いしたいとの事でした、私もいろいろと多忙な為お断りしたがしつこく粘られ、会長が決まらなくては自治会発足も出来ないし、やむなく引き受けることにしました。

こうして雇用促進住宅への入居開始から 6 ヶ月後に自治会が発足し、自治会による団地の運営がスタートしました、団地生活におけるモラルの向上、住民のコミュニティ再構築、子供達の学習支援等々企画し約 2 年半取り組んできました。この間県内外のボランティア団体やＮＰＯの皆さんには、大変なご支援を頂き、楽しさや癒し、元気と勇気をもらい、これまで頑張ってこれたものと本当に感謝の気持ちでいっぱいです、これまでに出会った皆さんのやさしさと思いやりの心は、私も見習っていきたいと思っております

5. 復興住宅への入居

そして震災から３年３ヶ月後の６月、我が被災地にも災害公営住宅の一部（1 号棟）が完成し、引っ越して来たのです。そして１０月には戸建と 2 号棟が完成し１０３世帯の団地が出来 12 月に約 9 割の入居者が入りました。１２月に自治会発足の運びとなり、住民集会で私の名前が挙がり会長をやることになりました。東北大学東日本大震災学生ボランティ

アの皆さんには、発足当初から定期的にご支援頂き、被災者に寄り添った内容で楽しさと癒しで、元気を頂き大変ありがたく感謝しております、今後とも宜しくお願いしたいと思っております。

災害公営住宅に入居して１年９カ月、震災から５年が経過しましたが、被災地の復興はまだまだこれからと云う状況です、少子高齢化の中、震災による人口減もあり過疎化は深刻な問題です、住宅の再建予定者も少ない状況で、若者に住んでもらえる街づくりが緊急の課題です。

6. 今後に向けたメッセージ

あらためて５年間を振り返った時、ここまで来るのには、世界各国から又日本全国からの温かいご支援のおかげであり、支援して頂いた世界中の皆様に感謝しております。

私も２０代の頃よりいろんなボランティア活動に参加して来ましたが、その経験や体験は社会人として、地域人として、大変役に立っていると思っております、皆さんもこの活動を通して災害に対する取り組みや復興の在り方等さまざまな事を学び、地域社会の中でもリーダーとして活躍出来る大人に成長して頂くことを期待いたします。

参考資料集

①東北大学東日本大震災学生ボランティア支援に関する要項（平成 27 年度）

平成２３年６月７日
理事（教育・情報システム担当）裁定
改正　平成２４年６月１日理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）裁定
平成２４年９月２０日理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）裁定
平成２５年１月３０日理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）裁定

（趣旨）

第１条　この要項は、東日本大震災において東北大学（以下「本学」という。）の学生が行う自主的なボランティア活動に対する支援について、必要な事項を定めるものとする。

（団体の定義及び支援対象）

第２条　支援団体は、東日本大震災に係るボランティア活動を目的とする団体で別に定める手続きにより許可された次に掲げるものとする。

（１）　本学の学生５名以上で組織され、本学の専任教員が顧問教員として置かれている団体（以下「学生ボランティア団体」という。）

（２）　本学以外の者が代表者となって組織された団体（以下「連携登録団体」という。）

２　第８条に定める支援室は、前項に定める団体に対して、所要の支援を行う。

（運営委員会）

第３条　本学に、前条に定める学生ボランティア団体及び連携登録団体の登録審査その他学生ボランティア活動支援に係る重要事項を審議するため、運営委員会を置く。

（組織）

第４条　運営委員会は、委員長及び次に掲げる委員をもって組織する。

（１）　学生支援を担当する総長特別補佐

（２）　学生生活協議会協議員　若干人

（３）　教育・学生支援部長

（４）　その他委員会が必要と認めた者

（委員長及び副委員長）

第５条　運営委員会に委員長及び副委員長を置き、委員長は学生支援を担当する理事をもって、副委員長は前条第１号に掲げる委員のうちから委員長が指名する者をもって充てる。

２　委員長は、委員会の会務を総理する。

３　副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときは、その職務を代行する。

（構成員以外の者の出席）

第６条　委員長は、必要があると認めるときは、構成員以外の者を会議に出席させて説明又は意見を聴くことができる。

（顧問）
第７条　委員会に顧問を置くことができる。
２　顧問は、委員長の求めに応じ、委員会の重要事項に関し、意見を述べ、又は助言を行う。
３　顧問は、委員長が委嘱する。
（支援室）
第８条　本学に、東日本大震災学生ボランティア支援室（以下「支援室」という。）を置く。
（所掌事務）
第９条　支援室は、第１条に定める支援を総合的に行うため、次に掲げる業務をつかさどる。
（１）　学外の機関・団体等との連絡調整に関すること。
（２）　学内の関係部署との連絡調整に関すること。
（３）　支援対象として学生ボランティア団体及び連携登録団体との連絡調整に関すること。
（４）　学生ボランティア団体及び連携登録団体の活動状況の把握、集約及び整理に関すること。
（５）　学生ボランティア団体及び連携登録団体における学生ボランティア活動に対する各種支援及びケアに関すること。
（６）　その他学生ボランティア活動支援に関すること。
（組織）
第１０条　支援室は、次に掲げる職員をもって組織する。
（１）　支援室長
（２）　副支援室長　２人
（３）　総長室職員　若干人
（４）　教育・学生支援部職員　若干人
（支援室長）
第１１条　支援室長は、支援室の業務を掌理する。
２　支援室長は、学生支援を担当する総長特別補佐のうちから学生支援を担当する理事が指名する者をもって充てる。
（副支援室長）
第１２条　副支援室長は、学生支援を担当する総長特別補佐のうちから学生支援を担当する理事が指名する者及び学生支援課長をもって充てる。
（事務）
第１３条　運営委員会及び支援室の事務は、教育・学生支援部において処理する。
（雑則）
第１４条　この要項に定めるもののほか、東日本大震災に係る学生ボランティア支援に関

する事項は、学生支援を担当する理事が定める。

附　則

この要項は、平成２３年６月７日から施行する。

附　則（平成２４年６月１日改正）

この要項は、平成２４年６月１日から施行し、改正後の第４条第１号、第５条、第１０条第２項及び第１１条第２項の規定は平成２４年４月１日から適用する。

附　則（平成２４年９月２０日改正）

この要項は、平成２４年９月２０日から施行する。

附　則（平成２５年１月３０日改正）

この要項は、平成２５年１月３０日から施行する。

②東北大学東日本大震災学生ボランティア支援に係る団体登録基準

平成２５年１月３０日

東日本大震災学生ボランティア活動支援運営委員会承認

１　趣　旨

この基準は、東北大学（以下「本学」という。）における東日本大震災に係る学生ボランティア支援を一層充実させるため、学内又は外部の団体から登録（継続を含む。）の申請があった場合の取扱いについて定めるものとする。

２　登録申請を受理しない場合の基準

次の各号のいずれかに該当する場合は、登録申請を受理しない。

(1)　申請書その他の必要書類に不備がある場合

(2)　申請が、虚偽・偽装その他真実でない内容を含むと判断される場合

(3)　登録申請を行った団体が、過去に次のいずれかに該当する活動を行ったものとして学生ボランティア団体又は連携登録団体として適当でないと認められる場合

①　本学が定める規則等のルールを遵守せず、又はこれに基づく職員の指示等に従わないもの

②　法令に違反する活動を行ったもの

③　営利を目的とした活動を行ったもの

④　その他登録団体として不適当と判断される活動を行ったもの

３　登録団体として認められない場合の基準

次の各号のいずれかに該当する場合は、学生ボランティア団体又は連携登録団体として適当でないものとし、登録を認めない。この場合において、新規申請の団体にあっては登録を行わず、既に登録された団体にあっては学生ボランティア団体の場合は登録を抹消し、連携登録団体の場合は解除するものとする。

(1)　登録申請を行った団体の活動全般が、以下のいずれかに該当すると判断される場合

①　学生の生活、学業及び健全な成長に支障を及ぼすもの

②　活動に当たって安全上の配慮や自律的な対応等が十分でないもの

③　情報連絡体制、責任体制が明確でないもの

④　公序良俗に反するもの

⑤　その他学生ボランティア団体又は連携登録団体として不適当と判断されるもの

(2)　登録申請を行った団体の活動が、政治的、宗教的な活動を伴う場合又は関連する団体・組織・グループ等がこれと同等の活動を伴う場合

(3)　登録申請を行った団体が、前項第３号に掲げる活動を将来にわたり行うおそれのある場合

４　登録の許可

前項の基準に該当しないと認められるものについて、学生支援を担当する理事（以下「理事」という。）は、登録を許可する。この場合において、登録の有効期間は、許可を得た日の属する年度の末日までとする。

５　補則

その他団体登録に関して本基準によりがたい場合は、東日本大震災学生ボランティア活動支援運営委員会の議を経て理事が決定する。

③東日本大震災学生ボランティア支援室の構成員（平成 27 年度）

職	氏　　名	所　　属　　等	備　　考
室長	小田中　直　樹	総長特別補佐（学生支援担当）	要項１０条１号
副室長	菅　原　俊　二	総長特別補佐（学生支援担当）	要項１０条２号
	高　橋　忠　志	学生支援課長	
室員	総長室職員若干人		要項１０条３号
	藤　室　玲　治	コーディネーター	要項１０条４号
	学生支援課職員若干人		

④東日本大震災学生ボランティア活動支援運営委員会委員名簿（平成 27 年度）

職	氏　名	所　　属　　等	備　考
委員長	花　輪　公　雄	理事（教育・学生支援・教育国際交流担当）	要項５条
副委員長	小田中　直　樹	総長特別補佐（学生支援担当）	要項４条、５条
委員	菅　原　俊　二	総長特別補佐（学生支援担当）	要項４条１号
	佐　竹　保　子	審議会：文学研究科	要項４条２号
	澤　田　惠　介	審議会：工学研究科	
	池　田　忠　義	審議会：高度教養教育・学生支援機構	
	佐　藤　義　幸	教育・学生支援部長	要項４条３号
	名　嶋　義　直	文学研究科	要項４条４号
	犬　塚　　元	法学研究科	
	西　出　優　子	経済学研究科	
	松　谷　基　和	経済学研究科	
	植　松　　康	工学研究科	
	藤　室　玲　治	コーディネーター	
顧問	原　　信　義	理事（震災復興推進担当）	要項７条

⑤東日本大震災学生ボランティア支援室登録団体一覧（平成 27 年度）

NO.	団　体　名　等	代　表　者	顧問教員
1	All for Tohoku	梶原　惟央璃（農学研究科２年）	堀井　　明
2	TEDxTohoku	小田嶋　美咲（文学部４年）	西出　優子
3	東北大学地域復興プロジェクト“HARU”	小濱　奈月（工学部３年）	村松　淳司
4	震災復興・地域支援サークル ReRoots	大里　武（理学部２年）	片岡　龍
5	学生による地域支援活動団体みまもり隊	田ノ岡　大貴（工学部４年）	池田　　実
6	東北大学陸前高田応援サークルぽかぽか	小林　大一郎（工学部３年）	永井　　彰

⑥支援室の主なイベント一覧

≪平成 23 年度～24 年度≫

開催日	イベント名	概要	参　加人数
H23.12.20	第１回東北大学ボランティアセミナー	震災ボランティアに関する情報を提供し、学生間のつながりを深める	16
H24.1.12	第２回東北大学ボランティアセミナー	ボランティア活動の紹介、ボランティア活動に携わっている学生との交流	6
H24.1.17	第３回東北大学ボランティアセミナー	トークセッション、パネリストセッション	8
H24.2.9	第１回東北大学ボランティア相談会	一人一人に合わせたボランティア関連情報を伝える	25
H24.2.21	第４回東北大学ボランティアセミナー	広島大学のボランティア団体の活動の紹介と意見交換	20
H24.4.7・8	被災地の野球部に野球グランドを貸す企画	気仙沼＆五城目第一中学校の野球部にグランドを貸して交流試合を行う	91
H24.4.10・12・17・19・24・26	東北大学スタートアップフェア第１弾	一人一人に合わせたボランティア関連情報を伝える	154
H24.5.4	石巻スタディツアー	被災地に赴き、被災した方の体験談を伺う	33
H24.5.5	若林がれき除去ツアー	七ヶ浜でがれき除去を行う	50
H24.5.19	東北大学コットンプロ	若林区荒浜･名取市沿岸部にてコットンの種まき	

	ジェクト		
H24.6.7	スタートアップフェア第２弾	一人一人に合わせたボランティア関連情報を伝える	28
H24.6.24	鎮守の森復活プロジェクト	山元町で植樹ボランティア	58
H24.7.30・31	オープンキャンパス	オープンキャンパスの来場者に東北大学での課外活動の様子や学生生活を知ってもらう	
H24.8.4	亘理スタディツアー	亘理を訪れ、震災の爪痕を参加者に肌で感じてもらう	19
H24.8.11	山元町いちご農園ボランティアツアー	被災したいちご農園で掃除や培土入れのお手伝い	33
H24.9.8・9	陸前高田ボランティアツアー	神戸大学の学生と一緒に被災者を対象とした足湯や手芸品作りの手伝いを行う	11
H24.9.13	若林区農地復興ツアー	若林区荒浜にて農地のがれき撤去や畑おこしなどを行う	3
H24.10.13・14	学友会バドミントン部強化合宿	気仙沼＆志津川高校の生徒を招いて学友会バドミントン部と交流試合を行う	25
H24.11.2・3・4	東北大学震災復興応援フェア	大学祭の来場者を対象に、震災ボランティアへの意欲・関心を喚起する	968
H24.11.19～30	東北大ボランティア写真展	支援室･学内団体の活動内容を写真やポスター等の展示物で紹介する	
H24.11.23・24・25	陸前高田ボランティアツアー	神戸大学の学生と一緒に被災者を対象とした足湯や手芸品作りの手伝い、漁業支援	11
H24.12.2	山元町いちご農園ボランティアツアー	被災したいちご農園で掃除や培土入れのお手伝い	14
H24.12.5・10・11・12	東北大学スタートアップフェア第３弾	一人一人に合わせたボランティア関連情報を伝える	40
H25.2.22～24	陸前高田ボランティアツアー	神戸大学の学生と一緒に被災者を対象とした足湯や手芸品作りの手伝い、漁業支援	13
H25.2.28	若林区農地復興ツアー	若林区荒浜にて農地のがれき撤去や畑おこしなどを行う	15
		計	1641

≪平成 25 年度≫

開催日	イベント名	概要	参　加 人数
H25.4.10,12,16,18,24,26	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	87
H25.4.27～4.29	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	13
H25.4.28	山元町いちご農園ボランティアツアー	山元町沿岸部の被災地区と、亘理グリーンベルトプロジェクトの現場見学	38
H25.5.3	石巻スタディツアー	石巻の被災地域で、仮設住宅やボランティア団体、復興・街づくりに携わる方々のお話しを通じて、被災と復興について学ぶ	27
H25.5.4	宮城県沿岸ボランティアツアー	沿岸部の被災地域の見学及び仮設住宅で足湯と手芸の活動を行う	10
H25.5.5	若林区農業復興支援ツアー	仙台市若林区におけるＲｅＲｏｏｔｓの活動へ参加し、被災の規模と農業支援・地域復興活動の現在について学ぶ	29
H25.6.8	福島スタディツアー	原発による放射能汚染のため仮設住宅に暮らす方々や、支援団体の方、福島で震災復興に携わる大学生との交流を通じて、福島の現状を学ぶ	23
H25.6.14～6.16	陸前高田ボランティアツアー	復興と防災を考えるワークショップへ地域住民とともに参加及び仮設住宅で足湯や手芸のボランティア活動を行う	11
H25.6.22	移動保育プロジェクトボランティア体験会	放射線量の高い地域の子供達に安全な公園でのびのび遊んでもらう「移動保育」に参加すする	20
H25.7.30,31	オープンキャンパス	在学生によるボランティア活動の紹介、高校生を交えたワークショップ	210
H25.8.7～8.11	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	15
H25.8.8	七ヶ浜ツアー	「元気になる支援」を目指して活動を行っている七ヶ浜町で、料理教室とレクリエーションを通して子ども達との交流活動を行う	14
H25.8.18	東松島ボランティアツアー	「よつばファーム」という農園での農作業、仮設住宅訪問、グループディスカッションを行う	11
H25.8.19～8.21	仙台＆宮城県沿岸部ツアー	関西・関東の学生と共に宮城の観光名所と被災地をめぐりながら、現地の方やメディア関係者	8

		のお話しを伺い、震災の影響について学ぶ	
H25.9.4～9.7	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	6
H25.9.12～9.14	福島スタディツアー	原発による放射能汚染のため仮設住宅に暮らす方々や、支援団体の方、福島で震災復興に携わる大学生との交流を通じて、福島の現状を学ぶ	12
H25.9.17	女川まちづくりスタディツアー	被災現場を見学し、住民や行政担当者の方のお話しを伺い、復興について考えるきっかけをつくる	16
H25.9.24～9.25	雄勝スタディツアー	行政・住民・支援団体など様々な方からお話しを伺い、石巻市雄勝町の復興とまちづくりについて学ぶ	16
H25.10.19,20	学友会バドミントン部合同合宿	気仙沼地区の高等学校のバドミントン部員との合同合宿	29
H25.10.21,23,24	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	43
H25.11.22～11.24	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	16
H25.11.24	石巻足湯ボランティア活動	石巻雄勝町にて足湯サロンの活動を行う	8
H25.12.7,8	全国足湯ボランティア交流会	学生ボランティアの交流会。	7
H25.12.14～12.15	留学生と共に行く福島スタディツアー	留学生とともに国際的関心の高い福島県の被災地を訪問し、震災や原発事故が地域に与えた影響や、地域が抱える問題への支援の取組みを学び。また、福島市内の仮設住宅において足湯ボランティア活動を行う	31
H25.12.20～12.23	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	8
H26.1.11～1.13	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	8
H26.1.19	石巻足湯ボランティア活動	石巻市飯野川高校仮設住宅集会所で足湯と手芸作りを行う	9
H26.1.31,2.7	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	45

H26.2.8～2.11	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	26
H26.2.13	石巻足湯ボランティア活動	石巻市飯野川高校仮設住宅集会所で足湯と手芸作りを行う	
H26.2.15～2.16	南三陸ボランティアツアー	被災地で農家の手伝いを行う	11
H26.2.21～2.22	福島ボランティアツアー	仮設住宅の訪問、除染についての学習、移動保育への参加を通して、震災や原発事故が地域に与えた影響や地域が抱える問題への支援の取組みを学ぶ	14
H26.2.23	山元町足湯ボランティア活動	山元町町民グラウンド仮設で足湯ボランティア活動を行う	7
H26.3.14～3.19	陸前高田ボランティアツアー	岩手県陸前高田市の仮設住宅等で足湯・手芸の活動を通して被災者を支援する	5
H26.3.23	山元町足湯ボランティア活動	山元町町民グラウンド仮設で足湯ボランティア活動を行う	5
H26.3.27	石巻足湯ボランティア活動	石巻市飯野川高校仮設住宅集会所で足湯と手芸作りを行う	5
		計	843

≪平成 26 年度≫

開催日	イベント名	概要	参加人数
4/8,10,16,17,23,25	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	341
4/13	若林区被災地スタディツアー	仙台市内で甚大な被害を被った仙台市若林区の被災状況を視察し、地元の方から被災状況や復興についての話を聞く	20
4/15	新入生歓迎ボランティアセミナー	陸前高田市上和野町内会の方に町内会の取り組みについて話してもらう	20
4/18-20	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	10
4/21	学生ボランティアスタッフ説明会	ボランティアを支援するボランティアである学生スタッフの仕事などの紹介	2
4/26-27	福島ボランティアツアー	福島県内の仮設住宅でのボランティア活動及び福島県の復興状況や放射線に関する知識を学ぶ	25

4/29	亘理・山元町を見る・聴く・体験するスタディツアー	宮城県南部の山元町で被災した農園を訪れ、いちご狩りなどの体験及び被災現場の視察や亘理町の方から被災当時の話を聞く	41
4/29	石巻市足湯ボランティアツアー	飯野川高校仮設住宅で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	16
5/3	若林区農業復興支援ツアー	仙台市若林区で地域復興に携わる団体「ReRoots」の活動に参加し、農業支援・地域復興の現在について学ぶ	27
5/4-6	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	31
5/8	学生ボランティアスタッフ説明会	ボランティアを支援するボランティアである学生スタッフの仕事などの紹介	
5/10	東松島春の農業支援ボランティアツアー	農業支援を行うことにより、甚大な被害を受けた東松島に人を呼び込む	19
5/31	石巻足湯ボランティアツアー	行政について話を聞き、仮設住宅で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	8
6/8	松島スタディツアー	松島町内を各自でフィールドワークし、その結果をまとめて松島町観光課に渡す	9
6/15	石巻市足湯ボランティアツアー	飯野川高校仮設住宅で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	6
6/29	山元町スタディツアー	現地の方の話を通じて被災の状況や復興の課題、地域の魅力について学ぶ	19
6/27-29	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	18
6/30-7/2	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	38
7/5	仙台市若林区復興視察	若林区の復興まちづくりの現状や復興の課題について学ぶ	23
7/5-6	福島ボランティアツアー	田村市都路地区への帰還を望む住民の農作業を手伝ったり郡山市の仮設住宅で清掃活動を行い、福島の現状について学ぶ	14
7/6	山元町足湯（HARU）	山元町の仮設住宅で足湯を通して、被災した方々の支援を行う	6
7/30-31	オープンキャンパス	在学生によるボランティア活動の紹介	130
8/2	山元町足湯（HARU）	山元町の仮設住宅で足湯を通して、被災した	5

		方々の支援を行う	
8/2-3	福島スタディツアー	日本に関心のあるハーバード大学生とともに、福島県の被災地を訪問し、学んだことを共有する	21
8/4-6	陸前高田仮設住宅調査第１クール	陸前高田市において、仮設住宅自治会長等へのインタビュー調査を行う	4
8/7-11	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	13
8/9	東松島夏の農業支援ボランティアツアー	農業支援を行うことにより、甚大な被害を受けた東松島に人を呼び込む	27
8/18-19	陸前高田スタディツアー（あしなが）	あしながインターンシップ生とともに現地の方の話を聞き、津波遺児と交流する	8
8/22-25	陸前高田仮設住宅調査第２クール	陸前高田市において、仮設住宅自治会長等へのインタビュー調査を行う	4
8/27-29	雄勝町リサーチツアー第１クール	仮設住宅や集落のリーダーへのインタビューを通して被災地における各仮設住宅・集落の特徴と課題を探る	9
9/4-7	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	5
9/11-13	他大学合同被災地スタディツアー	被災地を見てもらい、被害の状況や復興の課題について学ぶ	10
9/16-18	福島スタディツアー	福島第一原発事故の影響を受けた福島県内の地域を周り、現地の方の話や仮設住宅の訪問を通して現状について学ぶ	13
9/26-28	雄勝町リサーチツアー第２クール	仮設住宅や集落のリーダーへのインタビューを通して被災地における各仮設住宅・集落の特徴と課題を探る	8
9/27-28	ブルーツーリズム（復興応援団）	被災地の現状視察、泊浜と養殖業についてのラーニング、漁業体験	16
10/10-13	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	5
10/20-21	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	40
11/8-9	福島ボランティアツアー	足湯活動・住民へのヒアリングを通して地区の課題を理解し、避難中に荒れ	7

		た帰村者の宅地・庭などの整備を手伝う	
11/15-16	雄勝町ボランティアツアー	雄勝町特産の硯の作成を手伝うとともに、課題についてヒアリングを行う	6
11/21-24	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	13
12/13-14	福島ボランティアツアー	川内村の住民が避難する、郡山市内の応急仮設住宅３か所での清掃およびび片付け	14
12/20-21	雄勝町ボランティアツアー	雄勝の復興の課題について学ぶとともに、仮設住宅で足湯ボランティア活動を行う	18
1/9-12	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	5
1/24	雄勝町ボランティアツアー	雄勝町名振地区の伝統行事である「おめつけ祭り」の実施を手伝う	3
1/30・2/6	スタートアップフェア	自分にあった団体や活動を探せるように、学内外のボランティア団体による合同説明会	16
2/7-8	雄勝町復興まちづくりツアー	被災地の現状を学ぶとともに、足湯ボランティア活動を行う	15
2/12-15	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市の仮設住宅等で足湯や手芸を通して、被災した方々の支援を行う	8
2/21-23	福島ボランティアツアー	郡山市で「足湯ボランティア交流会」に参加し、いわき市で足湯ボランティア活動を行う	6
3/7-8	石巻市雄勝ボランティアツアー	波板地区で桜を植樹し、「雄勝ウォーク」に参加する	6
3/21-22	南三陸スタディツアー（復興応援団）	ラーニングと南三陸のワカメの作業体験をする	9
		合計	604

≪平成 27 年度≫

開催日	イベント名	概要	参加人数
H27.4.7・9・13・15・22・24	震災ボランティアスタートアップフェア	ボランティア支援室と連携をとっている団体が、ブースを設け参加者に対し活動紹介をする	51(7,9日)
H27.4.11	仙台市若林区スタディツアー	若林区にて新入生に震災の被災状況、復興状況、復興に携わる団体について知ってもらう	15

H27.4.12	石巻市雄勝町スタディツアー	飯野川仮設住宅における清掃ボランティア	17
H27.4.18・19	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市にて視察、清掃・花植え・足湯ボランティア	11
H27.4.25・26	福島ボランティアツアー	農業体験、川内村の視察、いわき市での足湯ボランティア	13
H27.4.29	石巻スタディツアー	石巻市にて被害状況、現在の課題、NPO の取り組みの課題を学ぶ	35
H27.5.2	仙台市農業復興支援ツアー	若林区にて視察、瓦礫撤去ボランティア、ReRoot の紹介	29
H27.5.4・5・6	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市にて視察、花植、足湯、喫茶、手芸ボランティア、農業支援、子供支援	25
H27.5.9・10	石巻市雄勝町スタディツアー	雄勝町にて視察、花壇づくり、竹伐りボランティア（学生のみ）	17
H27.5.16・17	東北大学・春のボランティア団体合同合宿「いっぽこ合宿」	東北大学内でのボランティア団体の連携を強化するとともに、新入生へ活動の紹介をする	22
H27.6.13・14	福島ボランティアツアー	いわき市薄磯地区にて足湯・手芸・教育支援、泉玉露にて流しそうめんイベント（学生のみ）	11
H27.6.19・20	留学生と共に行く福島スタディツアー	福島県の農業・観光業・教育の現状について留学生とともに学ぶ	26
H27.6.20・21	NPO 法人コースターとの打ち合わせと活動への参加	川内村にてコースターと打ち合わせ・視察・草取りボランティア、南一丁目仮設にて野菜販売ボランティア・コースター理事へのインタビュー	5
H27.6.27・28	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市にて視察、足湯・清掃・手芸ボランティア	5
H27.6.29/7.1・2	スタートアップフェア	ボランティア支援室と連携をとっている団体が、ブースを設け参加者に対し活動紹介をする	？
H27.7.5	石巻市雄勝町ボランティアツアー	雄勝町波板地区にて足湯・竹林間伐ボランティア	21
H27.7.29・30	東北大学オープンキャンパス	パネル展示による活動紹介、高校生との懇談会	215
H27.8.6・7・8・9・10・11	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市にてけんか七夕・納涼祭の手伝い、足湯、手芸、インタビュー、子供企画、学習支援、清掃、プール教室監視	13

H27.8.22・23・24	陸前高田仮設住宅調査ツアー	陸前高田市にてヒヤリングを行い課題やニーズを調査する	3
H27.9.4・5・6	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田市にて視察、花植・足湯・手芸ボランティア、P@CT の子供支援の手伝い	7
H27.9.16・17・18	福島スタディツアー	郡山市・双葉郡・いわき市にて視察、イベント実施	8
H27.9.21	大崎市水害ボランティア活動	大崎市にて浸水家屋の掃除	7
H27.9.28・29	石巻市雄勝町魅力発掘ツアー	雄勝町にて視察、まちづくりのアイデアを検討する WS	17
H27.10.3・4	東北大学東日本大震災ボランティア支援室学生スタッフ秋期研修会議（SCRUM 合宿）	2015 年 4 月～9 月までの半年間を振り返り、今後の活動方針を定めるとともに、ボランティアに関する研修を行い、また個人の半年間の目標を設定する会議	14
H27.10.10・11・12	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田にて視察、五年祭の運営の手伝い	6
H27.10.19・23	スタートアップフェア	ボランティア支援室と連携をとっている団体が、ブースを設け参加者に対し活動紹介をする	？
H27.10.30・31/11.1	東北大学学校祭	カフェの体をなした活動紹介・パネル展示・グッズやお菓子の販売・被災地からのメッセージの上映、大友氏による講演会	
H27.11.7・8	福島ボランティアツアー	薄磯地区にて足湯・手芸・清掃ボランティア、芋煮（学生のみ）	15
H27.11.14	石巻市雄勝町仮設住宅音楽イベント	雄勝町にて東北大学アカペラサークル del mundo との共催で音楽イベントを行う	9
H27.11.14・15	学魂祭	勾当台公園にて活動紹介、パネル展示、グッズやお菓子の販売	？
H27.11.14・15	陸前高田ボランティアツアー	陸前高田にて視察、引っ越し・足湯・手芸ボランティア	10
H27.11.21・22	石巻市雄勝町林業体験ツアー	雄勝町にて視察、林業体験	11
		合計	587

編集委員

氏名	所属・身分	主な担当
小田中　直樹	経済学研究科教授。総長特別補佐（学生支援担当）　支援室室長	編集統括
藤室　玲治	高度教養教育・学生支援機構特任准教授	三章一節、四章五節
松原　久	課外･ボランティア活動支援センターコーディネーター（学生支援課事務補佐員）	一章、二章一節・二節、三章二節・三節
石井　雄太郎	法学部３年。支援室学生スタッフ	二章三節、三章五節、四章一節・二節
秋山　健太	理学部２年。支援室学生スタッフ	三章四節、四章三節・四節
杉浦　遼星	理学部１年。支援室学生スタッフ	二章四節

平成 28（2016）年 3 月 31 日　発行
ボランティアへの挑戦――東北大学 学生ボランティア活動 5 年の記録

発行：　東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室

＜連絡先＞
〒980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41 番
東北大学　東日本大震災学生ボランティア支援室
特任准教授　藤室 玲治
TEL・FAX ： 022-795-4948　E-mail:reiji.fujimuro.d8@tohoku.ac.jp

ボランティアへの挑戦

東北大学　学生ボランティア活動5年の記録

2016年3月
東北大学東日本大震災学生ボランティア支援室